
飛べぬ燕、鳴けぬ金糸雀

黒轍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛べぬ燕、鳴けぬ金糸雀

【Nコード】

N1993E

【作者名】

黒轍

【あらすじ】

雷の少女は自由を求めている。風の王は自由を求めらる彼女を求めている。少女は限りある時間の中で朝と昼と夜を奔走し、王はそんな彼女を縛る日を切望し、時は解放と束縛を繰り返す。これは、臆病で好奇心旺盛で自分勝手な女の子の、世界と記憶と人間達のお話

登場人物

ナルカミ：雷族の長。記憶喪失。主人公。

カザミ：風族の長であり朝衆の王。

クロ：闇族の長にしてヴァルセイル（昼衆の全ての商業を取り仕切る組織）の副会長。左半身の各部位が義肢。

ココロ：心族の長。派手好き。

オトハ：音族の長。ウィンドネル城のハウスキーパーでもあり、ナルカミのレディズメイドでもある。

ナビ：機族。キラの使者。

キラ：機族の長。ウィンドネル城図書室の司書。

ウツ：心族。骨董品店アンティークボックスの唯一の店員。

マコト：心族。万屋。副業として骨董品店アンティークボックスを経営している。

ギア：機族の女公爵。エンディーヌの館を仕切る。

ミハネ：風族の貴族。雷族に反感を持つ。イハネの双子の姉。

イハネ：風族の貴族。雷族に反感を持つ。ミハネの双子の妹。

キセキ：光族の長にしてヴァルセイルの会長。頭のキレルビジネスマン。

エンジ：炎族の長。テンション高め。

アイス：生族の長。冷暖の差が激しい獣使い。

ウィル：情報取扱会社「ドペスター・クイック」の社長。

シズカ：心族。「ドペスター・クイック」本店の従業員。クロの知り合い。

クラゲ：水族。ミッドナイトストリートの治安改善のため、個人で活動している変わり者。

パフ：水族。香水専門店「NIGHT GIRL」を経営している。

ナミダ：水族の長。破天荒。

ケムリ：炎族。口数が少ない獣人。

あたしには幸も不幸も認識する力がありませんでした。

今自分が悲しいのか、楽しいのか、嬉しいのか、腹立たしいのか、それすらわかりませんでした。そんなことを考えたこともありませんでした。

退屈という感情は唯一持っていたように感じます。退屈なときには歌います。今思えばそれは歌と呼べるような代物では到底なかったのですが、強いて単語に置き換えるならば、それは歌でした。でたために喉から音を発する音楽。メロディやハーモニーを知らない音楽。そう、音楽ではありません。まさしくあたしは音を楽しむことしか娯楽を知りませんでした。

目に映るものといったら白い壁と、白いベッドと、用を足すとすると、ひとつの穴と、あとはただおびただしい量のコードしかありません。

穴は、外界へ繋がる唯一の隙間でした。毎日毎日食べ物と飲み物と、あとは清潔な服とか、必要最低限のものが送られてきます。ベルトコンベアーが通っているのです。たった一つの黒い隙間は、どこまでもどこまでも続いていました。

それはあたしにとって、唯一の未知でした。それ以外に不思議なものなど何もなく、あたしはこの小さな世界で平坦な毎日を過ごしていました。ずっとずっと前、記憶の続く限りずっと前からそうしていました。

だからこそあたしはその時まで発狂せずに済みました。それがあたしの通常でした。皮肉なことに、あたしは無知故に守られていたのです。

しかしある日、あたしの通常の世界は呆気なく壊れることになり

ました。

何も異常なことなどありませんでした。前触れも予感も何もありませんでした。

その日もあたしはパンと野菜を食べて、水を飲んで、着替えて、歌を歌っていました。

ベッドにもたれかかって座っているあたしの髪を、突然何かが運んでいきました。あたしの頬を、何かが撫でました。

あたしはそれを風と認識できなくて、唯々未知なるモノに恐怖するしかありませんでした。

あたしの髪を運ぶ力はどんどん強くなり、あたしの頬を撫でる力もどんどん強くなっていきました。透明な感触はあたしを触り、壁を触り、コードを揺らしました。それは空間を調べ尽くすかのよう

に部屋の隅々まで行き渡り、ぐるぐるぐるると巡ります。やがてそれは力を緩め、部屋の中心に収束していきました。まるで渦を巻くように。

あたしは息を呑みました。

その透明な物質は少しずつ色付きはじめたのです。そして一つの形を形成しはじめました。

それはほんの少しなのですが、見覚えのある形でした。

それは足を作り、手を作り、胴体を作り、顔を作り上げました。

あたしは当初、それが自分と同じような存在だとわかっていませんでした。あたしと同じような存在を見るのは、記憶の限りその時

が初めてでした。それに鏡を見たことのないあたしは、それが自分と似ているということがわかりませんでした。何より、形は同じでも、それとあたしとはあまりにも違いすぎていました。

その髪は橙色、その目は緑、服は何だかやたら複雑な装飾がついていて、おおよその色は紺で、でも沢山の色が溢れていました。対するあたしは、髪は白金色、服はシンプルな白いワンピース。体つきも、それはあたしよりずっとしっかりしていました。

それはあたしの目をじつと睨んだまま動きません。

あたしも唯々恐くて動けません。

やがてその口が開いて、何事かを呟きました。

「お前は、何故ここに居る？動力の中心はお前か？」

あたしは言葉がわかりませんでした。

歯はかちかちと鳴り、体は震えました。そのような体の反応さえ初めてでしたので、そのことにも恐怖を感じました。

それはあたしが言葉を理解できないことを察したのか、ゆっくりと近付いてきました。

逃げることさえ億劫で、あたしはベッドの上につずくまっただまま動きませんでした。

その手があたしの首に伸びて、あたしの首輪に伸びました。

「ガーネット……。ということは、間違いなくお前は……」

その手はあたしの腕輪に触れ、足輪に触れ、それら全てに繋がるコードに手を伸ばしました。

最後にその手があたしの髪を撫でて、あたしはその時初めて、手

第一章：全てを持つ子の欲しいモノ

九月三日のサンデیلیー誌の一面に、少女の写真はでかでかと載っている。

プラチナブロンドと黄金色の丸い目を持つ少女だ。この写真だとわかりづらけれど、きつと本物の目の中では、きらきらした稲妻がほとばしっているんだろう。

『下がった眉尻が上がったことはまだない』、と同誌は述べている。成る程、確かに写真の中の少女の眉尻も自信なさげに下がっていた。

「あは、きらきらしてて、きれーい。欲しいなあ」

クロがその記事を見て、嬉しそうに呟いた。

セミロングの黒髪を二つに結び上げ、ナース服を黒くしたような衣装を纏った、一風変わった少女。

しかし最も彼女の奇妙なところといえば、左側身体のパーツだらう。耳も、目も、手も足も、皆機械仕掛けで自然のそれとは違った。ベッドの上に寝転がった彼女が足を交互に動かす度、左足はうんん唸る。

それをわざと掻き消すかのように、室内では大音量で女性ボーカルのポップスが流れていた。お世辞にも上手いとは言えないアイドル歌手のような声だった。

部屋はまるで子供部屋のように散らかっていて、キャラクターもののぬいぐるみや色とりどりの家具で溢れている。

そんな色の海の中、部屋の主だけが黒いというのは何となく不自

然で、まるで彼女がぽっかりと欠けた何かのようにも見えた。

「こっこっ、と扉を軽く叩く音が聞こえてきた。続いて軽い響きの男声も。」

「遅くなりましたココロです」

「入って」

視線は動かさぬまま、クロは応じる。

扉は軽快に開き、外見的に言えばクロとは正反対の若い男が入ってきた。

ちよんぴんのように一部結った髪はピンク、目は水色、黄色の色眼鏡にボーダー柄のシャツ、チエックの半袖ジャケットを羽織り下はストライプのスボン。とにかくにも目立つ男だ。

ココロと名乗る男は、子どものように無邪気な笑みをクロに向けた。

「やあクロちゃん。何か用かい？」

そう言われて、クロはやっとその目をココロのほうへ向けた。

「欲しいものがあるの」

その言葉を聞いた途端、ココロの口がへの字型に変形する。

「そんな嫌そうな顔しないでよ」

クロがぶつくりと頬を膨らませた。

ココロは困った顔で肩をすくめる。

「だってさあクロちゃん、君のその台詞には、俺、全く良い覚えがないんだよ。夏だったのに雪が見たいだの、本当にいるのかどうかも疑わしい幻の一角獣が欲しいだの。拳句の果て、この前なんて会長と喧嘩した後、『優しくなったキセキを連れてきて』ときた。頼むから無茶難題はやめてくれ」

クロは不思議そうな顔をした。

「無茶難題なんかじゃなかったじゃない。雪は降ったし一角獣は存在したよ」

ココロはやや無理のある笑みを浮かべる。こめかみがひくひくと痙攣していた。

「俺らがものすごい苦労したその結果があれだよ。そんな簡単そうに言わないでくれ。まあ一角獣の件は、俺自身驚いてるけどね」「そんなこと言ったって、君個人はあんまり苦労してない癖に」「いいやしたね。会長するときなんてもう俺オンリーで苦労したね」

その言葉を聞いてクロはむっつりした。

「でもキセキは優しくなかったよ」

「そりゃ仕方ない。俺は不可能を可能にする力を持っていないんで」

言ってココロはにやりと笑った。

クロはつんとそっぽを向いた。

「じゃあ君の苦労なんて用なし」

「え！？酷くない！？それ酷くない！？俺がいなきゃ結局のところ雪も一角獣も見れなかったんだよ？頂点に立つ俺がいなきゃ何も達成できないんだよ？」

わたわたと焦るココロに、クロは勝ち誇った笑みを向けて言った。

「じゃ、今回の件で証明してよね。頂点の凄さってやつをさ」

びた、とココロの周りの空気が固まった。

一回、二回、三回、とクロの言葉を反芻し、噛み砕いて飲み込んで、理解する。つまり、してやられたってことだ。

それがわかった途端固まった空気が溶けるかのように、ココロはげんなりした顔を見せた。

「あは、あたしの勝ちー」

嬉しそうに足を交互に揺らし、クロの気持ちに共鳴するかのよう
に左足もうんうん笑う。

今度はココロがそっぽを向いた。

「それでね、今回のお題なんだけど」

むすつとしたココロはスルーで、クロはベッドから起き上がって、
持っていた新聞を突き出した。一面をココロに見せて。

「これでーす」

そっぽを向いていたココロの目がちら、とそちらを見やり、次の
瞬間思いっきり顔をしかめてクロから新聞を奪い取った。

じつくりと新聞全体を舐めるように眺める。一面記事はひとつし

かない。同じくひとつしかない大きな写真には、綺麗な少女の姿。見出しには「風の王、雷の族長発見」の文字。

ココロは必死でその新聞に希望の欠片を探した。

「えーっと、これだよ。この女の子の腕とか首につけられてたっていうガーネット。綺麗な石だよ。ねえあれ」

「何言ってるのさココロったら。あたしが言ってるのは勿論この写真の……」

「ああ違つもの？わかったわかった、これね。この女の子の服ね。可愛いねえ、いかにも高級そうだけど、クロちゃんだったらきつと似合うよ。うーん、これどこに注文したらいいのかな。とりあえず風の王様に聞いてみる？」

「可愛いけどこれ群青色だよ。あたし着ない。あたしが欲しいのはその中……」

「あ、もうこんな時間。俺そろそろ行かなきゃ。二時から会議があるんだ」

いそいそと立ち去ろうとするココロの腕を、クロがはっしと掴んだ。じろりとココロを睨み上げると、しっかりとした口調で言う。

「じゃあ忙しいココロのために一言で言うからしっかり聞いて。あたしは雷族の長が欲しい」

ココロは暫くクロと見詰め合ってから、根負けしたかのように溜め息を吐いた。

「何で？」

クロはにこにこ嬉しそうに笑う。

「色々。綺麗な子だなんて思って。お話とか、着せ替えとか、きつと楽しいよ?」

要するに新しいおもちゃが欲しいのか。

心の中で呟いて、現実でも別のことを呟いた。

「ここ「新聞記事」では言葉を話せないってあるけど」

「あたしのところに届く頃には、そこそこ話せるようになってるよ。誰か教えてくれるんじゃない?それに、話せなかったらそれでもいいし」

嬉しそうなクロを眺めながら、ココロは早々にあの雷族の少女が言葉を覚えることを祈った。

でないと、この娘は直ぐに飽きて、新しい”お遊び”を考え付くかもしれない。

第二章：籠の中の自由

上品で静かな音を立てながら、一目で高価とわかる食器が次々と並べられていく。

純白の上には色とりどりの美しい花の模様。実際に使う人はきつと気付いていないだろうけど、これは実は皆秋の花。この他にも春用・夏用・冬用の食器セットがあつて、季節に合わせて変えている。上には色々な種類のパンやフルーツ、サラダが盛られていて、ジヤムの小鉢やドレッシングのポットも三種類ずつ並べられている。あとはあの方の大好きなオムレツが、いつもよりは少しだけ大きめに皿に載っていた。

全て丸テーブルに並べると、オトハは腰に手を当てて満足そうに頷いた。

青い髪と灰色の目を持つ、美しいというよりは愛らしいという言葉の似合う女性だ。白いヘッドドレスと黒のエプロンドレスを身につけた清楚な印象の侍女である。ただし格好は侍女であつても、その身からは何か「高貴さ」のようなものが滲み出していた。

時間帯は夜明け。朝衆の領時は四時からなので、普通なら、もうすでに皆、各自の仕事を始めている時であろう。

白み始めた空は同時に部屋を薄明るく染め始めて、静かな世界を露わにする。

室内にあるベッドも丸テーブルも、棚もドレッサーもクローゼットも、皆派手過ぎない慎ましげな主張をしていたが、それが決して安物のシンプルさでないことは一目でわかる。

棚はまだまだがら空きで、本が一、三冊ぽつりぽつりと立て掛けてあるだけだ。字が読めないあの方には、それもまた意味を成さないものだ。

ドレッサーだけは他のものと違って、むしろ逆にモノに溢れている。化粧品やアクセサリなど、全てオト八が持ち込んだものだ。あの方はそのままでも綺麗だから、まだ化粧品を使ったことは一度もないのだけれど。

ベッドの羽毛布団がもそりと動いて、オト八はそちらに目を向けた。

小柄で細身の少女が、この薄い明かりでもきらきら輝く白金髪を散らして、そこに埋まっていた。病的なまでに白いその肌は、その少女がまるで、死の直前永久保存されたかのような印象を醸し出していた。

オト八はそっとベッドに近寄り、しゃがみ込んで少女に囁くような声をかける。

「嬢様。朝です」

ただその一言のみで、少女の目は躊躇うことなく開かれた。

長年の平坦な習慣からなる機械的動作に、少し悲しさを覚えながらも、オト八は優しいげな笑みを少女に向けた。

「朝食の用意もできています。今日は特別に、料理長が大きめのオムレツを作ってくださいましたよ」

きつとこの言葉も正確には理解できていないのであるう少女は、オト八の灰色の目をうつと見つめるだけであった。

この儂げな少女に名前はない。

以前はあった。でなければあの小規模なレジスタンスが、カザミ様の手を煩わせる程成長することもなかったはずだ。

彼女は利用されていたのだ。立場と力、両方を。言葉や名前すらも忘れてしまっ、長い、長い間。

名前を失くした力は暴走するだけだ。あのレジスタンスの者達はその暴走すら利用し、膨大な電力によって膨大な利益を得ていたけれど。

あと一足遅かったなら、と思うと、オトハは寒気を感じる。

この世に尽きないエネルギーなどない。あのまま柘榴石に力を吸い取らせるままにしていたなら、今頃彼女は何も気付かぬままに消えていただろう。

息絶えるのではない。それが自然であるかのように、この世から自我が薄れていくのだ。

だから今の嬢様に名前はない。それは彼女のためでもあるし、こちらのためでもあるのだ。

いずれは新しい名前を得ることになるのであるが、今は力に名をつけないまま、休ませておいたほうが得策だろう。

今の彼女は体や力は成熟しているが、心は赤子だ。理解力のないまま力行使する『理屈』を与えては、また暴走するかもしれない。

少女は頼りない動作で起き上がり、周囲をきよろきよろと見回した。

そして元から下がっている眉尻をさらに下げた。眠っている時以外の彼女の眼には、常に不安と恐怖と動揺が映っている。

そんな彼女を安心させようとして、オトハは柔らかい笑みを湛え

て少女の顔を覗き込んだ。

「ほら、嬢様、見てください。嬢様の大好きなオムレツですよ」

ふかふかに仕上がった黄色いそれを指差すと、少女はゆっくりと首を動かした。彼女の眉尻が元の形まで戻ったのをオトハは見逃さない。

「ね、美味しそうですね、オムレツ」

「おんむ……ねと」

小さな口でもごもごと呟いた少女を見て、オトハは胸中で歓喜した。

嬢様が喋った……！

しかし喜び叫ぶのは心の中だけにしておく。

以前少女用に持ってきたドレスがあまりにも似合うものだから、メロディと一緒にになってきゃっきゃと騒いだことがあった。すると、暫く少女は自分のことを怖がって、近づくの許してくれなかった。何がそんなに怖かったのかはわからないし、そこはかたなく傷つくが、あの時の少女には、騒ぐ自分達が狂った異世界人のようにでも見えたのかもしれない。

そんな感慨に耽っている内に、少女はおぼつかない動作でベッドから降り、テーブルの上の食器に手を伸ばそうとしている。オトハが慌ててその手を引くと、少女の軽い体ごと引っ張ってしまった。また慌てて体勢を元に戻した。

「嬢様、まだ嬢様が召し上がれる温度になっていませんわ」

余程長い間、冷めた食物しか与えられていなかったのだろう。この少女の舌はとんでもなく繊細かつ敏感になっており、熱いもの、また辛いものも食べられない。だというのに、本人は躊躇いなく口に入れてしまうからこれもまた厄介だ。

「先に身支度のほうを整えましょう。お手伝いいたしますから」

少女は暫くの間食卓とオト八とを見比べていたが、やがてどちらにも興味を失ったように目を伏せた。長い睫毛が白い肌に影を作る。

このいたいけな少女に幸せになってほしい、幸せになる手助けをしたいと思うのは私のエゴだろうか。

オト八も同じように目を伏せて、そっとクローゼットのほうへ向かった。

食器を片付け終わり、洗い物を厨房に任せした後、オト八は城の地図を持って再び少女の部屋へ向かった。

少女は始めて来たときと変わらず少食だったが、オムレツの皿だけは今日も綺麗にたいられていた。料理長もそれを見て、にやりと嬉しそうに笑った。

少女の部屋を二、三度ノックする。返事はない。いつものことだ。オト八は鍵を開けて静かに中に入った。この少女に接するとき気をつけなければいけないのは、何事も音を立てないように行うことだ。少女は大きな音にやたらと敏感で、すぐに怖がる。

少女は膝丈の純白のドレスを身に纏い、今日も椅子に座って窓の向こうを見つめていた。人がいないとき、少女はいつもこうして毎日を過ごしている。

「嬢様、嬉しいお知らせですわ。カザミ様から城内を自由に歩き回って良いとの許可が降りました」

少女がゆっくりとこちらに顔を向けた。小さな口が控えめに動く。

「かざ……み」

「ええ、そうです。いえ……『カザミ様』、ですわ」

雷族の長といえど、帝王への服従は絶対だ。それは私もキラも同じ。今の朝衆では王の下皆平等だ。

「かざみさま……」

「そうですね」と、オトハは嬉しそうに微笑んだ。

「あなたを電力塔から救い出してくださったのがカザミ様です。カザミ様は朝衆の王様で、とても偉いんですよ」

「でんよくとう……かざみさま……あさすう……」

音を確認めるかのようにのんびりと口を動かす少女。もしくはそれは、その単語から何かを思い出そうとしているかのようにも見えた。

オトハは複雑な表情でそれを眺めていたが、気を取り直し、持っていた地図を床に広げた。ウィンドネル城の地図だ。

「さ、嬢様、こちらへ来てください」

言ったときにはもうすでに少女は椅子を降りていた。

広げられた地図に興味深々らしく、珍しく金色の瞳はちらちらと輝いた。

少女が地図の傍らに座るのを待って、オトハは説明を始める。

「ここが、嬢様の部屋、今いる場所です。本館の二階となっております」

言葉が通じないことはわかっている。それでもやらないよりはましだと、オトハは思っていた。

この少女も、電力塔に幽閉される前は言葉を理解し、学校に行き、普通の貴族の生活を送っていた。それを忘れてしまったのは、きつと彼女の意思だ。そうすることにより、少女は思い込みを利用して自分で自分の身を守ってきたのだろう。真実を知っているが故に打ちひしがれてしまわぬように。壊れてしまわぬように。

『忘れた』のであれば、それは失われてはいないはずだ。心の奥底に、封じられた箱はまだ残っているはずだ。

だからきつとこの言葉も、少女の心の奥底では理解できているのだ、という期待がオトハにはあった。

「城の者には嬢様に親切にするようにとのカザミ様からの命令が降りています。だから安心して行ってください。迷ったような素振りがあれば、すぐに嬢様を部屋にお連れするようにも言ってありませんから」

このことに関しては「危険だ」との意見もあったが、少女には運動が必要だし、色んな人やモノに接したほうが精神的な成長も速い

だろう。それに、城内で誰も頼る人がいないという場所はほとんどない。あるとしたら……

「それで、この四階の場所、今印を付けた階には絶対に入らないでください。カザミ様専用、王の領域です。他の者も滅多にこの近くはうるつきませんので。あと行ってはいけない場所があるとしたら、大抵人が配置されていますので、その者の指示にはきちんと従うこと。いいですか、くれぐれもカザミ様のお部屋には入らないでください。もしかしたら恐ろしい罰を受けてしまうかもわかりませんわ」

真剣な表情で念を押したオトハを、ナルカミは暫くじっと見つめて、一度だけぶるりと体を震わせた。

伝わったのかもしれない。

「では今日は私と一緒に歩いてみましょうか」

立ち上がって部屋の鍵を開ける。少女の部屋は外からも中からも鍵穴を使わなければいけない仕様になっていた。

扉を開いてオトハは部屋の外に出るよう少女を促す。

少女の赤い靴が、音を立てずに広い世界へ踏み出した。

第三章：忠実な淑女

天を突き刺す矢のような形をした、見様によつては槍のようでもある棒は、絶えずあの方の情報を脳内に送り込んでいる。

感覚とまではいかないが、意識すればすぐにわかる。それは身体機能の一部だ。

知るといふよりは、思い出すというのが近い。

彼の位置まではあと10m程。9、8、7、6…扉を挟んで5m。

くすんだ桃色の髪の毛、重そうなドレスを纏った女性　ナビは、重厚感のある機械仕掛けの扉の前に来た。灰色の扉には、本来なら構造上必要ない、歯車やら螺子やらが所狭しと取り付けてあり、扉をいかめしく飾っていた。あの方の趣味なのだろう。

今は無駄を省いた冷たい頑丈な機械が大量に作られる時代だ。でもあの方は機族のトップという座につきながら、敢えてこのような一昔前の、懐かしく暖かい形にこだわっている。

ナビはキラの作るそんな機械が好きだった。

呼び鈴を鳴らそうとして、はたとその手を止める。帽子を被り直し、手鏡を取り出して化粧崩れがないかを確かめた。そして見下ろして、淡黄色のドレスを袖から裾までくまなく確認する。これから会おうとしているのは我らが機族の長だ。埃ひとつでもついていようものならば、ナビの淑女としてのプライドが許せない。

改めて呼び鈴の紐を引っ張る。すると扉の歯車がゆっくりとまわりだして、扉は音楽を奏で出した。古ぼけた、こもりがちなメロディ。

壮麗な城内の景観をいかつい扉でそこねた上に、こんな音楽を流して良いものだろうかと、当初は疑問に思った。しかしこの城の主はそういうことには寛容　　というよりかは関心がないようだ。

音楽がまだ鳴り止まない内に、中から声があった。

「どござ」

濁りのない、若い男の声。

ナビは小さく「失礼します」と呟いて、見た目のわりにはそう重くもない扉をゆっくり開けた。

室内はやけに明るかった。日差しとかそういう問題ではなく、これは人工的な真っ白い明るさだ。上を向くと、蛍光灯四本が静かに光っている。

部屋の中には工具や何に使うのかわからないものが溢れていたが、それなりに整ってはいた。少なくとも床にもものが散乱してはいない。

部屋の主は大きな四角い机に部品や工具を広げて、何か作業していたようだった。

ナビが部屋に入ってきたことを認めると、作業の手を止めて立ち上がる。

質の良い銀髪と、穏やかな薄墨色の目を持つ、若い紳士

それが機族の長を務める男、キラの姿だった。

ナビはドレスの裾をつまんで、深々と丁寧にお辞儀した。

「こんにちはキラ様。遅れてしまって申し訳ございません」

キラは困ったようにのんびりと笑う。

「『遅れた』っていったってあなた、僕は時間を指定した覚えはありませんよ」

ナビはふるふると小刻みに首を振った。

「いいえ。いいえ。今日あたくしはお部屋を出る際に手鏡を忘れてしまつて、一回戻つたのです。それがなかつたらあと五分は早く此処に着けたことでしょう」

「そうですか。それでも十分お早い到着時間でしたよ」

ナビは幸せそうに、本当に幸せそうに頬を染めた。

「お褒めに預かり光栄ですわ、キラ様」

キラはそれを見、目を細めて頷いた。

「それでね、今日はあなたに頼みごとがあつて呼んだんです」

「ええ、そうだと思つておりましたわ。何なりとお申し付けくださいな。何ならあたくし、遠く離れた開拓地で郵便の仕事を頼まれても、喜んでやりますのよ」

そう言うナビの顔は相変わらずにこにこと笑つてはいるが、そこに冗談の空気は少しも紛れていなかった。

困った方だ、とキラは思う。

一体彼女の何が、自分にそこまで尽くさせるんだろう。

「そんなことをあなたに頼むくらいなら、僕が代わりに行きますよ。そうでなくて、もっと近くて簡単なお仕事です。と、いってもそれは開拓地と比べてのことであって、実際は普段よりも遠くて重要なお仕事です」

するとナビは顔を輝かせた。

「まあ。あたくしもやっと、キラ様に大切なお仕事を任せられる程に、成長したのですね」

この純粹過ぎる女性と接する度、キラは不安になる。果たしてこんなにも濁りのない眼差しを持つ人間が、蹴り合い落とし合いの貴族社会でやっていけるものなのか、と。

しかし自分はそんな彼女を敢えて利用しているのだから、彼女を心配できる程綺麗な人間ではないな、とキラは心の奥で自嘲した。

「あなたのことは元から信頼しているし、実力も認めていますよ。ただ、今まで余りに平和だったので、それ程重要な仕事もなかっただけです」

取り繕ったわけではなく、これは事実だ。

ナビもそこところは了承しているようで、真剣な面持ちで頷いた。

「ええ、そうですわね。カザミ様が王座に就かれてから、朝衆はとも平穩になりましたわ」

「まあそれでも『表向きは』という域の平穩ですが」

キラが意味ありげな顔を見ると、ナビはのんびりと笑った。

「あらあら。それは仕方のないことですわ。でも何よりも、流血沙汰が起きていないのが一番です。あたくし『死』という不自然なものは、できればもう二度と見たくはないのです」

一瞬悲しそうな顔をしたナビを、キラは眩しそうに見つめる。喜ぶべきことに心から喜び、悲しむべきことに心から悲しむことのできる彼女の心理は、何と美しいものだろう。

「……それで、ね。今回はこの手紙を、14人の公爵達に届けてきてほしいんです」

言いながら、キラは机に被せてあったシルクハットの中から、14通の白い封筒を取り出した。

ナビは即座に頷く。

「了解いたしました」

キラはこの女性の素直さに再び驚く。公爵の何人かは車で、3日かかるところに領を持つ者もいるというのに。

思わずキラは口走った。

「あなたは本当に、貴族ですか？」

ナビは苦笑する。

「ええ、貴族ですわ。ラインハルト家の第五子でございます。あの、

あたくしそんなにレディとしての気品がありませんか？他の方にも時々言われるのです」

段々本気で困った顔をしてくるものだから、今度はキラが苦笑する番だった。

「いえ、何となく聞いただけです、あまり深く考えないでください。あなたはどこからどうみても高潔な淑女ですよ。ただ、今のシステムに順応できなくて、なかなか僕の個人的な命令を聞きたくない輩もいるものですから。あなたのような、貴族として生まれるにも関わらず、プライドの高くない素直な人間というのは、珍しいんですよ」

カザミは王になつてまず、カザミの元に全ての朝衆の部族を平等とし、族長の下に部族の全ての人間を平等とした。

これは何を意味するのか。

それはどんな人間でも、例え公爵だったとしても、族長は直属の部下として扱える、ということなのだ。同時に、族長だったとしても、カザミは直属の部下として扱えるし、現に今、そうなっている。これで反对者が起こらないわけがない。

しかしナビは眉を潜めた。

「そんな不届き者がいるだなんて、信じられませんわ」

「あなたのお父上がその典型的な例なんですけどね」などとは勿論言わず、キラは適当に微笑んでいた。

「それで、この手紙ですが、何の手紙だと思いますか？」

「雷族の長についての件ですか？」

予想に反してナビは正しく答えた。

「よくわかりましたね」

「話し合っべき問題で思いつくことなんて、それくらいしかありませんもの」

得意げな様子もなく、笑みを浮かべるナビ。

「まさしくその通りなんです。それで、この手紙を渡した公爵達にはその場で返事をもらってきてほしいんです。いちいち集まってもらって会議を開くほうが目立ちますからね。あ、別に封筒の中身は見ても構いませんよ。どれも同じ内容ですが」

冗談混じりに言うキラに、ナビは珍しく「あら」と不機嫌な表情を見せる。

「そんなこと、淑女の心に誓っていたしませんわ」

その顔がまるで子どものように愛らしくて、キラの顔からはいつの間にか自然な笑みがこぼれていた。

「では、よろしく願います」

言って、ナビに手紙の束を渡す。

ナビはそれを両手でしっかりと受け取って、深く頷いた。

「行ってまいりますね」

綺麗に一礼してから、身を翻したナビを、キラはほぼ反射的に呼

び止めた。

体ごと振り返るナビ。

「何でございましょうか」

キラはナビの目を真っ直ぐに見つめて問うた。

「もし、陛下と僕が対立するようなことがあった場合、あなたはどちらに忠誠を誓いますか？」

ナビは二、三度瞬きしてから、ふっと表情を緩めた。そっと囁く。

「万事はあなた様の意向の元に」

そして音を立てずに部屋を出て行った。

キラはその背中を満足そうに見つめた後、小さな声で愛を述べた。

なのに店が潰れない理由は、この仕事が店長の副業だからである。店の資金は全く別のところから入ってくるのだ。

そしてココロは副業の客としてではなく、本業のほうのクライアントとして、今日此処に来たのであった。

濃い緑色のペンキが塗られたドアを軽快に開ける。取り付けられているベルも、久々の来客を喜ぶように、からんからんと明るい声で鳴いた。

それに反応して、カウンターで本を読んでいた女性が顔を上げる。顔には、雨をたっぷり溜め込んだ灰色の雲のような、どんよりとした表情。

別にココロを嫌がってこのような顔をしているのではない。これが彼女の通常なのだ。

そのことを知っていたから、ココロも特に気にせず軽く挨拶した。

「こんにちはウツさん。良い昼をお過ごしかい？」

「……ええ」

それが本心とは欠片も思えないような暗い声で、ウツと呼ばれた女性は答えた。

胸の上あたりまで伸びた黒髪に、開ききっていないエメラルドグリーンの眼。肌は蒼白いという言葉がまさしく合うような色だったが、病弱そうかと言われれば、別段そういう様子を持っているわけでもない。藍色と白のエプロンドレスと、揃いのヘッドドレスを身

に付けていた。基本的にはしっとりとした静かな美女だ。正確に言うてしまうと、「しっとり」という言葉は「じっとり」に置き換えられてしまうが。

暫くウツとぼんやり見つめ合っていると、ウツは興味を失ったように読書を再開しようとした。ココロは急いで言葉を繋げる。

「マコト、呼んでくれない？」

ウツはある程度その言葉を予測していたらしく、すぐに、しかしゆっくりと立ち上がった。そしてココロとは目を合わせずに、カウンターの奥の階段を上がっていく。

手持ち無沙汰になったので、ココロはカウンターに背を預けて店内を眺めてみた。

時計、アクセサリー、食器、絵画、等々。中でも可愛らしいオルゴールの種類が群を抜いた品揃えで、聞いたところによると、そういったものは大抵ウツが仕入れてくるらしい。

本当は店頭に置いてある商品はまだまだ序の口で、気に入った人間になれば店長はもっと凄いモノを見せてくれるのだ、といつかク口が言っていた。

店内に灯りはひとつしかない。カウンターに、これまた歴史のありそうなランプが置かれているだけだ。きっと、ウツが本を読むためだけに置かれたようなものだろう。

二、三分、久々の静謐の時間をココロが味わっていると、階段のほうから足音が聞こえてきた。

現れたのは褐色の肌の若い男。大きな緋色の瞳は無愛想な表情を湛えており、男は面倒そうにぼさぼさの黒髪を掻きながら降りてき

た。体格は小柄なほうで、白い टीーシャツと黒い七分丈のワークパンツの上に、ベージュのエプロンを着ている。

「よ、マコト」

ココロが片手を上げて挨拶すると、マコトと呼ばれた男は、

「どうも」

と不機嫌そうに会釈した。

「ウツさんはどうしたんだい？」

ココロは先程から気になっていたことを聞く。

「引っ込んでそのままです。あんま人と会話したくないそうで」

それを聞くと、ココロはわざとらしくおどけてみせた。

「がーん。もしかしなくても俺って嫌われてる？」

「別にそんなこともないと思いますけど。ろくに会話したことない人とは、大抵あんなかんじです」

言いながら、手で押さえようとせずにもせずに欠伸をひとつ。

「ああそう。なら良かった。ていうかむしろ俺って君に嫌われてる？」

「嫌いなわけではないですよ。ただ単に好きじゃないだけです」

迷惑そうに言い放ったマコトの言葉に、ココロは心底ショックを

受けたような顔をした。

「ひどー、そんな正面きつて堂々と言うことないじゃんか」
「嫌いとは言つてませんよ」
「おんなじようなもんだつつーの。これでも族長なんだから、もちつと敬いたまえ」
「すいませんねえ、正直者で」

終始達観したようなマコトの物言いに、ココロは「うぐぐ」とわかりやすく歯噛みした。

「それで、何の御用でしょうか族長様」

いい加減不毛なやりとりに疲れたのか、マコトが本題へと切り出した。

ココロもすぐにへらへらした笑みを浮かべる。

「仕事を持ってきたのさ」

「何の」

「クロちゃんからのお使いの依頼」

マコトは顔をしかめた。

「うわ。嫌そう」

「当たり前ですよ。あ、始めに言っておきますけど、さすがの俺でも会長の優しさは持ってこれませんから」

「はは」とココロは笑った。

「いやー、俺もそこまでは期待してないよ。ていうか会長はあれで

十分クロちゃんには優しいしねえ」

言って和やかな笑みを浮かべる。
間髪入れずにマコトが続けた。

「天候を変えるのも却下ですよ。あの雪騒動の後、案の定各地で暫く異常気象が続きましたからね」

「あー、だいじょぶだいじょぶ。別に今回の仕事は、本来不可能なことじゃないから」

しかしマコトはそれで安心するどころか、逆にもっと顔をしかめてみせた。

「それなのに俺に頼むってことは、物理的に可能だろうと何だろうと、相当難しいことなんですな」

苦笑するココロ。

「ぴんぽーん御名答。それで……」

言いながらココロは、パンツのポケットから、折り畳まれた紙切れを取り出した。

「クロちゃんはこれを御所望なんだとさ」

マコトは差し出された紙切れを大人しく受け取る。新聞の切り抜きのようだった。

丁寧に開いて、現れた写真を目にし、驚愕した。次いで冷えた視線をココロに送る。

「こんな依頼、何で受けたんですか？」

ココロは困ったように笑う。

「クロちゃん最近ずっと自室に籠りつきりで、他の人もあんまり話さなくなっちゃったじゃないか。俺とかアイスだって、呼ばれればそりゃ行くけど、いつも暇なわけじゃない。それに話し相手としては、俺らじゃ満足できないらしい。だったら、積極的に話し相手を作ろうとしているのであれば、好きな子を選ばせてあげてもいいんじゃないかと、俺は思うんだよ」

マコトは表情を変えない。

「無駄だと思いますよ。雷族の長を連れてきたとして、あいつが満足できるはずもない。あいつの欲しいものはそんなものじゃない。それくらい、わかっていてるでしょう？あんたにも」

ココロはやはり困った笑みを浮かべながら、何も言わない。

「甘やかし過ぎなんですよ。あんたもアイスも会長も」

刺々しく言い放ったマコトとは対照的に、ココロは優しく呟いた。

「でも何かが、変わるかもしれない」

マコトは何か言おうとして、しかし何も言わずに口を閉じた。

「俺はいつもその期待の欠片を信じて、行動してきたよ」

酷く切ない表情を浮かべるものだから、マコトもそれ以上反論で

きなかった。

代わりにぼつりと質問する。

「何がそこまでさせるんですか」

ココロは苦笑いを浮かべながら首をひねった。

「さあねえ。別に大した恩があるわけでもないし、俺自身わかんないね。ただ持つべき感情に沿って、行動してるだけだよ」

その目はやたらと悲しそうで、しかしその時ばかりは、この男が空虚な人間に見えた。

「……面倒な人生を送ってますね」

ココロは乾いた笑いを漏らす。

「全くだ。心族になんて生まれなくなかったよ」

マコトは少しの間考えて、それから重たそうに口を開いた。

「報酬は高くつきますよ」

ココロが嬉しそうな声を出す。

「お、やってくれますかマコト君」

「まあ族長ですからね。敬っておきますよ」

諦めたかのような口調で言った。

「ただし」

とマコトは続ける。

「悪いようにはさせません」

それだけ言い残すと、もう話は済んだとばかりに、身を翻して階段を上っていく。

「……マコトは優しいなあ」

静かな静かな空間で、ココロはそっと呟いた。

顔には疲れた笑みが、空っぽの心を覆うように、空っぽのココロを守るように、のっぺりと張り付いていた。

からんからんと場違いに明るい音が鳴り響いて、マコトは大きく息を吐いた。

ココロが店を出ていったのを確認すると、途中まで上りかけていた階段を再び進む。

彼との会話はほんの十五分くらいの時間だったが、やけに疲れた。いつもそつだ。あの人と喋る時は色んなことに気を遣ってしまう。無駄に疲弊するのだ。

「だから好きじゃないんだよな。嫌いでもないけど」

そう呟いたところで、影に気付いた。

「うわ、と思って上を見ると、階段を上った先には、蒼白い美女がこちらを見下ろしている。」

美女は小さく口を開く。

「行かれるのですか？」

一瞬回答に詰まってしまってから、ああそのことかと理解する。
やはり盗み聴いていたらしい。

「うん、行ってくる。といっても暫くは調査だから、頻繁に戻ってくるけど。何にせよ店にいないことは多くなるから、留守を頼むよ」

ウツは小さく頷いた。そして小さな声で言った。

「店長も、族長様に負けず劣らず甘いですよ」

マコトは自嘲気味に笑った。

「自覚してる」

第五章：図書室の技師

ウィンドネル城本館で一番広い部屋

それは図書室だ。

朝衆首都エアルートの公共図書館にはとても敵わないが、そこには置いていないような貴重な書物も此処には多い。城に住む者なら誰でも利用することができ、それは城の者の一種の特権とも言えた。とはいえ、今現在の午前九時にそこを使用する者はほとんどいない。

朝衆の領時は午前四時から正午迄。この時間帯は丁度人々が二回目の食事を摂って、一休みした後、仕事を再開する時だ。

そういうわけで、昼食を食べて再び向かった図書室には、案の定司書のキラしかいなかった。

キラは食堂から持ち帰ったホットドッグを食べながら、未完成の機械を前に格闘している。

昼食前に来た時もこんなかんじだったし、昨日来た時もこんなかんじだった。聞けば暇なときには好きなことをしていられるから、司書という役職を選んだらしい。

少女に気付いたキラが、穏やかに声をかけた。

「やお嬢さん。勉強熱心ですね」

雷族の長である少女は、きらきら光るプラチナブロンドを舞わせながら、ペこりとお辞儀をした。

少女が城に来ておよそ一ヶ月程が経つ。その短い間に、少女は驚異的な速度で言葉を覚え、字も読めるようになっていた。

自分でも不思議に思っているのだ。今まで意味を成さない記号としか思えなかったモノが、あるときふつと、まるで最初から知っていたかのように理解できるときがあるのだから。

そうして字が読めるようになってからは、少女は頻繁に書物を開くようになった。

本を一頁めくる度に、未知なる世界は少女の眼前に広がった。

本当は、それはとても恐いことだった。自分の持つ世界の小ささを、一頁めくる度に突き付けられるというのは、ある種の恐怖をもたらした。

でもそれを知らないということとは、もっと恐ろしいことなのだ。

だから少女は本を読み、外を見る。自分の貧しい世界を、一刻も早く広げようとするかの如く。

同時に本を読むことは、純粹に楽しい行為でもあった。未知なる世界は少女に希望をも与えた。

やがて図書室に行く回数も次第に増えていき、キラとも随分と顔馴染みの仲になった。

「毎日毎日来ているけど、借りていって自分の部屋で読んでもいいんですよ？」

ドライバーを回しながらキラが言う。

少女は小さく首を振った。

「本に、囲まれていたいのです」

周りの者は敬語を使う者ばかりだから、少女の口調も自然と丁寧なものになっていた。

「お行儀が悪いと、叱られます」

唐突に少女が言うものだから、キラは一瞬「うん？」と首を傾げた。まだ喋ることに慣れていないせいか、少女はこのように、言葉足らずなところが多々ある。

不思議そうな顔をしているキラを見て、少女は暫く考え込む。それから言うべき言葉を見つけて、再び口を開いた。

「何かをしながら物を食べるのは、お行儀の悪いことだと、オト八さんが言っていました」

苦笑するキラ。それから少し意地悪な顔になって言った。

「さてはお嬢さん、本を読みながら物を食べて怒られましたね」

少女の下がった眉尻がさらに下がった。恥ずかしそうにうつ向いた顔はほんのりと赤い。

それを見てキラのほうも少しいたたまれなくなったのか、笑って付け加えた。

「言い逃れのためにちょっと言ってみただけですよ。気にしないでください」

言って面白そうに微笑むキラを、少女は少し拗ねた目で見た。

「言い訳を言わせてもらいますとね、僕は『紳士のマナー』というものをないがしろにしなければならぬ程、忙しいのですよ」

「何故ですか？」

キラは少年のような輝く瞳で、手に持っているいかめしい機械を掲げてみせた。

「コンクールにでも、出すのですか？」

「まさか」と言っただけでキラは笑った。

「評価が欲しくて、作っているわけではありませんから」

少女は何故？というふうには首を傾げた。

「今でしか、作れないモノがあるじゃないですか」

言いながらキラは、愛おしそうに機械を撫でた。

「時は流れる。時代は過ぎ行く。日々が安定していようと、季節は変わり人は変わる。だから、その時できることは、精一杯やっておこうと思ひまして」

そう言った、少年のような顔で大人の言葉をつむぐキラを、少女は憧れの表情で見ている。

しかしキラは、そこに水を差すかのように忠告する。

「だからって、これをお嬢さんがマナーを無視する言い訳にしてはいけませんよ」

凶星を突かれたように、少女は眉を寄せた。

キラはわかりやすい少女にくすりと笑う。

「何故ですか？」

「それが許される程経験を積んでないでしょう。僕は今まで色々経

験してきて、この行為が許されるくらいの信頼は勝ち得てきましたからね。今でもオト八には叱られますが」

ふうん、と納得しきれない顔で少女は呟いた。

それに、とキラは続ける。

「あなたみたいな貴族の女性は、特に、お行儀よくあるべきですよ」「それ、オト八さんも、よく言います。女の子なんだから、お行儀よくしなきゃ駄目ですよ、って。でも、何故ですか？女の子だからって」

少女が少しふてくされたような顔で言った。

キラははたと機械をいじる手を止める。

「うーん、そうですね。そういう習慣が元々続いているからですかね。貴族は特に風習とか伝統とか、気にしますし」

言いながら、キラのほうも何だかわからなさそうにしている。そして突然ひらめいたのか、うん、と一人で頷いた。

「慎みのない女性は、貴族社会では特に、敬遠されがちなのですよ」

少女は首を傾げる。

「けいえ……？」

「ちょっと遠回し過ぎただろうか。」

「異性にもてないってことです」

少女はまだわからないようだ。首を傾げたまま難しい顔をしている。

「お嫁に行けないって言えばわかりますか？結婚できない、とか」「けっこん……結婚は知ってる」

釈然としない顔ではあったが、少女は小さく頷いた。

「そういうことです」

キラも頷く。

少女は何かうわ言のように、「けっこん……けっこん……」と繰り返した。

自分の心の奥底で、何かが開く兆しが見えた。

でも特に興味もなかった少女は、それを意図的に開けようとはせず、すぐにどうでもよくなった。

それきり何も言わずに、キラの前を立ち去っていく。

キラは暫く少女を目で追って何か考えているふうだったが、また直ぐに作業に戻った。

昼衆の領時に切り変わって暫く経った頃。

少女が地理の本を開いて長机に座っていると、突然少女と本を影が覆った。

びつくりして顔を上げると、目の前にはキラがいた。彼は何か感心しているように言う。

「今日はお茶にも戻らなかつたのですか？」

あ。しまった。

少女は慌てふためく。

図書室の壁に掛けられた装飾過多な時計に目をやると、短い針は既に一の数を指している。

定められた間食とお茶の時間は十一時。今の時間に部屋へ戻っても、オトハはきつと夕食が食べられなくなるからと、用意してはくれないだろう。そりゃあお茶くらいはいつでも汲んでくれるだろうけど。

少女は深くうなだれた。

お茶の時間に食べられる甘いものは、毎日楽しみにしているのに。

「お茶の時間を忘れてしまつ程に集中していたのですね。これは…
…地理の本ですか」

キラは本を取り上げると、ぱらぱらと頁を捲った。

「お嬢さんは地理が好きなんですか？」

こくりと頷く少女。

「空に浮いてるお城や、地下に造られた巨大都市があるんですって。凄いですよね」

少女の瞳の中の稲妻が、きらきらとほとほとした。
キラは苦笑する。

「お嬢さん、空に浮いてるお城ってウィンドネル城のことですよ」
「ええ」

少女はそんなこと知ってるわ、とばかりに頷く。

「ウィンドネル城とは、ここのことですよ」

キラが苦笑を崩さないまま言った。

「え……」

少女の金色の目が大きく見開かれた。
驚きを隠すこともせず、上擦った声を出す。

「じゃあ、このお城は浮いているのですか？」
「正確に言うと、この城を支える、島のような土壌ごと浮いている
のですがね。カザミ様の力で、この城は絶えず移動しているのです」
「よ」

「凄い。」

文字通り、開いた口が塞がらない。

まさか、今自分があるこの場所が、御伽話のような世界だったなんて。

「じゃあ、下に降りるときはどつするのですか？」

少女はすっかり興味深々な様子だ。

「エアルートに繋がる空気の道があるんですよ。そこから降りられます」

「空気の……道？」

よく、というか全然わからない。空気の道だなんて聞いたこともない。道は空気にもできるものなのだろうか。

「詳しい原理は僕も知りませんが。そういうモノを作れる技師が、風族にいるんです」

名前の力か、と少女は納得する。

人に付けられた名は、その人の才能に影響を与え、開花させるらしい。わかりやすく言えば、名によって能力が決まるのだ。

例えば、カザミは風を見るという意味。カザミは風を操ることができる。オトハは音波の意。彼女は自分の口から発せられる音を自在に調節することができ、男声にしたりピアノを声で演奏したり、果ては一人でオーケストラも奏でられる。

「そうだ」とキラが呟いた。

「この城について、もっとよく知りたいですか？」

少女はぱつと顔を明るくして

とはいつても、下がっ

た眉尻は、もうその形で固まってしまったのか、そのままだったが
何度も頷いた。

「そういう文献がたくさんあるところがあるのですが……もし良かったら一緒に行ってさしあげましょうか？」

「はい、是非」

言って少女は嬉しそうに椅子から立ち上がった。

少女の金色の目は輝きを増し、キラの薄墨色の目は、真実を隠すかのように細められた。

第六章：繋ぎ合わせの公爵

キラから手紙を送り届ける仕事を承ってから、三週間程。

ナビの姿は、ウインドネル城内の機械の整備・修復などを司る、エンディーヌの館にあった。彼女は今その応接室にいる。

十四人目の公爵は、自領ではなくこの城に住んでいた。

これでやっと最後の手紙を渡せた。

最後の公爵ギアには、今キラへの返事を書いてもらっている。その手紙を受け取って、他の返信と一緒にキラに届ければ全ては終わり。キラにはきつと誉めてもらえるだろう。そのことを思うと、自然と顔が緩んだ。

何だか最近不思議なかんじだ。

キラに誉められると嬉しい。それはナビが幼い頃から、ずっと変わらない感情だ。

でも最近は何かが違う。

嬉しいという根本的な気持ちは変わらないものの、その質のようなものが違う気がするのだ。ただ嬉しいんじゃないやなくて、もっと幸福で、照れ臭くて、恥ずかしい。そんな嬉しさ。

ナビは今になって、やっとキラに同等

位の問題では

なく に見てもらえるようになった気がする。その影響
かもしれない。

以前までは、キラにとってナビは妹のようであり、ナビにとってキラは兄のようであったから。

ナビがうきうきと待っていると、扉が素早く開いて背の高い女が

入ってきた。

深紅のドレスと、同色の大きな帽子を被った貴族の女。ぐりぐりと動く吊り目がちの茶色い瞳と、やや痛んだ、腰まで届く金髪を持っている。

彼女こそギア公爵である。

「お待たせしてごめんなさいね、ナビ嬢」

口調は丁寧ではあるが、ギアはいつもむっつり顔で、何を考えているのかわからない。ナビはちょっとこの人が苦手だ。

「返事を書き終わりましたので、キラ殿によろしく」

言って、金色の装飾が施された白い封筒を、優雅な仕草で差し出す。

ナビはそれを丁寧に受け取って、ぺこりとお辞儀した。

「ありがとうございます。ではあたくし、責任を持ってこれをキラ様にお渡ししますね」

ギアは無言で頷いた。

そして唐突に言う。

「ねえ、あなたはどう思っているの？」

いきなり話を振られたので、ナビはびっくりしてしまった。

「何が……ですか？」

ギアはブラウンアイを上品に細める。

「雷族の長の件、ですわ」

ナビは困惑した。

こういう場合、自分はどう答えれば良いのだろう。

「いえ……別にあなたを試しているわけじゃありませんの。ただ、キラ殿でもなくお父上でもなく、他でもないあなた自身の考えが知りたいと思ひまして」

ナビは少し考える。

昔機族と音族は、雷族から迫害を受けていた。

ナビも小さかったが、その頃のことはよく覚えている。

毎日誰かが死んで、埋め合わせとして誰かが生まれる。そんな、絶え間ない不毛な生死が繰り返される時代。

終わりの叫び声があがったかと思うと、今度は始まりの叫び声があがる。結局どちらも喜ばしくなんてなかった。それは両方とも、何かが終わったことを暗示するものだったから。

今は違う。カザミが王位に就いた今は、帝王の下、風族も雷族も音族も機族も、皆平等となっている。

しかしカザミがそのような政策を、ほとんど何の問題もなく実施できたのには、当時の雷族族長の不在が大きく関係していた。

雷族族長が病気で死んで一年後、始め幼いカザミの代わりという名目で王位に就いていたカザミの父親は退位。カザミが王座についた時、勿論雷族の長である少女は生まれていたが、当然物心すらついていないわけで、事実上雷族の長の席は空いていたのだ。

だから機族や音族の中には、少女を恐れている者がいる。以前そ

うであつたように、また雷族の繁栄を取り戻そうと、少女がカザミに何か吹き込むかもしれない、と。それによって、あの血生臭い時代が再び始まるのではないか、と。

少女を監禁していたレジスタンスも、利益以前にまずそれを懸念して、彼女を閉じ込めていたらしい。

それに、現実に少女を担ぎ上げようとする雷族の動きもある。

雷族の長が見つかった件は、実は結構な問題を生み出しているのだ。

それらを考慮した上で、ナビは注意深く口を開く。

「あたくしは、キラ様の意見が全てですわ。キラ様のお考えがそのままあたくしの考えですの」

「そう」とギアは面白くなさそうに呟いた。

「わたくしはあの娘を野放しにしておくのには反対ですの。きっとキラ殿も同じ考えだわ」

ナビは少し驚く。

「何故……ですか？」

基本的に保守的で穏やかなキラが、反対派だとは考え難い。勿論もしそうだったとしても、ナビにはキラについて行く覚悟と準備がある。しかしナビなりのある程度の予測としては、キラは様子見派だと思っていた。

ギアは、美しいが、魔が差したような笑みを浮かべた。

「ご自分で聞いてみては如何？」

「あ、はい、そうですね。出すぎた真似を致しまして、申し訳ございませんでした」

無様に聞かなくてもいいことまで聞いてしまったなんて、淑女にあるまじき行為だったかしら。

ナビはややうつ向いて冷や汗を流した。

やっぱりこの人は苦手だわ。

「キラ殿も、よく躡けたものですね」

唐突にギアが言うものだから、驚いて顔を上げると、彼女は呆れたような顔をしていた。

よくわからなかったが、何となくキラへの含みを感じた。

「え、ええ。キラ様には昔から、礼儀作法のことまで教わって、大変お世話になりましたわ」

だから咄嗟にキラを擁護しようと思って、結局わけのわからない言葉を吐いてしまった。

ギアがふつと笑った。

「あ、あの、すみません、見当違いでしたね。その、どういう意味で言われたんですか？さっきの……その、躡がどこのこいつのって」

ギアはついにこらえきれなくなったようで、声を出して「あはは」と笑い出した。

ナビはただそれを困った顔で見ている。

「もう、もう結構ですわ。お腹一杯ですの。どうぞお下がりになって」

暫く笑い続けて、ようやく落ち着いてきたギアはそう言った。しかしまだ余韻があるらしく、くすくす言っている。

結局ナビは、何が何だかわからないまま、控え目な態度で部屋を出ていくことになった。

残されたギアは未だふふ、と笑みながらも、首をこきこきと鳴らす。それは本来なら、上質のドレスを纏ったレディには不似合いな動作。しかしこの女のそれは、何だかやけにしっくりときた。

「やれやれ。見せ付けられちゃうのは好きじゃないんだがな。あたしもそろそろ考えるべきか」

言っただけしりと自分の頬を叩くと、ギアはのしのと応接室を出ていった。

第七章：金糸雀と傀儡師

ウィンドネル城内の回廊に、二つの足音が響く。
ひとつはゆっくりと。ひとつは少し小刻みに。

それ以外に人気はない。

あとはただ、壁に掛けられた鳥や大空の絵画が、彼等を見守るだけだ。

少女は、キラが何処へ行こうとしているのか、もう既に確信していた。

他より幅の広い廊下。丸みがかかった天井に描かれた天空。しんと静まり返った其処は本館最上階。王の領域だ。

暫く歩いてから、耐えきれなくなって少女は立ち止まった。

「此処は、立ち入り禁止ではないのですか？」

胸は不安と恐れでいっぱいだ。

それでも此処迄ついて来てしまったのは、キラに対しても少しの恐怖心があるからかもしれない。

キラも立ち止まって、此方を振り返る。

「ええ。ですが僕とオトハだけは、此処に入る権利があるんですよ」

権利が与えられていない自分は、入っては駄目なんじゃないかと思っただけ、キラの表情は何となく有無を言わせない顔で、少女は不

安を抱きつつも再び歩き始めた。

キラもそれを確認して、優雅に回廊を進む。
やがてひとつの扉の前で立ち止まった。

装飾過多な王宮内にしては、わりとシンプルな二枚扉。年季が入っているようだが、決して貧弱そうではなく、むしろ重厚感や威圧感を醸し出している。

「此処は……」

「書斎です」

直ぐに応答するキラ。

少女は尚更眉を潜める。

「王様の？」

「ええ」

「それって一番入ってはいけない場所では……というか、今正に此処で、お仕事かもしれませんよ」

少女は心配でたまらないという面持ちだ。

対するキラは、

「大丈夫ですよ」

と言って、さっさと扉をノックしてしまう。

はらはらしながら見守っていたが、暫く経っても部屋の主が応答する気配はない。

「いないようですね」

少女は、良かった帰れる、と思って、ほっと胸を撫で下ろした。

しかし次の瞬間、何とキラは扉を躊躇うことなく開けたのだ。そして部屋の中を見回し、カザミがないことを確認すると、中に入っ行ってしまふ。

「だ、駄目ですよキラさん！勝手に入ったら怒られます」

しかしキラは余裕のある笑みを少女に向けて、「大丈夫ですよ」と言っつてのける。そして少女にも入るように促す。

どうしよう。怖い。色んなものが。

オトハは行くなと言っつ。

キラは来いと言っつ。

カザミは怖い。

でも好奇心もあるにはある。

暫く考えた末に、少女は足を踏み出した。

書斎は比較的綺麗に整頓されていた。しかしそれは、床にモノがないのと、元々モノが少ないのとでそう見えるだけであり、よく見ると、机や棚の上は結構乱雑な整理の仕方だった。

王の書斎だからといって、そう思ったよりは広くない。自分の部屋より一回り程大きいだけだ。

キラは本棚を端から見ていき、お目当てのものが見つかったのか、一冊引き抜く。さらにもう一冊。そして少女のほうに持ってきて、床に広げた。

「こっちがウィンドネル城の歴史と構造」

比較的薄い緑色の装丁の本を、ぱらぱらと捲る。
少女もキラの隣に膝をついた。

「あ……これ、知ってます」

その言葉にキラの手が止まる。

「地図ですか」

「オト八さんが、これと同じものを見せてくれました」

「成程。ここからコピーしたのかもしれないね」

「でも、ちよつと違う……」

少女は首を傾げた。

「この書物もかなり古いですからね。その間に、改装工場や建て増しも行われています。もしかしたら、オト八のを見せてくれた地図は、新しいものなのかもしれませんね」

「ふうん」と納得する少女。

「そつちの本は何ですか？」

指差したのは、キラが抜き取ったもう一冊
の分厚い本。

赤い装丁

表紙には、『名』とシンプルに一単語のみ書かれている。

「これは名前とか能力とか、そういうものについての本。興味ある
でしょう」

少女は目を輝かせて、こくこくと頷いた。

「あと……地理の本が隣の部屋……でしたかね。お嬢さんは此処でそれ、読んでください。ちょっと探してきますので」

いいのかな、と少し心配にはなったが、今は目の前の本に夢中で、あまり気にはしなかった。

「ありがとうございます」

キラは回廊に出るのかと思いきや、部屋にあるドアのひとつを開けて、向こう側に出ていった。

成程、隣の部屋と繋がっているのか。

キラの姿を見送ってから、少女は再び書物を見下ろす。難しい単語がいっぱい出てきたが、ある程度は理解できる。

やがて少女の目が真剣に本の文字を追うようになった頃。

白金の髪が、なびいた。

少女は驚いて顔を上げる。窓は、開いてない。しかし風は未だ止まらず、部屋に一ヶ所だけある大きな窓から優しく吹いてくる。

隙間風？そんな馬鹿な。

風は段々と強くなっていく。本の頁がぱらぱらと捲られていき、終いには閉じた。

渦を巻くように、ゆっくりとこの部屋を回転する流れ。

こんなこと、前にもあったような……。

思った瞬間、少女の顔が強張った。恐怖のあまり体はそのまま硬

直してしまっ。

やがて風は収まりはじめ、背後から声が聞こえた。

「其処で何をしている」

隣の部屋に出たキラは、ほっと一息吐いた。

あとは少女次第。万が一カザミの怒りが爆発して、少女が獄に入られようと、それはあの娘がそこまでの人間だったということ。元はいなかった存在だ。今更欠けたところで、自分達に損害はない。また、万が一自分が獄に入れられることになったとしても、それはカザミがそこまでの人間だったということ。そんな国家に仕える気も毛頭ない。

キラは小型のスピーカーを取り出した。音量を小さくして、そつと耳に当てる。

あの本のカバーの裏に、小型マイクを仕込んでおいた。

これで会話が聞ける。

キラはそつと笑んだ。

見定めようじゃないか。

第八章：王様と泣き虫

「其処で何をしている」

少女の背後から、低い、静かな声が聞こえた。

少女は動かない。否、動けない。その声に答える程の精神力は持ち合わせていなかったし、絶対的な恐怖の前には、震えも起さない。頭の中は真っ白で、後悔も恥じらいも今はなかった。

少女はただ本能的に、息を潜めて硬直しているしかない。

「何をしている、と言っている」

再度繰り返す男の声だったが、答えぬ少女に特に苛立ったようではなく、それは唯々静かな声だった。実際の音量が小さいわけではない。むしろよく通る声だから、かなりはつきりと聞こえる。しかしその平坦で、感情のこもらない声には、『静か』という表現が実に適格だった。

二度目の質問にも答えなかったので、声の主
カザミ
は、こつこつと控え目な靴音を立てて此方に近づいてきた。

少女はそれを感じてはいたが、何処か遠くから聞こえる音のように、ぼんやりとそれを聞いていた。そうして自分から離して考えることによって、襲い来る焦りと恐れの際に吞まれないようにしていたのだ。

だから完全に油断していた。

まさかカザミが、いきなり後ろから此方の顔を覗き込んでくると

は、思ってもみなかったのだ。

少女は今にも泣きそうな顔をして、体をのけぞらせた。まるで鼻先に猛獣がいるかのような表情だったし、実際そんな気持ちだった。

カザミの整った顔立ちは、僅かにしかめられる。

それはそうだ。自分をあの閉鎖空間から助け出してくれた張本人を、猛獣のように扱うだなんて。

途端に少女は、情けなくて仕方がない気分になってきた。

他の人に対する礼儀を忘れてはいけないと、常にオト八に言われているのに。

そんな申し訳ない気持ちが顔に出ていたのか、カザミの緑色の眼が二度、瞬いた。

「は、う……」

何か言おうとして、結局出たのは、こんな、言葉にすらなっていない声だった。

何だかとても恥ずかしい。今直ぐ此処から逃げ出したい気持ちだ。でもそんなことは勿論出来ない。

失礼云々の前に、そんな勇氣は少女にないのだ。

少女の顔を覗き込んだまま、カザミの口が開いた。

「お前、未だ喋れないのか」

「しゃべ……れます」

やっと声が出た。でもか細い、かすれた声だった。

「ではもう一度聞こう。何故此処にいる」

少しの間少女は考えた。目の前で起きることに精一杯で、自分が何故此処にいるかなどということは、今まですっかり忘れていたのだ。

そして状況を整理してから、少女は口を小さく開いたが、

「キラさんが……」

と言いかけて、少女は口をつぐんだ。

「キラが？連れてきたのか？」

呆れた顔をするカザミ。

しまった。これではキラを言い訳に使っていることになってしま
う。

「何事も他人のせいにはいきません。むしろ、
他人の罪を進んで被るような、そんな方こそ、貴き雷族の長である
べきですわ」

少女の心の中を、いつかのオトハの言葉が足音を立てて駆け巡る。

あたしはその時、聞いたんだ。

『どつして、雷族は貴いのですか？』

オトハは美しく微笑んだ。

『雷族の女性は謙遜で聡明で、服すべき権力に従順なのです。勿論全員が全員、そういうわけではありませんが、それはとても貴い特質。ねえ嬢様、誇りは持つて良いのですよ。でもご自分の謙遜さと聡明さと従順さに、誇りをお持ちになつて』

オトハの説く雷族の特質は、いつも、自分の心を磨くような思いで聴かされた。昔雷族が、音族と機族を迫害していたなど、悪いところも聞いてはいたけれど、オトハは雷族をよく褒めていた。少女もそれを聴いて、そんな雷族に誇りを持っていたし、オトハの望むイメージを壊したくはないと思った。

だから少女は慌てて首を振った。

「あ、の、キラさんは関係ないです。あの、此処の本が読みたくて興味があつて、それで、勝手に入ってしまった」

決意に反して言葉はやたらと頼りなかったが、それでも必死に訂正した。

しかしカザミの顔に、特に変化はない。

当たり前だ。こんな訂正の仕方では訂正しきれないわけがない。というか、確信をさらに強めるだけだ。

少女はむしろ、自分の言動によって穴を掘っていることに気付き、心の中で頭を抱えた。

案の定カザミは、少女のぼろぼろな証言に騙されるわけもなく、

「それでキラが誘つたと？」

と言いながら、改めて少女の前に立った。

少女は風の王に見下ろされるといふ圧力に耐えながらも、必死に否定する。

「違うのです。此処に来たのはあたしだけです。キラさんの名前は、さっき咄嗟に思い浮かんで、言ってしまっただけなのです。本当に、あの、関係ないのです」

その目はもう涙ぐんでさえた。色々な人に申し訳がつかなかった。

全部自分が悪いのに。オトハの忠告を無視した自分が悪いのに。どうしてあの時、キラの名前を一番最初に出してしまったのだろう。結局心の奥では、キラのせいだと考えている自分がいるのだ。

「何故かばう。正直に言うのがお前のためだ。嘘を吐いてはいけないと、オトハから習わなかったのか」

少女の恐怖は絶頂に達していた。目の前にカザミがいるというだけで十分恐いというのに、今はそんなカザミに問い詰められている状況なのだから、無理もない。

それでも、拙くてももう他人のせいにはしないと決心した。

雷族にも色々な歴史はあれど、あの日オトハが語った雷族も、決して間違っではないのだと信じたかった。だから自分自身がその証拠になりたいと願った。

「嘘は、吐いてません」

嘘は吐いてないと、嘘を吐くだなんて、何て滑稽な話なのだろう。むしろこの嘘はカザミに対する罪だ、という意識もあり、もう少女は何をするのが正しいのかよくわからなくなっていた。眼前の恐怖がそれを後押しするように、思考をごちゃ混ぜにする。

「俺は朝衆の王にしてお前の恩人だ。従順さを示す機会を無駄にするか」

思考をごちゃ混ぜに、する。

「嘘は、吐いて、ません」

言っ、少女は遂に涙をこぼし出した。大きな目から、滴がじわじわと溢れ出す。

何だろう、これ。

頬を水が伝っていった。

舐めたらしょっぱかった。

恐さと悲しさと恥ずかしさと情けなさと悔しさが頂点に達したと思ったとき、いつの間にか流れ出していた。

よくわからないけど、好きなだけ流れればいいと思った。

だって、それが溢れた瞬間に、一回思考がリセットされて、妙にすっきりした気持ちになったんだ。

カザミは「そうか」と言っ、それ以上問い詰めなかったが、微妙に面白くなさそうな顔をしていた。

その場の空気を変えるように、話の方向を変える。

「オトハはお前に言わなかったか。此処は立ち入り禁止区域だと」
少女は言葉を詰まらせる。

自分に言い聞かせた。
もう言い訳は駄目って。

「オトハさんは……言いました」

カザミの目は穏やかな厳しさを湛えていた。矛盾しているようだが、そんな眼差しだった。

「知っていながら罪を犯す

その報いは大きい」

「は、い」

少女はどんな罰を宣告されるのだろうかとひやひやしていた。だからカザミが次の瞬間言った言葉には、いささか拍子抜けしてしまった。

「ならば、去るが良い」

。

「へ？」

あまりにもあっさりとしていたから、つい聞き返してしまう。

「去れ。但し犯した罪を忘れるな。返報はお前の思い至らぬ大きなところであって来るだろう」

少女は瞬きを何度かすると、ぶるりと体を大きく震わせた。そして再びやって来た恐れの感情に押しやられるように、一目散に部屋を出ていった。

隣の部屋では、その成り行きを、キラが真剣に聴いていた。

扉の音と誰かが身軽に駆けていく音がして、キラは小型スピーカのスイッチを切った。

彼はそれをスーツの胸ポケットに入れる。

暫く無表情に何か考えているようなキラだったが、やがて薄い笑みを浮かべて部屋を出ていった。

それはやけに優しげな笑みで、足取りも春風の如く颯爽としていた。

第九章：仮面の真理

「聞きましたよキラ」

偶然か意図的かはわからないが、廊下で出くわしたオトハは、挨拶もそこそこにむすりと顔をしかめて言った。

雷族族長の少女とともに、カザミの書斎に侵入した次の日の朝のことだ。

図書室を少しの間部下に任せて、機械組み立ての部品を取りに自室へ戻ったところをがっちり捕まえられた。

これは誰かを叱りつけるときの顔だな、とぼんやり思う。オトハとも結構長い付き合いであるキラは、この表情も飽きる程見てきた。オトハに言わせれば、きつと自分がそれ程までに何かをやらかしていることになるのであろうが。

「何をですか？」

とりあえずとぼけておく。

「わかっているでしょう。嬢様を、カザミ様の部屋に、置き去りにしたそうじゃないですか」

やはりそのことか。

キラは曖昧な態度で笑った。

「そんなこともありましたね」

オト八は腰に手を当て、可愛いらしく怒る。

「何が『そんなこともありましたね』ですか！反省しているのですか？」

色々と面倒になりそうなので、

「はいはい。二度とやりませんよ」

と片手を挙げてさっさとその場を後にしようとしたが、オト八は素早く前方に回り込んできた。

そして冷えた視線をキラに送る。

「で、反省してるんですか？」

「二度とやりませんって」

「反省してる・ん・で・す・か」

参った。

何も言わずに苦笑を続けていると、オト八は疲れた顔で溜め息を漏らした。

「つまりしてないんですね。全く、あなたの頭がよく回るのはわかりますけれども、説明もなしに周りを巻き込むのはやめてくださいます？」

キラは苦笑を維持している。

「仕方ありませんよ。周りを巻き込んで初めてできることもあるの

ですから」
「そういう時こそ！」

熱の入った美しい声を張り上げながら、オト八はキラに詰め寄った。

「配慮を示し、我慢するのが、紳士の在り方ではないでしょうか」

言って、キラの顔を覗き込むようにじっと見つめる。

きつとこれが長年オト八の説教を聴いてきた人間ではなく、尚且つ男であれば、すぐさま顔を赤くすることであろう。オト八は実際かなりの美女だ。

しかし何度もこの顔を見てきたと同時に、その数と比例して正論でしかないこの説教を聞かされてきたキラにとっては、面倒臭いことに他ならなかった。

やれやれ。これだから貴族は大変だ。

キラは内心で溜め息を吐く。

あの少女といいオト八といい、この城の女性達はいちいち紳士だの淑女だの言う。まああの少女は、教育係がオト八なのだから仕方がないのだろうが。

心の中でぼやきながら、その女性達の中にナビを含んでいないのは、キラ自身気付いていたのであった。

「そうですね。しかし、僕は別に紳士的であることを最重要項目とはしていないものでして」

オト八は数歩距離をとってから、むっつりと目をつむった。

「あなた、朝衆に生まれてこないほうが良かったと思っているでしょう」

キラは笑みを崩さない。

「そうかもわかりません。でも、朝衆の機族に生まれたからこそその才能でもありますからね。それがなくては話になりません。結果として、感謝していますよ？朝衆に生まれたことには」

オトハは複雑な表情をしてはいたが、流石こちらも長年キラと付き合ってきただけのことはあって、どこか諦めているふうではあった。

「何事も程々にしておいてくださいね」

言い置き、その場を去ろうとしたオトハを、キラは呼び止めた。

丁度良いから一応聞いておこう。

「あなたは、雷族の少女についてどう思いますか？」

オトハはびたりと歩みを止めると、体をこちらに向ける。

そして即答した。

「どうも思いませんわ」

やはり予想通りの答えだったので、質問するだけ無駄だったか、とキラは過ぎ行く時間について少し後悔した。

「カザミ様がお世話しろとおっしゃったので、お世話しています。

ただそれだけです。少なくとも、あなたの欲する答えの範囲内で言う、ですが」

しかし何だかやけに含みの感じられる回答だ。キラはまた少しだけ興味が湧いて、再度質問した。

「では、陛下が殺せと言ったら、あなたは殺すのですか」

キラは微笑みながら、残酷な質問をする。

その問いにも表情を崩さず、

「いいえ」

と、今度もオトハは即答した。

「矛盾していませんか？」

「そうかしら」

彼女は飄々と言う。

「だっていくらカザミ様とて、人の命を奪う権利は持っていないと思うのです。だから、そう言われたのなら、拒みますわ」

濁りのない目で告げるオトハの前に、キラは、よくできた人間だな、と思う。

しかし可愛げはないが。

キラは質問の方向を変えることにした。

「過去の雷族による迫害については、どう思いますか？」

するとオトハは表情を一転させ、さも嫌そうな顔をした。

「さつきから何なのかと思えば、結局そういうことでしたのね。あなた嬢様をどうしようか、迷っているんですね」

オトハは気付くのが遅いなあとぼんやり思いながら、いつもの笑みを浮かべておく。

そしてその見当さえも、あながち外れているとは言えないもの、当たっているとも言いにくい。

「私は、嬢様が自分の部族を上を立てようとするような人でないことを知っています」

きつぱりと、まるで自分のことのように、オトハは潔く言い放った。

「雷族には随分誇りを持っているようですが」

オトハは当然のように頷いた。

「私がそうあるように教えましたもの」

「いいんですか？」

「心配には及びません。過去にあったことも脚色なしに教えました。嬢様は他人をおもんばかりのことができる方ですから、嬢様の登場によって迫害が再発することは、まず有り得ないといって良いでしょう」

言ってオトハは胸を張ると同時に、少し心配そうな顔になってキラの表情を窺った。

「キラ。私はあなたが何を考えているのかはわかりませんが、行き過ぎた真似だけはなさらないでくださいね。あなたが忠誠を誓うのはあなた自身ではなく、カザミ様なのです」

キラは乱れのない笑みを浮かべる。まさしく『にっこり』という笑顔だ。

「ええ。わかっています」

笑顔というものは実に便利だ、とキラは思う。

わりと薄っぺらい思考も、笑顔に少し工夫を加えれば深みのある思わせぶりな思考に偽れる。

オトハの顔から不安が消え去ることはなかったが、やがて彼女は機械的な一礼をし、その場を去って行った。

キラもそれ以上引き留めることはしなかった。

ただ、『にっこり』と笑っていた。

皆が偽者と認識する仮面が実は彼の真実だということは、誰も、ナビさえも知らぬことだった。

第十章：道先案内人の行方

ウィンドネル城の回廊を、ナビは弾む足取りで歩く。

此処は本館の三階。

キラを含めた、朝衆でも位の高い使用人の住む階だ。

但し、だからといってずば抜けて贅を尽くした作りになっていたり、高価な調度品が多いわけではない。

むしろ其処は、変わり者の趣味が遺憾なく発揮された、魔窟と言っただけ良かった。

自室前の廊下の壁際は好きに使って良い、しかし他人の領域に踏み込んでほしくない、という暗黙のルールがあるらしく、モノが全くない部分もあれば、モノで溢れている部分もある。

モノが全くないのは大抵音族の人の部屋で、逆にモノで溢れているのは機族の人の部屋だ。

皆位が高い分、遠慮とか慎みとかがないのだ。城の主も内装を気にする性ではないらしく、特に何も言わならしい。と、というかこのはじけっぷりは、よっぽどそういうことに関心がないということ、実に顕著に示している。

こういうのを見ていると、キラの領域は変わっているのは扉だけだから、可愛いものなのかなあ、とも思う。

今日は三週間かかって果たした任務の成果を、やっとキラに報告できる日。

ナビの総レースの小さなバッグには、十四通の手紙の束がみつちりと収まっている。

本当は昨日既に渡せる状況にあったのだが、キラのほうで都合がつかなくて、実際に手紙を渡すのは今日となった。

ナビが上品に、しかしやや急いで歩を進めていると、向こうから眉間にしわを寄せた侍女が歩いて来た。そのまた更に向こうには、すらりとしたスタイルの良い紳士の姿。

オト八とキラだ。

ナビはとりあえず、向かってくるオト八に一礼した。オト八もそれに応じて頭を下げる。

「おはようございます、オト八さん」

「ご機嫌よう、ナビ嬢。キラに用事ですか？」

オト八はナビと目を合わせるや、途端に表情を和らげた。しかし、

「はい、そうです。オト八さんも何かお話されていたのですか？」

そう聞くと、オト八は再び眉間に皺を寄せる。

「ええ、まあ」

そして、ふと心配そうな顔つきになって、ナビにそっと耳打ちした。

「ナビ嬢、彼は良くも悪くも策士です。そして良くも悪くも、貴方は巻き込まれ型の匂いがするのです。くれぐれもキラの言うことを何でも真に受けしないで……」

と、言いかけたところで、オト八の体が離れた。

違う。離れたのは自分の体だ。そして正確に言えば、離された。

ナビはすっかり動揺してしまつて、自分の体に腕を回し、引き寄せている主のほうを、振り返ることができなかった。

焦った思考で、それでも咄嗟に頭の中で地図を開く。自分の点滅とキラの点滅が同じ場所で重なった。

頭のすぐ上からは、透き通った声。

「うちの子に、余計なことを吹き込まないでくださいね」

オトハの顔がげんなりと歪む。視線はナビより少し上に注がれていた。

「じゃ、僕達はこれで」

言つてキラは、最早石と化したナビを半ば引きずるようにして、自室に連れ帰っていく。

キラの部屋に入る直前に、オトハが冷めた目でこちらを見、呟いた。

「お大事に」

これが果たしてどちらに放たれた言葉なのか、ナビにはわからなかった。

「御使いご苦労様。生憎僕の部屋に飲食物は置いてないから、何も出ないけど」

キラは部屋にひとつしかないデスクチェアにナビを座らせて、自身は机の上に座った。

「いえそんな……。む、むしろあたくしが、茶葉でもお菓子でもお持ちするべきでしたわね。あ、あの、今から戻って……」

ナビは未だ同様を引き摺っており、自分でも何を言っているのかわからない。

本気で立ち上がるうとするナビを、キラが優しくたしなめる。

「いえ、いいんです。ティーセットすら置いていない部屋ですし」

「では、ティーセットもあたくしがお持ちして……」

「ナビ」

キラが少し語調を強めてその名を呼ぶと、ナビはすっかり恐縮してしまい、膝の上を見つめるしかなかった。

キラはそんなナビを楽しそうに眺めている。

「では、返信を頂戴してもよろしいですか？」

「あ、はい」

ナビは急いで、バッグの中から手紙の束を取り出した。立ち上がって、両手で丁寧にキラに手渡す。

キラは紐を解いて、封筒の束を数えた。

「……十二、十三、十四。うん、確かに受け取りました。報酬は後程、あなたの口座に振り込んでおきますから」

「は、はい」

キラは頷くと、一枚の封筒から手紙を取り出して読み始めた。

ナビはそんなキラをじっと見つめた。
キラがそれに気付いて、不思議そうな顔をする。
当たり前だ。

普通なら此処で、ナビは去っていくはずなのだから。

「どうかしましたか？」

「あの……」

ナビが言い淀んでいると、キラは読みかけの手紙を再び封筒にしまつて、脇に置いた。

膝の上で手を組んで、完全に話をする体勢だ。

ナビは意を決して、気になっていたことを吐き出した。

「ギアさんが、言ったことなんですけど……。キラ様はきっと、雷族族長反対派だって。その、それをそっくりそのまま信じたわけではないのですが、実際はキラ様はどうお考えになっているのか、お聞きしたくて……」

キラは少しの間無言で考えているようだった。

ナビは、無躰な質問だったらどうしよう、とはらはらしていたが、特にキラが気を悪くしたところは見受けられなかった。

やがてキラが口を開いた。

「それはつまり、僕自身が彼女のことをどう思っているか、ということですよね？」

「はー」

キラは何かしらの含みを感じさせる、温厚な笑みを浮かべた。

「危険、ではありませんね」

「危険……」

それはどういった意味の『危険』だろう。

キラはナビの思考を読んだかのように、

「まあ色々な意味で、ですが」

と言った。

ナビは少し迷ってから、控え目に口を開いた。

もうこの際だ。聞けることは聞いておこう。

「もし差し支えなければ、ですけれども、結局キラ様は雷族の長をどうしたいと思っているのか、お教え願いたいのですが……」

キラはまた少し考えてから言った。

「答えの代わりとして、あなたに二つ目の仕事を頼みたいのですが、よろしいでしょうか」

そうしてこちらの目を見つめてきた。その丸い薄墨色の目からは、どうにも何らかの意図は汲み取れなかった。

しかしキラのこの頼みを断る理由は勿論ない。

「ええ。どうぞ何なりと」

キラは満足げに頷く。
そして声を潜めて言った。

「実は、ギアを筆頭とした反対派勢力で、今雷族族長誘拐の案を練
つていまして」

「ゆうかつ……」

キラの口から、予想以上に思いきった言葉が出てきたことに驚く。
キラがそつと人差し指を口に当てたので、ナビも声を潜める。

「誘拐ですか？」

となると、どうやらギアの言っていた言葉は本当らしい。キラも、
あの少女をこのまま野放しにしておくことには、反対なのだ。

「ええ。誘拐です」

そして一拍置いてから、再び抑えた声で言った。

「あなたには、実行犯のリーダーになつていただきたいのです」

ナビは目を丸くした。

一瞬、頭の中が白紙になる。そして時計の針が秒を刻むごとに、
先程のキラの言葉が、再び黒インクで染み込むように、頭の中に舞
い戻ってきた。

頭も人並み、運動神経も人並みの自分が、実行班リーダーだなん
て。

「無理に、とは言いませんが……」

ナビは慌てて首を振る。

「いえ。いえ。キラ様の言うことであれば、喜んでやらせていただきます。ですが……」

そこでナビは、心配げに眉を寄せる。

「何故あたくしが……?」

キラは優しく微笑む。

「実行班リーダーだからといって、何も荒仕事はさせませんよ。ですがあなたには、人の居場所がわかるという貴重な能力があります。今回はその力をお借りしたいのです」

「ですが、それなら別に、リーダーになる必要はないではありませんか?」

能力だけが必要ならば、班の一員になることで十分事足りる。

「ええ、そうですね。ですが、加えてもうひとつ理由があるんです」

ナビは「はあ」と言って次の言葉を待った。

「実行班リーダーは、僕が最も信頼を置く人でなければなりません。そうでないと、反対の意向が僕のものとなかなか信用もされませんからね」

「『最も信頼を置く人』が、あたくしですか?」

キラが頷くと、ナビはもうどうしようもなく嬉しくなってしまう。心の中で飛び跳ねた。

「さらに、あなたには逐一、反対派の今後の動向等を僕に教えてほしいのですが、よろしいでしょうか」

「ええ、ええ、全然構いませんわ」

「一日ごとに来ていただくことになると思いますが」「了解いたしました」

むしろ毎日キラに会えるのなら万々歳だ。

そう思った瞬間。

ナビは今までキラに抱いてきたこの感情が何なのか、ようやく特定できた気がして、彼女は意識するや否や頬を桃色に染めた。

まさか自分の天にでもいるような存在に、こんな感情を持ってしまったなんて。

でも不思議とやけに安心した。

恥ずかしいとか身のほど知らずとか、色々思うところはあるけれど、この時ばかりは変に幸せで、安らかな気持ちだったのだ。

第十一章：金糸雀よ、鳴け

部屋の窓際に、少女は座っていた。

勉強机の白い木椅子を運んできて、その上に体を丸めて座っている。アーチ状の窓は開放されていて、柔らかい空気が少女を包んでいた。入り込んでくる風に、白金髪はきらきら舞う。同時に白いワンピースもふわふわ踊った。

少女の視線は窓の向こう

広がる世界に向けられている。

此処からは城の敷地ぐらいいしか見渡せないが、そのさらに向こうの遙か下方には、もっと大きな世界が広がっているのだ。

そう思って、少女は身震いした。

あたしにはこのお城だけでも広くて、このお城だけで、全ての場所に行ったことがあるわけではないというのに。一体世界を隅々まで調べ尽くすには、どのくらいかかるというのだろう。もし調べ尽くせた日が来たとしても、その時にはきつともう既に、世界はがらりと様相を変えて、新しい文化もどんどん花開いているのだ。

果てしない営みを想像して、少女はいてもたってもいらなくなつた。こんなところで、唯々外を見つめている場合ではない、と思つたのだ。

何かに駆られるようにして、少女が椅子を降りたとき
風が吹いた。

少女の胸に何らかの予感と、確信が灯る。そして足を止めた。窓は開いているのだから、風など吹いて当たり前だ。しかしその違いのようなものが、少女には何となくわかった。

風が部屋中をとぐるを巻くように流れて、確信は強まり、心は構えの体勢だ。逃げ出したいのはやまやまなのだが、相も変わらずその存在は恐怖そのもの。動く勇氣も意欲もない。

そして、緩やかな風の渦はカザミの象を成していく。

カザミは、静かな緑色の目で少女を眺め、口を開いた。

「調子はどうだ、雷族の長よ」

「は、はい。好調です」

今度こそは失礼のないようにと、少女は震える声を絞り出す。

「そうか」

カザミはさして興味のなさそうに頷くと、

「今日は昼衆から客が来ている。来い」

と言って、さっさと部屋を出ていってしまった。

どうにも唐突だったもので、少女が咄嗟に動けないでいると、付いて来ないのを不審に思ったらしきカザミが顔を出した。動けない少女を見ると無表情に近づいてきて、その手を乱暴に取る。そして無理矢理手を引いて歩かせた。

少女は最初は足をもつれさせていたが、やがて小走り気味にカザミの後をついて行った。

カザミの手は妙にひんやりしていて、少女はカザミに掴まれている手首が気になって気になって仕方なかった。

着いたところは、四階の応接室だった。

カザミが扉を無造作に開けて、少女に中に入るようにと促す。少女は、恐々と足を踏み入れた。

中にいたのは、褐色の肌の若い男だった。体格は小柄で髪は黒。大きな赤い目を持っている。黒いスーツを着てはいるが、ネクタイはしていないし、ワイシャツの第一ボタンと第二ボタンは開いている。

少なくとも、この城には全く不似合いな男だった。

この人が昼衆の……。

少女にとっては初めて目にする、他衆の人間だ。しかし何故だか、この男とは初めて会った気がしなかった。

少女を目にすると、褐色の肌の男は面倒そうに立ち上がって、くしゃりと礼をした。

その態度は初めて見るものだったので、少し驚きながらも、少女もワンピースの裾を掴んで、お辞儀をする。

「どうもお久しぶりです」

男はまるで独り言を言うような口調で言った。

久しぶり？

少女は首を傾げる。

「お前から名を取り去った男だ。城に来て直ぐのことだから、覚えていないかもしれない」

扉を後ろ手に閉めながら、カザミが言った。

少女は納得する。

自分は初めてカザミと会って、それからどうなったかを覚えていないのだ。気付いたら此処にいた、というかんじだ。気を失っていたとか眠っていたわけではないらしい。オト八が言うには、精神が異常状態にあったとのことだ。つまり、狂っていたのだろう。

だからこの男が何となく見覚えがあるのにも、納得がいった。

男はカザミの言葉に頷くと、

「マコトといます」

と言った。

少女ももごもごと、

「お久しぶりです」

と返した。

すると、マコトが少し驚いた顔をした。

「もう喋れるんですか」

「ああ」

カザミは素っ気無く答えて、「座れ」と言いながら自分も座った。

マコトはその向かい側に腰を降ろし、少女も少し迷ってから、カザミの隣に控え目に腰掛けた。

「今日マコトが来たのは、お前に名付けるためだ」

少女は金色の目を瞬かせた。思わずカザミのほうをじいっと見つめてしまう。

「不満か？」

少女は慌てて首を横に振った。

自分に名前がつく。

全く予想だにしていなかった展開だ。

むしろ今日は、以前カザミの書齋に侵入したための罰でも受けるのだろうと思っていた。

実感は湧かないが、何だかそれはとても素敵なことに思えた。

記憶の中で、自分に名前があったことなど、一度もない。オトハが言うには、あの閉鎖された部屋にいるときにも、ちゃんと自分には名前があったらしいのだが、呼んでくれる人がいなければそんなものには何の意味もない。

でも今は違う。沢山の人が周囲にいるこの環境で、誰かが自分の

ことを特定の言葉で呼んでくれるかもしれないのだ。「雷族の長」とか、「お嬢さん」とか、そんな単語ではなく。

それは大層幸せなことに思えて、少女は嬉しくなった。

自分にはどんな名がつくのだろう。

しかし、そんな目を輝かせている少女を見て、カザミは息を吐いた。

「浮かれるな。名を持つというのは、同時に大きな責任も生じるということだ。特に、お前はな。これでお前は完全に雷族の長となるのだから」

そう言われて、少女は少しだけ小さくなる。しかしそれでも、嬉しさは消えなかった。

でも、と少女は思う。

「どうしてマコトさんがいらっしやったのですか？」

ただ単に名付けることにも、特別な力が必要なのだろうか。

マコトは眠そうな顔で答えた。

「まあ、普通に赤ん坊に名付けることであれば、誰にでもできるんですがね。赤ん坊は成長していく過程で自分の名を認識し、意味を選択していくってかんじですし。しかしこれが一回名前を消した人に再度名付けるとなると、そうはいかない。そもそもどんな力を持っていたとしても、基本的に改名するのは不可能なもんなんですよ」

そう言われて、少女は不安になった。

じゃあ、あたしの名前はどつなるの？

そんな少女の様子に気付いてか、カザミが言った。

「心配するな。名を変えることが無理なのは、その人間に与えられた名が染み込んで、絶対的なものになっているからだ。記憶を無くし、己の名すら覚えていないお前に、そのケースは当てはまらない」

マコトもカザミの言葉に、「ま、そういうことです」と頷いて、少女は胸を撫で下ろした。

マコトは続ける。

「それでも、あなたには自我や知識というものが既に確立されてしまっています。つまり、普通に名を与えようとしても、それが入り込む余地がなくなっているんです」

少女がよくわからなさそうにしていると、マコトが「直に感覚としてわかってくるでしょう」と言った。

「そういうわけで、俺のような能力保持者の出番なわけです」

「マコトさんは、どんな力を持っているのですか？」

そう聞いて、マコトは初めて笑みを見せた。それはどこか皮肉げな笑いで、あまり気持ちの良いものではなかったが。

そうしてマコトは、

「それも直にわかります」

と言った。

「では、いい加減始めましょうか」

少女はわくわくしながら聞いた。

「どんな名前をくださるのですか？」

するとカザミは逆に聞き返してきた。

「どんな名がいい？」

少女は少しだけ考えて、でも直ぐに答えた。

「どんな名前でも良いです」

カザミは少し困ったように顔をしかめた。
だから、少女は勇気を出して、言ってみた。

「カザミ様が、つけてください」

少し恐かったけれど、そう言った。

風の王様につけていただく名前だなんて、そんな素晴らしいものはないと思ったのだ。

カザミは少し驚いているようだった。静かな緑色の目が少女の金色の目に注がれる。

やがてカザミは唐突に口を開いて、言った。

「『ナルカミ』」

あまりにも突然、その単語だけを口にしたものだから、少女は始め、それが自分に与えられようとしている名だと気付かなかつた。しかし一、二拍置いてからそれに気付いて、心の奥に花が咲いたような気分になった。

嬉しかった。

ナルカミ、ナルカミ、と、少女は心の中でそれを繰り返す。

不思議な響きで、少女にはそれがどうしようもなく愛おしいものに感ぜられた。

「どんな意味ですか？」

幸せそうな顔でそう聞く少女に、カザミは目を逸らして素っ気無く答えた。

「それは己で決めていくものだ」

その言葉に、少女はこれ以上なく期待に満ちた気持ちを抱く。今まさに、自分に大きな可能性が生まれたことを実感した。

「じゃ、その名でいいんですね？」

マコトの言葉に、少女は何度も頷いた。

これ以外の名前など、もう考えられなかった。

「わかりました。あなたは確かに、『ナルカミ』という名を持っています」

。

マコトがそう言った後、僅かな沈黙が流れ、少女は少し焦った。

「え、と……？」

マコトは何も言わないし、カザミも何も言わない。

「それで、どうなるのですか？」

少女は心配そうに身を乗り出して、マコトの顔を窺った。

「これで終わりです」

マコトはいともあっさりと言い放った。

少女の目が二、三度瞬いた。

変わったところなど、ひとつもない。

「これで本当に、『ナルカミ』というのはあたしの名前になったのですか？本当ですか？」

そう尋ねた途端、マコトの顔が「してやったり」と言わんばかりに笑う。

そして穏やかに言った。

「本当です」

その瞬間だった。

その瞬間に、少女は、自分が確かに「ナルカミ」なのだ、確信

したのだ。

第十二章：齒車よ、廻れ

キラから新たな指令を受けた日の翌日、ナビの姿は、再びエンディングの館の応接室にあった。

詳しい話はギアから聞くように、とのことだった。

「実行は、五日後です」

目の前に足を組んで座っているギアが、そう言った。

「早いですのね」

キラに毎日会うことを期待していたナビは、日数の少なさに、少しだけがっかりした。

「ええ。早いですわね。ですが、早すぎることはありません」

ギアは朗々とした声で、断言した。

「それで、作戦とはどのようなものなのですか？」

ナビは少しだけ声を潜める。

「作戦と呼べるようなものでもないのですが……」

ギアのほうは、特に声のトーンも変わらずで、ナビは少しだけドキドキした。

「まず、始めるのは午前十時です」

この言葉に、ナビは少なからず驚いた。
普通考え得る時間帯といったら、皆が眠っている間と、相場は決まっているものと思っていた。

「朝衆の活動真つ盛りの頃ですが……。大丈夫ですか？」

ギアはこともなげに頷いた。

「そのほうが都合が良いのです。十八時になると、彼女の部屋は鍵が掛けられます。それは中にいる彼女にも開けられず、鍵を持っていないのは残念ながら、陛下とオト八殿だけです。就寝時は城外の警戒も最も高まる時間帯なので、外から連れていくということも無理でしょう」

成る程、言われてみればそれもそうだ。

「確かに朝衆の領時となると、あらゆるところに人はいます。しかしひとつだけ、その時、99%の確率で人のいない、尚且都合の良い場所があるのです。何処だかわかりまして？」

ナビは直ぐに首を振った。

この城に、そんなところなどあったらだろうか。

ギアはにまりと笑んだ。

「本館の四階です」

本館の四階……。……！

あまり聞き慣れないその言葉を反芻してから、その意味を知って、

ナビは息を呑んだ。

王の領域……。

「五日後、陛下は合同会議なのです。前回の会議は此処で行ったので、今回はミッドナイトストリートのほうでしょう。つまり、その時間帯は陛下さえいません」

凄いとナビは素直に思った。

この作戦なら、成功率も高そうだ。

実際ナビは、僅かながらも疑っていたのだ。この城からナルカミを連れ去ることなど、不可能ではないか、と。

「彼女には、何らかの理由をつけて、キラ殿に四階まで連れてきてもらいます。あなたは四階で待機して、人が来ないか絶えず見張っていてください。もし来そうになったら、所々に配置されている実行人員に連絡してください。彼等が適当に追い払います。そして、キラ殿と彼女が近付いてきたら、ジェットに指示を与えてください。あなたの仕事はそれで完了です」

ジェットというのはギアの部下で、高速で空を飛ぶ能力を持っている。

「ジェットさんに、彼女を任せて、それからどうなるのですか？」

ふと、ナビは心配になって聞いた。

「エアルートを通って脱出したら、ある貴族の屋敷で預かってもらいます。悪いようにはさせませんので、ご安心を。ほとぼりが冷めたら解放して、普通の貴族として自由に暮らさせるつもりですわ。何処かに嫁がせるのも、ひとつの手かもしれませんわね」

それを聞いて、ナビは安心した。
もうこの件に関して、躊躇うことは何もない。

「承知いたしましたわ」

ギアは綺麗な微笑みを浮かべた。

「ええ、よろしくお願ひします。また何かあったら、お屋敷のほうに連絡を入れますので」

そうしてナビは部屋を出た。しかし、少し歩いて直ぐに立ち止まった。

何だろう、何かが引つ掛かる。

いつ始まったのかはわからないが、ナビは違和感のようなものを此処最近感じていた。

この件に関して、正しいとか正しくないとか、そういうことではない。失敗するとか成功するとか、そういうことでもない。それは、自分が考えるべきことではない。自分にある選択肢は二つで、忠実であるか不実であるか、だからだ。それ以外は一切合切切り捨てて良いものと、ナビは判断していた。そして、自分はいつだって忠実であるほうを選んできたはずだから、このことについても問題はな
いはずだ。

ただ、雷族の長に関する件全てが、何かずれているような気がした。

皆が皆、少量の力を持ち合って、大きくずらしていくような、そんなイメージが浮かぶ。

「全てはキラ様の意向のままに」

小さく小さく、祈るように呟いて、ナビはそそくせと歩き出した。

第十三章：嘆きの旋律

今までこつこつと肥え太らせてきた願望が、ナルカミにはあった。それはまだ、誰にも言っていない望み。

間違った願い事だとは思わない。ただ何となく、言ってしまうのは恩知らずで失礼なことのような気がして、言うことが憚はばられていた。

それでも捨てることは決してできなかった夢。溜め込んで大きくしてしまった、願い事。

外の世界に、行ってみたい。

城と外界を結ぶ空気の道 エアルートを使うことは禁じられていた。いつも其処の番兵に足止めをくらってしまう。

いつ叶えられるかはわからない夢。でも、成るべく早く叶えたい夢だった。

ナルカミの脳裏には最近、キラの言った言葉がずっとずっと焼き付いていた。

『今でしか、作れないモノがあるじゃないですか』

中庭に面した吹き抜けの回廊を、ナルカミは歩いていた。

午前十時の秋の陽光は、穏やかながらも眩しい。ゆっくりと歩むナルカミが、四、五歩進む度に、白い柱が彼女を濃い影で覆った。

暫く歩いていると、反対側から貴族風の二人の娘が歩いてくる。

始めナルカミは、それを見て目を疑った。

顎くらいまでの長さの雪のように白い髪と、ターコイズグリーン
の目、ほっそりとした体格や背丈。そのどれをとっても、二人は類
似していた。顔立ちさえまさに瓜二つだ。

着ているものはそれぞれ違ったので、ナルカミは辛うじてこれが
幻覚や夢でないことを自覚できた。片方は水色のドレス、もう片方
は桃色のドレスを纏っている。

ナルカミが双子を見るのはこれが初めてであり、このときはまだ、
その知識さえなかったのだ。

二人はナルカミに気付いた様子もなく、話しながら歩いてきた。

だからナルカミも気にはなったが、会釈だけしてすれ違おうとした。
しかし二人は、ナルカミの眼前まで来ると、ぴたりとお喋りを止
めて立ち止まった。そして二人して、ナルカミのことを上から下ま
で眺めてくる。

ナルカミはどうすれば良いのかわからず、困った顔をしてその場
に立ち尽くした。

隅々まで観察してから、桃色のドレスの娘が漸く口を開いた。

「あらあら、これはこれは、ナルカミ嬢じゃありませんの」

続けて、水色のドレスを着た娘も言った。

「まあ、本当ですわ。生で見るのは初めてねえ」

二人の声は小鳥のようにかん高く、歌うようだった。しかし二人は、ナルカミのことを見ながら話しているにも関わらず、どこかナルカミがそこにいないかのような態度で話す。視界の中心にありながらも、彼女を気にかけていない。

ナルカミもそれに気付いていたから、何も言えないでいた。

すると水色のドレスの娘が、軽蔑したかのような眼差しを向けてきた。

「あらあらまあまあ、あなた挨拶の『あ』の字も言えなくって？」「教育がなっておりますのねえ」

桃色のドレスの娘が、悪戯っ子のように微笑む。

ナルカミはこんな態度を取られることは初めてだったので、大層動揺していた。今まで冷たくあしらわれたり、叱られたりすることはあったが、あからさまな悪意を向けられたことはなかったのだ。

しかしそれでも、ナルカミは精一杯粗相のないように振る舞おうとした。

「う、ごめんなさい。ぼーっとして……」

「まあまあ、言い訳？」

「そっ、そんなつもりはなかったのですが……」

二人の娘は顔を見合わせると、にんまりと笑んだ。

「やっぱり教育がなっておりますのね。雷族は長がこれですもの。」

朝衆の恥ですわ」

「……！」

「陛下もさぞかしお悔やみのことでしょうねえ。まさかこんな物分りの悪い小娘を、助け出してしまっただなんて」

言い返したいことは色々あったはずだ。でもその全てが喉元まで来てから霧散した。

ただ単に相手が恐かった、というのものもある。返すべき言葉は皆、さっきのように言い訳にしか聞こえないものばかりだった、というのものもある。

しかし、この時はナルカミ自身気付いていなかったことだが、彼女にはある意味積極的とも言える思考回路が活動していた。

そうして、思わずナルカミは聞き返していた。

「ナルカミは……この城には必要のない存在ですか？」

ナルカミの眉尻は相変わらず下がっていたが、その表情は何処か明るかった。

二人の娘もそれに気付いて、怪訝そうな顔をする。

「え、ええ。あなたなんていなくても、全く問題なくつてよ。元々あなたがいない中で、朝衆は十分やっていけたのですから」

間髪入れずにナルカミはさらに聞いた。

「ナルカミがいなくても、雷族は大丈夫ですか？」

やや気圧された表情を浮かべながら、桃色ドレスの娘もすぐに答

える。

「当たり前でございましょう。陛下はお優しいから、腐った雷族の愚民にさえ、哀れみの手を差し延べていますわ」

『腐った雷族の愚民』というところには、少しだけ悲しそうな顔をしたナルカミだったが、それでもやはり表情は明るい。

さすがに二人の娘も眉を寄せ始めた頃、娘達の後ろから声がした。

「ミハネ嬢、イハネ嬢。其処で何をしていますのです」

硬い、女声だった。

三人揃って声のしたほうを見やる。

厳しい顔をした、小柄な侍女が立っていた。

ミハネとイハネと呼ばれた二人の娘は、特に驚いた様子も慌てた様子もなかった。むしろ嘘偽りのない穏やかな笑みさえ浮かべている。

『ごきげんよう、オト八様』

二人は同時に言っつて、スカートの裾をつまんでお辞儀した。その態度はナルカミに対するものとは根本的に違っていた。敬意と悪意の差などではない。

そうしてナルカミは、やっと違和感の正体に気付いた。

ナルカミは、人間として扱われていなかったのね。

オト八は手短に挨拶を済ませてから、きつい調子でまた同じこと

を聞いた。

「それで、其処で何をしていたのです？」

「ナルカミ嬢と、少しお話していましたの」

桃色のドレスの娘は動じずに答える。

「何を話していたのですか？」

すると、聞いてくださいと言わんばかりに、彼女は滑らかに話し始めた。

「この子ったら、碌に挨拶もできないんですよ。だから、陛下もさぞかし、こんな小娘を助けてしまってお悔やみのことでしょうねえと、そういう話です」

桃色のドレスの娘が、ただありのままにオト八に伝えたことに関して、ナルカミは少なからず驚いていた。

しかもこの娘は、バツの悪そうな顔をするでもなく、普通にそのことを言ったのである。

オト八のほうは神経質そうな顔をして、頭を抑えた。

「まず、その『小娘』という呼び方はお止めなさい。嬢様は外年齢は低けれど、内年齢はあなた達より高いのですよ」

「あら、そうでしたの。失礼いたしましたわ」

オト八と話すのは滅法桃色ドレスの女のほうで、もう片方はただ隣で微笑んでばかりいる。

「それから、真偽がはつきりしないことをやたらと話すことも控えなさい。あなたは嬢様だけでなく、カザミ様をも中傷したのです」

ナルカミにはこの意味がよくわからなかったが、娘にはわかったようで、ここでやっと、恥ずかしそうな態度を見せた。

「最後に、皆公平に親切になさい。あなた達雷族に敏感過ぎですわ。過去のことは過去のこととして、胸の奥にしまっておきなさい」

オトハが説教を締めくくろうと言った言葉だったが、しかしその通りにはならなかった。

「それはできませんわ」

水色ドレスの娘が反論したのだ。

オトハはこの答えを大体予測していたらしく、別段驚いたりしなかった。ただ、片手を頬にあてて、溜め息を吐く。

「イハネ嬢。どうしてあなたはいつもそう反抗的なのですか」

イハネと呼ばれた水色のドレスを着た娘は、状況に似合わず可愛いらしく困ってみせた。

「あら、わたくし別に反抗しているわけではないんですよ。ただ正直に、ありのままを述べて差し上げただけです。わたくしが雷族に親切にあるだなんてとんでもない。むしろ、今のままでも十分親切ですわ。これ以上何を求めると言つのです」

イハネは一度口火を切ったかと思うと、すらすら喋った。

ナルカミは自分のことが言われているというのに、割って入る勇氣もなかったので、ただ一部始終を眺めていた。

「それに、オト八様はわたくしのみが反抗的であるような言い方をしますけれども、実際わたくしは三八ネの意見をも代弁して言ってるんですよ。ね、三八ネ」

イハネが三八ネに微笑みかけると、三八ネも嬉しそうに頷いた。

オト八は諦めたように、または疲れたように溜め息を吐いた。

その顔は悲痛で、いかにも頭の痛そうな雰囲気だ。

彼女は暫く何か考えているふうだったが、それが終わると、回廊の果てを指差して言った。

「行きなさい。今後二度と嬢様に構わないことです。でないと、陛下に言いつけますよ」

三八ネとイハネは口を揃えて、

『まあ恐い』

と言った。そして顔を見合わせくすくす笑う。

やがて二人は、どっちからともなく「失礼します」と言って、その場を去って行った。

二人がいなくなると、オト八は途端に顔を歪めて、ナルカミに駆け寄った。

「お怪我はないですか、嬢様?!」

そうしてナルカミの顔や手足を触る。

ナルカミはふるふると首を振った。

オトハは手を胸にあて、「ああ、良かった」と安堵の溜め息を吐いた。

そして困った顔をして言った。

「あの娘達は、雷族にのみあいつた態度をとるのです。決して悪い子達ではないのですよ。ただ、間違った方面に……それも直線的に正義感が働いてしまったというか……」

言いながらナルカミの顔を窺ったオトハだったが、そこでナルカミのぼんやりとした表情に気付く。

「嬢様？お聞きになつていらして？」

しかし、ナルカミは相変わらず何処か恍惚とした顔で、オトハの言葉は無視して言った。

「オトハさん、ナルカミは、このお城には不要の存在です」

その目は欠片も歪められず、その口は言葉を発した途端引き結ばれた。

しかしオトハにはナルカミの顔が、何かを喜んでいるように見えた。

そんなナルカミの態度に、オト八は急に不安になる。

「とんでもございません！私は嬢様がいないと寂しいです！私だけではありません。キラも雷族の皆も、カザミ様も……！皆嬢様がいなくなったら寂しがります！」

「でも、それだけです」

無垢なる眼差しでそう言われて、オト八は息を呑んだ。

ナルカミの体は、以前よりはましになってきているものの、細いきつと元々そういう体型なのだろう。彼女は少し押したら倒れてしまいそうで、少しひねったら折れてしまいそうで、風に吹かれれば軽々と舞い上がってしまいそうな、そんな印象を受ける。しかし、今のナルカミはむしろ逆で、押しても引いても其処を動かさそうな様相を呈していた。

「元々ナルカミは、この城にいなかった存在です。居候のようなものなのです。此処にいて何か役に立つことをしているわけでもありません。むしろ、色々な方々にお世話をしていただいて、厄介者になっっている立場です」

ナルカミの話を聞いている内に、段々オト八の顔は険しくなっていた。

ナルカミが何を言わんとしているのか、わかってきたのだ。こと、毎日外を見る彼女を目にしているオト八ならば、それを想像するのは容易だった。

「イハネ嬢とミハネ嬢に、何か言われたのですか？」

ナルカミは首を横に振った。

「でも、あの方達は、聞いたらナルカミがいなくても、何ら問題はないと仰っていました。以前もナルカミなしでやっていたのだから」と

オト八は黙っていた。

ナルカミはそれを見て意を決したのか、小さく息を吸うと、一息に言い放った。

「オト八さん。ナルカミはそろそろ、このお城に厄介になるのはやめようと思うのです」

ほら、やつぱり。

予想通りの言葉が来て、オト八は悲しくなった。寂しいからとか、そんな狭い意味ではない。自分やナルカミ自身のことも含めて、あらゆる人のことを考えた『悲しさ』だ。何故わからないのだろうか、何故何も言わないのだろうか、諸々の苦悩。

「本当のことを言うと、ナルカミは外の世界を見てみたいのです。自分のことしか考えていなくて、恥ずかしい限りなのですが、でもナルカミが必要のない存在である以上、言っても良いものとしませんでした。むしろ、お城にはナルカミのことが嫌いな人達も沢山います。ならば、ナルカミはお城にいないほうが良いと思うのです」

そう言うナルカミの表情は、少し切なそうでもあった。しかしやはり、確固とした決心は持っているようだ。

オト八は少し考えて、それから重そうに口を開いた。

「嬢様。あなたは何か勘違いしています」

ナルカミは首をひねってこちらを見つめる。

「あなたは繰り返し言いました。『自分はこの城には必要のない存在だ』と。本当にそうでしょうか？」

オトハの心は痛切だった。ナルカミよりも沢山のものを見てきた彼女だからこそ、当事者よりも知っていることは多い。

「この際、朝衆や雷族の重役だとか、あなたを疎む者もいるとか、まどろっこしいことは抜きにしましょう。ただ切実に、物理的に心理的に、ただあなただけが必要とする人がこの城にいたとすれば、どうします？」

ナルカミは不思議そうな顔をした。有り得ない、とでも言いたげな顔だ。

返答に困っているナルカミに、オトハはさらに追い討ちをかけた。

「それが、あなたよりも立場が上の人だったら、どうするのでしょうか？」

ナルカミは少しの間オトハの言葉を考えているふうだったが、やがて意味を理解したのか、目を瞬しはたかせた。そして眉を潜める。

「あなたは確かに、この城に必要な存在です。そしてそれは、立場上逃れることのできない、あなたを繋ぐ鎖と言っても良いでしょう。嬢様、酷なことを言って申し訳ありません。しかし感情はどうあれ、私がお仕えするのは事実上ただ一人。私はその方の幸せのために動くのです。嬢様、あなたはこの城を出てはいけません、否、出られ

ません」

ナルカミは何度も何度も瞬きしながら、オト八の言葉を聞いていた。驚いて動揺している、というよりは、意味がわからなくて動揺している、という表現のほうが合っていそうだ。

「何で……そんな……ないです」

オト八は辛そうに首を横に振った。

「嬢様。私は全てを見ています。嬢様がこの城に来てからのカザミ様を見てきました。嬢様が行方不明のときのカザミ様も見てきました。その前のカザミ様も見てきました。実際、嬢様と会うのだから、私はもうとうの昔に果たしているのです。あなたは覚えていないでしょうが」

途端、ナルカミの体がよろめいた。

オト八は慌ててそれを支える。

「嬢様?!」

ナルカミはきつく目を閉じ、頭を抱える。そしてうわ言のように呟いた。

「知らない……痛い……わからない……」

その顔は蒼白く、涙がにじんでいた。

オト八は心配そうにその背中を摩りながらも、表情はというと妙

に落ち着いていた。

「思い出さなくてもかまいません。少なくとも、今は。でも、知らんぷりは禁止です。わからないならわかるうとしてください。それが進歩です」

ナルカミは虚ろな目でオト八を見た。

「……進歩……」

オト八は小さく頷いた。

「行ってください。彼の元に。どの道許可を得るには、カザミ様の承諾が必要です。知りたいことは本人に直接お聞きになってください」

第十四章：春の嵐

書斎の仕事机に腰掛けて、カザミは分厚い束の書類を相手に、黙々と格闘していた。

窓辺からはのどかな風が流れ込み、橙色の髪を僅かに揺らしている。

彼は、シンプルなデスクチェアに、足を組んで腰掛けていた。緑色の目には、特に何の感情も浮かんでおらず、機械的な動作で手を動かしている。

ふと、カザミが手を止めた。今日は、起きてからもずっとこの調子で、さすがに疲れたらしい。お茶を一度口に含むと、羽ペンを放り出して椅子に寄りかかった。

その時何となく、机の隅に放置された二冊の本が気になった。以前、ナルカミが書斎に来たとき、読んでいた本だ。

カザミはおもむろにその内の一冊を手にとってみた。

赤い装丁の分厚い本だ。表紙には『名』と書かれている。

カザミも昔読んだことのある書物だ。

書斎の床にこの本を広げて、熱心に読み耽るナルカミの姿が頭に浮かんだ。

あとで届けてやろうかと考えながら、ぼんやりと書物を捲っていると、右手に小さな違和感を感じた。見ただけではわからなかったが、硬い凹凸の感触がある。

眉を潜めてカバーを取り外してみると、丁度、薄さも大きさも硬貨一枚くらい、小さな機械がはりついていて、その中に、さらに

小型のマイクラしきものがついている。盗聴器だ。

カザミは顔をしかめてそれを取り外そうとしたが、何かに感付いたようにぴたりと動きを止めた。

彼は一瞬考えるように目を閉じ、一度息を吐くと、ひとまず本を机に置いた。

そうしてそっと、溶け込むようにしてそよ風と同化した。

そのときナルカミは四階の書斎の前に来ていた。

辺りはしんと静まりかえっている。

此处に来るのは三回目で、一人で来るのは初めてだ。

ナルカミは扉の前で大きく深呼吸したが、それでも早まる鼓動は押さえられなかった。此处に来るまでの道のりでも、何度となく深呼吸してきたが、やはり結果は同じだった。

本当はオト八には一緒に付いて来てほしかった。でも彼女には拒否されてしまった。二人きりでゆっくり話し合っけきなさいと、彼女はそう言っていた。

カザミのことは、嫌いではない。むしろ名前をもらったあの件からは、ナルカミはカザミに好意さえ抱き始めていた。しかし、やはり恐いという気持ちは薄れない。

ナルカミは、先程のオト八との会話を反芻する。

カザミ様が、ナルカミを必要としている？そんな馬鹿な。

有り得ない、とナルカミは身震いした。

ナルカミは何の役にも立たないのに。何も得意なことなどないのに。

早く終わらそうと、そう思った。自分がカザミに必要とされているわけではないのだから、だとしたら城を出る許可も得られるはずだ。こんな小娘一人、城に置いておいて良いことなど何もないので、許可が得られて当然なのだ。

だから、早く終わらそう。

意を決して、ナルカミは扉を控え目にノックした。

……返事はない。

今度は少し強く扉を打つ。

「か、カザミ様。いらっしやいますか？ナルカミです」

か細い声で精一杯呼んでみるが、やはり返事はない。

お出掛けかな。

やや安堵しながら、ナルカミが身を翻したそのとき。

突然、扉が開く音がした。

びっくりしてそちらを見ると、扉は確かに、来る者拒まずといった様子で、大きく開いている。

しかし、そっと書斎の中を覗き込んでも、其処には誰もいないの

だ。

開いた窓から穏やかな風が吹いてきて、ナルカミの髪を触った。

そのとき、ナルカミは確信した。
いる、と。

この部屋を取り巻く空気の中に、彼の存在は確かにあるのだ、と思っ
った。

ナルカミはどきどきしながら、部屋に足を踏み入れた。絨毯の感
触が、そのときのナルカミにはやけに不安定なものに思えた。

「カザミ様。ナルカミです。非礼をお許してください。どうしてもご
相談したいことがあります。伺いました。カザミ様、カザミ様」

ナルカミは左右をきよきよと見回しながら、部屋の中心まで
歩いてくる。しかし其処で立ち止まって、ふと不安が蘇ってきた。

もしかしたらカザミ様は、本当にいないのかもしれ
ない。

もしそうだとしたら、今の自分は完全にただの侵入者だ。また同
じ罪を犯すことになってしまいかもしれない。

そうして、引き返そうかどうかどうしようか決めあぐねていると、ナル
カミは視界に異変が起こったことに、漸く気付いた。

「……！」

ナルカミの目の前には、朝の陽光を遮る何かがある。

恐る恐る背の高いそれを見上げると、静かな緑色の眼球と目が合
った。

「……ひっ！」

すっかり動揺してしまったナルカミは、一歩退こうとしたが、体が上手く動かない。

体勢を崩してよろめく彼女を、カザミが素早くその手を取って支えた。

ひんやりとしたカザミの手の感触に鳥肌が立つ。驚いたナルカミはもう一度小さく鳴いた。

カザミは呆れた目でこちらを見つめた。

「何だ。そんなに動揺して。俺が此処にいることを知っていたのではないのか」

カザミの体はかつてなく近くにあり、ナルカミの鼓動はどんどん早く、どんどん大きくなっていく。

それが追い討ちとなって、完全に腰を抜かしてしまった。

ナルカミは出来る限り、カザミから目を離して答えた。

「あ、う、わ、わかりました。カザミ様が此処にいること、は」

そう言うってから、ちらりとカザミのほうを見やると、彼は妙に楽しそうな顔をしていた。

「そうか。やはりお前は『お前』なのだな」

ナルカミはきょとんと、不思議そうな顔をした。

その言葉の指す意味は、わかるようなわからないような気がした。

しかし珍しく友好的な表情のカザミを見た途端、ナルカミは何故か平安な気持ちになった。そうしていつの間にか力は抜け、カザミに全て身を任せていることに気付く。

ナルカミは慌てて、自分の力で立ち上がった。カザミの手も自然に離れた。

そして、改めて、深く深くお辞儀する。

「カザミ様、事前の許可なく王の領域に踏み込んだことを、お許しください」

カザミは目を細めた。

「相談とやらだったな。来い。場所を改める」

そしてカザミは、ナルカミの手首を取った。

相変わらずその手は冷たかったが、今度ばかりはナルカミは、その温度に心地良さを覚えていた。

通されたのは、書斎の右隣にあるカザミの寝室だった。

大体書斎と同じ広さだが、雰囲気は全く違った。

モノがない。

そこはまさしく寝るための部屋であり、寝るための部屋でしかなかった。

大きなベッドが片隅に置かれているだけで、あとはモノと言えるものは全くない。強いて言えばカーテンくらいだった。

でも、何故敢えてここに？

不思議に思うナルカミに、カザミは感情の読めない顔で問う。

「何か思うことはあるか」

思うこと？聞きたいことではなく？

意味がわからなくて困惑していると、カザミは溜め息を吐いただけで、それ以上何も言わなかった。

カザミはナルカミをベッドに座らせると、自身は立ったまま壁に寄りかかった。

そして顎で促した。

「話すが良い」

ナルカミは急な展開に戸惑う。ぽっかりとした空間にカザミと二人きり、ということも、彼女から落ち着きを奪う要因となっていた。

さて、どこから話したら良いものだろうか。

考えた結果、ナルカミは自分の願いを単純に伝えることにした。

「カザミ様。ナルカミは、お城を出て外の世界で、自由に暮らしたいのです」

カザミはさして驚いた様子も見せなかった。無表情に、「そうかと頷く。ただそれだけだった。

しかしナルカミがおずおずと、

「き、許可をいただけるでしょうか」

と聞くと、至極あっさりとした態度で、

「駄目だが」

と言いつつ放った。

ナルカミはこの何とも微妙なカザミの態度に、どうしたものかと困り果てる。

拒否される確率は低いと考えていたナルカミだったから、少なからずショックは大きかった。しかしこうもあっさり返されてしまうと、何だか素直に動揺もできない。

「あの、な、何故ですか？」

「諸々の理由で、だ」

予想に反して曖昧な態度を取られてしまい、ナルカミは途方に暮れた。

そんなナルカミの脳内を、オトハの言葉がよぎった。

『物理的に心理的に、ただあなただけが必要とする人がこの城にいたとすれば、どうします？』

ナルカミは、真っ直ぐにカザミの目を見つめた。

そして問うた。

「カザミ様は、ナルカミが必要ですか？」

言ってしまったから、はっとなった。

なんて無礼な、何て調子に乗った質問をしてしまったのだらうと、自分が恥ずかしくなる。

「あの、その、決してそういうわけではなく……」

慌てて取り繕おうにも、どう言ったら良いのかわからない。

恐る恐るカザミの顔を見ると、彼は無表情にこちらを見つめていた。

さすがに怒らせてしまっただろうか。

しかしカザミはナルカミと目が合うと、おもむろに口を開いた。

「そうだな。必要だ」

ナルカミは目を丸くした。

暫く言葉に迷って、口をぱくぱくさせてから、どうにか言つべき言葉を選択し、吐く。

「ナルカミは、何の役にも立ちませんよ」

カザミは面白そうな目で、ナルカミを見た。

「ああ。まさしくそうだな」

はっきり断言されたことに少しショックを受けながら、ナルカミは半ばやけになって言い返した。

「じゃあ、じゃあ、外に出ることを許してください。自由にしてください」

「駄目だ」

ナルカミは肩を落とす。

「何故……」

「理由を出せばキリがない。それはおまえのためでもあり雷族のためでもあり。そもそも朝衆の族長は城で暮らす決まりになっている」
「でも……！確かにそうなのですが……！ナルカミはまだ何の役にも立たないから……！」

カザミは鼻で小さく笑った。

「ならば、尚更此処で教育を積むべきだろう」

ナルカミが言葉を詰まらせると、カザミはさらに続ける。

「仮に、お前が自由になって下界に出たとして、お前はどうする気だ？」

「世界を見に行きます」

即答したナルカミに、カザミは溜め息を吐いた。

「そうじゃない。そういうところからして、お前は甘いんだ。下界に降りて、今までのように暮らせると思うな」

ナルカミは、意味がわからないというような顔をした。
まず城を出ることが先決だから、降りてからのことはあまり心配もしていなかったのだ。

「金銭的な問題は、まあよしとしよう。しかし何にせよ、お前が一人でやっていくことは不可能だ。立場をわきまえろ。お前を利用しようとする者は多い。また昔のように幽閉されたいか」

ナルカミは首を激しく横に振った。

「ならば、『これ以上』を望まぬことだ」

そう言われて、ナルカミは恥ずかしくて情けない気持ちになる。しかし、それでも納得はしかねていた。

次の瞬間、ナルカミは耐えきれなくなって言い返した。

「カザミ様。ナルカミを見くびらないでください」

思いの他強気な言葉が飛び出したことに、自分でも驚いた。しかし言ってしまったものは仕方がない。ナルカミは、彼女なりに精一杯強い視線をカザミに向けた。

カザミは無言で目を細める。

「カザミ様。ナルカミは確かに世間知らずで、学のない人間です。恩知らずにして、愚かな役立たずの娘です。ですが、どうして自由に生きる権利まで取られてしまうのですか？」

其処で一旦言葉を切ってから、そつとカザミの顔を窺った。

彼は何か言いたそうな顔をしてはいたが、何も言わなかった。そのまま続ける。

「カザミ様が、今丁寧に説明してくださったことは、根本的な理由ではない気がするのです。だって、ナルカミの目には全て解決できそうに見えるから……。ナルカミは、これでも雷族の長なのですよね。だったら、厚かましいこととはわかっていますが、一緒につい

て行つてくれる人も見つかると思つのです。お金だつて、自分で働いて稼ぐのでも構いません。最初にちよつとのお金は借りさせていただくかもしれないが、後々必ずお返しします。これならいかがでしょう、カザミ様。ナルカミを、見くびらないでください」

言いきつてから、途端に弱気になったナルカミは、おずおずとカザミのほうを見た。カザミは、ナルカミの自信なさげな瞳と視線を交わすと、小さく息を吐いた。

「根本的な理由なら、俺はとうの昔に言った」

「え……」

ナルカミは戸惑う。慌てて記憶を探り出すが、見つける前にカザミが言葉を発した。

「お前自身が聞いたのではないか。そして俺は答えたはずだ。『お前が必要だ』と」

ナルカミは、ぼかんと口を開けてカザミを見つめる。
カザミは少し苛立ったような顔をしていた。

「お前は知らないのだろう。俺がどれだけ長い間待ったか」

その言葉の意味するところが、ナルカミにはさっぱりわからなかった。

待つ？何を？

「もう俺自身忘れてしまった。20年は待たされた。それなのに、お前はまた俺を待たせるつもりらしい。元々気が長い性分ではない。ふざけるなど、そう言いたい」

ナルカミはわけもわからず、ただカザミの放つ威圧的な雰囲気
に怯えていた。

そうしてカザミは近付いてきて、その冷たい手でナルカミの腕を
引いた。

ナルカミも特に抵抗もせず、立ち上がる。

その瞬間、ナルカミは思いもよらぬ強い力で、カザミのほうへ引
き寄せられた。

「!?!」

そうして今度は幾分加減した力で、抱き寄せられる。

心臓が早鐘のように鳴り、ナルカミはこの振動が、密着した体を
通して向こうに伝わってしまうのではないかと、不安になった。

「は……う……」

カザミの手によって、ナルカミの顔は彼の胸に押し付けられる。
もう片方の手はナルカミの背にあって、彼女の体を不器用そうに撫
でていた。

「いつもそうだ」

カザミは呟く。

至近距離で聞く彼の声は、ナルカミの鼓膜に静かに染み込んでい
った。

「目を離れた隙に、いつの間にかいなくなっている。臆病者のくせ
に好奇心だけは強くて、何にでも興味を示す。そうして気付かぬ内

に、俺の視界から消えていく」

ナルカミの頭の中は真っ白で、何も考えることができなくなっていた。

ただぼんやりと、カザミの体温の中にうずもれていった。

「だからもう目は離さない。それが根本的な理由だ。お前は俺に自由を奪う権利などないと言う。しかし俺は20年以上も待った。それくらい許されて当然だ。何より……」

言いかけて、カザミはナルカミの体を離して、その目を見つめた。

「俺は王だ」

ナルカミはカザミの目を直視できなくて、わざと焦点をぼかした。

『王』。

その言葉は揺るぎないものとして、心に刺さったような気がした。

しかしそれ以上に強い力で刺さったのは、カザミの体温と、硬い体の感触に他ならなかった。

第十五章：羽を手に入れた燕

その日、ナルカミは眠れぬ夜を過ごしていた。

時刻は二十二時頃。朝衆にとつては深夜にあたる時間帯だ。

しかしナルカミは、オトハが鍵を掛けていった十八時から、ずっとベッドの上に座ってぼんやりしていた。

明かりは消したままで、窓は開いている。

半分を少し過ぎたあたりの月が、ナルカミの横顔をひっそりと照らしていた。

彼女は寝巻き用の白く薄いキャミソールワンピースを着ていた。

それだけでは少し肌寒いので、薄掛けにくるまっている。そうして、ナルカミ自身の存在を、この部屋の空気に同化させるように、膝を抱えて静かに座っていた。

胸の中に何度も蘇るのは、今日のカザミとのやりとり。

ナルカミは悲しかった。悲しくて悔しくて腹立たしかった。

だって、ずるい。

『王』なんていう絶対無敵の切札を使われたら、反論しようがないではないか。それに、その権威はこんなところで使って良いものではないと思うのだ。

ずるい、ずるい。でも逆らえないのが悔しい。

それと同時に、何故かナルカミの気分は高揚していた。

実際ナルカミは、昼のやりとりを思い出すとき、『ずるい』や『悔しい』の負の感情の二倍、何とも形容しがたい『喜び』や『幸福』に似た気持ちを感じていたのだ。

それがどういうものなのか判断できず、今度は疲弊してしまう。
その繰り返しだった。

彼は、『二十年待った』と言った。きつとそれが、鍵なのだろう
と思う。

カザミと自分は、この心の奥底で眠る封じられた箱の中で、邂逅
を果たしているのだ。

それがことを複雑にしているのであり、またこの感情の原因なの
であろう。

ナルカミは何度も何度も思い出した。

静かな緑色の目、冷たい手、硬い体の感触、体温、そして自分を
必要だと言った、低い声。

そういった諸々の要素が、目を閉じたナルカミに囁き続け、眠ら
せてくれないのだ。

かといって、己の自由を奪ったカザミを、恨んでいないわけでも
なく。

ナルカミは、自分の思いの終着点を何処に見い出したら良いのか
がわからなくなっていた。

そうして夜を過ごしていると、突如、静寂が破られた。

扉のほうから、がちりと鍵が開く音がする。

鍵を持っているのは、オト八とカザミのみ。

ナルカミは緊張しながらも、何となくカザミだったら良いなと思
っていた。

しかし扉が開いて現れた人物に、ナルカミは目をしばたかさせた。

しまった。

ベッドの上にちょこんと座っているナルカミと目が合って、マコトは数秒硬直した。

そして直ぐ様、己の迂濶さを呪い出す。
まさか起きているとは思わなかった。

幸いナルカミは不思議そうな顔　　少し残念そうな表情
も混じっていたように感じるが　　でこちらを見つめてい
るだけだったので、マコトはまず静かに扉を閉じた。

そして苦笑いで挨拶する。

「ども。今晚は」

ナルカミも、きょんとした顔でそれに応じた。

「こんばんは……」

次いで直ぐに続ける。

「マコト……さん？」

「そうです。覚えていてくれて光荣です」

そう言うってから、どうしたものかと、マコトは頭を掻く。

とりあえずナルカミが騒ぐようすはないものの、流石にここで、
はいさようなら、というふうにはいかなそうだ。

今日は調査段階で来たところだから、このまま誘拐しようにも準備が不足している。

マコトが言葉を濁していると、ナルカミのほうから聞いてきた。

「何か御用ですか？」

彼女はただただ不思議そうにしているだけで、特に怖がることも不審がる様子もなかった。

「あー。そんなに御用じゃない。今日は」

「じゃあ、何故ここに……？」

そう問われ、マコトは迷う。

彼は嘘が吐けない。仮に吐いたとして、それらは全て本当になっ
てしまうのだから、何にせよ迂濶に言葉を発せないのだ。

「えーと、あんたさ、この城にいて面白い？」

仕方がないので、マコトは無理に話題を変えることにした。

我ながら、かなり下手くそで不自然な話の換え方だったと思う。

しかしナルカミは、それに気付くこともなく、首を傾げた。

「わからない……です。つまらなくはないです。でもずっと此処に
いたくもなくて……」

「……！」

マコトは思わぬところで事態の打開策を見つけたことに、内心歡
喜する。

「城にいたくはない？」

聞き返すと、ナルカミは切なそうな顔をして答えた。

「此処にいたくはない、というよりかは、外の世界を見てみたい、というのが正しいのかもしれませんが。ナルカミは此処が嫌いなのじゃないから……。でも、駄目なのです」

「何で？」

「カザミ様は、許してくれないのです」

その言葉を聞いて、まず最初にマコトの頭に浮かんだのは、過去の新聞記事だった。

何の前触れもなく出された、風の長と雷の長の、婚約報道。

そもそも当時の彼女はまだ長の座にも就いておらず、人々から全く感知されていなかった。そのため民衆に動揺を与え、注目されたことを覚えている。雷族が風族と関係性を強めることに、恐れを抱く音族や機族には、反感を抱く者も多かった。

そして式の前日だったのだ。ナルカミが失踪したのは。

もしかしたら、まだカザミはナルカミに好意を抱いているのかも
しれない。

当時周囲では、政略結婚だの何だのと騒がれていたが、実際の力
ザミの人柄を知るマコトは、そうではないと踏んでいた。

しかしそれはそうとして、

もしかして、相当厄介な問題に足突っ込もうとして
る？俺。

少し嫌な予感を覚えながら、マコトは聞かずにはいらなかった。

「あんたは、カザミさんのことが好きなの？」

始めナルカミは、その問いの意味がわからないとでもいうように、ぼかんとしていた。

しかし暫く経つと、その目は大きく見開かれ、その頬は見る見る内に紅潮していった。

ナルカミは自分に起きていることが理解できないようで、

「え……う……好き……？……好き……」

と、うわ言のように繰り返している。

そしてすっかり動揺した顔で、こちらを見つめて聞いてくる。

「ナルカミは……カザミ様のことが、好きなの？」

「いや……俺に聞かれても」

ああ、やっぱり聞かなきゃ良かった。

マコトは今夜二度目の、自分の迂濶さを呪った。

これでは、逆に事態をわかりにくくしてしまったことになる。その上、他人の色恋沙汰程面倒なことはないのだ。今はとにかく、自分のこの失態を何とか解決に繋げなければ。

「つまりあんたは、自由になりたい、でもカザミさんがそれを許してくれない、自分もカザミさんに好意を持っているから、どうしたら良いのかわからない、と」

ナルカミは目を丸くして、こくこくと頷いた。

まさしくそれは、自分の立場さえわかっていなかった、彼女の欲していた答えだったらしい。

ナルカミは、マコトのほうを尊敬の眼差しで見つめる。

「まあ、どう決定するかは結局のところあんただ。ところで今日俺が来たのは、そんなあんたの選択肢を増やすためなんだ」

ナルカミは首を傾げた。

マコトは薄く笑う。

「お望みなら、あんたをここから出してやるっ」

「!!!」

ナルカミは、目を見開いてこちらを見つめる。その顔には一瞬希望が灯ったかのように見えた。しかし彼女は直ぐに目を伏せる。

「無理です。ナルカミは、このお城からは出られません。空気の間一本しかないのです。其処には、強くて賢い門番がいます」

しかしマコトは、挑戦的な態度で言う。

「おやナルカミさんよ、あんた俺の力を疑うのか？」

ナルカミが顔を上げた。

「俺は今まさに此処まで来れたし、一番警戒態勢が厳しい夜でも、見付からずに此処まで来れた。鍵だって開けられる。大切なのは、信じる心だ。あんたが最初からそんなんじゃ駄目だ。でも、信じる心さえあれば、人は何でもできる」

ナルカミは目の中に稲妻をほとばしらせ、聞いた。

「本当に？」

マコトは笑った。

「本当に」

ナルカミの顔にも、ほんのりと笑みが浮かんだ。

それはこの少女には珍しいことで、何だこいつ結構綺麗な顔じゃないかと、マコトはぼんやり思った。

カザミさんが惚れるのも、無理はないかもな。

「三日後の十時頃に、もう一度迎えに来るから。その時までにごうするか決めておけ」

実際は、やっぱり城に残る、と言われても連れていく所存だが、嘘は吐いてない。安全領域だ。

大事なのは……

「だから、俺が来たことは誰にも言っな」

ナルカミは素直にこくこくと頷いた。

そうしてマコトも、満足そうに頷いた。

第十六章：帝王と約束

「……ということでした、計画は何ら問題なく進んでおります」

言って、ナビはキラの顔を窺った。

キラは、

「そうですか。」ご苦労様です」

と言って、紅茶を口に含んだ。

ナビがキラの元に毎日報告しに行くようになってから、キラの部屋には、新たにティーセットと、ナビ用の椅子が置かれるようになった。

ナビとしては何とも申し訳ない気分だったが、そのお陰で、こうしてキラとのんびり話することができるのは、とても嬉しいことだった。

「いよいよ明日、ですか」

キラの言葉に、ナビは顔を引き締める。

「ええ、そうですわね。今夜はぐっすり眠って、明日に備えませんか」

遠足前の子どものようなナビの発言に、キラは笑いをこらえているようだった。しかしナビのほうは、それが自分の言葉のせいだとは気付かず、きよとんとしている。

「まあ、明日はお互い頑張りましょう」

そう言ってキラは、その場を無理矢理閉めた。
しかしそこでナビは、

「あ、あの……」

と、キラを引き止める。

「?何でしょう」

いつになく不安そうな顔を見せるナビに、キラの顔も真剣になる。

「あの、あたくし、心配事があるんです。あたくし自身、正体のわからない心配事ですから、だからどうすることもできないのですが……」

キラは頷きながら、

「聞きましょう」

と言った。

ナビは短く「ありがとうございます」と言ってから話し始める。

「あたくし、この作戦が物理的には上手くいくって、確信しているんです。でも、あたくし自身の何の根拠もない本音で言わせていただきますと、絶対上手くいきっこないって、何故かそんな確信があるのです」

キラは興味深そうに「ほお」と相槌を打つ。

「何となく、あたくしキラ様から最初の任務を受けたときから、違和感のようなものを感じています。何となくであって、実際はもつと昔から感じていたのかもわかりません。キラ様を疑っているとか、そういうことではないのです。ただ、何かがずれているような気がするのです。何かというのが何なのかもわかりませんが、言葉にするならそのような気持ちなのです」

キラは「成る程」と頷いた。

「変ですよ、あたくし……」

ナビは恥ずかしそうにうつ向く。

しかしキラは首を横に振った。

「いえいえ。わかりますよ、僕にもその気持ちが」

ナビが驚いて顔を上げる。

「では、キラ様も違和感を感じて……?」

しかしその問いにもキラは首を横に振った。

「いいえ。ただ僕は、あなたが違和感を感じる理由を知っている、とでも言いたいでしょうか」

「！」

「でも残念ながら、今はその理由をお教えすることができないのです」

そう言われて、ナビは肩を落とす。

「そうですか……」

「まあ、ひとつ言えることは、心配しなくても大丈夫、ということ
でしょうかね」

言っけてキラは、余裕のある笑みを浮かべた。

「全ては僕の意向通りに動いてますから」

ナビは微笑んだ。

しかしその裏では、

本当にそうなら良いのですが……。

と、まだ不安は消えていなかった。

キラもそれに気付いていないはずはないだろうが、この話は終わ
りとはかりに、席を立った。

『三日後の十時頃に、もう一度迎えに来るから。そ
の時までにどうするか決めておけ』

その三日後も、ついに明日に迫ってきていた。

ナルカミはもう答えを出していた。

どんなしがらみがあるうと、外に出たい。それがナルカミの一番
の願い。

しかしやはり罪悪感があった。それに、寂しさも。

だからナルカミは、出来ることならばどうにかカザミの許可を得たいと思っていた。でないと、もう一生顔を合わせる事ができなくなってしまうかもしれない。

しかし、カザミとはあの件以来全く会っていなかった。

ナルカミはオレンジ色の空を見て、うつ向いた。

もう直ぐ就寝時間だ。やがてオト八が部屋の鍵を閉めに来ることだろう。

そうしたら、もう出られなくなる。

これがカザミに会いに行く最後のチャンスと言ってもいいだろう。

しかしナルカミはまだ迷っていた。

カザミそのものの恐さ。拒否されるのが関の山という恐さ。それから、どういう顔をして会ったら良いのかわからないという、恥ずかしさ。そういったものが、ナルカミをずっとこの部屋に引き止めていた。

ナルカミのプラチナブロンドは、オレンジ色の光を反射して、いつもより濃い色に染まっていた。

窓からの風がナルカミの髪を一瞬だけ散らした。

顔を上げた。

静かな緑色の目と視線を交わす。

窓際に立つ彼の姿は背に光を受けて、輪郭のみ輝いていた。橙色の髪は燃えているようにも見えた。

ナルカミは自分でも不思議なくらいに落ち着いていた。むしろ安堵しているくらいだ。さっきまではあんなに迷っていたのに。

「カザミ様……」

ナルカミが弱々しく切り出すと、カザミは自分の言葉でそれを遮った。

「一年」

突拍子もない言葉に、ナルカミは多少面食らう。

「え……？」

「それが俺の限度だ。妥当だと思う」

カザミの顔は、諦めたような、それでいて挑むような表情を映していた。

「ナルカミ。俺を見くびるな」

ナルカミはワントンポ遅れて、それが皮肉だということを理解する。

しかしカザミがそう言った理由までは、彼女には察せなかった。

「この前マコトが来たろう」

「……」

ナルカミは息を呑む。

何故そのことを……？

彼女の心情に答えるように、カザミが言った。

「この城にはいくつか監視用の風を放つてある。お前のところにも、だから大概のことは感知できる」

ナルカミは、暗闇の深みに投げ入れられたような気分になった。あと少しだったのに。数時間だったのに。もうちょっとだけ待てば、外の世界に出られたのに。

しかしカザミは、最初に言った言葉をまた繰り返した。

「だから一年、だ」

ナルカミはカザミの顔を見つめる。カザミの輪郭から漏れ出る輝きが、僅かな希望の光に見えた。

「あのあと俺なりに考えた。確かにいくら待たされたからといって、お前から完全に自由を取り去ることは理にかなっていないとも思う。始めは三年くらいかとも思ったが、考えてみればお前は罪を犯していてな」

「……？」

ナルカミは怪訝そうな顔をする。

何かやらかしたことなどあっただろうか。

そんなナルカミの様子を見て、カザミは不機嫌そうな顔をした。

「愚かな。覚えていないのか。お前は俺の領域に侵入しただろう」

はつとなった。

確かにあの時カザミはこう言っていた。

『返報は、お前の思い至らぬ大きなところでやって来るだろう』

何て自分は馬鹿なのだろう。カザミの言葉は全て事実だった。自分の思い至らぬ、大きなところでやって来たのだ。

でも、とナルカミは思う。

「そ、それで二年減ってしまうのは、少し厳しすぎませんか？」

「一回一年の換算だが」

「え……」

と漏らしてから、直ぐにナルカミは気付く。

「あ、あれも侵入に入るのでですか?! な、ナルカミは、カザミ様があのとき確かにいると確信したから……」

「しかしどちらにせよ、お前は勝手に書斎に入ったな。考えてもみる。俺はあのとき、一度でも返事をしたか？」

ナルカミは唇を噛む。

「……ずるいです」

「お前が馬鹿なだけだ」

カザミは一蹴して、高圧的にナルカミを見下ろした。

「しかし、だな。他の事情も考慮すると、実際一年も残らなくなる

のだ」

「なっ……」

「俺が待った分と俺が王という分を足すとな。だがそれではお前があまりに哀れだ。だから、条件を出すことにした」

これまでに結構理不尽なことを言われているナルカミは、次はどんな難題が出されるのかとはらはらしていた。

「一年お前を自由にしてやる代わりに、一年経った後は、俺に奴隷として仕える」

ナルカミは首を傾げた。

「ドレイ……？ドレイって何ですか？」

カザミが一瞬、嘲るように笑った気がした。

「つまり、俺の言うことを聞けということだ」

「一生……ですか？」

カザミはこともなげに頷いた。

ナルカミは困った顔をする。

「う……嫌です」

「そうか。ならばこの話は終わりだ。お前は永遠にこの城で生きるがいい」

ナルカミの顔が強張る。

「……嫌です」

「では、俺の奴隷になるか？」

回答に詰まるナルカミ。

段々どつちをとつても、結果は同じのような気がしてきた。

「奴隷と言つても、無理なことをやらせるわけではない。労働にこき使つわけでもない。ただお前の所有権が、はっきりと俺に変わるだけのことだ。さして今とそんなに違うわけでもないだろう？」

ナルカミは答えない。

「さあ、どうする？」

カザミがそう言うってから、数十秒沈黙が流れた。

ナルカミは目を伏せて、心を落ち着かせようとしていた。実際、彼女の心に迷いはなかった。ただ、その決断を直ぐに口にする程、その決意が強いわけでもなかった。

だから彼女は、少し待ってから口を開いた。

「わかりました。ナルカミは一年後、カザミ様にお仕えします。だから、一年ください」

カザミは満たされた気持ちで部屋を出た。

あと一年。

一年待てば、ずっと欲しかったものが手に入る。

これまで待つてきた二十何年に比べれば少ないものだ。それに、今回は確実な保障の元に待つことができるのだ。ならば容易い。

ふと、右横に気配を感じた。

扉を閉めながらそちらを見やると、青い髪の侍女がいた。目が合うと、彼女はじつとりとした視線を向けてくる。

「盗み聞きとは良い趣味をしているな、オトハ」

「鍵をかけに来たら、嬢様とカザミ様の声が聞こえたので、お取り込み中かと思ひまして。待たせていただきましたわ」

言葉は丁寧だが、顔はやけに不機嫌そうだった。

「カザミ様。やり方がむごいです」

カザミはうつすらと、挑戦的な笑みを浮かべる。

「何の話だ？」

「『奴隷』ですって？嬢様きつと、意味を全部理解していませんわ。今回ばかりは、あなた様のやり方に賛同しかねます」

「嘘は吐いていない。容易に合意するあいつが悪い」

オトハは呆れたように息を吐いた。

「そういう状況に追い込んだのはカザミ様ですのに」

カザミは威圧的にオトハを見下ろした。

「何だ、オトハ。今日はやけに口数が多いな。ナルカミに情が移ったか」

彼がそう言うと、オトハは唇を尖らせた。

「誰だってあんなに誠実で純真な方ならば、情くらい抱きますわ」

するとカザミは笑った。

「そうだな。そして先に手中に収めたのは俺だ。手出しも口出しもするな」

第十七章：三発の弾丸

おかしい。

本館四階にて息を潜めてキラを待っていたナビは、いい加減異変に気付いて、険しい顔をした。

時刻は十時十分。

キラがナルカミを連れてくるのは、十時のはず。

キラは別段時間にするさいわけでもないが、こういう場面ではしっかり時間を守る人だ。

それなのに、今になっても来ない。

しかし、周りを見てみると、皆異変に気付いていないわけではない。しかし、特に不安がっているようすもないのだ。

「ギアさん……」

近くであぐらをかいて座っていたギアに呼びかけると、

「んー？」

と、緊張感も何もない、気だるげなハスキーボイスが帰ってきた。

ナビが実行班リーダーになると、ギアとも段々打ち解けることができてきた。それに伴い、彼女は今のような、淑女らしからぬ一面をも見せるようになってきた。どうやらこちらが本性のようだ。

「キラ様……遅くありませんか？」

「そうだな。何か手間取っているのかもしれない」

そう言うギアは、なぜか楽しそうに見えた。

「あたくし、見てきましょうか」

今にも走り出しそうなくらい心配そうなナビに、しかしギアは首を横に振った。

「やめときな。あんたの任務は周辺を見張ることだろう？じゃあその仕事を忠実にこなさなきゃ」

それもそうだと思い、ナビは再び意識を研ぎ澄ました。

しかし、やはり心配は消えない。ここでこうして待っているだけというのがもどかしい。

ふと思いついて、ナビは手元に意識を集中した。

するとその手中に、細く、長い、矢印のような形をした黒い棒が現れた。

ナビゲーションジャベリン。通称ナビリン。

ナビのヴィルパワー

信じる力

を高める

道具だ。

ナビは両手でそれを握り締め、さっきまで四階と三階までだった脳内の地図を、二階まで広げて表示した。

すると、丁度キラの点滅は階段を上がってくるところだったので、ひとまずナビは安堵する。

しかし、直ぐにそこにナルカミの姿がないことに気付いた。

どついつことかしら……。

ナビは不思議に思ったが、とりあえず上がってくるキラを待った。

そして案の定キラは直ぐに現れた。

すると何故か、ギアを始めとするその場にいた実行班一同は、にやにやとした笑みを浮かべる。しかしその笑みも、キラの顔を見ると霧散した。

彼には似つかわしくない、疲れた顔をしていたのだ。

「き、キラ様……？ いかがなされました？ ナルカミさんも、いらっしやらないようですが……」

キラは苦笑する。

「ああ、それはいいんです。いや、良くないのかもしれないことになってるんですが……」

彼のおかしな言動に、ギアも眉を潜める。

「取り締まり班のほうで何かあったのかい？」

「それも大丈夫です。実際、この作戦自体は上手くいきました」

取り締まり班？ 何のことかしら。

そんな部隊があることは、ナビは全く知らなかった。

彼女が不思議そうにしていると、キラは微笑んだ。

「すみません、ナビ。あなたを利用させていただきました」

「え……」

キラの言葉に、ナビの体が石化された。

「ナルカミ嬢については、事前に僕独自の調査を行った結果、今のところ危険はないと判断していました。そして陛下の御意志は、ナルカミ嬢を傍に置いておくこと。それを快く思わない輩など、不忠実も同然です。これは今回のことに限ったものではなくてですね。結構昔から、機族の公爵陣は割と問題ある方々が多かったんですよ。まだ、階位に関わらず、上の権威に服す義務があるという認識が薄いらしくて。で、これを機に、そういう方々全て、一掃させていただきます」

ナビはまだ頭が上手く働かない。思考回路の片隅で、違和感の正体はこれだったのかしらと、ぼんやり思った。

「そういうわけでナビ。あなたのお父上バグ・ラインハルト公爵を、爵位から外させていただきました」

「！」

心臓を二度撃たれたような気持ちになる。

ギアが哀れむような目でこちらを見ていた。

「ち……父が……ですか？」

「ええ。あなたは全く気付いていないようでしたけれども、あなたのお父上はかなりの問題児です」

咄嗟にナビは頭を下げた。

「それは……申し訳ございませんでした」

しかしキラは優しく言う。

「話はまだ終わっていません。顔を上げてください、ナビ」

呆然としながらも頭を上げると、キラは穏やかに笑んだ。

そしてナビは、今日三度目の弾丸を受けることになる。

「だから、あなたを公爵に任じることにしたのです」

「……！！」

まるで撃ち抜かれた心を守るように、ナビが胸を手で押さえる。

「そん……な……！！」

キラは次々に驚愕の表情を強めていくナビの姿を、楽しそうに見ていた。

「む、無理ですわ……！あたくしなんかにはできるはずないですもの！」

「いえいえ。あなたは実に適任です。こと今の朝衆の制度下においては。あなたは本当に忠実で、善良な淑女です。これからも僕の元で働いていただくため、立場を高めることも必要だと、僕は思うんです」

ナビの顔はほのかに赤くなる。

「キラ様は、あたくしを買い被りしていますわ。あたくしは、そんな御立派な役職に就ける程積極的な人間じゃありませんの」

するとキラは、試すような色の混じった笑みを浮かべる。

「おや。では僕の任命を退けますか」

ナビの顔が一瞬強張る。

しかし直ぐに観念したかのように、肩の力を抜いた。

その問いに対する答えを、ナビは一種類しか選択できない仕組みになっているのだ。いや、選択以前の問題なのかもしれない。ナビは答えをひとつしか持っていなかった。

「……やらせていただきますわ……」

それを聞いて、キラはにっこりと笑った。

しかしそのやりとりの一部始終を傍観していたギアが、やや不満そうに口を出してきた。

「おや？それで終わりなのかい？」

「？」

ナビは目を瞬^{はじ}かせる。

キラがやや強い調子で「ちょっと黙っててください」と言ったので、それに対しても驚く。

そうしてキラは疲れた顔に戻って、頭を押さえた。

「僕自身、今日は驚かされることばかりで。こんな状態では、作戦を最後までやり通せそうにありません」

すると、周囲の者達の目も、不満そうなもの変わった。そんな者達を代表して、ギアが口を開く。

「そっぴや聞くのを忘れてた。何かあったのかい？」

「実はですね」とキラは話し始める。

「陛下の御意志で、ナルカミ嬢が誘拐されたそうです」

第十八章：燕、飛ぶ

廊下に繋がる扉を見つめながら、ナルカミはマコトがそこを開けるのを、今か今かと待っていた。

今日は生憎の曇りだが、それでもナルカミの心は晴れ渡るように明るかった。

ベッドに座る彼女の隣には、ベージュのボストンバッグが置いてある。

図書室の本を借りるときのために、オト八に買ってもらったものだが、今日そこに入っているのは本だけではない。ビスケットや地図帳、ハンカチやティッシュも入っている。

突如、部屋をノックする音が聞こえて、ナルカミはいよいよ顔を輝かせた。

がしかし、「失礼します」と言って入ってきたのは、褐色の肌の男ではなかった。

「お、オト八さん……?」

その青い髪の侍女を見て、ナルカミの表情は強張る。対照的にオト八のほうは、不自然なくらいににこにこしていた。

「ご機嫌よう嬢様。少しお時間いただいてもよろしいですか?」

う、とナルカミは言葉に詰まる。

勿論、良いわけではない。

「え、と、今じゃなきゃ駄目……ですか？」

ええ、とオトハは頷く。

「とてもとても、大切なお話があるんですの」

焦るナルカミ。

どうにかしてオトハをここから追い払わねば。

そう思った矢先、扉がもう一度ノックされたので、ナルカミは思わず「ひい……」と悲鳴を上げた。

案の定褐色の肌の男が入ってくる。

そして彼は、オトハを見て固まった。

オトハのほうはというと、腰に手を当て、マコトのほうを冷えた視線で見ている。

マコトは目を泳がせながら、

「あー……どーも……お久しぶりです」

と、気のない挨拶をした。

オトハもそのままの体勢で応じる。

「御機嫌よう、マコト。本当に久しぶりですわね」

どうやら二人は知り合いらしい。

「ああ、ははは。一応この城にも何回か仕事で来てたんですけどね。不思議とあんたには会ってませんでしたね。もしかして避けてます？」

「いえいえ。そんなことございませんわ」

と、オトハはそれが、心にもないことだということが丸分かりの台詞を吐く。

「ああ、そりゃあ良かった。うちの族長もあんたと会えなくて寂しがってたんで、今度会いに行行ってやってくださいね」

それを聞いてオトハの態度が一変した。彼女は顔を真っ赤に染め上げ、眉を吊り上げる。

「誰が！あんな輩に会いに行くものですか！さあ、言いたいことはそれだけですか！？ならば出て行ってください！さっさと！！」

「あーそうします。じゃ、行くぞナルカミ」

そう自然に言われたので、ナルカミも自然に立とうとした。しかし当たり前だが、オトハは立ち塞がる。

「ち、ちよつと待ちなさい！嬢様も！」

マコトは面倒臭そうな顔をする。

「まだ何かあるんですか？」

「目の前で嬢様が誘拐されようとしているのに、それをみすみす見逃す程愚かではありませんわ！」

おや、とマコトは笑う。

「誘拐とは人聞きが悪い。俺は、ナルカミをこの城から自由に
やるうと思つて来たんだ」

「自由？自由ですつて？」

オトハはマコトを忌々しげに睨んでから、ナルカミに顔を向けた。

「嬢様。騙されてはなりません。マコトにも……カザミ様にも」

ナルカミは困つたような目でオトハを見つめる。

今は何を言われても、この決意を変える気はなかつた。

それにしてもオトハは、自分がカザミとした契約についても知つ
ているのだろうか。

「嬢様。私はマコトや、その背後の者達が何を企んでいるのかは知
りません。ですが、二つだけ言えることがあります。突如現れた救
世主にろくな者はいません。それから、あなたは利用されやすい立
場なのです。カザミ様については……仕事上、私もこれ以上は何も
言えませんけれども……」

しかしオトハがそう言ったときには、ナルカミはもう彼女の目の
前にはいなかった。

マコトに手を引かれ、足をもつれさせながらも部屋を出ようとする。

「……っ！！」

廊下に出る寸前で、オトハに手首を掴まれた。

しかしオト八の行動が、本当に嫌だと思ったその瞬間。ナルカミは、何らかの原理、心理、そして意味を理解した。それは難しい方程式が解けたときのような感覚だった。ナルカミはその答えに行き着く過程がわかったわけではなかったが、勢いでその解を、自分の頭に殴り書きした。

すると、オト八に掴まれている左手から、何かが放出された。

それは黄金色のきらきらしたもので、綺麗だった。しかしナルカミは、それが剣の危なっかしい美しさのように見えた。

それはナルカミの手からオト八の手に伝う。

刹那オト八は、声にならない叫び声を上げて、反射的に手を離れた。

そして信じられないような目でナルカミを見た。

オト八の顔を見た途端、ナルカミはその視線に何処かを射抜かれた。その痛みを隠すために、全身麻酔を施したように体が動かなくなる。

恐る恐る左手を見ると、金色のものはまだ僅かに、ナルカミの手をばちばちとほとばしっていたが、やがて消えた。

ナルカミも自分が信じられなかった。

しかし「マトロイ」、

「速く！」

と急かされ、我に帰る。

無理矢理体を動かし、廊下に出た。

すると向こうのほうに、階段を上がってきたキラの姿が見えた。

マコトは舌打ちし、キラは妙なツーショットに眉を潜めた。

後ろからオトハの叫び声上がる。

「キラ！嬢様が誘拐されようとしています！速く！捕まえてください……！」

そのときのキラは、珍しく、相当度肝を抜かれた顔をしていた。

そして慌てて叫ぶ。

「眠れる人工の生命達よ、目覚めよ！！雷の女帝を救え！」

小さく、かちやかちやとした金属音が聞こえた。

その音は段々大きくなってきて、終いにはがちやがちやとやかましく騒ぎ出した。

それは何処からというわけではなく、まるでこの城全体が共鳴しているかのように、四方八方から聞こえてくる。

気付けば二人は、大小様々な金属の群れに囲まれていた。

マコトは唇を噛み、ナルカミは小さく悲鳴を上げた。

機械達は前にも後ろにもいたし、天井にもいた。見たことのない、

意味のわからない機械もいれば、懐中電灯だったりラジオだったり、馴染み深いものもある。それら全てが、作られた意図の範囲を越えて、意思を持っているかのように動いていた。

「さすが我が朝衆の誇る機族の長！久々に見直しましたよ！」

機械達のさらに後ろで、オトハが歓声を上げた。

「久々に、ですか」

キラは苦笑しながらも、まだ起きていることが信じられないかのような面持ちだった。

機械郡に囲まれて、ナルカミとマコトは身動きができなかった。

すると突然、群れの中から一体の機械がこちらに進み出てきた。大きくも小さくもないその機械は、下にキヤタピラがついていて、二本指の単純な手も持っている。

そしてその機械は、ナルカミにゆっくりと腕を伸ばしてきた。

ナルカミの顔が恐怖と諦めの色に歪む。しかしそのとき、当の本人は全く自覚していなかったことだが、その金色の瞳は、強く、気品溢れる輝きを増していた。

「やめて……！！！」

ナルカミは機械に向けて、咄嗟に叫んだ。
強く、目を瞑った。

。

そして沈黙が訪れる。

いつまで経つても、金属の触れる冷たい感触が来ないばかりか、今まで絶えなかった、機械達の騒がしい駆動音さえ聞こえない。

ナルカミは恐る恐る目を開けてみた。

先程近付いてきた機械が、ナルカミに手を伸ばしたままの体勢で固まっている。

驚きながら周囲を見回すと、止まっているのは一体だけではなかった。

自分達を取り巻いていた命ある機械達全てが、ただの冷たく重い塊に変わり果てていたのだ。

マコトがこちらを振り返って言った。

「でかした！流石雷族の長だ！行くぞ！！」

そして再びナルカミの手を取り、機械郡を蹴散らしながら走り出す。

ナルカミも何が何だかわからないまま、とにかく足を動かすことに専念した。

後ろのほうで、

「あー、やっぱり電動では勝てませんね」

と、キラが脳天気にはやくのが聞こえた。

同時に、

「ぼさつとしてないで速く追い掛けてください！」

というオトハの声も。

マコトはナルカミを連れて、一番近くにあった部屋に飛び込んだ。そして真っ先に窓を開放する。

瞬時に、ナルカミの脳内が嫌な予感で満たされる。

ナルカミの嫌そうな顔もお構いなしに、マコトは叫んだ。

「さあ、飛ぶぞー！」

「い、いくら二階とはいえ、ナルカミはそこまで運動神経良くはな……！」

しかしマコトは首を横に振る。

「『飛び降りろ』だなんて言っていない。『飛ぶ』んだ！あんたならできる！」

ナルカミは黄金色の目を真ん丸にして、マコトを見つめた。

マコトも、そのきらきら輝く目を一心に見つめる。そして確信を込めて言う。

「本当々」

その言葉と同時に、ナルカミは強い力で背中を押された。一度窓枠につんのめるが、そのまま一回転して空中に放り出された。

落ちる、とは思わなかった。

まるで最初から、空の飛び方を知っていたかのように、ナルカミは安々と空中の床を歩いた。それは不安定なものだったけれど、確かに空を蹴れば実際に体は進んだ。

直ぐにマコトも追い付いてきて、ナルカミの手を掴んで誘導する。

自分に起きていることに戸惑いながらも、それをおかしいとは思わなかった。ただ、空を蹴り、前に進む。今はその動作に集中していたかった。

「これからどうするのですか？」

「ウィンドネル城の近くまで、仲間の飛行機が来てる。そこまで飛んで行こう」

するとナルカミは、急に不安げな顔になった。

「駄目です。このお城はカザミ様の風に守られています。外から入るのも無理ですし、中から出るのも無理です」

しかしマコトはにやりと笑った。

「それがどういうわけか、今日は風壁が全く無いんだよ」

「え……」

ナルカミは絶句した。

カザミの風壁は、例えば彼が城にいたくとも、今までずっと稼働してきたものなのに。

こんな都合の良いことなどあるのだろうか。

もしかして、カザミ様が計らってくれたのかな。
そうだとしたら、それは幸せなことだ。

そしてカザミのことを思い出したのと同時に、ひとつの単語が唐突に浮かび上がってきた。

『一年』。

それは今この瞬間から、ナルカミの胸の奥でカウントダウンを始めた。

ナルカミは、その存在を確かに感じながら、一步、また一步と足を踏み出す。

灰がかった白の世界で、ナルカミは手を引かれながら、「自由」へと歩いていった。

一度も、振り返らずに。

終章：停止した歯車は油を得る

正午の少し前、風に変化したカザミが書斎の窓から帰ってくると、そこには瘦身の紳士がいた。

彼はカザミを見ると、深々とお辞儀をする。

「おはようございます、陛下」

カザミは不機嫌そうに、キラのほうを軽く睨んだ。

「いくらお前とて、勝手に俺の部屋に入っていていいと言った覚えはない」

キラはまたしても飄々と頭を下げる。

「それは失礼いたしました。鍵もかかかっていなかったもので」

特に申し訳なさそうな態度も見せないキラに、カザミは溜め息を吐いた。

そしてふと、何かを思い出したような顔をする。

彼はズボンのポケットに手をつ突っ込むと、小さな物体を取り出して、キラに投げた。

キラは片手で上手にそれを掴んで、まじまじと眺めた。小さな小型マイクだった。そして思い当たるふしがあったらしく、ああ、と一人で納得した。

「後片付けぐらいしっかりしておけ」

「すみません。すっかり忘れていました」

言ってから、不機嫌そうではあるが、さして怒った様子もないカザミを見て、首を傾げる。

「お咎めはないんですね」

カザミは嘲るように薄く笑った。それはある意味自嘲気味でもあった。

「今回は特別だ。俺もおまえのお陰で助かったことがあるからな。ナルカミに感謝しておけ」

キラはその意味を完全に理解したわけではなさそうだったが、

「そうしておきます」

と言って微笑んだ。

「それで、何をしに来たんだ？その様子だと、盗聴器を取りに来たんではなさそうだが」

「ええ、少しお聞きしておきたいことがあります」

そう言うキラの表情は、どことなく疲れているようにも見えた。そして言った。

「一体あなたは、何処から何処まで知っていたのですか？」

カザミは面白そうな顔でキラを見た。

「どの範囲のことだ？」

「そうですね。とりあえず、僕と、ナルカミ嬢と、それからマコト

殿のことです」

カザミは少し考えてから口を開いた。

「ナルカミのことは全て知っていたな。お前がナルカミの誘拐計画を立てていたのは知っていたが、それがフェイクだったのは知らなかった。マコトに至っては目的も含めてほぼ何もわかっていない。予想をつけることはできるがな」

成る程、とマコトは頷く。

「では、何故我々ではなく、得体の知れない昼衆のほうにナルカミ嬢を委ねたのですか？」

カザミは目を細めた。

「お前が知っているかどうかは知らないが、いつかギアの言った言葉が引つかかったんだ」
「ギアが？」

マコトは不思議そうな顔をする。

「誘拐後、ほとぼりが冷めたら何処かに嫁がせる可能性もある、と言っていてな。冗談じゃないと思った」

「ほお。そういうことですか」

キラは小さく息を吐いた。

「でも、いいんですか？ナルカミ嬢を奴らに渡して」

カザミは頷く。

「昼衆はまだ良識のある輩だ。滅多なことはないだろう。それに、ナルカミには風を放っている。代償として、この城内を巡るいくつかの風が使えなくなるがな」

カザミの話聞いたキラは、疲れたように笑った。

「結果としてあなたは、大体全て、上手くいったんですね」

カザミはこともなげに頷いた。しかしそれからやや眉を潜める。

「お前は違うのか？」

キラは乾いた笑いを漏らした。

「途中まで、万事上手くいってましたがね。最後の最後で全てが台無しになりました」

「本当は……」とキラは続ける。

「プロポーズするつもりだったんですよ。ナビに」

そう自白するキラに、カザミは少なからず驚いた。

「全てが終わった後、反対派のナルカミ嬢誘拐計画に荷担した罰と引き換えに、僕と結婚してくださいと」

「……せこいな」

「あなただって同じようなものでしょう。それに僕の場合は軽い酒

落です」

「だというのに……」とキラはうめく。
そして彼は弱々しく言った。

「あの騒動の中で、婚約指輪落としました」

「どーしてあたしが、こんなことやらされなきゃいけないんだ！」

二階の廊下を幕で掃いていたギアは、耐えきれなくなつてついに叫んだ。

彼女の周りには、金属の部品や何かの機械の断片が散乱していた。
マコトとナルカミが蹴散らしていった機械郡だ。

ギアの他にも、あまり機嫌のよろしくなさそうな人が何人か、掃除にいそしんでいる。

同じく床を掃きながら、オトハが冷めた声で言った。

「あなた達の上司に、後片付けはちゃんとなさいと言ったところ、部下達がやってくれると仰っていたもので」

「全く。だからってあたしらをこき使うことないだろ」

ギアが悔しそうに言うと、オトハは、

「だって一番近くにいたんですもの」

と、むっつりとした顔で言った。

ギアは深々と溜め息を吐く。

ふと、視界の隅で、ナビが掃除の手を止めているのが気になった。近付いていってみると、彼女は手中の何かを見つめている。

「おい、ナビ。さぼってんじゃないよー」

ギアが呼び掛けると、ナビは我に返って謝った。

「ごめんなさい。こんなものが落ちていたもので……」

言って、手に持つ小さなものをギアに見せた。

「……指輪？」

それは、銀のシンプルなリングに、透明で小さな宝石のあしらわれた、控え目だが上品な指輪だった。

「ははあ、とギアは思い至る。

成る程、だから作戦は失敗したか。

「それ、キラのだよ」

「え？」

ナビはきよとんとする。

「キラの。いつか持ってたの、見たからさ」

「キラ様が……？まあ……」

ナビはなおも不思議そうにしていた。

「持ってってやりなよ」

そう言つと、ナビは「ええ」と上品に微笑んだ。

〔第一部・終〕

終章：停止した歯車は油を得る（後書き）

初めましてこんにちは、黒轍です。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

次からは第二部の始まりとなります。

何部構成になるかは全く目途が立っていないのですが、一部は一巻、二部は二巻というようなかんじでお付き合いくだされば幸いです。

第二部はクロ中心のお話で、ちょっとシリアス風味です。

ナルカミは相変わらず微妙な位置にいますが、よろしければご覧になってみてください。

気になり出したのは、初めての出会いからかなり後。

でもあたし鈍感だったから、実はもつとずつと前から気になって、自分のそういう気持ちにすら気付いていなかったのかもしれない。

細かいことはよくわからないけど、とにかく一目惚れじゃなかったことだけは確かだよ。

むしろあの人のこと、あたし嫌いだった。

口うるさくて、怒りっぽくて、説教臭くて大嫌い。

あたしより五歳年上だけど、長く生きるんであれば、そんなのあまり関係ないじゃない？なのに物凄く偉そうなの。

あたしあの人が楽しそうにしてるの、見たことなかった。いつつもおでこに皺寄せて、溜め息ばかり吐いてる。

あの人はあたしが楽しいことやるとすぐ怒るの。だから、きっと自分が楽しくないから、楽しいあたしのことひがんでるんだなって思った。可哀想だったから、一緒に楽しいことする？って、聞いてあげたの。そしたら何て言ったと思う？

『悪徳商法を楽しみとするか。末期だな。商人の屑にも満たない』

だって。

超嫌なやつ。

でもね、あたしあることをきっかけに、楽しいことやらなくなっちゃった。

ちびっこが彷徨ってたから、どうしたの？って聞いたの。そしてらお家がわからなくなっちゃったって言ってたから、あたし情報屋に行つて、道を聞いて、その子のこと家まで送ってあげた。

子どもは好きなんだ。大人より断然子どものほうが好き。だって楽しいことしかないもん。大人はつまんないことをつまんなさそうにやってて、意味わかんないの。つまんないんだったらやんなきゃいいじゃないって思う。だから、自分に正直に生きてる子どもが好き。

そうして、あたしが家に帰る途中だった。

突然あの人が現れた。

今度は何を怒られるんだろうって、あたしは身構えて。

そしたら、あの人はあたしの頭を撫でてくれたの。偉いって。見直したって。

あたしは何だか不思議な気持ちだった。あの人のこんな穏やかな顔は見たことがなかった。あの人にどう接すればいいのか、あたしはわからなかった。

でも、嫌な気分じゃなかった。

何で褒めてくれるの？ってあたしは聞いた。

あの人は、あたしが良いことをしたからだよって言った。

「これが良いことなの？」

「そう。あんたの考える『楽しいこと』は悪いこと」

初耳だった。

そんなの今まで、誰も教えてくれなかった。

「じゃああたし、良いことするよ。だから、何が良いことなのか教えて」

そしたらあの人は、何故か困ったように笑った。

「難しいこと言うな」

あの人は結局、何が良いことなのか教えてくれなかった。
でもあたしはあのときから、楽しいことをやらなくなったんだ。
つまらないことをちよつとやるようになった。
これが大人になるってことなのかな。あたしは大人になったのか
な。

あたしは自分が好きじゃなかった。

髪は黒、目は黒、司るものは闇。

真つ黒。暗黒。

暗いイメージばかり。

あたしはあの人が羨ましかった。

髪は薄めのグレイ、目は銀色、司るものは光。

何もかも交換してほしかった。

ずるい。あの人がばかり。あたしの欲しいものは全部あの人が持
ってる。

でもあの人は言った。

「綺麗な目だな」

びっくりした。

どこが？真つ黒なのに。

「濁りのない黒程、美しい色はないよ」

そんなこと言われたの初めてだった。

嬉しかった。

そのときから、この漆黒の目が、唯一あたしの誇りになったの。

あたしは次第に、あの人に惹かれていった。

あの人は色んなことをあたしに教えてくれた。

あの人があたしを叱って、あの人があたしに優しくして、あの人だけがあたしを愛してくれた。

あの人の距離が縮まれば縮まる程、他の人達もあたしに近付いてきてくれた。

あの人にはあたしへの永遠の愛を誓った。あたしもあの人への永遠の愛を誓った。

あたし達は指輪を交換した。

毎日毎日嬉しくて楽しくて幸せだった。

あの人のお傍にいれば、あの人にはあたしをも照らしてくれる。白く染め上げてくれる。そんな気がした。

ある日あたしは、体に異変を感じたの。

お腹が、変。

何度も一度食べたものを吐き出した。

だからお医者さんに行ったの。

そうして、あたしは自分の中に、もうひとつの命があることを知った。

あの人には喜んでた。他の人達も喜んだ。

あたしは喜んでいいのか、正直わからなかった。

あの人との間に、新しい命が生まれる。それは嬉しい。それは嬉しいけれど。

あたしなんかの元に生まれちゃっていいの？って。そういう思いもあった。

それを言ったらあの方は笑った。

「何のために俺がいると思ってるんだよ」

だって。

その一言で、あたしはもう何でもできるんだって、そう思えた。

あの人が隣にいれば、あたしは賢者にもなれるし、勇者にもなれるの。最強なんだもん。

そしたらね、君がそこにいるのが確かにわかったんだよ。

あたしの中にいる、暖かな光。あたしの中にあって、あたしではない、君。

嗚呼、あたし絶対君を、この世に出してあげるね。絶対君に、素晴らしい世界を見せてあげるね。

君は光族に生まれればいいなあ。

容姿も性格も、あの人に似てくれればいいなあ。

でも、目だけはあたしの色を受け継いでほしいな。あたしの自慢の、漆黒色がいいな。

大丈夫。心配しないで。君の傍には、最強のあたしと、それよりもっと最強のあの人がいるから。

待ってるから。待っててね。

第一章：始まりの空模様は青か灰か

夜衆首都、ミッドナイトストリート。

此処は日中は実に静かな街だ。

夜を活動時間とする夜衆の人間は、昼間は地上の街で寝ているか、静かに創作活動に打ち込んでいる。

その代わりと言っては何だが、夜の地下街は酷い。

己の作品を持ち寄って、各々自慢したり批評し合ったりするらしいのだが、この街には、ただ騒ぎたいがために集まる輩も多い。

そもそも基本的な自治がなっていないこの衆は、とにかくふざけた奴らが集まる。

「自由」を掲げるのは良いが、自由とはある程度の制約があつてこそ美しいものになるというのに、夜衆の族長達はそれがわかつていないのだ。

そういうわけで、キセキは何があつても夜の地下街には入りたくないのだが、今のようない日中の地上街は割と好きだった。

この時間帯の地上街は、完全な静謐に包まれている。昼衆で言えば、深夜から早朝にかけてのひっそりとした雰囲気、寝ずして味わえるのだ。

これはなかなか格別な気分がして、キセキは気に入っていた。

キセキは書類をまとめながら、会議の後の静けさを味わっていた。今日は月に一度の三衆合同首脳会議の日だった。キセキは今、ミッドナイトストリートの公会堂に来ている。夜衆では全ての人間が平等であるので、いわゆるお偉いさん達専用の会議場なども特にないのだ。

今日は珍しく会議も早く終わった。

理由は明確だ。夜衆代表として来るのが、炎族長、エンジだったからだ。

夜衆は四人の族長の上に立つ者や、中心人物がいない。そのためこういう会議の場合は、四人の族長が交代で来ることになっているのだが、これが他の三人の誰かだと手に負えない。

エンジも決してまともというわけではないのだが、水族の長ナミダがない限りは、まだ安全領域だ。

そういうわけで、早く終わった会議に一安心し、帰りの準備を始めているキセキに、背の高い男が近付いてきた。

珍しい、とキセキは思う。

朝衆帝王カザミ。

人付き合いを好まない彼が、自分から個人的に近寄ってくるなど、滅多にないことだった。

「キセキ」

カザミは低く静かな声で、呼び掛けてきた。

「何でしょう」

「近いうちに、うちの者が世話になるかもしれない」

キセキはぼかんとする。

何の話だ？

「そのときはよろしく頼む」

彼の顔は飽くまで真面目だったが、キセキにはどうにもカザミが楽しそうに見えて仕方がなかった。

「……どちら様がおいでで？」

「直にわかる」

「……ていうか、何の話ですか？」
「直にわかる」

今は何を言ってもこの調子が続きそうで、キセキは沈黙した。
するとカザミも身を翻して、離れて行った。

それを見ていた、獣のような三角の耳と尻尾をつけた青年

エンジが、目をくりくりさせて叫んだ。

「お泊まり！？お泊まりなのか？いいなあいいなあめっちゃいいなあ
！！キセキキセキ！俺も！俺とナミダもキセキんち泊まる！！」

冗談じゃないと思いつつも、キセキは曖昧に笑っておいた。

そしてどことなく疲れた顔で、遙か我が都の空を見やる。

秋の空はどこまでも青く高く、広い。

あの子は今日も、閉じた心で喪に服す。黒く悲しく、
自分を責めて。

狭苦しい、灰色の大都市をナルカミは行く。

どうやら此処は昼衆の首都、サンライズエリアらしい。

この街はありとあらゆるものが一ヶ所にぎゅっと凝縮されている
ようだ。人もモノも建物も。綺麗なモノも汚いモノも。世界に散ら
ばるありとあらゆる人工物を集めたような、そんな場所だった。

そう、自然物は驚く程に少ない。

商品として売られているものはある。しかし自然に生え出る緑は皆無と言っても良い程だ。雑草一本なければ土一欠片もない。どこまでも舗装された、滑らかで冷たいアスファルト、コンクリート。

建物は大小様々だ。まずビルが建って、それから比較的小さな店が、ビルとビルの間隙に軒をつらねているようだ。ビルは大抵灰色の無機質なものが多かったが、小さな店となると、カラフルだったり煉瓦造りだったり、お洒落なものも多い。

道路は四つに分断されており、真ん中の二つが車用で、端の二つが歩道らしい。どちらも大変な混雑ぶりだ。

排気ガス、人混み、灰色。気持ち的にも実質的にもむせかえるような空気だ。

道行く人達は皆様々だ。旅商人もいれば貴族もいる。学生もいれば、明らかに地方の民族衣装を纏った者もいた。

ナルカミにとってはそれら全てが珍しく、あっちへこっちへ、忙しく首を動かしている。

しかし立ち止まってよく見ることはできなかった。彼女の手を引く男が、足早に歩いていくからだ。

男は紺色の丈の長いコートを着、同色の帽子を被っていた。

ココロと名乗ったその男は、ナルカミにも同じようなコートを着せて、フードを被るようにと言った。

自分をウィンドネル城から連れ出してくれたマコトとは、ある一軒の店で別れた。ココロは、そこで引き継ぐような形でナルカミを案内し、今に至る。

自分の能力、マコトやココロの正体、この街のことなど、ナルカミにはわからないことだらけだった。

しかし、ひとつだけわかったことがある。

マコトさんは、あたしをウィンドネル城から連れ出してくれたけど、自由にしてくれる気はないみたい。

突然ココロが立ち止まった。
濃厚な笑みをナルカミに向けて言う。

「目的地に着いたよ」

彼はひとつの巨大ビルを見上げる。

ナルカミもそれに倣った。スケールが大き過ぎて、頭がくらくらする。

「此処は……？」

「サンライズエリアで最も高いビル。全ての商業を統括する組織、ヴァルセイルの本拠地さ」

第二章：常闇の黒姫

「とりあえず、そのコートはもう脱いでいいよ」

ビルに入って、『エレベーター』という狭い部屋に通された後、ココロは言った。そして己自身もコートを脱ぐ。

中から現れたのは、先程までの恰好からは想像もつかないような派手な姿だった。

ピンクの髪は一部分だけちょんぴんのように結っており、水色の目の上には紫色の色眼鏡。真っ赤な蜘蛛の巣プリントの施されたライダースの下には、ロック調のロゴ टीー シャツ。下は緑を基調としたチェックのズボンに、黒いスニーカーを履いていた。

見たこともないファッションと過激な色合いに、ナルカミの目はちかちかする。

「何？そんなに珍しい？俺の恰好」

ナルカミは目を離せないまま、何度も頷いた。

ココロは苦笑した。

「まあ世間知らずの貴族の女の子には、ちょっと刺激が強すぎたかな」

ナルカミはココロを見つめたまま、コートを脱いだ。

どうやらこの人は、カザミのように恐い人ではないらしい。

ならば、と思い、ナルカミは気になっていたことを聞いてみる。

「この部屋に入った途端、下から圧力のようなものを感じるのですが……大丈夫でしょうか」

ココロはきょとんとした。

「ナルちゃん、エレベーター乗ったことないの？ ウィンドネル城にもいくつかあるはずだけど。エンディーヌの館とか」

ナルカミは何も知らないといったふうに、首をふるふると横に降る。

「乗り物……なんですか？」

「うーん、まあそんなとこなのかな。箱が動いてるんだよ。つまり、この部屋ごと上に持ち上げられてるんだ。だから下から圧力が来るように、思えるんだな」

ナルカミはぽかんとした。

「部屋が……動く」

すると、小さく「ちん」という音が鳴った。

「さ、行くよ」

ココロが言ったのと同時に、扉が開く。

ナルカミはそろそろと足を踏み出した。

外は特に変わったところもない、建物の内部だ。一階とは違い、床は絨毯だった。

「何処に着いたのですか？」

「96階」

「きゅっ……」

信じられない数字を耳にして、ナルカミはその場に立ち尽くした。

「今から会う子の部屋があるところなんだけどさ。その子の名前が『クロ』って言うて。ね、『クロ』で『96』。くだらないけどね。本人の要望で此処になった」

ココロは、ナルカミがその高さに驚いているとは、思っていないようだった。

「ほ、本当に此処は96階……？」

ココロはあっさりと頷く。

「何なら、その窓から見てみなよ」

言うて、近くにあった大きな窓を指差した。

ナルカミは硝子に手を当てて、恐る恐る下を見下ろす。そしてすぐにあとずさった。

元々あまり顔色の良くないナルカミであったが、今は普段よりさらに蒼白い。足取りはふらふらと頼りなく、全身は小刻みに震えていた。

ココロが首を傾げる。

「あれ？高所恐怖症？マコトと一緒に空飛んだんじゃないの？」「そ、そうなんです……こんなに高くから、こんなに多くの建物を見下ろすことはなくて……。ウィンドネル城を出たときも、雲の中だったから……」

成る程ねえ、とココロは納得する。

「ま、此処が96階だつてことには納得でしょ？」

ナルカミは力なく頷いた。

「じゃ、行くよ。クロちゃんが、今か今かと君のことを待ち詫びているんだ」

ココロが扉を開けた瞬間、女性ボーカルのポップスが大音量で流れてきた。

ナルカミは思わず耳を塞ぎ、ココロは顔をしかめた。彼は、中でベッドに寝転がっていた少女に呼び掛ける。

「うおーいクロちゃん。いくら何でも煩すぎ。耳悪くするぞー」

ココロは別段大声で言ったわけでもないのに、ナルカミは聞こえないんじゃないかなと思う。しかしクロにはわかったようで、彼女は首だけこちらに向ける。

第一印象は、綺麗な女の子、といったかんじだった。しかし、同時に不自然さも多く感じる。まず、彼女は全身黒づくめだった。髪も漆黑、ワンピースも漆黑。頭にはナース帽を黒くしたような帽子を被っている。大きな目も黒色なのだが、何故か片方は違った。白に近い灰色のような色で、ナルカミはそれがすぐに人工のものなのだと気付いた。自然なものではないのは目だけではなかった。耳も、手も、足も、何故か左側だけは機械仕掛けだった。

クロはココロにっこりと笑いかけた。

「いいよ。悪くなっても。片方既に悪いんだもん。今更もうかたつば欠けたところで、何ともないよ」

しかしその言葉は、ココロの耳にもナルカミの耳にも入ることはなかった。

二人はただ、音の洪水の中で、ぱくぱくと口を動かすクロを眺めている。

クロ自身も、聞こえないのは承知の上らしく、特に言い直すこともしなかった。

やがて彼女は気だるげに起き上がって、音の発進地であるオーディオの停止スイッチを押す。

ふいに静かになった室内には、クロの機械の体が唸る音が、やけに大きく聞こえた。

やがてクロはナルカミに目を止め、興味深々といったふう目にくりくりさせる。

「君が雷族の長？」

ココロはそっと、ナルカミを前に押し出した

「そつだよ。『ナルカミ』っていう名前」

クロは「ふーん」と呟いた。

「不思議な響きね。カザミがつけたの？」

自分の名前の話になると、ナルカミは途端に嬉しくなる。

「はい」

幸せそうにナルカミが頷くと、クロは「ああそう」と面白くなさそうに言った。

「あなたは……『クロ』っていう名前なのですか？」

ナルカミが聞くと、クロは微笑んだ。

「そうだよ。そのまんまでしょ。何もかも真っ黒なあたしにぴった」

クロが笑ったので、ナルカミもぎこちなくではあったが、笑った。この衆の人は皆気さくで、堅苦しくなくて、話しやすいな、なんて、このときはのんびりと思っていた。

「可愛いお名前ですね」

するとクロの表情が固まった。呆然としたような顔でナルカミを見やる。

ナルカミは何かいけないことを言ってしまったのだろうか、心配になった。

しかしすぐにクロの硬直は溶け、ややうつ向いた。あまり力のもっていない声で答える。

「うん。そうだね」

「クロちゃんは、闇族の長で、ウァルセイルの副会長なんだ」

ココロが場の空気を盛り上げるように言った。

「あ、そ、そんな偉い方だったのですか。失礼なことを言っていたらごめんなさい」

ナルカミは萎縮してしまって、慌てて頭を下げた。
しかしクロは明るく言った。

「あは。君だつて、あたしと同じようなものじゃん。変に意識なんかしないよね」

ナルカミは再び頭を下げた。

「じゃ、お使いごころーさん！ちょっと遅かったけどね！もう行っていいよ」

クロはココロに視線を戻してそう言った。

「はいはい。マコトにもお礼言つといてね」

ココロは面倒そうに言ったが、クロがそれに答えることはなかった。

ココロが部屋を出て行くとしたので、ナルカミもついていこうと踵を返した。

しかし、後ろからがっしりと抱きつかれてしまう。

振り返ると、クロがにまっと笑った。

「君は、此処にいるの！」

ただ、機械仕掛けの左目は、彼女の表情に比べて驚く程に無機質だった。

第三章：隠蔽不足の涙

クロの部屋には色が溢れていて、ナルカミは落ち着くことができなかつた。

少なくとも、城では有り得ない光景だ。

雑貨は大抵カラフルでポップなものが多くて、可愛いものが沢山あった。今ナルカミが控え目に腰かけているベッドも、ピンクに白の水玉柄だ。

室内はモノが多く、わりと散らかっている。縫いぐるみが点々と床に投げ出されていた。

ナルカミの目には、それすらセットされたインテリアのようにも見えた。

部屋はこんなに色が多いのに、どうしてクロだけ真っ黒なんだろう。

ナルカミはふと、不思議に思った。

丁度その時部屋の扉が空いた。

「お待ちせ！」

クロは大量に衣類を担ぎ上げて入ってきた。そして、衣服をナルカミの隣にばつさりと放り投げた。ふー、と息を吐いて、おでこの汗を拭う仕草をする。

「あ、ご、ごめんなさい。手伝えれば良かったですよ。ナルカミ、そんな気が回らなくて……」

ナルカミが謝ると、クロは首を振った。

「あは。気にしないで。今のは疲れた真似。実際はなーんにも感じてないの。左手だから」

言つて、機械仕掛けのそれを掲げてみせた。

ナルカミは何も言えなかった。

クロの人工の体について、気にはなったが、聞くことはできなかった。

「君は優しいね。朝衆の他のやつらとは違うね」

ナルカミはきよとんとする。

「朝衆の皆さんは、ナルカミ以上に優しいですよ」

カザミ様は恐いけど、とナルカミは内心で付け足した。
しかしクロは渋い顔をする。

「何処が？カザミは恐いし、キラは何考えてるかわかんないし、オトハは煩いし」

「でも……皆さんナルカミに優しくしてくれました。カザミ様は確かに恐いけど……」

そこまで言ってから、ナルカミははっと口をつぐんだ。

クロのほうを見ると、しかし彼女は不思議そうな顔をしていた。

「変なの」

ぼつりと呟く。

「でも確かに、そういうところで君は朝衆なのかもね」

ナルカミは言われていることの意味がわからなくて、ただ困惑していた。

「ま、いいや。ね、それよりも、その敬語、止めてよね」

ナルカミは困った顔で首を傾げる。

「いけませんか……？これがナルカミの普通なのですが」

クロはこっくり頷いた。

「嫌いなんだよね、それ。あたしと君は今日から友達。ね？」

「は、はあ……」

友達とは言葉ひとつでなれるものなのだろうか。

しかしクロは、やや語調を強めて言った。

「だったら、敬語はよして。友達に敬語って、おかしいでしょ？」

「そうですか？ナルカミはオト八さんに、どんなに親しい間柄でも、敬意は必要って聞いたのですが……」

するとクロの顔がむくれた。

「あー、あの煩いおばさんねー。ま、一理あるけどさあ？でも、それとこれとは別。敬語の習慣ってゆーのは、朝衆の貴族のものでしょ？でも此処は昼衆。貴品も優雅さも求められない、商人のシビアナ世界。だったら、その風習に従うのが筋つてもんじゃない？ね

「？」

「そう言われれば、そんな気もする。
ナルカミは不承不承頷いた。

「わかりました」

クロが頬を膨らませる。

「……わかった」

そして満足そうに笑った。

「さて。何着せようかな。君ってお人形さんみたいで綺麗だけど、ちよっと細すぎだよ。あと肌も白すぎ。病弱そうってゆーか。実際そうなんだろうけど」

クロがじろじろ見てくるのが恥ずかしくて、ナルカミはうつ向いた。

「セクシー路線はまず無理だよ。胸ないし。色気ないし。小柄だし。スタイルは微妙なんだよね。あたしも他人のことも言えないけどさ」

「む、胸？」

「胸」

「……なくては駄目なので……駄目なの？」

「あつたほづが男の子は喜ぶよ」

むづ、とナルカミは唸る。クロのほづをちらりと見やると、それなりに膨らみがあったので軽く落ち込んだ。

「となると、やっぱり貴族風のドレスっぽいワンピースが一番かな。君は何色が好き？」

そう聞かれて、ナルカミは少し戸惑った。

好きな色のことなど、今まで考えたこともなかった。服も毎日オトハが勝手に選んで置いておいてくれるので、特に迷うこともなかったのだ。

「……わからない」

クロは目を瞬かせた。

「好きな色、ないの？」

「考えたことないから」

ナルカミは困った顔で聞いた。

「クロさんは……」

しかし途中でクロが遮る。

「クロって呼んで？」

ナルカミは少しの間口をつぐんでから、渋々従った。

「クロは、黒色が好きなの？」

クロは笑った。

「まさか。黒なんて大嫌い」

「え……」

ナルカミは当惑する。

じゃあ何で……。

「何で黒い服を着てるかって？」

ナルカミの思考を読んだかのようにクロは言った。

「これは仕方ないの。あたしの義務であり責任であり。あと自分を責める気持ちと、自分を逃れさせる気持ちから。あは。意味わかんないでしょ。あたしも意味わかんない」

笑顔で答えるクロを見ている内に、何故かナルカミの心がきりきりと悲鳴をあげた。

何でだろう。痛い。

咄嗟にナルカミの口から、言葉が出ていた。

「じゃあ、ナルカミも黒色がいい。クロは黒嫌いって言うけど、ナルカミは好きだから着るね」

クロの右目が大きく開かれた。

一度ぱくぱくと口を動かしてから、眉を潜めて口をつぐんだ。それから小さな口で、呟く。

「君も一緒に、悲しんでくれるの？」

ナルカミは彼女の言葉の意味するところがわからなかったが、またしても咄嗟に頷いていた。

クロの目はゆっくりと伏せられた。

「あは。変なの。馬鹿みたい」

そう言うくとクロは口を閉じ、沈黙した。

その間ナルカミも、声を掛けることができなかった。

やがてクロが踵を返した。ナルカミの隣の服の山ではなく、部屋の隅のクローゼットに手を伸ばす。

「わかった。お揃いの黒にしよう」

そして様々な黒服を物色した後、スカートに膨らみのあるワンピースとパニエを取り出した。

等身大の鏡を前にして、ナルカミは立たされた。

レースのふんだんにあしらわれたヘッドドレスを頭に付け、体には先程のワンピースとタイツを纏っていた。それらは全て黒色で、ナルカミの白金髪と白い肌がよく映えていた。

後ろではクロが満足そうな顔をしている。

「うんうん、さすがあたし。良く似合ってる。スタイリストに転職しようかな」

「今は、お仕事、何をなさってるの？」

「今？今はね、フクロウカンパニーってゆる貿易会社の社長」

「！」

ナルカミが目を丸くした。

クロは得意気な顔をする。

「あは。何気淒いでしょ。最近は全然顔出してないけどね。ヨダカとキセキに任せっきりの」

「ヨダカ……キセキ……？」

「ああ……うん。ヨダカは副社長。で、キセキは……光族の長だよ」

そう言うクロがまた目を伏せたので、ナルカミは少なからず慌てた。今日は自分が来たせいで、クロに気まずい思いをさせてばかりな気がする。

「うん。でもやっぱ君似合うなあ。この薄色の金髪とよく合ってる」

気を取り直して、クロはナルカミと向き合う。

するとクロは、ナルカミの目の中をじいっと凝視した。

今度はナルカミが目を伏せる番だった。

クロはうっとりとして呟く。

「いいなあ。きらきらしてて、きれい。金色の大きな硝子玉」

クロのその言葉に、何となくナルカミは恐怖を覚えた。

今にもクロが手を伸ばしてきて、目をむしりとしていくような、そんな錯覚に襲われた。

「お人形さんみたい」

「く、クロも、綺麗だ……よ？」

ナルカミが目を合わせずに言った。

クロは黙り込む。

「クロの、左右で色違いの目も、とっても綺麗。深い深い黒色と、

不思議な薄い灰色の目。闇と、光みたい」

僅かな静寂の後、クロの甘い声が発された。

「どうして、そういふこと言うの？」

「？」

顔を上げると、クロは肩を震わせていた。

「そんな……心にもないこと」

「！」

クロの右目から、何かが溢れて絨毯に小さな染みを作った。

「そうやって、おべっか使って、みんなあたしから離れていくんだ。まるでそうすることで、自然に離れる口実を見つけたみたいに」

クロは泣きわめいたが、床にへたり込むことはしなかった。左足はぐつと床を捕まえ、クロの体は微動だにしなかった。

「悲しい。悲しい。ごめん。ごめんね。ごめんなさい。許して」

言って、彼女はそつと目を閉じる。瞬間、大粒の涙が二、三滴、空中に放り出された。

彼女の謝罪はナルカミに向けられたものとも思えたが、他の誰かに向けられたものとも思えた。いわばそれは、全世界に罪を詫びているようだった。

「真っ暗、真っ暗だよ！何もかも！！」

ナルカミはクロにかける言葉が見付からなかった。

見つからない、というよりは、かける言葉を探してもいない、と
いうのが適当かもしれない。

そのときのナルカミは完全に傍観者だった。

唯々、泣き続けるクロを眺めていた。

その涙を、綺麗と、純粹に見とれていた。

第四章：ニンゲンケモノ

会議を終えたキセキがヴァルセイルに戻ると、ロビーのソファ―に腰掛けた女がファッション誌を読んでいた。

セミシヨートの黒髪には、何本か赤のメツシユを入れており、耳には小ぶりのシルバーピアスをいくつもつけている。背丈は平均より少し高い程度。目は深みのある赤紫色だ。白のワイシャツにレースのついた黒いジャケットを羽織り、同じく黒いネクタイを緩めて巻いている。下は三段の黒色ティードスカートで、飾りベルトが二本ついていた。

キセキは近付いていって、彼女の名前を呼んだ。

「アイス」

女の肩がびくつと震えた。女はぎこちなく顔を上げ、キセキと目を合わせた。

「真っ昼間からさぼりとはいい御身分だな」

「ち、ちがっ……!!」

アイスは慌ててファッション誌を閉じる。

「その、待ってるんだよ!」

「何を?」

キセキは冷ややかに問いながら、アイスの向かい側に腰を下ろした。

「ひ、人を」

「誰を？」

「シズカ……」

アイスは段々声を小さくしていった。

へえ、とキセキは適当に相槌を打つ。問い詰めたはいいが、別段興味があるわけでもなかった。

そして本当に聞きたかったことを問う。

「クロは、どうしてる？」

「えっ!？」

予想に反して、これ以上なくアイスは慌てふためいた。

キセキは不審に思う。

いつも聞いていることだというのに。

「何かあったのか？」

アイスはここから見てもわかる程に、汗を放出していた。そして顔をぶるんぶるんと大きく横に振った。

何となく汗が飛び散りそうで、キセキは気持ち後ろに退いた。

「何にもない!何にもない!」

大いに何かありそうなアイズに、キセキは疑いや戸惑いという感情を持つ以前に、ただ呆れるばかりだった。

馬鹿かこいつ。

「で、今度はあの女、何をやらかした」

「実は……いや、いやいやいや、だから何にもないって!」

ここまで正直な態度を取られると、まさかこの反応が偽りなのではないかと、そんな疑念すら沸き起こってくる。この女と比べれば、名に真実の意を持つマコトすら嘔吐きになり得そうだ。

「ああ、そう。じゃあ久しぶりに、クロの様子でも見てくるかな」

言って立ち上がるうとしたキセキの足を、アイスはがっとう掴んだ。小机を挟んで飛びかかってきたものだから、アイスの体は不自然に伸びている。

アイスは必死の形相で、こちらを見上げてきた。

「や、やめたほうがいいぞ！今はやめたほうがいい！！」

「何で？あんたいつつも俺に、『たまにはクロに顔見せてやれ』って言うてくるじゃねーか」

アイスは目を泳がせて、どうにか言い訳を探しているようだった。

「え、と、今、今入浴中！クロ風呂入ってる！」

「何時だと思ってるんだよ。三時だぞ？え？」

「今日は特別今入ってるんだ！」

「へえ。何でお前がそんなこと知ってたんだ」

「き、昨日本人が宣言してた」

「ああ、そう。まあ何でもいい。とにかく俺は行く」

言ってアイスの手を振り払うと、彼女は本気で焦り出した。

「だ、だから駄目だったの！何で敢えて入浴中に行くんだよ！あれか！？覗くのか！？覗くんだな！？やーいへんたい！！！！」

「上等だこの野郎。後で覚えてろよ」

それでもアイスは何とかキセキの行く手を妨害しようとするものだから、ついにはキセキはぶち切れた。

彼はまとわりついてくるアイスの足を払い、倒れさせると、しゃがみ込んで彼女の眼前に白い手袋をはめた手を掲げた。

「クロが何をしでかしたのか、十秒以内で答えろ。失明させるぞ」

しかしキセキが言い終わるや否や、片足に痛みが走った。

足元を見ると、一匹のダルメシアンがキセキの足に噛みついている。激痛とまではいかないのに、きつと手加減されているのだろう。

キセキは苦々しげに舌打ちした。

気付けば周囲を、種々の犬達に囲まれている。

アイスが寝転がったまま、優しげな声で言った。

「良い子だぶち。後でご褒美をやるぞ」

そして先程とは違って変わって、落ち着いた様子で立ち上がった。衣服をぱんぱんとはらいながら、

「これだから人間は……」

などと呟いている。

「お前だって人間だろう」

キセキが悔しそうに言うと、アイスは「いいや」と首を横に振った。

「あたしは獣だ。人間の皮を被った獣なんだよ」

キセキは無言でアイスを睨んだ。

「ぶち。もういい。そんな長く噛んでたらお前の歯が腐る」

ぶちと呼ばれたダルメシアンは、くうん、とひと鳴きすると、大人しくキセキの足を離した。

「全く。今まで滅多にクロに会おうとしなかった癖に、こつこつときにだけ首を突っ込みたがるのか」

キセキは唇を噛んだ。

それは触れられたくないところだった。

「勝手に行くがいい。そうして一人で突き進んで、己の愚かさを知るがいい」

言い捨てると、アイスは再びソファーにどっかりと腰を下ろした。

「何だ。このシチュエーションからいくと、お前はビルを出て行くところだろう」

アイスはそっぽを向いた。

「言っただろう。シズカを待ってるんだ」

それは本当だったのか。

キセキは踵を返してから、一度立ち止まった。
そして一言残して去って行った。

「己の愚かさをくらくらい、とこの昔に知っている」

第五章：贅沢者の惑い

薄暗い室内では、クロの静かな寝息と、時計が秒を刻む音のみ響いていた。こつも静寂が続くと、それら小さな音すら大きく聞こえるから不思議だ。

明かりはつけず、沈みかけの太陽のみがこの部屋を照らしている。

あの後クロはベッドに横たわり、ナルカミからは顔を背けて、静かに泣いていた。

ナルカミはその間、ただクロの後ろ姿を眺めていた。やがてクロの泣きじゃくる声は、規則的な寝息に変わった。

ナルカミは部屋の隅に、体を丸めて座っていた。

あんなに悲しそうな人を見るのは、初めてだ。

クロの背中を見つめながら、ナルカミは思う。

どことなく、泣きわめくクロの姿は、ナルカミが自由にしている、と頼み込んだときのカザミに似ていた。あのかのときのカザミは、悲しそうというよりは、苛立ちを露にしていたが、それでも両者はどこか似通っていた。

それにしても……。

自分は、いつになったら解放されるのだろう。

一体何のために、此処に連れて来られたのだろう。

こんな、意味のわからない切なさに溢れたところに連れて来られても、経験の浅い自分はどうすることもできないというのに。

ふと、ナルカミはクロの寝息が止んでいることに気付いた。クロの姿は先程と全く変わらなかったが、規則的な呼吸音は確かに停止している。

いつの間にか、口が勝手に動いていた。

「ナルカミは、いつ自由にしてもらえるの？」

「自由……」

クロはナルカミから顔を背けたまま、そう繰り返した。

「君の一番欲しいモノは、それなの？」

ナルカミは答えなかった。ただ、クロの目には入っていないことを承知で、頷く。

「贅沢者」

無感情な声で、クロはぽつりと洩らした。

「あたしには君がわからないよ。大切なものを持つてるのに、どうして欲しいものを優先させるの？」

大切なもの？大切なものなんて、持っていたっけ？
もしかして、お城での豊かな生活のことを言っているのかな、とナルカミは思った。

「クロは、欲しいものより大切なものを一番にするの？」

ナルカミは逆に聞き返した。

クロは疲れた声で答える。

「あたしの大切なものと欲しいものは、一緒だよ。でも、なくしちゃった」

「何処かに落としてしまったの？」

クロの顔が僅かに震える。

少し経ってから、今のは首を横に振っていたのか、と理解した。

ゆっくりと、クロは起き上がった。衣ずれの音が控え目に響く。

こちらを向いたクロの目は赤く、腫れていたが、ナルカミはその姿を綺麗だと思った。

「正しく言うとね、手放したの」

クロは憂いに沈んだ表情で、そう言った。

「自分から？」

ナルカミがそう聞くと、クロは小さく頷いた。

「あたしは、もう欲しがらないことにしたの」

「何故？」

「その資格がないから。それに見合うものを、持っていないから」

ナルカミは不思議でならなかった。

難しいことはよくわからないが、欲しいものを手に入れる能力が、資格なのではないのだろうか。手に入れた時点で、もう資格は満たされたのではないのだろうか。

「わかる？ひがんでるんだ」

クロが諭すように言った。

「ひがむ？」

「羨ましがって、妬んでるの。あたしが持っていないものを、君が持つてるから」

「それは、クロが手放したっていうもの？」

「同じじゃないけど、似たようなもの」

するとナルカミは、心底不思議そうな顔をした。

「じゃあ何故、捨ててしまったの？」

クロは虚を突かれたように、固まった。

「ナルカミには、クロの欲しくて大切なものがわからないけれど、羨ましいのであれば、手放さなければ良かったのに」

クロは暫くの間、微動だにしなかった。固まったままで、彼女はこぼす。

「仕方ないじゃない」

クロの顔には、何の表情も浮かんではいなかった。しかしそれは無感情などではなく、ありとあらゆる感情がないまぜになって相殺されたような、そんな無表情だった。

「それがわからないから、君は贅沢なんだよ。だから君は朝衆なん

だよ」

クロの言葉は結局よくわからなかったけど、だからこそナルカミは、妙に納得できた。

そうか。だからナルカミは贅沢者なんだ。

「そんな君に、自由なんて絶対あげない」

それは困る、とナルカミは思った。ただでさえ、一年という限られた時間しかないのに。

「あたしと一緒に、ずーっと悲しんでいればいいよ」

その言葉に、ナルカミは信じられない、というような顔をする。ずっと？ ならばクロは

「クロは、ずーっと悲しんでいるつもりなの？」

クロは至極あっさりとした態度で頷いた。

そして話は終わりと云わんばかりに、再びベッドに寝転がる。

何て悲しい人生だろう。

ナルカミは声には出さず、独りごちた。

ナルカミにはクロがわからなかった。

何故悲しいままにしておくの？ それで何か変わるの？ 変わらないことを望んでいるの？ じゃあ何故悲しいの？

問いは問いを生み、答えを出せぬまま堂々巡りだ。

だからナルカミは、贅沢なの？

第六章：失われた光

夜、キセキは18階の自室に鍵を掛けると、エレベーターに乗り込んだ。少し躊躇った後、勇気を震い起こして96のボタンを押す。扉は閉まり、エレベーターは静かに動き出した。

アイスと出会った後、結局すぐにはクロの部屋に行けなかった。やるべき仕事があった、というのもある。しかしそれは、ただ単に行動を先伸ばしにするための言い訳ではない。本当はあまり行きたくなかった、ただそれだけの理由なのだ。

最低の男だな、俺は。

キセキは眉間に皺を寄せた。

いつだって、会いたいと思っている。それなのに、拒否される恐怖のほうが強くて、身動きが取れない。

果たしてそんな程度の人間に、彼女を愛していると言える権利があるのだろうか。

むしろ俺が愛しているのは過去の彼女

単なる幻影な

わけで、有りの俣の彼女は、受け入れていないのではないだろうか。そんな苦悩は、結局のところ自分の内で考えてもどうにもならないことである。キセキは諦めという結論に行き着いた。

丁度そのとき「チン」、と控え目な音が響いて、エレベーターが止まった。

扉が開き、キセキは外に出る。

すると、背が高く、ひょろりとした男が、向こうから歩いてきた。ココロだ。

彼はキセキの姿を確認すると、いかにも「げ」というような顔を

した。

それを見て、キセキも顔をしかめる。

「くんばんは」

無愛想に挨拶すると、ココロも堅い笑顔で応じた。

「あー、どうもー。クロちゃんに何か用っすか？」

「ああ」

頷くと、ココロの笑みが引きつった。

「そっつすか、でも何で？」

「別に。様子を見に来ただけだ」

滑稽だな、とキセキは思う。様子を見に行くだなんて、自分からはまず絶対にしない行為だ。

ココロもそれを知っているから、苦笑していた。

「そっつお前はどうした」

自分の情けなさをいつまでも露呈させておくことが嫌で、キセキは特に興味もないことを聞いた。

「俺も様子見っすよ」

「そっつか……」

昔と同じように、とまでは行かずとも、クロはココロやアイスには未だ心を開いている。閉ざされたのは、結局自分一人なのだろう。

正直なところ、キセキは悔しかった。一番愛を注いだつもりだっ

たのに、最下位になる惨めさ。理由はわかっている。それが彼女なりの優しさなのだ。しかし納得はできなかった。

「クロは、どうだった？」

その問いに、ココロは珍しく、難しそうな顔をした。いつもならばヒステリー気味だの機嫌は良いだの、何かしら即答してくるのに。やっぱり、何か問題があったのだろうか。

「迷ってるかんじ、かな」

「ココロは自信なさげに言った。

「迷う？何を？」

「さあ……。でも、何かが変わったと、俺は思いますよ」

「ココロの言葉の意味を暫く考えてから、キセキは言った。

「俺は今、行かないほうが良いのだろうか」

「ココロは暫く目を泳がせて考えているふうだったが、やがて微笑んで言った。

「行ってあげてください」

夕食を食べて風呂にも入ったナルカミは、クロに本を読み聞かせていた。

何をすることが好きなのかと聞かれたので、本を読むことだと
うと、クロが読んでとせがんできたのだ。

二人並んでベッドに寝転がり、ナルカミは時々つつかえながらも
物語を朗読していた。

読んでいるのは昏衆に昔から伝わってきたらしい御伽話で、クロ
が持ってきたものだ。

クロはナルカミの隣で、気持ち良さそうにそれを聞いていた。

「前時々こうやって、あたしが寝つくまで読んでもらってたの」

話が一段落したところで、クロが呟いた。

彼女は頻繁にヒステリーを起こすが、立ち直るのも早い。この一
日で、ナルカミはそれを理解した。

「今は読んでもらってないの？」

「うん……」

クロは悲しそうに笑った。

まただ。またクロは悲しんでいる。

こんなに素直で一途な女の子を、こんなに悲しくさせているのは
一体誰なんだろう。

ナルカミは不思議に思った。

「ね、続き読んで。スズとフィズはそれからどうなったの？」

クロが話を変えようと、先をせかす。

その時、扉を二度叩く音が響いた。

誰だろう。

ココロならついさっき来たから、その可能性は低い。

「誰？」

クロが顔だけ扉のほうに向けて、呼び掛けた。

すると返事もないまま、扉は開く。

現れた人物を見て、クロが目を剥いた。

入ってきたのは、ナルカミの知らない男だった。

ライトグレーの髪に銀色の目。その上に黒縁の眼鏡をかけている。細身の黒スーツに白いワイシャツ、赤いネクタイをつけていた。全体的にモノトーンな色合いの中で、ネクタイの赤がやけに目についた。

男は、ナルカミを見て啞然とした。

「クロ……お前……」

「出てって!!」

男が何か言いかけたが、直ぐにクロが喚き出したので、それは遮られた。

「今すぐ出てってよ！キセキなんか嫌い！二度と来ないでって、言っただじゃない！」

キセキと呼ばれた男の銀色の目が、寂しそうな色を湛えた。同時に、後悔したような色も。

クロはというと、その顔は蒼白だった。様々な感情がそこに集結

し、今にも溢れて壊れてしまいそうな、そんな雰囲気だった。

キセキは長い溜め息を吐いた。

それが気持ちの切り替えだったのだろう、先程の切ない表情は今は微塵も残っておらず、ただ、苛ついたようにクロとナルカミを相互に睨んだ。

ナルカミはその鋭い眼光に怯えながらも、何となくカザミ様に似てるな、と思っていた。

クロはベッドから降り、キセキと向き合った。

「クロ、あんな」

「出てって!!」

「お前やっていいことといけないことが」

「出てって!!」

「第一危険だし」

「出てってってば!!!!」

クロは叫んで、右手でキセキの腹を押した。

キセキは面倒そうに眉を寄せると、クロの手を乱暴に取った。

クロが息を呑む。

。

暫くの間、三人の中に沈黙が流れた。

クロはキセキを見つめ、キセキはクロを見つめ、ナルカミは二人を眺めていた。

キセキがそっと、クロの手を離れた。クロはその手を、ぎこちなく自分の横につける。

「クロ。あれが何だかわかっているのか？」

キセキは小さな子を諭すように言った。

「ナルカミだよ」

クロはキセキを睨みながら答える。

キセキは首を横に振った。

「そうじゃない。どういう立場の者かわかっているのかと、そう聞いたんだ」

「雷族の長でしょ？」

「そうだ。大問題だぞ？これは。わかっているのか」

クロのキセキを睨む目に、力がこもった。

「このことを理由に、政治上不利になったらどうするんだ。お前は昼衆皆に迷惑をかけるんだぞ。そもそも誘拐だなんて、またけしからんことに手を染めて。これも『楽しいこと』なのか？」

クロは唇を噛んだ。目を大きく開いて、精一杯キセキに反抗していた。その顔はある意味涙を堪えているようにも見えた。

「知らないよ！あたしが何しようとかあたしの勝手でしょ！！ほっといてよ！」

キセキは無表情にクロと数秒見つめあった後、クロを避けて部屋の奥に入っていく。

ナルカミはキセキの標的が自分であることに気付くと、びくりと

震えた。

クロが後ろから抗議した。

「ち、ちよっと！勝手に入ってかないでよ！！」

キセキはクロの言葉を完全に無視して、ナルカミの手を取った。

怖い。

カザミとはまた違った恐怖を、彼からは感じた。

それは無関心故の怖さ。何をしてくれるかわからないという危険だった。

そしてベッドから彼女を引きずり降ろす。キセキはそのままナルカミを連れて部屋を出て行こうとした。

「何するの！？やめて！」

クロがキセキの前に立ち塞がって叫んだ。

「彼女は唯でさえ危険な存在だ。『雷』だぞ？何をしでかすかわかったものじゃない」

「ナルカミは危険なんかじゃないもん！」

クロは尚も喚いたが、キセキは無視して通り過ぎた。それでも彼女は諦めず、キセキの腕にしがみついた。そして懇願するように言った。

「お願い。連れて行かないで」

キセキは一度足を止めて、一瞬だけ慈しみに溢れた顔をした。

「わからないのか？お前を心配しているんだ」

そう言って、彼はナルカミを引いて部屋を出て行った。

クロは暫くの間、そこに立ったまま動けなかった。

今無理矢理手を引かれて行ったのが、ナルカミではなく自分だったならば、どんなに幸福だろう。

そんなことに思いを馳せて、少しだけ泣いた。

第七章：路地裏の骨董屋

再びエレベーターに乗り、下降しているとき、キセキがナルカミに話し掛けてきた。

「お前は、望んで此処に来たのか？」

ナルカミは返答に困った。そうとも言えるし、そうではないとも言える。

ナルカミがどう言おうか迷っていると、キセキは質問し直した。

「ウィンドネル城に帰りたくないか？」

ナルカミはすぐに首を横に振った。

キセキはそれを見て、何か考えているふうだったが、やがて口を開く。

「一先ず、お前をマコトの店に預けようと思う」

キセキからは、もう先程のような恐怖は感じられなかった。

ナルカミは何となく、物事が自分にとって都合の良いほうに動いている気がした。

自由になれるのも、もう時間の問題なのだと思った。

でも、それでいいのだろうか。

いつになく、複雑な気分だ。

もう、クロと会うことはないのかな。あの子はそうやって、いつまでも悲しみ続けるのかな。

そう思うと、ナルカミの心は、悲しみが雨のように降って、じん

わり染み込むように、青色になるのだ。

暗く狭い路地を、二人は行く。

日中一度通った道だ。その時も、何だか薄暗くて怖いなあとは思っていたけれど、今は明かりがなかったなら、完全なる黒の世界を歩いていることになっただろう。

辺りを照らすのは、キセキの右手だ。そこから淡い光が発されて、道筋を示してくれる。

そういえば、光族の長さんなんだっけ。

キセキは道を暗記しているわけではないらしく、さっきからひっきりなしにメモを確認していた。

やがて少しだけ開けた場所に出た。

キセキが手を前方にかざす。

『アンティークボックス』と書かれた看板が、そこに立っていた。

「良かった。間違えないで行けたのは初めてなんだ」

キセキが安堵したように薄く微笑んだので、ナルカミはびっくりした。

そうして結局何も答えられなかった。

まさか普通にこんな顔をする人間だとは思っていなかったのだ。

キセキが緑色のドアを押した。しかし、当たり前だが動かない。彼は舌打ちして、ドアを激しく叩いた。

何度か叩いた後、突然、涼やかな鐘の音と共に、ドアが開いた。

「ひっ……」

現れた人物に、ナルカミは反射的に悲鳴を上げた。

キセキの背中にそっと身を隠すが、彼に頭をはたかれてしまった。

「失礼だろ」

ナルカミは恥ずかしく思いながらも、前に出ようとはしない。

出てきたのは女性だ。それもよく見れば、結構な美人の。

しかし彼女の持つ燭台の灯りが照らし出すのは、今にも崩れてしまいそうな雨雲のように、暗く沈んだ蒼白い顔。まるで物語に出てきた「幽霊」のようだ、ナルカミは思った。

胸の上あたりまで伸びた黒髪と、開ききつていないエメラルドグリーン色の眼を持っていた。

寝巻き用の黒いワンピースを着ているところからすると、この時間なら当たり前だが、寝ていたのだろう。

しかしよくよく思い出してみれば、ナルカミはこの女性に会ったことがある。しかも、今日。

そういえば、一回目にこの店に来たとき、この女性は藍色と白のエプロンドレスを着て、奥のカウンターに座っていたのだ。

「……会長様……?」

彼女はその半分閉じられた目を、少しだけ開いた。

キセキはにっこりと、事務的な笑顔を浮かべる。

「こんばんわ、ウツさん。夜分遅くに失礼いたします」

ウツと呼ばれた彼女は、キセキと後ろのナルカミを交互に見て、首を傾げた。

「マコトを呼んでいただけますか？」

キセキがそう頼むと、ウツは無言で去って行った。

「中で待とう」

キセキは後ろのナルカミに呼び掛け、店の中に入って行った。ナルカミもそれに続く。後からキセキに「閉めて」と言われたので、ドアを閉めたら、上についたベルが場違いに大きな音を立てて、驚いた。

店内の天井には灯りが取り付けられていないようで、カウンターに設置された唯一のスタンド式ランプを、キセキが勝手につけていた。

オレンジ色の光が薄明るく店内を照らす。古めかしく暖かみのあるアンティーク達が、ひっそりとそこで眠っていた。

やがて階段を褐色の肌の小柄な男が降りてきた。

ぼさぼさの黒髪に、半袖短パンという軽装。赤い目はやはり眠そっだ。

マコトはキセキに目を留め、それからナルカミに気付く。驚き半分、予想半分、というような、微妙な顔をしていた。

「いんばんは」

マコトは「どーも」と不機嫌そうに挨拶した。

「何ですか？こんな時間に」

「すまん。しかしこれは、お前のしでかしたことの後始末をしてもらおうと思つてのことです」

そう言われて、マコトはばつの悪そうな顔をした。

「何のことでしょう」

「とぼけるな。ナルカミ誘拐に、お前も関与していたらう」

マコトは、直ぐに観念したように息を吐いた。

「何故わかつたんです？」

キセキは疲れたように、或いは自嘲的に笑った。

「クロが何か欲しかったとき、大抵お前が関わってたじゃないか」

マコトは、

「そうでしたっけ」

ととぼけた。

「それで俺に、どうやって後始末をしろと？」

言いながら、マコトはちらりとナルカミを見やった。
ナルカミはおずおずと会釈する。

「暫くの間、といつても、いつまでかはわからないが、ナルカミを預かってくれ」

マコトは目が覚めたように、大きくその瞼を開いた。

「は？カザミさんに返さないんですか？」

「まあ……通常ならそうするところなんだがな」

キセキは顔を陰しくした。

「どうも、誘拐されるのがカザミの意志であり、彼女もウィンドネル城には帰りたくないらしい」

その言葉に、マコトは複雑そうな顔をする。

「はあ。ナルカミのほうはまあわかりますけど……何でカザミさんまで？」

「奴はナルカミが此処に来ることを知っていたらしい」

マコトが眉を潜める。

「それってつまり、誘拐前にですか？」

キセキは頷いた。

「合同会議のときに本人が言っていたことだから、そうなんだろうな」

「何で言っていました？」

「『近々うちの者が世話になる』とか。妙に楽しそうな顔で」

マコトは面白くなさそうな顔をした。

「何か俺が掌の上で踊らされてたみたいで、嫌ですね」

「一応聞いておくが、カザミとお前がグルだった、とかいうオチはないだろうな」

「誓ってないですね」

マコトはやけに嫌そうな顔をして言った。

そして仕方なさそうに、「わかりました」と承諾する。

「ナルカミはうちで預かりましょう」

キセキもそれに笑顔になった。

ナルカミは、自分が何か聞かれるものと身構えていたが、それがないのにいささか拍子抜けしていた。

第八章：落し物は戻らない

よく、よく覚えているよ。

場所も、時刻も、其処に居合わせた人達の顔も。

空の色も、地面の色も、あたしの心の色も。

風が、風が吹いたね。

あたしの髪と、あの人の持った何枚もの紙が、空に、高く、高く舞い上がった。

あの人は咄嗟にそれを取ろうとして、灰色の広い車道に出たんだ。危ない、って、思った。

向こうから鉄の塊が、猛スピードで来たの。

でも、あの人は頭が良くて、光になって避けることができた。

あれ？いない、って。馬鹿なあたしは思ったよ。

あの人がいない。

あ、いた。ちゃんと、歩道のほうにいた。

あたしは嬉しくなった。

良かった。良かったあ。あの人が無事で本当に良かった。

でも、笑顔になったあたしに、あの人は怒り狂ったような顔をした。

びっくりしたよ。

本当に怖い顔。口も目も、これでもかっくらいに、くわって開いて。

何か、叫んだ。

そこに居合わせた大勢の人達も、みんなあたしのほうを怖い顔で見、何か、叫んだ。

あんまりに怖くて、何を言っているのかわかんなかった。

ただそのとき、衝撃があつて。
その瞬間、妙にみんな静かになつたのを覚えてるよ。
みんな、怖い顔のまま固まつた。

あたしはそのとき初めて、お空を飛んだよ。
空中でも、ずーっとあの人の顔を見つめてた。

あの人の顔は、見る見る内に、悲しそうで苦しそうな顔に変わつてつた。

気付いたら、あたしはお空を飛んでなかった。どうやら、落ちちゃつたみたいなの。

背中が冷たかつた。

ああ、あたしアスファルトの上に寝てるのね、って、わかつた。
あの人の顔が近かつた。側にいて、あたしの右手を握つてた。相変わらず、悲しそうで苦しそうな顔だつたよ。

そんな顔しないで、笑つて。あたし君を守りたかつたの。君程頭が良くないから、闇になつて避けるとか、そういうことはできなかつたけど。あたし君を守りたかつたの。だから本望だよ。お願いだから、そんな顔しないで。

そう言いたかつたのだけれど、上手く声が出ないや。

あの人は「もう喋るな」って、呻いた。

あたしは、じゃあせめて笑おうと思つた。

あたしが笑えば、大抵のときはあの人も笑つてくれるから。でも、あの人は笑ってくれなかつた。

その顔は、余計に苦しげになるだけだつたよ。

ふと、あたしは気付いたの。あれ、視界が、いつもより狭いや。

はつとなつて、あたしはあの人の握っていないほうの手、左手を動かそうとした。

あれ？あれ？動かない。あれ？

仕方ないから、あの人の握っているほうの手を、少し名残惜しかつたけど、動かした。それほどまでに、あたしは焦っていたんだ。あの人の手はそつと離れ、あたしは左目に触つてみた。

あ、ぐしゃくしゃ……だ……。

ショックだった。あの人の誉めてくれた、あたしの黒い目。片方、失くしてしまった。

どうしよう。どうしようどうしよう。

だからあの人も悲しい顔をしているんだ。

ああ、悲しい。

あたしの唯一の誇りが無くなってしまった。

悲しい。悲しい。

そう。あたしは気付けなかったの。その時まで。自分のことばかり考えてるから、気付けなかったの。

あれ、あたしの中の、『君』は、何処に行ってしまったんだろ、う。。。

第九章：暗がりのアンティークドール

ウィンドネル城に居た頃使っていたものよりかは、随分硬いベッドで、ナルカミは目を開けた。

辺りは薄暗い。となると、自分は眠ってからすぐに目が覚めたのだろうか。確か床に着いたのは、空の色が、黒から群青に変わった頃だった。

ナルカミはゆっくりと身を起こした。

以前使っていた部屋より、二回り程小さい部屋だ。あまり使われていなかったのか、少しだけ埃っぽい。

あるのは、ベッドと、空っぽの箆筒と、小さな丸机だけだ。少しだけカザミの味気ない寝室を思い出した。

ナルカミは廊下に出た。驚く程に静かだったため、ナルカミも無意識に音を立てないように歩いていた。冷たい空気が眠気を覚ます。

そろそろと階段を降り、角からそつと、一階の様子を覗き見てみた。店内はやはり薄暗く、すぐ側のカウンターにはウツの背中が見える。彼女は、本の頁を捲るとき以外は全く動かない。

邪魔をしてしまうのが嫌で、ナルカミは声を掛けられず立ち尽くした。

すると突然、ウツが立ち上がった。そのときはナルカミに気付いていたわけではなかったようだが、ふとした瞬間に二人は目が合う。

「…………おはようございます…………」

ウツは特に動じることもなく、照明を付けながら言った。
ナルカミもおどおどと頭を下げる。

「お、おはようございます」

「お腹が空いているでしょう。何か作るわ」

ウツはゆっくりとした動作で、ナルカミの横を通り過ぎ、階段を上がって行った。

ナルカミも慌ててその後を追う。

「あ、ありがとうございます。お世話になります」

ウツは、階段を登って一番近くの部屋に入る。

ナルカミも少し迷って後に続いた。

そこはキッチンとダイニングの部屋だった。手前に四人掛けの四角いテーブルがあり、奥に流しやコンロ等がある。側面には食器棚が置かれていた。どれも洒落てはいるが、年季の入ったものばかりである。これらもアンティークだったりするのだろうか。

ウツは手際良くトースターにパンを入れ、薬缶をコンロにかけ、冷蔵庫から卵や野菜を取り出す。

ナルカミは迷いながらも、テーブルに遠慮がちに腰かけた。

「う、ウツさんはいつもこんなに早く起きているのですか？」

ウツはこちらを振り向くと、うっとりとした目をしばたかせた。

「起きるのは十一時よ。昼衆の人間にとっては、むしろゆっくりめ

だと思っわ」

「え………?」

きよとんとするナルカミ。

「今が何時だかわかっている?」

「時計を見たわけではないのですが………まだ薄暗いし、早朝かと…

…」

「いいえ。今は十二時よ。ここは日中でも陽が当たることがないの

「!?!」

ああ、そういえばそういうところに建っていたな、とナルカミは思い当たる。

昼衆の時間軸にしてみれば、そこまでの大寝坊ではない、というのが救いだっただ。それでも寝坊に変わりはないが。

ナルカミは小さくなって謝った。

「ごめんなさい、ご飯の二度手間をかせせてしまっって」

「気にしないで。あんな時間にあなたを連れ出した会長様のせいよ」

ウツの顔は相変わらず沈んでいて、何を言うにも悲しそうな声だったが、その言動は存外さっぱりしたものだった。

ナルカミもウツのそんな態度に、少しほっとする。

「えと、マコトさんは………?」

「出掛けたわ」

野菜を切りながら答えるウツ。

「お仕事が入って。あの方の本業は万屋なの」

「よろず……や？」

聞いたことのない単語に、ナルカミは首を傾げた。

「いわゆる何でも屋のことよ。報酬と引き換えに何でもするの」

ナルカミは感心する。

確かにあの人なら何でもできそうだ。

「じゃあ、このお店は……？」

「こっちは彼の副業。趣味よ。そしてわたしはその唯一の店員」

そう言ったとき、ウツの顔はほんの少しだけ誇らしげに見えた。

「え、じゃあ下のお店を空けておいていいのですか？」

「扉にベルがついてるから、お客様が来たらすぐにわかるわ。そもそもお客は少ないんだし」

ナルカミはとても申し訳ない気分になった。

「ただの店員さんなのに……こんなことやらせてしまつてすみませ
ん」

「いいのよ。わたしもここで住み込みで働いてるし、家族みたいな
ものだから。あなたをもてなす義務があるわ」

それでもナルカミは情けなくて、もう一度「すみません」と謝つ
た。

ウツの出してくれた朝食を食べ終ると
局全部は食べきれなかったのだが
下に降りた。
、ナルカミは再び階

近くでやはり読書にふけていたウツに、声を掛ける。

「ウツさん」

ウツはゆっくりと振り向いた。

「あの、食べ終わりました。でも全部食べきれなくて、食器もどうすればいいかわからなくて……」

ウツは「わかったわ」と言うと、階段を上がって行った。片付けに行ったのだろう。

ナルカミは何の役にも立てない自分が、ただただ嫌だった。少しだけオト八のことが恋しくなった。当たり前のようにお世話してくれてたけれど、当たり前なんかじゃなかったんだ。そんなまさに当たり前なのに今更気付く。今度会ったら、謝って、お礼を言おうと思った。

ふと、机に置いてあるウツの読みかけの本が気になった。表紙には『カタストロフィー』とある。

それは、クロと一緒に読んだ御伽話の本と同じだった。ウツがこんな子ども向けの本を読んでいるなんて、意外だった。それを言えばクロだって何歳かはわからないし、思えば彼女がこの本を読んでとせがんだのも不思議なことだったが。

そういえば、あの後スズとフィズはどうなったんだろう。ナルカミはウツの座っていた椅子に腰掛け、そっと本の頁を捲り

出した。

「どいてくださる？」

背後からいきなりそう言われ、ナルカミは慌てて本を閉じ、椅子を立った。

気配が全くわからなかった。

「い、ごめんなさい！」

「ありがとう。悪いけど、このポジションだけは譲れないのよ」

ナルカミはぺこぺここと頭を下げた。

「この本に興味があるの？」

ウツが赤紫色の表紙を撫でる。

「あ、はい。クロと、この前一緒に読んで……」

ウツはうつとりと目を細めた。

「そう、クロが……」

「あの、お知り合いなんですか？」

ウツの沈んだ顔に、懐かしげな色が僅かに混ざる。

「ええ。最近はお会いしていないけど」

そうしてどこか遠くを見るように、ナルカミから目を逸らした。
ナルカミは思い切って聞いてみた。

「あの、クロは、なぜあんなに悲しそうなのですか？その、ウツさんがいつも悲しそうなのと関係あるのですか？」

ウツは視線をナルカミに戻す。

「どうしてそう思うの？」

ナルカミは少し躊躇ってから、言葉を発した。

「ナルカミの会う昼衆の人達は、みんな悲しそうに見えて……」

ウツは「そう」と言って目を伏せた。

「あなたが言っているみんなが悲しむ理由は、それぞれ関連があるのかもしれないわね。でも、わたしが悲しそうに見えるのは別の理由よ。それを話してもあんまり面白いことにはならないから、クロの話をしてあげる」

ナルカミは目をぱちくりさせて、次の言葉を待つ。

「クロが結婚していることは、知ってた？」

ナルカミは驚いて、すぐに首を横に振った。

「もう五年くらい経つのかしら。お相手は誰だかわかる？」

ナルカミは恐る恐るその名を口にした。

「キセキ、さん？」

「そう」

ウツは大きくゆっくり頷く。

ああ、やっぱりそうだったんだ。

キセキが部屋に入ってきたとき、クロはどうしようもなく苦しそ
うだった。キセキもどうしようもなく苦しそうだった。

今のナルカミは恋愛に関する知識など皆無といっても良かったが、
心の中の記憶の箱は一本の糸を出してきて、クロとキセキをいつの
間にか繋いでいた。

「クロは昔、悪徳商法に随分と手を染めていたのよ。今もちよつと
歪みがちだけど、以前はそんなの比べ物にならないくらいに捻れて
いたわ」

「あくどくしようほう？」

「お客様を騙して、大金を巻き上げてたの。その事実だけは周知だ
つただけけれど、彼女も相当頭が切れてね。なかなか尻尾を出さな
いから、止めることも罰することもできなかったのよ」

「あ、フクロウカンパニー……」

ふと思い出して、口に出してみた。確かクロが社長を務める会社
だ。

「そう。その他にも、昔は色々な企業に手を出したし、ちよこちよ
こした、彼女が実際に動くようなこともよくあったわ。むしろそっ
ちのほうが多かった。思いついた悪いことは、片っ端からやるって
かんじだったわ」

意外だけれど、何となく想像はできた。元来クロは、そういう小悪魔的要素を持っている気がする。

「でも会長様と仲良くなりだしてから、クロは段々変わっていったわ。少なくとも、犯罪には手を染めなくなった。当時クロと会長様は、犬猿の仲として有名だったから、いつの間にか仲良くなったときにはびっくりしたわ」

「それで、結婚？」

ナルカミは少しだけわくわくして聞いた。

ナルカミとて、世の一般の少女達と同様、こういうことにも興味はあるのだ。

「ええ。あの頃は昼衆全体としても、本当に安定していたわ。キセキ会長様の全盛期と言ってもいいくらい」

「でも、二人には悲しいことが起こったのですね」

ナルカミはクロの涙と、キセキの切なそうな顔を思い浮かべる。あの二人が幸せそうに肩を並べているところなど、ナルカミには考えられなかった。

「そう。クロが、交通事故に遭ったの」

「こうつう……?」

またしてもわからない単語が出てきた。

「『車』はわかる？」

「あ、はい。真ん中の道路を走っている乗り物ですよね」

「あれに突き飛ばされたの。クロは」

「……!」

車というものに詳しくはないが、あれが相当重いものだというこ
とはわかる。あんなものにぶつかられたら、ただでは済まないだろ
う。

「しかも、『トラック』っていう、車の中でも一段と大きいものに
撥ねられたのよ」

「クロの左目とか左腕とかは……」

「そう。全てあのとときに失ったのよ」

「そうだったのですか……」

ナルカミはクロに、左右で色違いの目が綺麗だとか言ってしまった
ことを思い出して、後悔した。あるとき、ナルカミは知らず知ら
ずの内に、クロの心の傷に触れてしまっていたのかもしれない。

「ただ単に交通事故に遭っただけなら、まだ良かったのだけれど、
状況はもっと複雑だね。本当は、あるときひかれるとしたら、クロ
ではなく会長様だったはずなのよ」

「え？」

どういうことだろう。

「つまり、クロが会長様をかばったの」

「！」

「でも、それは本当は必要のないことだった。会長様は光に変化す
ることができるの。だから、クロが会長様を守ろうと車道に飛び出
したとき、会長様は既に歩道にいたのよ。なのにクロはそれに気付
かず、意味もなく犠牲になった」

ナルカミはただ口を小さく開けたまま、ウツの言葉に聞き入って

いた。

「悲劇は、まだ、終わらないのよ」

「まだ……？」

ウツは頷く。

「クロのお腹には、子どもがいたの」

沈黙するナルカミ。

何も、言えなかった。

「ここまで来たら、どうなったか、わかるでしょう？」

何も言えない。

「これが、クロと会長様、ことによると屋敷全体を取り巻く、悲しみの正体よ」

ナルカミも、悲しくなった。

「お互いがお互いに負い目を感じているから、どうしても踏み込むことができないのよ。クロにしてみれば、無意味に車に突っ込んで、お腹の子どもを殺したことになる。でも会長様にとっては、自分のために、クロの体と子どもの命を犠牲にしたことになる」

すれ違つ、二人の心。何て皮肉な話なんだろう。そのすれ違いは、利己的な考えから生まれたんじゃない。むしろ、二人とも優しすぎたために生まれたすれ違いなんだ。

「それから、クロは塞ぎ込んで、滅多なことがない限り、ヴァルセイルの96階から出なくなっちゃったわ。そして自分から拒むようにして、会長様を遠ざけた。会長様に見てみれば、全て自分のせいだから、嫌われても仕方がないと思ってる。そうして彼も、クロが拒むままに、離れていったのよ」

優しさは、ときに残酷なのね。

ナルカミは思った。

「でも、本当は二人ともまだ、好き合ってるのですよね？」

「さあ」

薄暗闇の中で、ウツが少しだけ笑った気がした。

「それを知って、どうするの？」

「！」

確かにそうだ。

関係ないのに首を突っ込みたがるなんて、どうしようもなく嫌らしい人間だ。

「い、ごめんなさい」

恥ずかしくなって頭を下げると、しかしウツは静かに「違つのよ」と言った。

「どつしてあなたが此処に来ることになったのかしらって思って

よく意味はわからなかったが、とりあえずナルカミは首を横に振る。

「そのことは、ナルカミにもわかりません」
「あなたは望んで来たそうだけど……」

昨夜の話をウツも聞いていたのだろうか。

「望んで来たのではないです。望んで、お城を出て来たのです」

「そういうこと」とウツも納得する。

「じゃああなたは何故城を出たかったの？」

ナルカミはうつ向いた。

「自由に、なりたくて」

それがいつの間にかこんなことになっていた。マコトを恨むとまではないが、やはりこちらとしては複雑な心境だ。

「ふうん。クロとあなたが、昔からの知り合いってことはないわよね」

「わからない。ナルカミは、閉じ込められていたとき以前の記憶がないのです。でも、クロの態度からすると、多分会うのはこれが初めてです」

ナルカミは不安そうに言った。

「そう……」

ウツは考え込むようにして、黙り込んだ。

ナルカミも同じように黙り込んだ。

薄灯りでは、ナルカミの白金髪もぼんやりとしか輝かず、まるで彼女もウツもアンティークのようだった。

第十章：限定された優しさ、矛盾した理由

窓の外では、丁度太陽が、ビルの向こうに落ちていく。

色に溢れた部屋で、クロはベッドの上に寝転がっていた。

何をするでもなく、ただとりとめのない考えが、浮かんでは消え、浮かんでは消えていく。

室内には賑やかな女性ポップミュージックが流れている。

しかしそれはクロの心の底まで響いてこなかった。

どんなにあたしの見る世界がカラフルだろうと、どんなにあたしの聞く世界が賑やかだろうと。あたしの居る世界はいつだって、真っ暗で、驚く程静かだ。だからこそ大きく聞こえるのは、自分の体が軋む音と、鼓動がひとつ。

そう。ひとつ。

もがき苦しんでがむしゃらに何かを探すようにして、必死に耳を澄ました。でも、聞こえないのだ。本物であるはずの右耳も、高性能の左耳も、もうひとつの鼓動を捉えてはくれない。

あたしの中にいる君の暖かさを、もうあたしは感じない。

何処に、何処に行ってしまったんだろう。

約束したのに。絶対君に、素晴らしい世界を見せてあげるんだって、約束したのに。

君が、いない。

ああ、あの人に会いたいなあと、ただ漠然と思った。

側において、慰めてほしい。抱き締めて、愛してほしい。それからちよっと叱ってほしい。そうしてあの人隣の隣で、永遠にまどろんでいた。

だから、だからこそ、あの人には永遠に会いたくなかった。
あの人から色々なものを奪って、勝手に捨ててきた癖に、まだこ
んなふうに、求め続ける自分がいる。

あの人と一緒にいれば、あたしは重荷を半分、あの人に容易く渡
してしまっただろう。そうでなくとも、あの方は優しいから、気付か
ないようにあたしから重荷を取り除いてくれることだろう。

それでは駄目なのだ。

あたしはこの罪を、一人で背負わなければいけないのだ。君を想
って黒く染まるのは、あたし一人がいい。

それがあたしの役割で、責任で、義務。

ママ、だからあたしに、この名前をくれたのね。

『クロ』。

『黒』。

だからあたしは、閻族の長なのね。あたしは、閻を背負って生き
ていくのね。そういう運命なのね。

室内に、扉を二回叩く音が響いた。

クロは返事をしない。

五秒程経ってから、扉は勝手に開いた。

「出てって」

現れた男に、クロは直ぐ様言い放った。
キセキは何も答えない。扉を閉めると、クロのいるベッドに近付いてきた。

クロは落ち着いた動作で身を起こす。
キセキが、その隣に腰を下ろした。
クロは何も言わずにうつ向いた。

「クロ。お前は何故ナルカミが欲しかったんだ？」

クロは答えなかった。答えたくないのではなく、答えられなかった。その問の答えは、クロ自身もわからない。

「なあ、クロ。終わりにしよう？」

そのときクロは、顔を上げた。強張った顔で、キセキを凝視する。眩しいと思った。

「終わりにしようって、何を？」
「お互い、傷付くのを」

彼の銀色の目は、このオレンジ色の世界の中では僅かに黄みがかっていて、まるでナルカミの髪の色みたいだと思った。

優しい人。

あたしの隣にいるのは、きっと世界で一番あたしに優しい人だ。

ほら、あたしの欲しいものが、すぐ側にあるよ。手を伸ばす必要もないくらい、近くに。

今求めるならば、きつと求めただけ得られるんだろっなあ。違う。

求めた以上に、だ。

欲しい。だから、要らないよ。

「キセキなんて嫌いよ」

ぼつりと、彼のほうは見ずに、囁くように小さな声で言った。

「すまない。俺のせいで、お前の綺麗な黒い目が、片方、潰れたな」
「嫌い」

「左耳も、左腕も、左足も、全部機械仕掛けになってしまったな」
「出てって」

「子どもの命まで、俺の犠牲になってしまった」
「黙って」

「俺のせいだ。すまない。本当に申し訳なく思ってる」
「やめて」

「クロ」

クロはきつとキセキを睨んだ。

もう何も言っただけでほしくなかった。キセキが何か言う度に、自分の罪が増えていくような気がした。

しかしキセキと目が合った瞬間、クロの唇に彼のそれが重なった。咄嗟のことだったので反応できず、クロはそのまま硬直してしま
う。

やがてキセキの唇が離れると、クロはそっと抱き締められた。

暖かい。

キセキが耳元でそっと囁いた。

「クロ。愛している」

ずつと、この暖かな場所に顔を埋めていたいと、思った。
そしてクロは、完全に力を抜いて、キセキにそつと身を委ねる。

一秒、二秒、三秒。

数えてから、彼女はキセキには聞かれないように、小さく小さく息を吐く。

そして声には出さず、サヨナラ、と口の動きだけで呟いた。

突然、彼女は強くキセキの体を押し退けた。

そしてありつたけの力と悲しさと愛しさを込めて、叫ぶ。

「出てって！キセキなんて、大っ嫌い！！」

そのときキセキがどんな顔をしたのかはわからない。

苦しくて、彼の表情を確認する程の勇氣は出なかった。

キセキは何も言わずに、立ち上がった。

「ああ」

一言残すと、クロの横を通り過ぎて行く。

その声には落ち着きがあつて、冷ややかといつても良かった。

そして、振り返らずに部屋を出て行った。

そう。それでいい。

さようなら。あたしの大好きな人。大嫌いと言える程、大好きな人。

「もう、君があたしのことで悲しみませんように。もう、あたしが

君のことを求めませんように」

クロはそつと呟くと、窓を大きく開け、オレンジ色の世界に身を投げ出した。

そして闇に溶けて、霧散した。

第十一章：口の堅い情報提供者

陽は沈んだとはいえ、十八時のサンライズエリアはまだ薄明るい。しかしそれは、上空から見渡したときにそう見えるだけだ。

実際にその大都市の中に身を置いてみると、空は明るけれど周囲は随分と暗いことに気付くだろう。

摩天楼に囲まれたこの街では、本来はまだ明るいはずのこの時間帯でも、夜のようなものだ。

勿論人通りはまだ多い。車道も相変わらず混雑している。昼衆の領時は二十時までなので、それを過ぎたら帰宅ラッシュで、道はさらに込み合うだろう。

クロは途中何度も人にぶつかりながら、サンライズエリアの西中心通りを走っていた。

サンライズエリアは、西中心通りと東中心通りの二つの大通りを基盤として作られている。

西中心通り周辺は一般向けで、主に店舗が立ち並ぶ。対する東中心通りは職員向けで、オフィスビルが多い。

ちなみにヴァルセイルも東中心通りにあり、何故かアンティークボックスマ東の奥地にある。この骨董品店に客が来ないのは、そのせいでもあるだろう。

クロは走りながら、ひとつのビルに目を止めた。ビルの中でもかなり大きいほうだ。入口の上には、大きく「ドペスター・クイック」とあった。

クロは迷うことなくその中に駆け込んだ。

「シズカは！？」

入るなり、彼女はそう叫んだ。

店内は外と同じように混雑していて、クロは早速注目の的となった。

「クロ様？」

誰かが言った。

それを聞いた皆は一様に顔を好奇の色に変える。まるで伝染するように、誰も彼も、

「クロ様」

「クロ様だわ」

と呟いた。

しかしクロはそんなことはお構いなしに、もう一度叫ぶ。

「シズカは何処なの！？」

カウンターにいた一人の従業員が、前に出てきた。

ストライプの入ったスーツを、きっちりと着こなした男だった。

「いらっしやいませ、クロ様。クイック本店兼本社へようこそ。ス
タッフNo.408シズカを御指名ですか？」

男は柔和な微笑みを浮かべながら、そつのない物腰で近付いてく

る。

「そつよ。早くして頂戴」

クロは塵程も怯まずに答える。

「御案内します」

そして男は早足で歩き出した。

クロはこの男の正体を知っている。この店

世界最大

級の情報取扱会社『ドペスター・クイック』

の社長・

ウイルだ。

社長という重役にも関わらず、一階で接客を務めている変人である。

この店には、道を聞きに来たり、美味しい飲食店情報など、軽い情報を求めて来る客も多い。そういった客には、一階のインフォメーションデスクで直に対応し、人目を憚る情報の場合には上の階の個室で、それぞれのスタッフが対応する、といった様式になっている。勿論そちらのほうが値は張る。今回のクロのように、指名も可能だ。

ウイルはエレベーターにクロを乗せると、4のボタンを押した。

ちん、と音が鳴って、扉が開く。

エレベーターを出ると、目の前にはもうすぐに部屋がある。

ウイルは少し奥に入った408号室前で止まった。

カードキーを通してドアを開ける。

促されるままクロが入ると、「ごゆっくりどうぞ」という言葉と共に、ドアが閉められた。

部屋には机がひとつと椅子が二つ。
その内のひとつに、赤毛の女が座っていた。
前髪を揃えて切ったショートカットで、店のスタッフとは思えないようなドレッシーかつポップな恰好をしている。
机の上にはノートパソコンがひとつ置かれており、女は今までそれで作業をしていたようだった。

彼女はクロを見ると立ち上がり、丁寧にお辞儀した。

「いらつしゃいませ」

「シズカ！ナルカミは何処！？」

クロは挨拶もせずいきなり叫んだ。

しかしシズカと呼ばれた女はやけにマイペース、というかマニユアル的で、動じた様子もない。

手を反対側の椅子に差し延べて、

「どうぞお座りください」

と、しっとりした声でそう言った。

しかしクロもクロで、

「いいからナルカミは今何処！？もうお城に帰っちゃった！？」

と、座ろうとすることもない。

シズカは機械的な動作で、自分だけ腰掛けた。

「ナルカミ、とは雷族の長・ナルカミ氏でよろしいでしょうか」
「うん！」

「『お城』とはウィンドネル城のことでしょうか？」
「うん！」

少し苛立ったように声を荒げるクロ。
より正確な情報を提供するためとはいえ、急いでいるときにはやはりまどろっこしい。

シズカは滑らかな指の動きで、キーボードを叩き始めた。一分もしない内に顔を上げる。

「三時二十八分の情報によりますと、ナルカミ氏はサンライズエリア東ダーヴ街5-352-18番地骨董品店アンティークボックスにいます。ウィンドネル城にはいません」

クロは怪訝そうな顔をした。

「三時？今日の？」

「そうです」

「もっと最近のないの!？」

「ありません」

そう言って口をつぐむシズカ。

しかし彼女がまだ何か言いたそうにしているのが、クロにはわかった。

「いいよ。言って。お金のことなら気にしないで」

情報屋はその名の通り、情報売り物にしている。だから例えこちらにあまり益のない情報を勝手に向こうが与えてきたとしても、それも料金に加算されてしまうのだ。

シズカは真面目で、それを避けようとするタイプだった。だからこちらが聞かない限り、補足情報も全く与えない。

勿論情報屋のスタッフ全員が、シズカのようなわけであるわけではない。人によってはお喋りで、何やかんやと話したがるスタッフもいる。

どちらが良いというわけではなく、これは状況によって使い分けべきところだ。だからこそ指名というシステムがある。

シズカはクロの言葉に頷いて、口を開いた。

「三時二十八分の情報が最新ということは、ナルカミ氏がそれ以降外に出していない、という可能性が非常に高いです」

成る程。

「わかった。有難う、シズカ。代金はフクロウカンパニーに請求し
といて！」

そう言い残すと、クロは身を翻して、部屋を出て行った。

シズカは綺麗な動作で立ち上がると、誰もいないにも関わらず、
丁寧にお辞儀した。

「またのお越しを、お待ちしております」

第十二章：色から消えた色

夜衆の領時に入ってまだ間もない時分、ココロはクロの部屋に向かっていた。

仕事を終えたばかりで疲れもあるが、やはり彼女のことが心配だ。聞けば早速キセキにばれて、ナルカミを取り上げられたらしい。勿論この場合悪いのはクロだが、「悪い」と言って放っておくことのできない何かが、ココロの中にはあった。

クロが何故ナルカミが欲しかったのかというと、それはきっかけが欲しかったからなんじゃないかと、ココロは思う。変わる、あるいは、変える、きっかけが。

きつといい加減クロも、今のこの状況に飽きてきたのだ。そのとき丁度視界に入ったのがナルカミだったのだろう。

だからクロは、理由としてナルカミを欲しがったのではないか。無意識に、あるいは意識的に。

何にせよ、良い予感はしなかった。

その理由やきっかけを奪われたとき、クロはどう動くのか、皆目見当がつかない。

ココロは不安な気持ちを胸に、クロの部屋をノックした。

「こんばんはー、ココロでーっす」

返事はない。

まあ時々あることだ。特に機嫌が悪かったり拗ねたりしていると
きには。

お気に入りを取り上げられたのだ。無理もない。

こういったときには放っておくのが一番だ。下手に慰めたり同情したりすると、ヒステリーを起こされることも少なくない。

しかし何となく心配なココロは、勝手にドアを開けることにした。

「失礼しま……」

室内を目にしたココロの顔が強張った。

いつもはカラフルなこの部屋にあるはずの黒い影が、今日は全く見当たらなかった。

「ばっかじゃないの!？」

険悪な目つきをしたアイスが、キセキに向かって叫んだ。

味気ない会議が終わった後のことだ。

二人だけになってからアイスが近付いてきて、あの後どうしたのかと聞かれたので有りの俣を話したら激怒した、という経緯である。

キセキは指で耳の穴を塞ぎながら、不服そうに反発した。

「何で俺が馬鹿になる」

そんな彼の態度に、アイスは頭を抱えて呻いた。

「あーもーそれがわかってない時点で超馬鹿!!馬鹿馬鹿!」

馬鹿な奴に馬鹿馬鹿連呼されるのは非常に面白くなかったので、睨みつけてやったら、アイスは一瞬大人しくなった。そして少し遠慮を学んだふうに、抑え気味に話す。

「いや、だからさ、何でそこでナルカミを取り上げちゃっかな」
「何でって、危ないだろ。雷だぞ」

アイスが苛立たしそうに顔をしかめた。

「はあ？ 嘔吐けよ。あんたにだってクロの実力はわかってんだろ？ まだまだ精神的にも能力的にも発展途上の雷の長を抑えられる程の力すら持ってないとも思ってるのか？」

キセキは何も言えなかった。

「そうじゃないだろ？ あんた嫉妬してるんだ。自分以外の誰かがク口を救ってしまふことが嫌なんだ」

全身がかつと暑くなった。それが怒りのためなのか、羞恥のためなのかはわからない。自分のプライド上前者であってほしいとは思
う。

そんな自分の内心を知られたくなくて、キセキは努めて静かな、押し殺した声で言った。

「何故そう思う」

アイスはむっつりとした顔をした。

「あんたがそこで否定するでもなく、さりげなく話をずらそうとしているところからそうなんだよ」

キセキは不満顔で、椅子の背もたれに寄りかかった。
まさしく凶星というやつだ。

「なあ、あたしが思うに、あんたがすべきことは、落ち着いてよく考えることだと思うぞ」

「俺は落ち着いているし、いつもクロのことを考えている」

アイスは即座に反論した。

「嘘だ。いや、考えている、ということに関してはそうなのかもしれない。でもあんた、あの事件から今日この時に至るまで、全然落ち着いてない。昼衆全体の経済面にも影響はあるんだ。自覚はあるだろ」

確かに、あの交通事故以来、昼衆は本当に緩やかにではあるが、不景気に向かっている傾向がある。

「だが、それは俺というより、クロの影響だろ。彼女自身商業に関しては相当のやり手だったからな。それが欠けたんだ」

「ほお。他人のせいにするのか。ヨダカだって代理として頑張っているぞ」

「彼女には敵わない」

アイスは呆れたように息を吐いた。

「じゃあそういうことにしといてやるけどさ。でも何にせよあんた、前より冷静さに欠けてるよ。だからクロとの関係が今に至ってんだろ?」

キセキは沈黙した。

「あんたらお互いに遠慮し過ぎなんだよ。今元気なのはどっちかっていうとあなたのほうなんだからさ、もっと積極的にクロの気持ちをはわかるうとしてあげな」

キセキは「そうか」と機嫌悪そうに言ったが、理解はしていた。

「しかし、それとナルカミを取り上げたのと、何か関係が？」

アイスは眉を吊り上げた。

「大ありさ。要は、何で今の時期、クロがそんな大層なもんを欲しがったのか、よく考えなつて話。あの子何をし出すかわかんないぞ？」

「じゃあ何でお前らはクロにナルカミを与えた」

そこで一瞬だけアイスは言葉を詰まらせた。

それを見たキセキがつまらなさそうに鼻を鳴らすと、アイスは悔しそうに次の言葉を吐く。

「あたしはまあ傍観者だから、詳しいことはわかんないけど、ココロは何かしら変えたかったみたいだね」

「変える？」

「状況が良くなるか悪くなるかはわからないが、賭けてみたかったんだよ。ナルカミに」

「理解できんな」

キセキは疲れたように目をつむった。

しかしまた直ぐに目を開けることになる。

ズボンのポケットの中から、振動が伝わってくる。
赤い携帯電話を取り出し、画面を見ると、ココロからだった。
不審に思いながら通話スイッチを押し、耳に当てる。

「もしもし？」

するとやけに焦ったココロの声が聞こえてきた。

『大変つす！クロちゃんが部屋に居ません！！』

ココロの声は相当大きく、アイスが顔をひきつらせるのがわかった。

そして二人は一言も発さず、先を争うようにして会議室を飛び出した。

第十三章：闇を追え

現在、西中心通りは帰宅ラッシュの真っ只中だった。

夜とはいえ、サンライズエリアは明るい。

店は昼衆の領時を過ぎても暫くやっているところがほとんどだ。車の量もこの時間帯一番多い。

様々な街の光が大地を照らし、ビルに反射し、太陽の都市は煌めいていた。

勿論星など見えない。

夜になったからといって、ひんやりと涼しい風が吹き抜けることもない。静かになることもない。

街の空気は相変わらずむし暑く、籠っている。

ココロは何度も人とぶつかりながら、夜の西中心通りを駆けていた。

彼はクロの元にナルカミを連れてきたことを少しだけ後悔していたし、今となつては責任も感じていた。

何より純粋な心配が、彼の足を速める。

やがてビルの中でも一際大きいそれが見えてきた。

入口の上には、「ドペスター・クイック」の文字。

ココロはそれを目指しながら、強く強く祈った。

ああクロちゃん。頼むから早まった真似だけはよしてくれ。

君がいないとみんな、寂しいんだ。

中に入ると、案の定どのカウンターにも沢山の行列ができていた。流石にこれに並んで待つという余裕はない。

誰か知っている顔がないか、行列の奥を見据えていると、一人の男が優雅な足取りでこちらに向かってきた。

ストライプ柄のスーツをきっちりと着こなした、温厚そうな男だ。

ココロはそれを見つけて、胸を撫で下ろした。

しかし直ぐ様気を引き締めて、声を上げる。

「ウイル！」

男はある一定の距離のところまで立ち止まると、深々とお辞儀した。

「いらっしゃいませ、ココロ様。クイック本店兼本社へようこそ」

ココロはそれを見て顔をしかめた。

「やめろよ気持ち悪い」

ウイルは見事な営業スマイルを浮かべてそれに応じる。

「他のお客様方に悪い印象を持たれては困りますので」

ココロは「ああそうかい」と軽く流してから、こんなことを言っている暇はないことに気付いた。

場合によってはクロの安否にも関わる情報だったため少し迷ったが、今は上の階に行く時間も惜しいと判断し、声を潜めた。

「クロの居場所を教えてほしい」

返答は直ぐに返ってきた。

「現在アンティークボックス二階にいます」

通常なら、通信も何も行わずに、いきなり提示された『現在』の情報程不確かなものはないはずだが、ウィルの場合は特別だった。

即ち、名の能力だ。

ココロは彼の能力を知る数少ない人物であったため、それをいともあっさりと感じた。

「ありがとう。金はうちの銀行に請求しといてくれ」

そして、ココロはその場で携帯電話を取り出す。

あとはキセキに任せるしかない。

第十四章：けちんぼと贅沢者

味気ない四畳半に、頁を捲る音のみが響く。

ナルカミはベッドに座って、大きな書物に目を通していた。

本は地図帳。マコトから借りたものだ。この本には単に地図だけでなく、それぞれの都市や場所の特色なども書かれていて、なかなか楽しいものだった。

ナルカミには、このまま大人しくこの店に居座る理由も、城に突き返される予定もなかった。

今まさに、自分の目の前に、広大な世界は大口を開けて待ちくたびれているというのに、どうしてそこに飛び込まずにいられるだろうか。

できるならば、明日にでも此処を発ちたい気分だ。

ナルカミは人一倍臆病者だが、その二倍程強い好奇心も持ち合わせていた。恐らく彼女にも、外界を怖がる気持ち、此処を逃げ出すことに関する罪悪感もあるのだろうが、そんなものは霞んでわからなくなってしまうくらい、彼女の外への興味は尽きなかった。

勿論此処もナルカミにとっては物珍しい『外』に変わりはない。ただ、彼女に時間の余裕などはないのだ。今日一日でこの店のアンティークや、珍しいものは見尽くした。もう此処に留まる必要はない。

じゃあ、次の行き先は？

こうなると、当然そんな疑問も出てくる。

その答えを探すための地図帳だった。

一番効率が良いのは、サンライズエリアの他の場所を見て回るこ

とだろう。

昨日少しだけ歩いたが、何もかもが目まぐるしくて、ちょっと歩いただけであの街を味わうことなど不可能なのだ、直ぐに気付いた。いや、それに関しては何処の街でも同じなのかもしれないが。

自動車に乗ってみたい。

ナルカミは昨日街を歩いた記憶を手繰り寄せ、その中から夢を膨らませる。

空を飛んでいた、鯨のような乗り物にも乗ってみたい。そういう空中の遊泳物達が皆一様に、集まって出てを繰り返す、あの大きな塔にも行ってみたい。外から見るとはあれど、入ることはできなかった。沢山のお店にも行ってみたい。そこでちょっとだけでいいから、可愛いものと美味しいものを買いたい。それにはまずお金が必要だから、何処かで働こう。

ナルカミには『労働』というものさえ珍しく、わくわくするものだった。

しかしやはり、この街にとどまるのはよくないだろう。

もしかしたらまた誰かに見つかって、また行動を制限されてしまいかもしれない。

ほとぼりが冷めるまで、この街の観光はお預けにしておこうと、ナルカミは決めた。

さてそれじゃあどうしようかと、再び地図帳に目を落としたナルカミは、けれど直ぐにまた、はっとなって顔を上げた。

一瞬視界に、味気ないこの部屋にあるはずのない、濃い色が見えた気がしたのだ。

そしてナルカミの視覚は間違っていなかった。

「くんばんは」

いつの間にか目の前に来ていた、色の中でも一番濃い色は、愛らしく笑った。

ナルカミは三白眼にでもなってしまうくらいに、大きく目を開けた。

「……クロ……？」

闇を司る女王は、嬉しそうに微笑む。

ナルカミは即座に、ドアを見、窓を見た。どちらも閉まったままだったし、窓に至っては鍵もかかっている。この店は品物どころか店自体もそれなりに年季が入っているらしく、ドアが開いたならば軋む音がするはずだから、ドアから入ってきた可能性も限りなく小さい。

一体、どうやって？

そう口に出した覚えはなかったが、顔はそう物語っていたらしく、クロはナルカミの心を読んだかのように答えた。

「忘れちゃったの？あたしの司るものは闇だよ？自分の体を闇に溶かすこともできる。お日様の下は流石に無理があるけど、人工の光の中だったら、闇を作り出すこともできる。あたしが入ってきたとき、ほんとは一瞬だけこの部屋も暗くなっただけなんだけど、君ったら幸せそうな顔でほんやりしてるもんだから、気付かなかったんだね」

ナルカミは少しだけ恥ずかしくなった。ナルカミには恋愛の記憶がないため、詳しいところはわからなかったが、言うなれば、好きな人が友人にばれてしまったときのような、そんな気分だった。

クロはぼすつとナルカミの隣に腰掛けて、ナルカミの顔を覗き込んできた。

「ねえねえ、何考えてたの？」

ナルカミはうつ、と言葉に詰まった。

クロの意図はよくわからないが、よくわからないだけに、容易く『此処から逃げて何処に行こうか考えていました』などとは言えない。

答えあぐねていると、クロのほうから質問を重ねてきた。

「カザミのこと？」

ナルカミはクロが現れたときほどではないが、目を大きく見開いた。

「え……？？」

何でまた、ここでカザミ様のことが？

きよとんとするナルカミに、逆にクロもきよとんとした。

「カザミのことじゃないの？君今、好きな人のこと考える顔だったよ？」

ああやっぱりさっきの恥ずかしさの比喻は間違っではないなかったんだな、と思っただけから、問題はそこではないことに気付いた。

「なっ、ナルカミはカザミ様のこと好きじゃなっ……」

言いかけてから、どういいうわけか言いかけるだけで終わってしまった。

「好きじゃないの？」

まさしく今ナルカミの頭の中に浮かんだ疑問を、クロが言語化する。

ナルカミはカザミ様のこと好きなんだろうか。

そのたったひとつの問いで、ナルカミの脳内は大氾濫を起こしかけていた。

確か前にも、同じ質問をマコトにしていた覚えがある。

そのときはこの問題についてじっくり考える余裕もなく、うやむやの内に忘れてしまっていたけれど。

恐いけれど、嫌いではない。

好きだとも思う。

でも、この感情が恋愛のそれと一致しているのかはわからなかった。

ただし、例えばオトハやキラを好きだと思うその『好き』と、カザミに対する『好き』が違うことはわかっていた。

じゃあ、カザミ様に恋してるの？

そう思うと、それにも疑問を投げかけないわけにはいかなかった。ひとつに、ナルカミはカザミが好きなのと同時に、恐い。

これは、ナルカミが持つ、主に小説から取り入れた恋愛知識から言えば、有り得ないことだった。

城にいた頃のナルカミは、少なくとも十冊以上の恋愛小説は読ん

だが、それらの登場人物達は、間違っても恐怖の混在する恋愛関係など作っていなかった気がする。知識の少ない自分のことだから、もしかしたら自分の汲み取れない部分にそういった要素が関係しているのかもわからないが。

二つ目に、自分とカザミの歴史はあまりにも少ない、ということだ。

城にいたのは二ヶ月程だったと思うが、その間毎日会っていたということとは勿論ない。多くて精々十回程度ではないだろうか。

その間に好きになる、というのが、ナルカミには理解し難かった。確かに小説の中では、「一目惚れ」というケースが何度かあった。しかしナルカミにとってのカザミの第一印象といえば「恐い人」だったし、あの瞬間に自分が恋心を抱いたなど信じられるはずがない。

ではこの愛ともつかない不安定な感情がいつから始まったのかというと、それは記憶の中のいつでもない気がした。

つまり、記憶がある前……？

ずきり、と頭が悲鳴をあげた瞬間、

「ねえ……そんな考え込むこと？」

幸か不幸か、クロがナルカミの苦悩を中断した。

「やっぱりあたしには君がわかんない。ねえ、カザミが好きなんじゃないの？」

ナルカミは遠慮も何もないクロの態度を見て、少しだけ羨ましく感じた。

クロだったら、記憶があるうとなかろうと、自分の気持ちに対してこんなふうに悩んだりすることもないんだろうなあ。

ナルカミは力なく首を振った。

「わからないの」

クロは一瞬眉を潜めたが、すぐに察したらしく、

「そっか。記憶喪失だもんね」

と呟いた。

「ま、セーフだったね。ここで『好きじゃない』って言いきってたら、何されるかわかんないもんね」

ナルカミはクロの言っている意味がわからなかったが、クロはそれ以上その発言には言及しなかったので、いつしかナルカミも忘れてしまった。

「ねえ、だからなの？記憶喪失だから城を出たの？大切なものの区別もつかなかったの？」

突然クロが聞いてきた。

彼女は真っ直ぐ前を見ていたものだから、最初ナルカミは独り言かと思った。

どちらにせよその問掛けの真意が見い出せなかったナルカミが黙っていると、クロは息を吐いてこぼした。

「いいなあ、記憶喪失。あたしの目から見たら、君は全部持っているような気がするよ。だって、君が欲しいものと大切なものどっちを優先しようと、大切なものはいつも君の傍にあるんだもん。ずるいよ」

ナルカミが不思議そうにしていると、クロは「気付いてないんだね」と言った。

「教えてあげる。君の周囲には、微弱な、髪の毛さえ飛ばない程に微弱な、風が流れてる」

訳がわからなかったが、話の流れと風が絡んできたことから、カザミが関係しているであろうことは何となくわかる。

「知ってる？カザミは自分の作り出した風を城のあちこちに飛ばして、監視用にしてるんだよ。どういう仕組みかはわからないけどね」

え。

ナルカミの頭の中に、嫌な予感が駆け巡る。

「な、ナルカミ、監視されてるの？」

「そうだと思うよ」

そう言われて、ナルカミはどうしようもなく恥ずかしくなった。だって、ということは、さっきカザミが好きかどうかということに関して悶々としていた自分も、丸分かり、ということではないか。

とそこで、ナルカミはクロの言わんとしていることがようやくわかった。

「大切なものって、カザミ様のこと？」

クロはちらりと視線をこちらに寄越してから、ぶっきらぼうに逆に聞き返してくる。

「そうなんじゃないの？」

ナルカミはただ困惑するしかなかった。

「ま、いいけどさあ」

クロは足をぶらぶらさせながら、拗ねた子どものような顔をする。

「記憶喪失ってさあ、ずるいよ」

ナルカミはびっくりして、クロを凝視した。

この病に関して、今まで気を遣ってくれたり、遠慮してわざと触れないようにしてきた人はいれど、このような態度を示されたのは初めてだったのだ。

ナルカミが戸惑っているのを横目に、クロは続ける。

「だって全部なかったことにできるんでしょ？何も知らない顔が正々堂々できるんでしょ？」

ナルカミの頭はまた痛み始めた。

思い出すのは、オトハとカザミの言葉。

『知らんぷりは禁止です。わからないならわかるうとしてください。それが進歩です』

『お前は知らないのだろう。俺がどれだけ長い間待ったか』

そして、追い討ちをかけるように、クロまでもが言うのだ。

「でも、結局はそのままじゃいられないよね。『知らない』っていうのはある意味罪だから。罪は贖わなきゃね」

「アガナウ……？」

「いつまでも『知らない』を言い訳にはできないんだよ。必ず、遠くないときに、君は全て知らなきゃならなくなる」

ナルカミは、無意識の内に、拒否発言をしていた。

「いや……！」

言うてから、自分で驚いた。

でも、全てを知るのは、とても怖い気がした。記憶が戻れば、確実に自分に制限が与えられるだろう。

何より、ナルカミは、今ある記憶以外の自分を、自分なのとは思えなかった。かといって他人という認識でもない。

つまり、過去の自分など、ナルカミにとってはぎりぎりでもどうでも良いものだったのだ。

しかしクロは、そんなナルカミを責めるように言葉を発する。

「君が嫌だろうと何だろうと、それは自分の意思で決められるようなものじゃないんだらうけどなあ。何せ君は族長だし、カザミのお気に入りだし」

ナルカミは黙り込んだ。

酷く情けなくて、悲しい気分だった。

正直もうクロには帰ってほしかった。

そう思ったナルカミの脳裏を、疑問がかすめる。

そういえばクロは、何をしにここに来たのだろう。

まさかこんなことを言いにはわざわざ出向いてきたとは考えにくい。まさか、またあたしを閉じ込めに……？

ナルカミは恐る恐る聞いた。

「クロは、何をしに来たの？」

そう聞いたナルカミの目が、あんまりにも悲しそうだったのだろう。クロはちよつと笑った。

「安心して。君を連れ戻しに来たんじゃないから。そんなことしても、もう意味ないから。あたしはただ、君と話に来ただけだよ」

ナルカミは一先ず安堵したが、クロの言葉には何か含みを感じて別の意味での不安がまた生まれた。例えばもし今このままクロと別れたら、クロとは永遠に会えない気がした。

そうした心配を晴らそうと、何か変えようとしたのか、ナルカミはことの本質に切り込んだ。

「クロは、キセキさんが好きなのでしょう？」

クロはこちらを向いて「うん」と頷いた。こちらが泣きたくなくなってしまうような笑顔だった。

「き、キセキさんも、クロのことが好きだと思つよ？」

またしてもクロは微笑んで、「うん」と頷いた。

そして続けて呟く。

「知ってる」

「じゃあ、何で拒んでいるの？」

クロは、ナルカミの目をじいつと覗き込んだ。

ナルカミもおどおどと、クロの漆黒と濁った白の目を見つめた。

「全部知ってる目だね」

クロが言った。

「う、ウツさんから、聞いたの」

「そっかあ」

クロはどこかふっきれたかのような声でばやいた。

それが余計にナルカミの不安を煽る。

「これはつまり、贖罪なんだよ」

「食材？」

「つつても料理の材料のことじゃないよ？」

「ふうん」と普通に相槌を打ったナルカミを見て、クロはあは、と笑った。

「ああもう。結構真面目な話なのに」

そして、泣き笑いのような顔をして、話す。

「あたしが犯したのはね、最悪の罪なの。殺人罪なの。だから一生をかけて償わなきゃ駄目なの。あたしの、一生を捧げなきゃ……」

よくわからなかったが、悪いことをしたから良いことをしなければならぬという意味だろうか。

「でも、わざとやったんじゃないのでしょうか？そしたら、事故よ」

クロは瞳に沈んだ色を宿して、首を横に振った。

「わざとだよ。明らかにあたしは確かな意思を持って、道路に飛び出したんだから」

「でも、でも、それはお腹の子を殺そうとしての行動じゃないじゃない。むしろ人の命を助けようとしてのことであって……」

「違うの！」

ナルカミの言葉を遮って、クロが強く叫んだ。

ナルカミはびっくりして口を嚙む。

「違うの！全部あたしのエゴなんだから！あの人がいなかったらあたしは生きていけないの！あたしは自分を生かすために飛び出したの！そのときあたしの思考の中に、あの子のことなんてこれっぽっちも入ってなかった！存在を忘れていたんだ！消しちゃったんだ！殺しちゃったんだ！！自分を生かすために！！」

一息に言い終わったクロは、肩を上下させて荒い呼吸をしていた。そしてやけにすっきりした顔になってから、途端絶望的な顔になった。クロは深く頭を垂れた。彼女の黒いスカートに、いくつつかのみができた。

それを見たナルカミは、はっとなってクロを呼んだ。

「クロ！クロ！」

クロが右だけ赤い目を上げた。

その瞳を、ナルカミは期待に満ちた眼差しで見つめる。

不思議そうなクロの右目から、さらに大粒の水滴がひとつ、落ちた。

するとナルカミは、「わあっ」と歓声を上げた。

「きれいーい！」

クロは二、三度目をしばたたかせた。

「は？」

場の空気を見殺したナルカミの発言と表情に、クロは苛立つことも呆れることもできない。

「クロの目から出る水、きらきらしてて、とっても綺麗」

嬉しそうに話すナルカミに、クロは珍しく翻弄される側だった。

「水って……涙のこと？」

「『ナミダ』？ナミダっていうの？」

「うん……。こんなの、誰だっけ出るよ。君は泣いたことがないの？」

ナルカミは宙を見上げて考える。

そういえば、カザミ様があんまりにも怖かったときに目からしょ

っぱい水が出たことはあるから、きつとあれのことなんだろう。

「ある。でも、他人のを見るのは初めて。クロは、こんなに、綺麗なものを出せるのね」

そう言うと、クロは大きな打撃を受けたような顔をした。

これはもしかしてヒステリーを起こす前兆かな、とも思ったが、クロは何か思い出すような、懐かしいような目でナルカミを見つめるだけだった。

「ねえ。あのさあ」

何かを恐れるように躊躇いがちな口ぶりで、彼女は呟く。

「フィズと、スズのお話は、最終的にどうなったの？」

「え……」

ナルカミは戸惑った。

突然の話題の転換にもそうだが、そもそもあのお話は、ナルカミも勿論最後まで読み通せていないのだ。

しかしクロは付け加えるように言った。

「君が全部読んでないのはわかってる。だから、君なりの最後を教えてくださいの」

物語は、太陽の国の王子様フィズと、月の国の王女様スズの話である。

ある日月の国は太陽の国に滅ぼされてしまい、月の国の王女様は、捕虜として太陽の国に連れていかれてしまう。王女様はそこで王子

様と出会い恋に落ちるが、立場上周囲の者は猛反対する。

クロに読んであげたのは、確かそこまでだ。

ナルカミは今日、その先をウツの本で少しだけ知ったが、何となくそれは使わないほうが良い気がした。

慌てて頭はぐるぐるしていて、整理も何もなかったが、思いつくことを適当に言った。

「お、王子様は、王女様と結婚できる方法をひとつだけ見つけるの」
そして言い出してから、唇は止まらなくなった。

「それは王女様を王子様のドレイにすること。そうすれば、王女様のシヨウウケンは、王子様のものになるの。でも、王女様はそれを嫌がったの。ドレイになれば、王女様は一生太陽の国のお城で暮らさなければならぬから。だから、王女様は王子様とケイヤクしたの。一年自分を自由にしてくれば、一生あなたにお仕えしますって、約束したの」

言い終わってから、ナルカミははっとした。焦っていたため、今自分が何を言っているのかさえよくわかっていなかったのだ。いわば、無意識の発言だった。

何て恥ずかしい。この言葉もカザミには筒抜けなんだろうか。
いや、そうじゃない。今問題にすべくはそこじゃない。

『奴隷』。『所有権』。『契約』。

今になってようやく、思い出したのだ。その言葉の本当の意味を。勿論今気付いてももう遅い。してやられたのだ、カザミに。

クロは興味深そうに話を聞いていたが、急に青ざめるナルカミを不審そうに見ていた。

「奴隷？ 奴隷ですって？」

ナルカミはうわ言のように呟いた。その体は微かに震えている。怒り、ではない。そのとき真っ先に感じたのも、恐怖だった。

流石に心配になってきたのだろう。

クロが気遣わしげに声をかけてきた。

「何……？ どうしたの？」

ナルカミは切羽詰まった顔でクロを見た。

「ど、どうしよう、ナルカミ、行かなきゃ、逃げなきゃ……！！……違っ……駄目！ 無理だ、逃げられない……！！ 行かなきゃ！ 一年が、過ぎちゃっ……！！」

言つなり彼女は立ち上がってドアノブに手をかけたので、クロは慌ててその手を引いた。するとナルカミの軽い体はいとも容易く引き寄せられたものだから、逆にクロがびっくりしてしまった。

「ちよっ……！！ ちよっと待ってよ！ 落ち着いて！ ああもう、こんなつもりじゃなかったのに！ あたしが振り回して勝手にバイバイするつもりだったのに、何であたしが君に振り回されてんのさあ！」

その言葉を聞いて、ナルカミの動きが止まった。

「『バイバイ』？」

何故かはわからない。

そもそもクロがただ話をするためだけに、こんなところに来るとすらおかしかったからかもしれない。

ナルカミは、その『バイバイ』というところに、嫌なっつかかりを感じた。

するとクロも言葉に詰まったので、余計に嫌な予感を引き立てる。

「どういうことなの？」

ナルカミは不安そうに聞いたが、クロがその問いに答えることはなかった。代わりに彼女は逆に質問してきた。

「今の……スズとフィズのお話は、実話？」

心配は拭い去ることはできなかったが、とりあえずナルカミは、控え目に頷いておいた。

「半分くらいは」

するとクロは、

「そっか」

と言って、妙に納得した表情を見せた。

「どっからがフィクションなのかはわかんないけど……君にも色々あるんだね。ごめんね、あたし、君に酷いこと言った」

「え……？」

ナルカミは小さく首を傾げた。

クロは不似合いにもバツの悪そうな顔をする。

「『警沢者』ってさ、言っちゃったじゃない」

ナルカミは少し考えて、ああ、と思い当たった。そんなことはすっかり忘れていたのだ。

しかしナルカミは、「ううん」と首を横に振った。

「いいの。本当のことなの。ナルカミは、とっても警沢だと思う」

「……？」

「でも」

不思議そうなクロの顔を尻目に、言葉を続ける。

「警沢が悪いだなんて、ナルカミは思っていないの。こんなに素敵な世界を神様は与えてくださったのだから、それを心行くまで楽しまない手はないと思うの。制限時間付きだから、尚更今の内に警沢しておかなきゃだめなの。クロの言う『大切なもの』が、本当にナルカミにとって大事なものはまだわからないし、思い出せないけど、一年も立てば何かわかると思うし、わからなくても一年後にはどうせ強制的に、ナルカミはあの人の下に戻るの」

そういうナルカミの顔は、嬉しそうでもあり悲しそうでもあり、複雑な色を浮かべていた。

「クロは、幸せの節約をし過ぎだと思う。もっと、自分のことを考えていいと思う」

クロは視線を落として呟いた。

「そうかなあ」

「きつとそう」

珍しく強く言い張るナルカミを見て、クロは少しだけ笑った。

「何か、変なの。あたし、会って二日しか経ってない人に慰められちゃってるよ」

そう言つと彼女はうん、と伸びをし、立ち上がった。

「ねえ、あたし君に会えて良かったよ。最後に会えたのが君で、本当に良かった」

ナルカミはしかし、十分意味ありげなこの言葉を問い詰めることはもうしなかった。

あるのは「やっぱり」という感情のみだ。

やっぱり、ナルカミには無理な話なのね。

カラストロフィーを救えるのは、結局のところ王子様だけなのだ。

だからナルカミは何も言わなかった。

ただクロが闇に溶けるのを、じいつと睨んでいるだけだった。

第十五章：カタストロフィー

昔々のお話です。

この世界は様々な国に別れていましたが、その中でもずば抜けて大きな国が二つありました。

ひとつは太陽の国。もうひとつは月の国です。

二つの国はもう長い間、随分と仲の悪い関係でした。戦争も何度も起こりました。

ある時、長年の大戦について決着がつくときがやって来ました。勝ったのは太陽の国です。

月の国の首都は廃虚と化し、たくさんの人々が捕虜にされ、連れて行かれました。その中には月の国のお姫様もいました。

さて、太陽の国には一人の王子様がいましたが、非常に頭の良いことで有名でした。名前はフィズといいました。彼は今の王様を手伝い、良い評判も得ていたので、国民からも期待されている青年でした。

でも、フィズは二十歳を過ぎたというのにまだ独り身でした。彼は自分にも他人にも厳しいことでも有名でしたから、結婚相手はなかなか見付からなかったのです。

そんなフィズはある日、地下にある倉庫で探し物をしていました。

するとどこかから、小さな鳴咽が聞こえてきます。

不思議に思ったフィズが色々調べてみると、声は下から聞こえてくることに気がきました。ここよりさらに下と叫びたら、後はもう地下牢しかありません。

フィズは行ってみることにしました。

フィズは部下達の信頼も得ていたので、看守もすんなり通してくれました。

ついでに今聞こえるこの泣き声は誰のものかと聞いてみると、看守はバツの悪そうな顔をするだけでした。

色々問い詰めたい気持ちもありましたが、フィズはとりあえず声の主を探すことにしました。

未だ聞こえる声を頼りに奥へ奥へと足を進めていくと、やがてひとつの扉にたどり着きました。

その扉は他と比べて一際頑丈そうでした。普通ついているはずの小窓もありませんでした。

フィズは看守を呼びました。

「ここにいるのはどんな罪を犯したやつだ？」

看守はバツの悪そうな顔をするだけでした。

「ここを鍵を開けてくれ」

そう言うと、看守はようやく口を開きました。

「王子様、それは無理ってもんだ。俺も王様からは色々命令されるんだ」

しかし看守は付け加えました。

「それを取り消せっていう程の王子様の命令だってんなら、考えないこともないけどな」

フィズは了承しました。

要するに、「責任はお前が取れよ」ということだったようです。

看守は鍵を開けると、もう俺は知らんとばかりに、自分の持ち場に帰って行ってしまいました。

さて、フィズが扉を開けて中に入ると、そこには一人の若い娘がおりました。

その娘は薄汚れた身なりをしていましたが、よく見るとその衣服は上質のドレスで、容姿・容貌も大層美しい女でした。

娘はフィズが入ってきたことにも気付かず、ただ切々と涙を流すだけでした。

フィズはその美しさに一瞬我を忘れそうになりましたが、気を取り直して娘に話しかけてみました。

「娘、顔を上げろ」

驚いた娘が、言われた通りに顔を上げました。

「お前は何の罪を犯したというので、ここにいるのだ」

娘は始め、とてもびっくりしていたので口も開けなかったのですが、やがて小さく言葉を吐き出しました。

「さあ、わたくしにはそれが全くわからないのです。きっとわたくしなどには到底窺い知れぬ理由があるのでございましょう。もしくはわたくしの存在そのものが罪なのでしょう」

フィズはその美しさと澄んだ声と、へりくだった物腰にひかれました。彼女のような娘は、生まれてこの方初めて目にしたのです。

「お前の名は何という？」

王子様が聞くと、娘は答えました。

「スズ・ムーンライトと申します」

その答えに、フィズは目を丸くしました。それは月の国の王女様の名前と、寸分違わなかったからです。

しかしその名を聞いてもフィズが怯むことはなく、むしろ彼はそれから毎日娘に会いに行きました。

二人の仲は段々と深まっていきました。二人はやがて、お互いを熱烈に愛し合うようになりました。

ある日、ついに二人の関係がばれてしまうときが来ました。

それでも、フィズはこれを機に、と思い、王様に、月の国の王女様と結婚させてくれるよう申し出ました。

勿論周囲の者達は猛反対です。長い伝統を誇る血筋が汚れてしまう、と思っただのです。彼等はどうか二人の結婚を中止させようと、王様に必死の懇願をしました。

王様とて二人の結婚には反対でした。

でも王様には、ただ単に二人を結婚させない以上の考えがありました。結婚を許すふりをして、別の娘と結婚させるのです。王子様の独身問題には王様も長らく頭を痛めていましたし、この機会に結婚させてしまえば王様の不安も晴れ、一石二鳥だと思ったのです。また、結婚までこぎつけてしまえば、駆け落ちなどという馬鹿な行為にも走らないだろうと踏んだのです。

だから王様は結婚を承諾しました。但し結婚式当日までは、スズを牢屋から出してはならないということでした。

フィズとスズは大喜びし、親戚達は大激怒でした。

真実を知るのは王様と、看守のみでした。

結婚式当日、スズの独房には朝早くから来訪者がありました。看守です。

彼は同情のこもった眼差しでこう言いました。

「さあ、王子様の結婚式の日が来た。約束通り、今日からあんたは自由だ。ここを出て、どこへなりと行くといい。ただ、王子様のところには行っては駄目だ」

スズは無邪気な顔で問掛けました。

「まあ、それはどうしてなのでしょう。わたくしの持つ行き先はあの方の隣だけ、わたくしの居場所はあの方の隣だけだと申しますのに」

看守は悲しそうに首を横に振りました。

「王子様の隣はもう既に埋まってしまっているんだ。今日行われるのは、あなたの結婚式じゃない。フィズ王子と、クラウドス家の令嬢の結婚式だ」

スズの水色の瞳は大きく見開かれました。
しばしの沈黙の後、彼女はただ一言、

「そうですね」

と囁くように言ったただけでした。

やがてスズの目から、大粒の涙がきらきらと溢れ落ちました。それは宝石のような輝き、いえ、宝石以上の輝きで、ラピスラズリもダイヤモンドも負けてしまうであろう程に、美しいものでした。

スズは震える声で言いました。

「嗚呼、果たして何ヶ月ぶりの涙でございましょう。実にあの方がわたくしの涙を取り去ってくださったのです。そしてまたあの方が再びあるべき場所に返してくださいだったので。当然の摂理、これは当然の摂理なのです」

涙は一向に止まる気配を見せません。

これはきつと永遠に続くものなのだと悟ったスズは、泣きながら看守にこう言いました。

「わたくしは月になります。夜の間わたくしはあの方を見守り続け

るのです。あの方が配偶者と寝ることに飽きたとき、あの方はきつとわたくしを見ながら眠りについてくださることでしょう。そうして初めて、わたくしはあの方の愛を一身に受けて、眠りにつくことができるのです。わたくしは月になります」

スズはそう言い残して、いずこかに消えていきました。その行き先は、誰も知りません。

さて、王宮では、盛大な結婚式が始まりました。

王様はフィズの結婚相手に、ベールは決して脱がないようにときつく言い渡していました。

しかし花嫁が登場したとき、例えそれが遠目で、顔も見えないような状態だったとしても、それがスズではないことはフィズの目に明らかでした。それほどまでにスズの容姿はしなやかで、美しいものだったのです。

フィズは結婚式を無理矢理中止させ、王様に詰め寄りました。全てを知った彼は愕然としました。そして急いで地下牢に向かいました。

もうこんなところにいる必要はない、彼女といずこへでも行こうと、そう思っていたのです。

しかしフィズが駆け付けたときには、もう時既に遅し。

スズは去った後でした。

フィズは必死に彼女の姿を探しました。

しかしスズ自身は愚か、彼女の目撃者さえ、誰もいないのです。

あれ程美しい人間ならば直ぐに人目につくはずだというのに、彼女のことなど誰も知らないのです。

絶望したフィズは、ある日再び、地下牢の、スズの独房に足を運びました。

勿論中には誰もいません。

三畳あるかないかの狭い部屋。薄汚れた簡易ベッドと鎖と便所のみの狭い部屋。

しかし彼女のいたこの独房は、こんな閑散とした暗い場所ではなかったのです。

そして、二人が愛を育んだのは全て、この空間の中でのことでした。

王子様は激しい後悔の念に捕われ、きつくきつく手を握り締めました。あまりに強く握ったので、爪が掌に食い込んで、真っ赤な血液が溢れ落ちました。

それはきらきらと煌めきながら、床に落ちていきました。ルビーの輝きも、サファイアの輝きも、その赤い粒の煌めきには劣る程でした。

そしてフィズは、震える声で看守に言いました。

「私は太陽になろう。彼女がどこにいようと、その行く先を照らし出す太陽になろう。私達の愛がただの一度でも陽の当たる場所で交わされたことはなかった。だから私自ら光になろう。そうすることで、彼女に絶えず愛を注ぐことにする。私は太陽になろう」

フィズはそう言い残して、いずこかに消え去りました。その行方は誰も知りません。

ただ言えることは、二つの光がすれ違いを繰り返して世界を形作っている、皮肉な事実があること。

そして、二つの天体が同じ空に浮かぶとき、どこかで看守が溜め息を吐いているということなのです。

第十六章：怒る獣、まどろむ姫（前書き）

携帯で「br」タグが表示される件について、修正終わりました。メッセージに気付くのが遅れて申し訳ありませんでした。そして教えてくださってありがとうございます。自分ではまず気付けないところでしたので、このようなご報告は本当にありがたいです。また何かありましたら皆様教えてくださると嬉しいです。そして携帯画面で小説を読んでもらっていた方々、見苦しいものを晒してしまい本当にすみませんでした。それから更新が途絶えていたにも関わらず足を運んでくださった方も、本当にありがとうございます。今日からまたぼちぼちペースで書いていきますので、お付き合いくださいれば幸いです。

第十六章：怒る獣、まどろむ姫

扉を開ければ、そこは完全に洗練された色鮮やかな「少女の部屋」だった。

「……これじゃあむしろ不完全だ」

キセキは一人ごちた。

この部屋は欠けたもの

ぽっかりと穴が空いたような、

漆黒色があつてこそその、完成された空間だった。

その色を司る少女は今はおらず、「完璧」な部屋は、キセキにとつては無性に嘘臭いものだった。

ココロからの連絡を待つ間、少しでもいいから何か手がかりとなるものはないかとこの部屋に来た。

しかし今改めてこの空間の前に立つてみると、それは随分異質なものに見えて、ある意味では聖地のようだった。自分がそこに入つて、その胡散臭い調和を乱すのは何となく憚られた。

まあいつまでもそうは言つてられないので、意を決して足を踏み出すと、気になるものは直ぐに見つかった。

ベッドの上に無造作に放り出された、一冊の書物。

濃い緑色の表紙には、「カラストロフイー」と書いてある。

キセキも知っているこの物語は、昼衆では随分と有名な伝説だ。

それを目にした瞬間、何故だかキセキには、クロの行き先がわかった気がした。

流石に月になったとは考えがたいが、似たようなことは有り得る。

それに気付いた刹那、キセキがまず抱いたのは、焦りでも不安でもなく、どうしようもない怒りだった。

しかしそれと同時に、今度はズボンのポケットが震えた。

キセキは急いでその中の携帯電話を取り出し、耳に当てる。

「もしもし」

『もしもし!?!』

声の主はココロだった。

『クロちゃんの居場所がわかった! アンティークボックスだ! 今すぐ向かってくれ!』

叫ぶようなココロの言葉に、キセキはひどく落ち着いた声で、

「わかった」

と言い、通話スイッチもさっさと切った。

そして一度静かに深呼吸すると

「あんのクソ娘……!!」

悪態を残して、猛り狂う豹の如く走り去って行った。

いい加減眠くなってきて、ナルカミはゆっくりと地図帳を閉じた。行き先は大体決まった。

明日起きて、ご飯を食べたら、ここを出ることにしよう。

朝食だけ食べて逃げるだなんて、オト八が聞いたら激怒しそうなことだけれど、今のナルカミは一文なし。空腹のまま外に出ることの危険さくらいはわかっていた。無論、朝食を食べていたとしても持ち金ゼロで外に出る、しかも旅に出ることの危険さなどはわかっていないのだが。

一階はいつもウツがいるから、正規のルートで外に出ることはやはり不可能だ。

しかしナルカミは、二階のこの部屋から外に出る、それもいとも容易な方法を知っていた。

この部屋の窓の横には、外から店へ、電気を運ぶ電線が通っていた。ナルカミは、そこを伝って移動することができる。

いつからその力が自分にあつたのかはわからない。でも、できると、やったこともないのに、いつの間にか確信していた。

ナルカミは、「雷」を「鳴」らせるし、「雷」に「成」れると。カザミがどういう意味でこの名をつけたのかはわからなかったが、自分にとってはこういう意味なのだ、感覚的にわかってきた。

だから、大丈夫と。やっていけると。

窓のすぐ向こうにあるビルは活動を停止したようで、今では明かりは非常灯くらいしかついていない。

街はようやく眠りにつこうとしているようだ。

それに倣ってナルカミも布団の中に潜り込もうとしたところで、一階からドアをノックする音が聞こえてきた。

ナルカミは動きを止めた。

やがてウツのものであろうスリッパの音が、ナルカミの部屋の前を通り過ぎていく。

ドアを叩いた人間の正体がわかっていものだから、ナルカミはそっとベッドから降りた。ウツの足音が完全に階段を降りてから、ナルカミも控え目にドアを開いて後を追った。

カウンターの影に隠れて見てみると、ウツが丁度ドアの鍵を開けたところだった。

荒々しくドアを開いて現れたのは、やはりキセキだった。

彼は何も言わずにこつちを見つめているものだから、見えていることはないと思いつつも、体が自然と固くなってしまふ。

「おい。何をいつまでも隠れている。」

「……っ！」

ばれてた!?

「……視力がよろしいですね」

びくびくと出てくるナルカミをよそに、ウツがおっとりと呟いた。

「視力は悪い。ただ、名の能力で暗闇でも明るく見えさせることができる。おい、もたもたするな。さっさと来い」

恐怖のため動きの遅いナルカミに苛々しているらしいキセキは、待ちきれなくなって聞いた。

「クロは」

ナルカミはそれを聞いてびたりと足を止めた。

「とつくに……あの……どこかへ……」

怒られるかとも思ったが、キセキは舌打ちして、

「やはりか」

と呟くだけだった。

そして何も言わずに身を翻すと、大股で店を出て行った。

視界の隅ではウツが、

「あら、クロ来てたの」

と、マイペースにぼやいた。

目をつむって、街の夜に身を浸す。

浮遊感があるわけではないが、地に足をつけている感覚もない。

己と街を一体化させるように、クロは暗黒に広く深く溶けていた。あんなに嫌っていた闇だというのに、身を委ねればそこはあまりにも居心地が良くて、泣きたいような笑いたいような変な気持ちになった。

そして全身の力を抜いて初めて、自分が驚く程に疲れていたことに気付いた。精神的にだけじゃなく、肉体的にも。

自分で言うのも何だけれど、あたしはよく、頑張ったと思うよ。

だからもう、終わりにしたいと、そう望んだ。
疲れてしまった。飽きてしまった。黒い悲しみを纏って生きていくことに。闇を抱えて沈むことに。

こうやって夜にたゆたいながら自分の人生を振り返ってみると、
酷く惨めで情けなくて、冷めた気持ちになった。

どうしようもない程に苦しくて切なくて、だから、もうそんなことを感じなくてもいいように、あたしは楽になることにした。

それでもやっぱりあたしが好きなのはあの人なわけだから、この街の闇に溶けて、永遠にあの人を見守ろう、傍にいよう。

そうすればもう、寂しくないよ。いなくなる悲しさも、あの人
隣にいつでもいられることを考えれば、大丈夫。へっちゃら。

子を失って、愛を捨てて、孤独を知って、ずっと喪に服してきた
あたしは、真の闇というものを知っている。だから、あたしがあた
しを捨てて、本当の意味で闇になる方法も知った。

眠い。この居心地の良い空間で何も考えず、限りなく永久にまど
ろんでいられるのであれば、闇も悪くはないかもしれない。
でも、それでもまだ意識を手放せていないのは何でだろう。
あたしはその答えを知っている。

愛した人が、最後に来てくれるかもしれないから。

「おい、起きろ、クロ」

だって、虚空に話し掛けるこの人を見て、嬉しくて嬉しくてたまらない自分があるんだ。

第十七章：夜明けの宝石

「おい、クロ。起きろ」

ああ、やっぱり来てくれた。この人はやっぱり来てくれた。

最後の最後でこの人に会えるのが嬉しくて、嬉しくて、サンライズエリアの夜は震えた。

アンティークボックスからは少し離れた狭い道に、キセキは立っている。

しかし場所など関係ない。

この街の夜と同化しているクロは、いわばこの街の中であればどこにでもいる存在だった。

キセキはいつになく険しい表情をしていた。怒っている。

それを見て、クロの心も少しだけ沈む。

まあ当たり前だ。今まで自分があの人にしてきたことを考えれば、それは当然の怒りだ。

キセキは腕を組んで虚空を睨みつけた。そして抑えた口調で声を発する。

「色々言いたいことは山ほどあるが、それを言っても頑なお前に効くとは思えないので、最重要事項をひとつだけ言う」

クロはひっそりと身を潜めて、神経を研ぎ澄まし、キセキの言葉を待った。

「お前がいないと俺は寂しい」

喜びのあまり、大気がまた震えた。

優しい言葉を貰えたのは最近でも何回もあったけれど、それを素直な気持ちで受け取れたのは、最後のこのときだけだったから。

キセキは続ける。

「ただそれだけだ。お前のためじゃなく、他でもない俺のために、お前が必要なんだ」

もう満足だった。これ以上は何もいらぬ。

あたしは安心して、眠れる。

そうしてクロは、そっと、意識を手放そうとした。

やっと、悲しみと苦しみの時代に終止符をつけるときがきた。

あたし自身が闇になることで、あたしは完全に、全身で、君の尊い命を悼むことができるよ。街から光が消える度に、街は喪に服すんだ。

足りないものなど何もない。

ありがとう、ありがとう、ただ感謝の念だけを抱いて、クロは眠りに就くことにした。

「って言葉で言っても、結局お前は何もわかってないだろうから」

そのときの様子を、後のサンデیلیー誌はこう報じる。

「明け方前、突然サンライズエリアの街は光に満たされた。強すぎる輝きではなかったが、それは一瞬大都市の闇を余すところなく除いた。発信源はアンティークボックス近辺であり、ヴァルセイル会長のキセキ氏が原因であることがわかった。理由を聞いてみると、「暗闇がうざかったから」とのこと。久しぶりの暴言に顔を険しくする記者も多かったが、この反応はクロ氏との関係において何らかの進展があったためではないか、という声も上がっている。ちなみにその光は、白や黄色というよりは燃えるようなオレンジ色で、まさしく「輝く」夕の名を持つキセキ氏独特の光だった」

いつの間にか浮遊感がなくなっていることにクロは気付いた。闇にたゆたうあの居心地の良さも今はなく、足元にはただ硬いアスファルトの感触と、肌寒い空気があった。

眩しくて眩しくて目を閉じた。瞼を通して抜けてくる光がなくなっただけを確認して、目を開けてみれば、自分は元の姿に戻っていた。

光は一瞬のことで、今周りに目をやっても、先程の名残は一塵もない。夜明けを待つ群青色が、どこまでもどこまでも続くだけだ。

恐る恐る正面に目を向けると、顔に青筋を浮かばせたスーツの男が立っていた。

心臓がどきどきした。理由は特定できなかったけれど、きっとあらゆる意味での反射なのだろう。

キセキがふいに口を開いた。

「言葉で言っても何もわかってないだろうから、無理矢理にでも引きずり出して面合わせるしかないんだよ」

クロは何も言えなかった。黙ってキセキを見つめることしかできなかった。

負けたけど、負けることによって救われた、そんな気分だった。

「お前さ、何がしたいんだよ。あんな本わざとらしく目立つところにほっぴりだしやがって。俺に追いかけてきてほしかったのか？良かったな、望み通り来てやったよ。それとも俺の後味を悪くするのが目的か？なら残念だったな。俺は自分の平安のためならどこまでも執念深くなれる男だ。ただで消えられるだなんて思っな」

クロはうつ向いた。

「わかんないよ。あたしも、わかんないよ」

果たして自分は本当に消えたかったのか。果たして自分は救われたかったのか。

いや、違う。わからないはずがない。

だって、あたしだって一人の人間なのだ。

救われたくないわけがない。生きたくないわけがない。

愛されたく、ないわけがない。

「キセキ、あた、しは……」

震える声を振り絞って、キセキに正直な気持ちを言おうと思った。でも、キセキはそんなクロの言葉を遮った。

「答えが欲しいわけじゃない」

言ってキセキは、こちらに歩み寄ってきた。

「お前がどういふ答えを持っていようと、結果は変わらない。俺は結局俺の幸福を求めて、お前を連れて行く。お前の気持ちなんて、どうでもいいんだよ」

キセキはクロの目の前で立ち止まると、クロの体を力強く抱き寄せた。

クロは一瞬息が詰まりそうになって、それでも彼の腕の中は、あのカラフルな部屋とか、闇の中よりも、ずっとずっと居心地の良い場所だった。

そしてキセキは、クロの耳元で囁いた。

「なあ。お前が仮に闇と同化して、その後俺はどうすると思ってるんだ？ 癩だが、あの本の王子と同じことをするに決まっているぞ？ お前の後を追って俺はこの街の光になって、俺とお前は永遠に堂々巡りだ。で、それを見たアイヌやココロが毎日溜め息を吐くんだ。なあ、そんな世界の何が面白いっていうんだ？」

キセキが語調を強めるに従って、腕の力もさらに強まっていった。クロは抗議の声も発せず、ただ彼の体温の中に収まっている。

「お前が街の闇に溶けたときと、俺がお前を闇から引きずり出した

後で、世界はどこが変わったか？」

キセキの腕の中で、クロの頭が震えた。それは否定の意思表示だった。

「そうだ、変わらない。必要ないことなんだよ。お前が闇になろうと俺が光になろうと、世界は一向に変わらない。闇は闇、光は光でもう足りてるんだ。でも俺にとってお前のいない世界はまだまだ物足りない場所なんだ」

キセキはそこで、ふっと腕の力を弱めた。

クロの頭の上に、雨が降ってきた。

「ふざけんなよ。何もかも一人で完結させようとするなよ。お前の子どもは俺の子どもでもあったし、お前の左半身は俺の左半身でもあるんだ。痛みを共有しないのであれば、何のための結婚だよ……」

クロはキセキが腕の力を緩めたのを機に、弱々しく反論した。

「でも、あたしの司るものは闇で……」

言いかけたところで、額に鈍い衝撃があった。

「いつ……!!」

涙目でキセキを見ると、キセキもおでこを押さえていた。どうやら頭突きをかまされたらしい。

キセキはクロを睨んで、それから少しだけ笑った。

「ほら、痛み分けだから」

彼の笑顔を見た瞬間、クロは何だかどうしようもなく満たされた気持ちになって、自分の心だけじゃ収まりきれなかったそれが自然と溢れ出るように、目から熱いものが滴り落ちた。

それはアスファルトに落ちて、跳ね返って散らばって、また落ちた。

「闇とか光とか、関係ない。お前はいつも嫌がっていたけど、俺はお前のそういうところ全て内包して好きなんだから。もっと、自分に正直に生きてくれよ」

クロは涙で濡れた唇を小さく動かした。

「いい、のかな。あ、たし、救われちゃっても、いい、の、かな」

口は震えて上手く動かなかったけど、ゆっくりと、それだけ言った。

しかしキセキは首を横に振った。

「言つたる？俺はお前のためじゃなく、俺のためにここに来た。俺がお前を救うんじゃない。お前に俺を救ってもらうために、ここに来たんだ」

その瞬間、お腹の中に、暖かいものが宿った気がした。

そうか。

クロは気付いた。

この暖かさは、今はいない君の存在を示すものじゃない。これは、あたしの、生きる意味だったんだ。

「帰ろう、クロ。ヴァルセイル本部にじゃない。俺達の家、帰ろう。少し眠ってから、長い話をしよう」

それでも、そこまで言われても、クロは一緒に行くわけにはいかなかった。

「駄目。駄目だよ。あたしは、贖罪をしなきゃ……」

それは半ば意地といっても良かった。

今ここで素直にキセキの後についていたら、長い間、孤独を耐えてきた自分の行動は一体何だったというのだろう。

わかってている。本当はわかっている。あんなことには、本当は何の意味もない。

でも、それを認めてしまるのが恐くて、惨めで、情けなかったのだ。

しかしキセキは頷いた。

「うん。そうだな、だからお前の刑は無期懲役だ。俺の元で」

その瞬間、呆気なく、清々しいくらいの呆気なさをもって、クロの躊躇いはいとも容易に砕けた。

ああ、この人は、王子様なんかじゃなかった。交渉の得意な、ただのビジネスマンだ。

そして長い交渉の結果、クロはそこでやっと妥協できて、首を縦に振ることができたのだ。

涙でにじんだ視界がいつの間にか闇色じゃなくなっていることに、クロは気付いた。

おかしいな、キセキはちゃんとここにいるのに、何でこんなに明るいんだろう。

そう思ってから、当たり前の原理に今更行き着いた。

「あ、朝

」

そうだ、夜明けは誰にでも、等しく来るのだ。

当然のことだけれど改めて思い知ったそのことが、愛しくて、嬉しくて、クロは右目からぼろぼろと、涙を吐き出し続けた。

涙は淡い陽光を浴びて、煌めきながら地面に吸い込まれていった。それを見たキセキが、笑って言った。

「ダイヤモンドみたいだ」

第十八章：灰の空模様は終わりが始まりか

「……るかみ、ナルカミ、起きなさい」

声を聞き止めた瞬間、ナルカミはぱつちりと目を開けた。しかし体の反応にまだまだ意識はついていけず、彼女はぼんやりと自分の顔を覗き込んでいる人物と見つめ合った。そして、起きたばかりでまだ目が濁っていることもあって、ナルカミは再び目を閉じようとしたが、傍らにいる人物はそれを許してはくれなかった。

「起きなさい。ナルカミ」

静かだがしつかりとした女声は、有無を言わさぬ調子で、ナルカミは目を擦りながらゆっくりと身を起こした。

段々冴えてきたその眼がまず見たのは、相も変わらず晴れない表情をしているウツの姿。そして薄暗い室内だった。

ナルカミははっとする。

まさか、ウツの手を煩わせる程に寝坊したんじゃない……。

「あの、今何時ですか？」

「六時です」

その数字を聞いて、自分の顔から血の気がひいていくのがわかった。

ナルカミは大体いつも二時頃には起きていたから、何と自分は約四時間も寝過ごしたことになる。

しかし彼女はそこまで考えて、何かおかしいことに気付いた。

二時頃？

二時頃といったら、自分は確かまだ起きていた。その時間帯は眠ってさえいなかったような気がする。

あ。

そういえばここ、昼衆だった。

となると、ナルカミがまだまだ眠いのは当然のことであり、むしろ今起こされるといふのは異常事態以外の何物でもなかった。

ナルカミが怪訝そうな顔をしていると、ウツがシヨルダーバッグを持ち上げて、はい、とナルカミに差し出した。

ナルカミはわけもわからず、ただ反射的にそれを受け取る。

A4サイズのノートも入るような大きさで、黒地に生成りのレースがふんだんにあしらわれていた。重みがあるので、中に何か入っているようだ。

「それから、洗濯しておいたから、これに着替なさい」

言っただけでまた差し出されたのは、以前クロに着せられた黒いワンピースだった。

全く状況がわからなかったが、取り敢えずナルカミは大人しく従った。ウツは着替えるのも手伝ってくれた。

「え、と……」

「ティッシュとか、ハンカチとか、必要なものは鞆に入れておいたわ。お弁当も飲み物も、それから少しだけお金も」

ナルカミが困った顔で立ち尽くしていると、ウツは全て知っているような声で言った。

「出るのでしょうか？」

体が硬直した。同時に、たくさんの「何で？」が頭の中を支配する。

ウツは当惑した表情のナルカミを見て、少しだけ微笑んだ。

「わかるわよ、あなたは最初から自由を望んでたんですものね。あなたは怖がりだけど、行動力はあるみたいだから、このまま大人しくここにいるような人間ではないのでしょうか？もっとも、いつここを出るつもりだったかは知らないけれど。もしかして今日だったか？」

そう言っって目を細めるものだから、ナルカミはもう絶句するしかなかった。

「でも、それがいつだろうと、あなたにここを出る意思があるのであれば、今直ぐにでも行かなきゃ駄目なのよ」

話しているウツは、昨日とどこか違った。暗くて沈んだ表情だったけれど、その顔はどこか楽しそうで、おかしそうだった。

「でないよ、あなたまたクロに捕まるわよ」

そこでまたひとつ、ナルカミは心配事を思い出す。

そうだ、クロ。クロはあの後、どうなったんだろう。

そんなナルカミの心理を先読みしたように、ウツはまた心の問いに答えた。

「彼女なら大丈夫よ。会長様がどうにかしてくれるから」

その物言いははっきりしていて、確かな自信を持っているようだった。

「キセキさんが……ですか？」

「そう。あの人うちに来たとき、怒っていたような顔してたでしょう？だから、大丈夫。『会長がキレたら商談は負ける』って、昔から言われてるのよ。あの人も口は達者だから、クロの一人や二人言い聞かせられない男じゃないわ」

「そうですか……」

ウツの言葉は根拠に欠けていたが、何故かすんなりと納得できた。

「だから、早く行きなさい。この時間帯なら人目につくこともあまりないわ」

「それでも情報屋の目からは逃れられないでしょうけど」とウツは小さく付け足した。

付け足された言葉は非常に気になったが、あんまり問い詰めているとまた急かされそうなので、ナルカミは最後にひとつだけ質問することにした。

「あの、どうして、ナルカミのこと助けしてくれるのですか？」

ウツは少しだけ考え込んだ。そして考えた割には短い答えを唇から紡いだ。

「だって、面白そうじゃない」「え？」「

ナルカミは目をぱちくりさせる。

「あなた才能があるわ。人を巻き込み変えていく才能がある。そんな気がするの。だから、そういうの、しまったままにするなんて勿体無いじゃない」

大真面目な顔でウツはそう言った。

それでもナルカミはウツの行動が不思議でならなかったけれど、ウツはそれ以上考える余裕も与えなかった。

「さあ急ぐのよ。どこへ向かうのかわからないけれど、急いでオンラインズエリアを出なさい」

ウツはナルカミの肩を抱いて、無理矢理部屋のドアのところまで連れて来た。

そして背中をそっと押す。

「行ってらっしゃい」

ナルカミは困惑気味に、それでも感謝を込めて頭を下げた。

「ありがとうございます」

そしてさっと身を翻し、階段を駆けて行った。

ウツはナルカミの姿を見送ってから部屋に戻って、窓を開けた。顔を出して上を見ると、空は曇天だった。

「午後には降るかしら」

ウツは窓を閉めてから、また大真面目な顔で呟いた。

「良い天気ね。彼女の旅路を祝福するようだよ」

「あーあ、ここで朝日が街一杯に満ちてたりしたらドラマチックなのに」

曇り空の下、クロとキセキは手を繋いで歩いていた。

「そう上手くいくものでもないだよ」

とキセキは呟く。

サンライズエリアのビル群は、薄灰の空の下どこまでも無機質だった。でもライトグレーの空はこの人の髪の色と一緒にだし、銀色のビルはこの人の目の色と一緒にだったから、それでもいいかと、クロは満足することにする。

「すごい久しぶりのお家だな」

「ああ、俺だよ」

「え、！？何で！？」

「何でって……お前がヴァルセイル本部で寝泊まりしてたとき、俺もそこで寝てたからだよ」

クロは驚愕する。

「がーん！じゃあもしかして我が家は二年間手付かず！？」
「まあそついうことになるな」

平然と言つてのけたキセキを、クロは恨めしそうな顔で見た。

「じゃあまず寝る前に掃除じゃん。キセキの嘔吐きー！」

そんな軽口を言い合っていると、自分達の住んでいたマンションが見えてきた。

しかしクロはそんなものよりも、その前にたむろしている人物達のほうに目がいった。

ココロとアイスと、それにマコトだ。

真つ先にこちらに気付いたココロが、右手を挙げた。

「お帰り」

安心したような笑みを浮かべて言う。
それにつられてクロも笑った。

「ただいま」

久しぶりに、心の底から笑顔を浮かべたら、何だか泣きたい気持ちになつて、思ったときには涙も溢れていた。

それを見たアイスが苦笑して、近付いてきてクロの頭を撫でた。

「おいおい、もう既に散々泣いたんだろ？いい加減笑ってくれないと、遅れを取り戻せないぞ。なあ、マコト」

急に話題を振られたマコトは、無愛想に、

「そうだな」

とだけ答えた。

クロは目を擦りながら、何度も何度も頷いた。

「うん。うん。そうだね。泣いた分は笑って取り戻さなきゃ」

それでも泣きじゃくるクロの肩を、キセキは優しく抱いた。

幸せだ、と、クロは思う。

こんなに暖かいものに囲まれて、あたしは何て幸せなんだろう、と。

後ろめたい気持ちがないわけじゃない。我が子を殺してのうのと幸せに生きる母親だなんて。

でも、だからといって不幸になる意味もないことを、クロは知っている。

加えて、キセキが生きる意味を与えてくれた。自分のためでもなく、子どものためでもなく、彼のために生きるという選択肢を与えてくれた。

だから彼の隣で生きようと、決めることができた。

あたしにできるのは、過ちを忘れないことと、二度と同じ間違いを繰り返さないこと。それと、あたしの中のこの温もりを絶やさないこと。

それだけ覚えて、前に進もうと思った。

「みんな、よろしくね。これからまた頑張って、昏衆の財政を建て

直そう」

そう言つと、苦笑だつたり力強かつたり、各々のしかたで皆笑つた。

クロも満面の笑みを浮かべた。

「つてなわけで、やっぱりまずは新しい発見から商売は始まるよね！あは！」

一変してクロの元気な声を聞いて、和やかなムードは一気に崩れ去つた。

ココロとアイスは笑顔をひきつらせ、キセキはこめかみをひくつかせ、マコトはげんなりした顔をする。

「じゃあじゃあ手始めに！マコトに天馬探しに行つてもらおっかな！そんで捕まえてえ、メリーゴーランドにしたら楽しいよ！」

マコトは深い溜め息を吐いて、ぼそりと呟いた。

「やれやれ。世話の焼ける妹だ」

終章：陽は昇り世界は変わる

いよいよ明るさを増してくる空の反面、ナルカミの心は暗かった。ビルに囲まれた道を浮かない足取りで歩きながら、彼女は途方に暮れている。

ああ、何てことだろう。

ナルカミは小さな口から溜め息を漏らした。

まさかこの街が、こんなに広いだなんて。

正直、適当に歩いていれば簡単にこの街を出られるものと思っていた。

道行く人に聞こうにも、この時間帯車はぼつぼつ通れど、歩いている人などほぼ皆無。

ナルカミは今完全に迷子となっていた。

段々本気で不安になってきて、目に涙も浮かんできたそのとき、

ナルカミの隣で、黒塗りの車が止まった。

車に詳しくはないナルカミでも、それが他の車と比べて高級であることはわかった。

驚いていると、車の窓が開いた。

中にいたのは、ストライプの入ったスーツを、きつちりと着こなした男だった。特に派手な印象はなかったが、くすんだ桃色の髪の毛が、何とも言い難い難い雰囲気をもし出している。

灰色の瞳は温厚そうに笑いかけてきた。

「こんにちは。奇遇ですねお嬢さん。いや、あなたがここを歩いていることは知っていましたが、私がここを通ったのは全くの偶然ですよ」

ナルカミは目を瞬かせた。

こんな人見たこともない。

でも心の中ではまさに救われた気分だった。今のナルカミにはどんな極悪面でも救世主に見えたことだろう。

ナルカミはスカートの裾をつまんで、丁寧に辞儀した。

「こんにちは。あの、ナルカミはあなたに会うの初めてなのですが、よろしければ少し助けただけませんか？」

男は優しく微笑んだ。

「構いませんよ、お嬢さん。何でしょう」

ナルカミはひとまず安堵する。

「実は道に迷ってしまいました。どうやったらこの街を出られるか、教えてほしいのです」

「お嬢さんはどこに行くつもりなのですか？」

ナルカミは少し迷ってから、素直に答えることにした。

「ミッドナイトストリートに……」

男は僅かに驚く。そしてやけに興味深そうな顔をした。

「成る程。でしたらどうぞ後ろに乗ってください。丁度私はエアルトに向かうところでしたので。ミッドナイトストリートなら道中にありますし、降ろしますよ」

「え……」

通常ならばこんな怪しい見ず知らずの者の車に乗るなど、よっぽどの命知らずだが、

「いいんですか？」

ナルカミはその命知らずのうちの一人だった。

あまりの素直さに呆れたのか、男自身も苦笑した。

「ええ、どうぞ」

「ありがとうございます」

ナルカミは微笑んで頭を下げた。

しかしそこでようやく不審さに気付いたのか、少し不安そうな顔になる。

「えっと、でも、どうして、優しくしてくれるんですか？ナルカミ、あなたと初めて会ったのに。それともどこかでお会いしました？」

「いえいえ。私もあなたにお会いするのは初めてですよ。ただ間接的に、あなたのことは色々知っていましたね」

それもまた一般的に見れば怪しさを倍増させる言い訳に他ならなかったが、世間知らずなナルカミは深く考えもせず、ふうんと納得した。

「まあ我ながらこの上なく不審なことは自覚してますがね。あなたが泣きそうな顔までしていたので、ついつい助けてあげたくなくなってしまったんですよ」

そう言われて、ナルカミは耳まで赤くなった。

恥ずかしかつたので何も言えないでいると、男は何か勘違いしたようだ。

いきなり、

「そうですね、それじゃあ人質として、私の秘密を教えて差し上げましょうか」

と言い出した。

「ひ、ヒミツ？」

しかし、その何とも甘く不思議な響きに、ナルカミは食い付いた。

「ええ、それもトップシークレットですよ」

「な、なあに？」

ナルカミはわくわくして次の言葉を待つ。

「私の本名です。普段はウィルと呼ばれているんですけども……」

そこで彼は声を潜める。

「本当の名前は、『ウイルス』と申します」

「ういる……す？」

呟いたナルカミに、ウィルは口元に人差し指を当てて制した。

「いいですか？秘密ですよ？それが知れると、色々と私の世間体も危うくなる可能性がありますので」

『セケンテイ』の意味はわからなかったが、ウィルの顔は口は笑えど目は真剣だったもので、ナルカミはこくこくと頷いた。

「私のことは他の人と同じように、『ウィル』とお呼びください。さて、これで信じてもらえましたかね？」

ナルカミは「はい」と言って、「お願いします」と頭を下げた。ウィルはにっこりと笑む。

「じゃあどうぞお乗りください」

そう言った直後、後ろのドアが自動的に開いた。驚きながらも、ナルカミは中に入り込む。

車の中は、ラベンダーの良い香りがした。

「改めまして、ウィルと申します。よろしければどうぞ」

振り向いたウィルが、小さな紙切れを丁寧な動作で差し出してきた。

受け取って見てみると、そこには彼の名前と、「情報取り扱い店ドペスター・クイック代表取締役」という文字が印刷されていた。

瞬間、ナルカミの脳裏に、いつぞやのウツの言葉が蘇る。

『それでも情報屋の目からは逃れられないでしょうけど』

はっとなってバックミラーに映るウィルの顔を見つめたときには、車は既に発車していた。

やはり鏡越しにナルカミと目が合うと、ウィルは笑った。

「そんな心配そつな顔しないでくださいよ。これでも一応私は善良な市民のつもりですから。といつても根拠はありませんがね」

何にせよもう事態はあらがいようのないところに来てしまっていたし、ナルカミは観念してシートの背もたれに寄りかかった。何より、この男が悪人には見えなかったのだ。

「まあ短い間ですが、よろしくお願いします」

「それと……」とウィルは付け加える。

「ミッドナイトストリートに入ったら、自分のことを『ナルカミ』と言うのも、スカートをつまんでお辞儀するのもよしたほうがいいですよ」

「な、何故ですか？」

特にこの名前はとても気に入っているから、自分でも使ってるのに。

「ミッドナイトストリートはいわば無法地帯ですからね。そんなに酷くはないですが、自由人達の集まる場所です。奴らの行動は読めませんよ。くれぐれも自分の立場は容易に明かさないように」

「わ、わかりました」

ナルカミは唇を噛んで、気を引き締めた。

黒塗りの高級車は曇天の下、太陽の街を進む。

「えー！！いないのー！？」

いつもは閑静な店内に、珍しくベルの音以上に大きな声が響き渡った。

声の主クロは、木造のカウンターをどたどたと殴ってだっ子のようにごねる。

「何でー何でー！何でいないのー！？」

カウンターを殴る音は、左右の腕で違うものだから、何とも不思議でユニークなリズムが店内に反響する。

対照的にカウンターに座るウツは全くのマイペースを保っており、本に目を落しながらクロの相手をしている。

「旅に出たわ、彼女」

「旅！？何で！？」

「何でも何も、最初から彼女の目的はそれよ」

クロは天井を仰いでうー、と唸った。

「そっかー、自由になりたかったんだもんね」

するとウツが目だけ上に上げた。

「何だ、知っててナルカミを縛ってたの？意地悪ね」

クロはぶくつと頬を膨らませた。

「色々あったの、あたし達にも」

「でももう親友だけだね」と付け加えて、にっと笑う。

「ふうん。あの子、こんな短い間でさらわれて、あなたと色々あって、親友になって、うちに預けられて旅立ってったのね。忙しい人」

そういえばそうかも、と思って、クロはまた笑った。

ふとクロは、ウツの読んでいる本が気になった。

「ね、もしかしてそれ、『カラストロフィー』?」

「ええ、そうよ」

それを聞いてクロは、まるで無邪気ないたずらっ子のように、両目をきらきらさせた。

「知ってる?そのお話のラスト、もうひとつの説があるんだよ」

後にこの『もうひとつの説』は広まりに広まって、こちらが話のラストとして主流にまでなってくるのだが、それはまた別の話である。

終章：陽は昇り世界は変わる（後書き）

こんにちは、黒轍です。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

次から第三部の始まりとなります。

第二部はほぼ昼衆オンリーな話で、これだけで完結してしまうようなものでしたが、第三部は朝・昼・夜ごちゃ混ぜになる予定です。でも割合的には朝にかたよってるかも。

平坦なかんじの第二部と比べて、第三部はやや第一部と似たようなどたばたしたかんじになってくると思います。

懐かしい人物とかも出てきますので、良かったらそちらもお読みくだされば嬉しいです。

壮麗な宮殿内のある回廊を、一人の少女が歩いていた。

死人のように白い肌、オレンジ色の明かりに照らされてぼんやりと輝く白金髪、対照的に薄明かりの中でも力強く煌めく黄金色の瞳、痩せた肢体、そして黒の膝丈のドレス。

その様相はどこか人間離れしていて、妖精のようでも幽霊のようでもある。

彼女 ライの顔に浮かぶ途方に暮れた表情だけが、唯一人間らしさを備えていた。

今日は王様と初めて会う日だった。

今年彼女は十六になる。

長に正式に任命されるのは、雷族のしきたりでは十七だが、成人は十六だ。

そのため今日は、ウィンドネル城で王に挨拶に行かなねばならぬのだ。朝衆ではそれを「姿見の宴」と呼ぶ。

王だけでなく、他の多くの貴族も集まるこの宴は、いわば族長就任に先立った顔見せだった。

勿論一応の主役はライだが、最初だけ挨拶して、後は皆が思い思いに食事と交流を楽しむだけだ。

遅刻してはいけないと、急いで来たのだが、少々早く来すぎてしまったようだ。まだ十分時間もあるしで、お手洗いに行っておくことにした。しかしその帰り、見事に道に迷ってしまったのだ。

行くときは城の使用人がついてきてくれたので問題なかったのだが、帰りは場所も近いしわかると、案内を断ってきてしまった。

今更ながらにあのときの愚かな自分を悔やむ。まさか自分が至近距離の道筋も覚えられない程に愚かだ、ということもわからない程

愚かだったなんて。

いつまでも自分を罵っていても仕方がないので、ライは足を止めて一度周囲を確認することにした。

階段はまだ一度も登ったり降りたりしていないから、ここはまだ四階なはずだ。ただ、お手洗いは丁度別の棟に行ったほうが近いからと、一度空中の渡り廊下を通ったのだ。そしてきつと自分は、歸りにその渡り廊下を間違えた。確かお手洗いに一番近いところを渡ったのだが、渡ったすぐ先に大広間がなかったことを考えると、あのとき間違えたに違いない。大広間がなかったにも関わらず何故ここまで来てしまったのかというと、それは自分の愚かさの話にまた戻ってしまうことになるのだが。

誰かに道を聞こうにも、何故かこの棟に入ってから誰にも会っていない。辺りは迷子のライをわざと脅えさせるかのように、不気味にしんと静まりかえっている。侍女でも執事でも警備の者でも、誰かしらいいはずなのに。

そういえばさっきまでいたところと、この空間はかなり違う。廊下は広いし、天井には鳥達の飛び交う大空が描かれており、さらに豪華なシャンデリアもぶら下がっている。壁面に飾られている絵画も陶器も、他と比べて一層高価そうな気がした。

もしかして、何か特別なところに来てしまったのだろうか。

さらなる嫌な予感に、ライが顔を青くした瞬間
彼女
の体を影が覆った。

「!?!」

びつくりして振り返った先には、一人の男が立っていた。

燃えるような橙色の髪には赤のメッシュがいくつか入っており、切長の緑色の目は、対照的に静かな雰囲気湛えていた。背は男の

人の中でもかなり高いほうだと思う。耳や髪、首、手などには民族調の装飾物が沢山つけられていたが、ちららちららした印象はない。むしろそれら全てを含めて、貫禄のある空気を纏っていた。

「そこで何をしている」

低く、静かだがよく通る声で男が言った。

男の放つ威圧感のようなものに、ライは背中がぞくりとするのを感じた。

「み、道に迷って……」

必死に紡ぎ出したその声は、枯れて、上擦っていた。

嘘は吐いていないのに、まるで自分が悪いことをしたときのように、胸がどきどきした。

男は目を細める。

その態度に、ライは自分が疑われているのではないかと不安になった。

「う、嘘じゃないです」

咄嗟に出たその言葉に、男は呆れたような顔をした。

「誰も疑ってなどいないが」

そう言われると、ライは顔を赤くしてうつ向いてしまう。

男は尊大に鼻を鳴らすと、ライの手を乱暴に取った。

そのひんやりとした感触に鳥肌が立った。

そして男は彼女の手を引いて、いずこかへと連れて行くところ。

「……っ」

反射的に抵抗すると、逆にさらに強い力で引っ張られてしまった。顔を恐怖の色に歪めるライを見て、男が溜め息を吐いた。

「会場まで連れて行く。何か文句はあるか」

ライは虚をつかれたかのように目をぱちくりさせた。できることといえば、力なく首を横に振ることしかなかった。

第一章：ニンゲンケモノ出動

何の変哲もない生活感溢れるキッチンに、一人の女が何をすでもなくただ立っていた。

彼女は意識を集中させるように目を閉じている。

その出で立ちは、百歩譲っても主婦の領域にいるような格好ではない。

セミショート黒髪には、何本か赤のメッシュを入れており、耳には小ぶりのシルバーピアスをいくつもつけている。背丈は平均より少し高い程度。ルーズなかんじのアシンメトリーの黒のワンピースを着ていた。

女 アイスは、唐突に赤紫色の目を開くと、抑えた声で囁いた。

「汝小さきうごめく者ら、汝漆黒の甲冑を鈍く光らせる者ら、汝人たる者にたかる者ら。我は命じる。即刻この館から立ち去れ」

そう言葉を発してから暫くの間、アイスは黙して立っていた。そして出し抜けに全身から力を抜いて、深呼吸する。気配はもうない。大丈夫だろう。

「クロ。終わったぞ」

扉のほうに向かってそう呼び掛けると、左半身の部位が人工の少女がひよっこりと姿を現した。

黒髪は上で二つの団子に結っており、黒のナース帽のようなものを被っている。服はふわふわとしたバルーンスリーブの黒いドレスだ。

クロは、珍しく怯えたような目をアイスに向けた。

「ほんとに、ほんとにだいじょぶ？ 奴はもういない？」

やや呆れながらもアイスは頷く。

「大丈夫だよ。気配はなくなったから」

クロは安心したように溜め息を吐いた。

しかしアイスは唇を尖らせる。

「ていうか、ゴキブリ退治のためにあたしを駆り出すのやめてくれないか」

「えー！？ 何でー！？ 友達じゃん！」

「専門家に頼めつての！ あんた金持つてるくせにけちりすぎだ！ ただでさえあたしは忙しいってのに」

しかしそこでクロは疑いの眼差しをアイスに向ける。

「うそーん。アイス昼衆の族長達の中で一番暇じゃん」

「なっ……そそそそんな、そんなことないぞ！？」

あからさまにうるたえるアイス。

それを見たクロがここぞとばかりに攻めに入る。

「だってさあ、君の率いる自警団って、ほぼ動物達が働いてるだけで、君ら自体はふらふらしてるだけじゃん。なのにみんなからお金とって君らが儲けてるのっておかしいよねー。ぶっちゃけ給料はドックフードでいんじゃない？ みたいなの？」

「そっ、そんなことない！ あたし達だって頑張ってるんだ！ 動物達を

動かせるあたし達がいなきや 自警団は成り立たないんだぞ！」

己の生活費の危機に、必死になるアイス。
しかしクロの反応は、

「ふーん、そーゆーもんかなあ」

とまいちだ。

「そういうものだ！それに、まあ確かにあたしはちょっとくらい暇
かもしれないが！だからこそこつこついうふうにあんたが困ってるとき、
来ることができるんだ！」

クロは優しく微笑んだ。

「だよね。やっぱり」

「ああ！そうとも！」

「じゃ、これからもあたしの雑用よろしくね。君の存在意義がかか
ってるんだから」

アイスは深くうなだれたのだった。

「そういえば、ナルカミはどうしてる？」

— 仕事終わった後のお茶をこ馳走になっている最中、ふと気になっ
てアイスは聞いた。

「んーとね、旅に出た」

クッキーを皿に出しながら、クロは至極あっさりとした口調で答える。

思わず口に含んだ紅茶を軽く漏らした。

「いや、ギャグじゃないからね」

ティッシュを何枚か取ってこちらに寄越しながら、クロは言う。
アイスは神妙な顔つきで口から漏れた紅茶をふく。
そしてひとまず気持ちを落ち着かせてから、

「まじで?」

と言った。

「え?真面目に?真面目にギャグじゃないのか?」

ギャグであってほしい。大いにギャグであってほしい。

「大真面目に旅に出たよ。てゆかそんなにあたしの言うこと信じられないの?ウツに聞けばわかるよお」

むっ、とアイスは唸る。

ウツも認めた事実だというのであれば、恐らく本当なのだろう。

「で、どうしてそんなことになったんだ?」

不審そうな目でクロを見ると、彼女はむっとした顔になった。

「ちょっとさあ、やめてくれる?そーゆーあたしが一方的に悪いよ

うな目。あたし今回は無関係なんだから」

アイスは眉を潜める。

「無関係？」

それはこの娘には不似合いな言葉のような気がした。

「そ。ナルカミもさあ、ほんとに自由になりたくてマコトについて来たらしいよ」

「つまり奴は城から逃げ出したかった、と？」

クロはこくりと頷く。

「そう。昔を知ってるあたし達には理解しがたいけどなー」

成る程確かに理解し難い。

確かナルカミとカザミは、婚約関係にあつたはず。

「破局ということか？」

しかしクロは首を横に振った。

「でもないらしいから、余計ややこしいんだよね。てゆうかナルカミはカザミとそーゆー関係にあることも覚えてないみたいだからね。好意は持つてるようだけど」

「ふうん。何かややこしい話だな」

こういふ話は苦手だ、と言わんばかりに、アイスは背もたれに寄りかかった。

「まあ色々あるらしいよ。詳しくは知らないけど」

クロはクロで、どうでも良さそうにクツキーをかじった。

「で、誰を行かせたんだ？」

「ん？」

何気なく言った質問に、きよとんと首を傾げるクロ。
その仕草に、無性に嫌な予感がかき立てられる。

「いや、誰と一緒に行かせたのかと思って」

「さあ。ナルカミ一人なんじゃないの？」

アイスは自分の耳を疑った。

「正気か？」

身を乗り出すと、カップが傾きかけたので、やや身を引いた。

「へ？てゆか何をそんなに驚いてるわけ？あたしその場にいたわけじゃないから知らないよ。ウツから聞いた話だもん」

「どこに向かったんだ！？」

「勢い余って立ち上がる。」

特に慌てた様子もないクロに、何だか苛立った。

「さあ」

「『さあ』って……！お前、世間知らずで、しかも記憶喪失状態の貴族娘が一人で旅に出るなんて、危険極まりないことだぞ！？わか

ってるのか!？」

「なこと言ったってえ、その場にいたのウツだもん。文句ならウツにどーぞっ」

あまりの無責任さに、アイスは絶句してしまった。気持ちが落ち着くのを待つて、また口を開く。

「これはお前やナルカミとかの、個人的な問題じゃないんだぞ？ただでさえ雷族誘拐なんていう馬鹿馬鹿しいことをやってのけるんだ。これで朝衆で音沙汰ないのが逆に恐いくらいだつてのに、さらにその誘拐の対象が行方不明だなんて、ああもっ！」

自分でも焦燥のあまり頭がこんがらがってきて、アイスは思わず机を叩いた。

しかしそんな彼女を前にしても、クロはまだ飄々としている。

「あれ？キセキから聞いてないの？」

「何がだ？」

「カザミはこのこと了承の上で放置らしいよ」

余計事態がわからなくなってきた。

「見放された、ということか？」

「ううん。だから違うつて。何か深いわけがあるらしいの。どっからが作り話でどっからが本当なのかは定かじゃないから、あたしも詳しくは言えないけど。それに……」

言いかけて、クロは一度苦笑した。

「寧ろカザミはナルカミにゾッコンっばいよ。ナルカミに風をつけ

て監視してるみたいだった」

そういえば、ウィンドネル城にはカザミの風が流れていて、それが防犯カメラの役割を果たしている、というのを聞いたことがある。しかし今までのクロの話の踏まえた上でも、ナルカミが危険な状態にあることには変わりがない。

難しい顔つきのアイスを見て、クロもそれを察したのか、彼女もやや不安そうな顔になった。

「まあ……確かに危ない、か」

「やっとなわかつたか」

アイスはクロを軽く睨んだ。

しかしそんなアイスの視線も全く意に介さず、次の瞬間クロはぱつと表情を明るくした。何かとても良いアイディアが閃いたかのようだった。

そして彼女は勢い込んで立ち上がる。

「よっし、緊急命令ー！」

アイスの背筋が凍った。

嫌な予感がする。ひっじょおに嫌な予感がする。

クロは満面の笑みで言い放った。

「無期限で、ナルカミのボディガード、頼んだよ！」

第二章：雨天後の幻想

大きな揺れを感じて、ナルカミは目を覚ました。

その瞬間バックミラー越しに男と目が合う。彼の灰色の目は、柔らかに微笑んだ。

「すみません。ちょっと運転が荒かったですね。もうすぐ着くんですよ、ミッドナイトストリートに。なるべく早い時間帯にあなたを降ろしてさしあげたいと思うと、どうも気持ちが悪いです。すみません。」

「早い……時間？」

ナルカミは首を傾げた。

窓の外は今や闇色の世界だ。

不思議そうにしていると、男　　ウィルが補足を入れてくれた。

「ミッドナイトストリートの領時は二十時から四時までです。少なくとも五時になれば、地下街は完全に人気がなくなりますよ。滞在中の宿を探す必要のあるあなたにとって、それじゃあ困るでしょう？」

ナルカミは、その要領の良さと行き届いた気配りとに感銘を受け、ウィルに深く感謝した。

「ありがとうございます。気遣ってくださって。その、ナルカミはそんなこと思いつきもしませんでした」

この人の車に乗って良かった、と心から思った。最初は少し心配

だっただけで、やはり悪い人ではなさそうだ。

しかしこのそののなさ、計算の速さ、まるで機族の人みたいだ。ナルカミには、どうもこの人がキラと重なって見えて仕方がなかった。

「あの、もしかしてあなたは、キラさんの御兄弟か何かですか？」

何となく口をついて出た言葉だったが、ウィルはかなり意外な反応を見せた。

それは一瞬のことだったが、嫌そうに、非常に嫌そうに顔を歪めたのだ。

あまりに疎ましげな表情だったので、ナルカミはびっくりして鳥肌を立てた程だ。

「もしや地雷を踏んでしまったのだろうか。」

三衆の仲は、争い事さえないものの、決して良いというわけでもない。他衆、或いは一つの衆の人間を憎む者も少なからずいると聞く。

「ウィルがその一人だったのかもしれない。」

「ナルカミは小さな声で、しかし即座に謝った。」

「あの、ごめんなさい」

「ああ、違うんです。その、ちょっと驚いただけなんです。あなたがあまりにも突飛なことを言うてくるものだから」

「あ、別に深い意味はないです。何となく、雰囲気とかがキラさんに似てるなって思ったただけなんです」

「フォローしようと言ったことだったのだが、今度はその言葉によって青筋まで一瞬浮かべた気がして、ナルカミは身を震わせた。」

「ウィルはすぐ微笑んだ顔に戻ったが、暫くそのまま何も言っていなかった。ナルカミも恐くて何も言えなかった。」

そして十秒くらい経った後に、ウィルがそのままの表情で言った。

「聞きたいのですが、女の子が好きになる男はお兄ちゃん似とかいう迷信があるじゃないですか。いや、私は迷信と思っっているのですが、もしかして迷信じゃないんですかね？」

ナルカミが意味がわからなさそうにしていると、ウィルは手を振って、

「いや、いいんです」

と諦めたふうに言った。

結局ウィルとキラがどういふ関係にあるのか、いや、関係性があるのかすら教えてもらえなかったが、この話はもうしないほうが良さそうだ。

そのとき、前方に小さな光が見え始めた。

小さいが、確かな輝きを持ってそこにある光だ。

「あれは……？」

ナルカミの瞳の中で稲妻がほとばしった。

「見えてきましたね」

「てことは……」

「ええ。ミッドナイトストリートです」

ナルカミは待ちきれないかのように、後ろから身を乗り出して小さな光をじつと見つめた。

光は段々はつきりしたものになっていき、やがていくつにも分裂した。

近付くにつれて、道も混雑してきた。

「やはり所詮こんな街に集う者達。運転が荒いですね」

ハンドルをきりながら、ウィルが眉を潜めた。

「街の外まで……どうしてこんなに混んでいるのですか？」

周りを走る色とりどりの車に目を奪われるナルカミ。

「他の街の芸術家達が集まってるんですよ。そして酒を飲みながら各々の作品を批評し合う。ときにはコンテストに出たり、美術館に出展したり、作品を売り買いする。ミッドナイトストリートの夜はそんな感じですよ」

ナルカミは顔を押し付けんばかりに窓を覗き込み、うっとり溜め息を吐いた。

外は今さっき雨が降り止んだばかりで、道路が濡れている。そこに車のライトが反射していて、幻想の中にいるような気分だった。

第三章：紺青を愛した街

街に入ると、皆が皆同様の方向に歩を進めているようだった。

ウィルと別れた後、あらがえないのかあらがう気力もないのか、ナルカミもそちらに流されていった。

サンライズエリアのように色々な格好の人がいたが、スーツなどのきつちりとした身なりをした人は少ないように思えた。

道は勿論人混みでごったがえしていて、あちこちで騒ぎも起きているようだった。しかし建物の中は不思議とひっそりしているようだ。灯りもぼつりぼつりとしかついていない。

街並みは一定しておらず、様々な建物がごちゃごちゃと立てられている。西洋建築があれば、東洋建築もある。大きな屋敷があれば、人が住んでいるのかも怪しいような粗末な小屋もある。地面はアスファルトだった。

と、突然足が空を掻いた。

「あつ………！」

ナルカミは倒れ込んでしまい、前の人に体ごとぶつかった。

しかしナルカミの体が軽かったのか、ぶつかった相手がしっかりしていたのか、前の人も少しよるめいただけで済んだようだ。彼は迷惑そうにこちらを無言で睨んでから、さっさと行ってしまった。

周りの人間達も、ナルカミは無視して避けて通って行く。

ナルカミは頼りなさげに立ち上がった。

どうやらここから地下街へ続く階段になっているらしい。

進めば進む程、闇が増えていくようだ。

天井にはぼつぼつと白い蛍光灯が取り付けられていた。それが唯一の光源だ。

足元は暗く、ナルカミは何度も転びそうになりながらも、階段を降りていった。

段々と、ざわめきが増してくる。遠くのほうでは音楽のようなものもごちゃごちゃと聴こえてきていた。

突然、目の前がぱつと明るくなった。

それは日中の太陽の輝きに比べれば、随分と劣る光だったが、暗闇に慣れた目のナルカミには、眩しすぎる光だった。

思わず目をつむってしまった。しかしそれでも人々の動きは止まらないわけで、ナルカミはろくに目も開けられずに流れに従っていると、案の定また転んだ。

「うっ……」

このまま倒れ込んだままでいると蹴飛ばされかねない状況だったので、ナルカミは必死に立ち上がって、おぼつかない足取りで端に寄った。

そうやって少し休んでいると、ようやくと目が慣れてきた。

道は全てコンクリート敷きで、時々天井に向けて柱が立っている。壁は見当たらない。もしかしたらこの空間は、ただ四角く掘抜かれたものなのかもしれない。そこに地上の建物が地下へと根を下ろし、道や街並みを形成しているのだろう。その証拠に、街の建築物は全て天井を突き抜けるようにして伸びている。

街の建物は、ギャラリーだったり飲食店だったり雑貨屋だったりして、ほぼすべて何かしら経営しているようだ。扉は見たところ開けっ放しのところが多い。

四方八方から様々な音、声が聞こえてくる。それは怒号だったり笑い声だったり何か割れる音だったりして、とにかくやかましい。

やっと落ち着いてきたとき、何だかとても良い匂いがしてきた。

食べ物の香りだ。

後ろを見ると、案の定そこはレストランのようだった。

ガラスケースを覗き込むと、様々な料理のサンプルが飾ってあった。ナルカミに馴染み深いものもあれば、全く見たことがないものもある。中には好物のオムレッツもあった。

しばし見入っていたが、ガラスに映ったものを目にした瞬間、ナルカミはぎよっとなって後ずさった。

瞬きを一、二回繰り返し、もう一度顔を近づけてそれを注視する。顎くらいまでの長さの雪のように白い髪と、ターコイズグリーン
の目、ほっそりとした体格や背丈。衣服を抜きにすれば、どこをとっても類似した二人の娘。顔さえまさにうりふたつだ。

間違いない。イハネとミハネだ。

確信し、ナルカミは恐々と、しかし素早く後ろを振り返った。すると何と、二人はこちらに近付いてくるではないか。しかしナルカミのことは目に入っていないようだ。

どうやら二人の目的はナルカミが背にしている飲食店らしい。それがわかると、ナルカミは安心する余裕もなく駆け出した。

自分は正当な理由でここにいるけれど、果たしてそれをあの二人が知っているのはわからないし、そもそもあの双子はどうも苦手でちょっと怖くもある。助けてくれそうな人間がどこにもいない今、会わないで済むのならそれより良いことはない。

兎に角障害物が多いのでスピードは出せないが、それでもできる限り速く走った。何度も人にぶつかり、悪態を吐かれ、そんなものにいちいち構っていられる暇もなく。

とりあえず近くの角を曲がって、後ろを振り返ってみた。

良かった。来てない。

やっと安堵の息を吐いたとき、軽い衝撃と共に、視界が傾いた。

そして無様に地面に尻餅をついてしまう。

一瞬何が何だかわからなくて、目を上に向けたら、何だか怖そう
な女の人がこつちを見た。

セミシヨートの黒髪に何本か赤のメッシュを入れた女で、メッシ
ュ繋がりで何となくカザミのことを思い出してしまった。

彼女は少しこちらを睨んで口を開いた。

「おい、おまえ前を見て……」

しかしそこまで言って、女は口を閉じた。

目を見開いてこちらを見つめている。

もしかして、ばれた？

背筋が凍る。嫌な汗がふつつと沸くのを感じた。

「おまえ……」

それだけ言って、女が手を伸ばしてきた。

その手はただ単に伸びてきているだけだというのに、ナルカミに
はそれが暴力的な意味を持っているような気がして、無意識に内な
る力を動かしていた。

女の手がナルカミの手に触れた瞬間、金色のそれはナルカミの手
から女の手へ、女の手から体へと伝染した。そして女の全身は一度
きらきらと瞬き、その美しさとは対照的に、ばちばちと破壊の音が
辺りに響いた。

今度は女の体が傾ぐ番だった。

ミッドナイトストリートは嫌いだ。何しろ人間がいっぱいいる。「いっぱい」なんてものじゃないか。「いっぱいいっぱい」だ。

勿論その点に関して言えば、サンライズエリアもエアルートも同じで嫌いなのだが、この街は人間の質も格段に悪いのだ。前者のふたつの街の人間達は理性で動いているが、ここでは感情で動く人間のほうが遥かに多い。向こうで笑い声が上がったと思えばこっちで泣き喚く声上がり、そうかと思えば怒声が響く。

「おまえにはある意味獣らしくていいんじゃないか」といつかキセキが言っていたが、とんでもない。

アイスは獣が本能的に動くのは、これ以上なく理性的なことだと思っている。ともすれば獣達のほうが人間などよりもずっと賢く、無駄がない生き物なのだ。

こんな墮落した街の人間達と一瞬にしないでほしい。

しかし何故そんな嫌いな街を自分が歩いているのかというと、それは命令されたからである。つまり自分は理性的に動いているわけで、やっぱりあたしは獣なのだ、アイスは鼻を高くした。

ミッドナイトストリートに着いたのはついさっきだ。

アイスをここまで送ってきたキャメルは道に詳しく、ここに来るときも渋滞に合わないで済む道を選んで、効率良く来ることができた。

連れてきた犬はダルメシアンのブチ一匹だ。

ミッドナイトストリートにも犬は沢山いるし、そんなに連れて行く必要も見い出せなかった。

人探しには鳥が一番役立つのだが、生憎ここは地下街。元々鳥などいないし、いたらきつと不審がられるだろう。

鼠はまあ沢山いるが……あまり使いたくはないな。

彼等はずる賢い。必ず代償を要求してくるだろう。

まあそれくらいはいい。適当にパン屑でも与えとけば良いのだから。

しかし彼等がそれを頂戴しに自分の周りに集まってくることを考えると、正体を隠すためにもあまりよろしくはないだろう。

昼衆と夜衆の仲が悪いわけではないが、昼衆の生族と夜衆の炎族は仲が悪い。

少なくともばれて良いことはなさそうだ。

今頃はぶちが他の犬達に応援を要請して、探索に当たっていることだろう。

ミッドナイトストリートは広いが、サンライズエリア程ではない。一日もあれば調べ尽せる。

念のため自分は宿を取っておくべきかな。

そんなことを考えて、泊まれそうなところを探していると、一人の少女がよそ見しながら駆けてきて、今にも自分に体当たりしそうなことに気付いた。

気付いたはいいが、これじゃ避けきれないな。

観念して逆に構えの体勢を取ると、やはり少女は思いきりよくぶつかってきて、少女だけ反動で尻餅をついた。

少女が恐々とこちらを見た。

これでは何だかこちらが悪いような雰囲気ではないか。確かに自分も宿を探すためにきよるきよるしていたが、この少女は完全に後ろを向きながら、しかも走ってきたのだ。

うん、あたしは悪くない。

思い、文句を言おうとした、

「おい、おまえ前を見て……」

瞬間、気付いた。

煌めく白金髪、稲妻のほとばしる黄金の目、人形のように白い肌、少し力を入れたら折れてしまいそうな手足。

帝王のお気に入り、雷族の姫、電光の女王

「おまえ……」

身を起こしてやろうと手を伸ばすと、ナルカミの顔が恐怖に歪むのがわかった。

少しシヨックだったが、構わず彼女の腕に触れたその瞬間だった。ナルカミの目と同じ色をした何筋もの光が彼女の手から発され、それは踊るようにアイスの全身に触手を伸ばしてきた。

アイスが覚えているのはそこまでだ。

第四章：意思を持つ守護壁

「あいよ。ストロベリーショートお待ち。持ち帰りか？」

前に出されたトッピングが色々のつたアイスクリームを見つめながら、ケムリはこくりと頷いた。

「おまえがここに来るってことは、今日はとーちゃんかーちゃんは留守か」

白銀の色の髪を持つ店の主人は、話しながら持ち帰り用のボックスや氷を用意しだした。

ケムリはその間にも無言で頷く。

「はーん。まあ、あの二人はやるべきことがなくても、やりたいことは山ほどあるような人間だからな。しっかりこども子どもほったらかしな人は感心しねえ。俺から何か言っというてやるうか？」

ケムリは首を横に振ったが、主人がこっちを見ていなかったのので、小さな声で「いい」と言った。

主人も大した答えは予想していなかったようで、

「あそ」

と適当に返した。

「ま、こんな店経営しておいて何だけど、おまえなんか特に育ち盛りなんだからさあ、もっとちゃんとしたもん食えよ。かりがりじゃねーか。身長ばっかぐんぐん伸びやがって」

ぶつぶつ言いながらも、店主は保冷仕様のボックスを袋に入れて、ケムリに差し出してきた。

ケムリはそれを受け取り、無愛想に店を出て行く。扉を出るとき、店主がまた声をかけてきた。

「おまえさあ、今何歳？」

ケムリは首だけそちらに向けて、

「う」

とだけ答えた。

店を出ると、何故か外は騒がしかった。

騒がしいのはいつものことだが、今日は何やら空気が違う。遠くのほうから、

「雷族の長だ！」

とか、

「ナミダ様を呼べ！」

「近さで言ったらユキ様だろ!？」

とかいった声も聞こえてくる。

興味はあったが、今の一番の関心事は手に持つ袋の中身だったので、気にせず帰ることにした。

近道しようと暗く狭い路地に入ったとき、「くうん」という鳴き声が出て、ふと足を止めた。

足に何かに触れる感触がしてそちらに目をやると、一匹のダルメシアンがケムリの足に頬をすり寄せていた。

ケムリは炎族の狼の系統なので、犬などの動物にはよくなつかれるのだ。

しゃがみ込んで頭を撫でてやると、ダルメシアンは目を細めて物悲しそうに鼻を鳴らした。

そして背を向け、路地を少しだけ奥に進んだ。それだけでこちらをじっと見ているので、ケムリは漸く自分を待っているのだとわかった。

ダルメシアンのところまで歩いてくると、そこには建物のちよつとした窪みがあった。

そしてそこに、人間がいた。

黒いワンピースを着た黒髪の女で、気を失っているのか眠っているのか、目を閉じ、力なく壁に寄りかかっている。お世辞にも人相の良い人間ではない。衣服はところどころ茶色く焦げたような跡があった。

息はしているようだ。僅かに肩が上がったり下がったりしている。その肩を揺さぶってみたり、頬をぺちぺち叩いてみたりしたが、一向に起きる気配はない。

段々興味もなくなってきた。帰ろうとしたが、それは無理だった。行く手にもう一匹黒い犬が立ちはだかっていたのだ。

いや、もう一匹どころではない。気付けばケムリは、数匹の犬に囲まれていた。雑種も血統書のついていそうな綺麗な犬もいて、統一感はない。

ケムリは緊張感もなく首を傾げた。
ダルメシアンが女の服の裾を加えて、こちらをじっと見つめてい
る。

ケムリは得心し、女を背中におぶり出した。

周囲は凄じ騒ぎだった。

ナルカミはその中心にいるにも関わらず、周りを気にしているよ
うな素振りを見せていない。

さつきからずっと、自分の手をしみじみと眺めているだけだった。
涙を懸命に堪えながら、そうしているのだ。

周囲の人間達は何とかナルカミを捕えようと息巻いているのだが、
それは果たせずにいた。それどころか、彼女に指一本触れることも、
近付くことすらできていない。

本来ウィンドネル城を守っているはずの風の障壁が、今はナルカ
ミを守護しているのだ。

しかしナルカミはそんなこともどうでもいいようで、ただへたり
込んでいた。

突然、一際大きな声がナルカミを呼んだ。

「おい！そこの者！」

若い野太い男声だ。

その声だけはナルカミにも届いたようだ。彼女は手を見つめるの
をやめて、障壁の向こうに目を向けた。

そのとき初めて風の壁や周囲の騒ぎに気付き、ナルカミはぽかんと口を開けた。ついでにいつの間にかあの黒髪の女もいなくなっている。

「我々はあなたを傷つけようとしているわけではない！むしろ保護したいと存じている！どうか安心して、この風壁を解いてほしい！」

叫んでいるのは、黒い帽子と緑の制服を着込んだ男だ。本で見た、朝衆の昔の警備隊のような服装だ。この街にしては珍しくきつちりとした服を着ている。

彼の声が聞こえたはいいが、しかしこの風壁はナルカミにもどうしようもない。カザミ様の仕業だということはあるが、本人はここにはいないし、この風がどういうシステムになっているのかすらわからないのだ。

あらゆる意味で途方に暮れたナルカミは、悲しそうに男を見つめることしかできなかった。

「くつ。何なのだ、あの少女は。言語がわかっているのか？こつちを向いてばーつとしていただけではないか。あれが本当に雷族の長なのか？」

強靱な風に足元を掬われないよう、しっかりと大地を踏みしめながら、クラゲは呟いた。

この風壁が彼女をけしからん者達の魔の手から守っているのはいい。しかしこれでは安全に保護したいと考えている者も近付けない。そして街自体にも被害が出ている。少女に近いいくつかの窓は、

もうすでに割れていた。

しかし雷の族長が何故風を操っているのだ？そんな能力も持っているのか？

危険と未知に挟み撃ちされた気分、クラゲの顔はさっきからどんだん険しくなってきた。

と、突然、人混みの一部が割れた。

「はいはい、ちょっとどいてねー」

甘ったるい声と共に現れたのは、ベージュの長い髪としなやかな体躯の美女だった。右側の目の周り頬には、ハートのタトゥーを彫っている。

彼女がひとつ歩を進めるごとに、純白のワンピースは流れるように舞い、同時に甘く爽やかな香りも舞った。

「な、何だ、パフ。あなたはこういうところに来る人間じゃないだろっ」

やや頬を赤く染めながらも、クラゲは手を振ってパフを追い返す素振りをした。

頬を染めているのは何もクラゲのみではなく、集まっていた野次馬の幾人かも同様の反応を見せている。

しかしパフは慣れているようで、特に気にも止めていない様子だ。

「いいでしょ。別に」

そして風の中にある少女をまじまじと見つめた。

「ふーん、すごい風ね。こーゆーの好きよ、愛の力ってやつね」

クラゲのほうは眉を潜めて、パフを見つめた。

「ここは危ない。あなたなんて軽いからすぐ飛ばされてしまうだろう。さっさと店にお帰りよ」

パフは唇を尖らせた。

「何よ、子ども扱いして。そんなこと言っただってあなた、全然何もできてないじゃない」

クラゲは不服そうに顔をしかめる。

「さっきからあの少女に呼びかけているのに、彼女が全く反応しないのだ。おいっ、その者！この風を止める！」

……………。

「……………な？」

名誉挽回でもしたつもりなのか、クラゲはそう言っただけでパフの顔を伺った。

しかしパフは呆れたように一言、

「馬鹿ね」

とだけ返した。

クラゲは屈辱に顔を更に赤くした。パフに呆れられたのが悔しか

ったのではない。それを見てにやつく者が周りに何人もいたことが悔しいのだ。

対照的にパフのほうは、得意気に鼻を鳴らした。

「いい？あの子に話しかけても物事は解決しないのよ。あの風を起こしてる本人を説得しなきゃ」

そう言うと、パフはきよとんとしているクラゲ達を無視して、目の前の風そのものに呼び掛けた。

「ねえ、聞こえてるんでしょ！？風の王様！わたし達はあの子に危害を加える気はないし、加えさせる気もないわ！もしそうなりそうになったとしたら、また何もかも吹き飛ばせばいいじゃない！このままにしてたって、どうにもならないわよ！」

一瞬の後、風はまるで最初から何事もなかったかのように消えた。それがあまりにも素早く、突然消滅したものだ。だから、クラゲはしばらくそれが消えていることにも気付かなかった程だ。

パフは得意気な笑みを強くしてこちらを振り返ってきたが、クラゲは逆に顔を強張らせた。

周囲の民衆が、壁が消えた途端一斉にナルカミのほうに押し寄せたのだ。

大半の者は珍しがってとか、取り押さえるためとかいう理由だと思われるが、ここは夜衆。騒ぎに乗じて良からぬことを企む輩もいるに違いない。

しかし風壁のため、クラゲさえ離れた場所にいたのだから、もうなだれ込む大衆を止めることはできない。

ついに大衆に埋もれ、ナルカミの姿さえ見えなくなったとき、

水しぶきが上がった。

第五章：塩水の破女（前書き）

誤字の修正と読みやすくするための改行作業を行っています。
同時に新しい章も更新しているので、修正されるところとそうで
ないところにも（最初と最後）があります。
少しずつ直していきますので、お待ちいただければ幸いです。

第五章：塩水の破女

それは先程の風壁のようにナルカミを囲む形で生じた。

何もないところに突如発生した水柱。それも少し塩臭い。跳ねたしぶきを舐めたらしょっぱかった。

海水？

とぐるを巻くように上昇するそれは、天井にぶつかると盛大に弾けて覆い被さってきた。

「どうしよう」とか「溺れてしまう」とは思わなかった。何かの確信があつたわけではなく、そんなことを考える一瞬の余裕すらなかったのだ。

だから目をつむる暇もなかった。ナルカミが目をつむったのは、自分に襲い来る水が寸前でさらに弾けた後だ。

そうして風の音と、水の音しか聞こえなくなった。

三秒程待ったが、一向に自分が濡れたり溺れている感覚はない。

不思議に思ったナルカミは、恐る恐る目を開けてみた。

すると丁度最後の水流が自分の周りで落ちていくところだった。

しかし飽くまでも自分の体には触れていない。半径一メートルくらいのところで、またしても風壁が吹き荒れているのだ。しかも先程のものよりも強い。

何故こういつも、守ってくれるのだろう……。

不思議で仕方がなかった。

水が完全に地面に落ちたと共に、風も収まった。

その様子を眺めながら、ナルカミはカザミの寢室を思い出していた。

ベッドとカーテンのみの虚無の空間。何物にも執着を見せない、あのスタンスの象徴のような部屋だった。

なのに、何故自分に対しては違うのだろう。

恐らく感覚としては理解しているのだろう。彼の想いを。拒む理由も感情も、持つてはいない。

それなのに素直になれないのは、きっと記憶がはっきりしていないからなのだろう。

結局、記憶が無い限り、自分と彼の関係など薄っぺらいものだ。だから、知りたいと思う。でも、知るのが恐いのも確かなのだ。

どうして

己の噛み合わない気持ちに居ても立ってもいられなくなったとき、耳慣れない声が聞こえた。

「もーっ！どーしてみんな我慢してられないの！？超信じらんない！ふっー族長のあたし達が獲物をいただくのが先決じゃない！？ねっ、エンジ！」

「そーだよそーだよ！めっちゃぶざけんな！それにそんなに一変に押し寄せたらナルカミがつぶれちゃうだろ！？めっちゃ自己チュー！」

ナルカミを現実に戻したのは、そんな勝手な言葉達だった。

どちらも子どものようにでいて、でも大人だということはわかる声だった。

声のしたほうからは、二人の男女が近付いてきていた。

一人は水色の透き通った髪と、猫のように吊り上がった大きな目を持つ女。黒いハンチングを被り、ゴスペン調の服を着ていた。

もう一人は犬のような三角の耳と尻尾を持つ、背の高い男だった。ナルカミは反射的に炎族だと認識した。いつか読んだ本に、炎族は獣人だと書いてあったはずだ。

二人は足が水に濡れるのも構わず、ばしゃばしゃと音を立てながら向かってきた。

先程ナルカミに押し寄せて来ていた者達は水流に弾かれたようであり、かなり離れたところにぼつぽつといる。水色髪の女と炎族の男を見て、こっちに来るのは諦めたらしい。

堂々と登場した二人だったが、端に避難していた制服の男に呼び止められた。

「ナミダ様！何てことをしてくれるのです！」

二人は足を止め、声のしたほうを振り返った。

「あっ、クラゲだ！ねえねえ、あたし凄いでしょっ！？偉いでしょ！？ナルカミのこと守ったよ！」

ナミダと呼ばれた女は明るく言ったが、それとは対照的に、クラゲと呼ばれた男は顔を険しくした。

「何てことをしてくれるのです！街が水浸しじゃないですか！」

ナミダはクラゲの言っている意味がわからないとでも言うように、勝気そうな瞳をしばたかせた。

クラゲの隣ではタトゥーの女が顔をひきつらせていた。そんなことはお構いなしに、クラゲはなおも続ける。

「地下街は蒸発が非常に遅いから、街の修復にも時間がかかるってあれ程言っただじゃないですか！なのにまたしてもこんなに水浸しにってしまったって……！」

そこまで言ったとき、ふいにナミダの顔が歪んだ。

「……とはいえナルカミ殿をお守りしたのは素晴らしいことですが、いやはやさすが我らが水族の長」

途端、態度を一変させるクラゲ。

そして言われたナミダも表情を明るくする。

「でしょでしょ！？やっぱりあたしってば超偉い！」

ナミダが笑顔を見せると、いつの間にか生じていた緊迫した空気がほどけた。

不思議とナルカミまで胸を撫で下ろしていたのだ。

そんなときふと気付いた。

クラゲもタトゥーの女も、とりあえず見ているのはナミダの方向だが、その隣にいる獣男にもちらちらと視線を送っている。二人は両方の人物の機嫌に気を配っているようだ。

ということは、理由はどうあれこのコンビは両方とも要注意人物なのだろう。

ナルカミは、彼等にはなるべく近付かないようにしようと決意した。

しかし気を取り直したナミダは、そんなナルカミの小さな意志もお構いなしに、こちらに向かって再び歩いて来る。

獣男がそれに続いた。

ナミダはまるでそこに水などないかのように軽々と進んでくるので、同時に飛沫も軽々と、しかし盛大に上がっている。彼女の黒いロングブーツや服の所々がその度に濡れていたが、当人はそんなことも気にならないようで、ずんずん近寄ってきた。

ナミダの蹴散らす水滴がナルカミにも当たって、ああ折角のお洋服が、と少し残念になったが、そもそもその前から自分は相当濡れていることに気付いた。

さつきから自分はへたり込んだままの状態である。当然、ワンピースのスカート部分はびしょ濡れだった。

そういえば随分寒い。当初地下街に入ったときは、熱が籠っているのか随分と暖かく感じたが、冷水に浸っているのだ。寒気を感じて当たり前である。

気がつくといよいよ悪寒を感じるようになってきて、ナルカミは立ち上がった。体が僅かに震えている。無理もない。秋も半ばを過ぎた。

ナルカミが起立すると、いつの間にかナミダが迫っていて、顔を覗き込んできた。

あまりに顔面どうしの距離が近かったので、ナルカミは身を退こうとする。しかし体調の悪さと水の抵抗が相まって、一瞬体がぐらついた。何とか持ちこたえたが、やはり目と鼻の先にはナミダの興味深々な表情がある。ナルカミは離れるのを諦めて、代わりに視線を逸らした。

大きなエメラルドグリーンの視線をひしひしと感じ、頬が紅潮する。恥ずかしい。こんなに顔を近付けられたのは初めてかもしれない。

何の前触れもなく、ナミダの顔がぱつと遠退いた。反動で彼女の巻き毛が流れ、ナルカミの喉を霞める。

「きれーい！」

離れたナミダが、感嘆したように叫んだ。

その言葉はナルカミに、いつぞやのクロの言葉を思い出させた。しかしナミダの声音はひたすらに純粹で、何の裏もなく無邪気にそう言っているようだ。

ナミダは振り返って獣男を呼ぶ。

「見てよエンジ！ナルカミの目玉！超綺麗！！美しい！！きらきら光ってる！至極の芸術品だよ！」

それに応じてエンジと呼ばれた獣男も歩み寄ってきた。そして自らも目を輝かせながら、ナルカミの瞳を覗く。

「ほんとだ！めっちゃ綺麗！！宝石みたいだ！」

ナルカミは顔を赤くしてうつ向いた。

手放してこんなに誉められたことはなかったのだ。それがナルカミを誉めているのではないことがわかっていても。

二人は恐縮しているナルカミをよそに、はしやぎまくっていた。

「これはもう人間衆宝決定でしょ！」

シュウホウ？何だろう、それは。

「うん！そうだね！決まり決まり！！あ、でも他衆の人間を衆宝に指定してもいいの？」

「んー。まっ、いんじゃない？」

「そだな！今度会ったらダイヤとフブキにも言っとかなきゃな！」
「うん！！！」

何だか自分には全く意味のわからない世界で、話がどんどん進んでいるようである。あんまり大したことが起こらなければいいのだけれど。そしてこのまま自分のことは無視したまま、二人が去ってくればいいのに。

しかし勿論そんな上手くいくはずはなく、ナミダは早速、再びナルカミに注意を向けてきたのだった。

第六章：歌わぬ金糸雀

ナミダは、今度はナルカミ自身に問いかける。

「ところでさあナルカミ！君って雷操れるんでしょ!？」

「え……」

いきなり話を振られたので、ちよつと返答に戸惑ってしまった。

「えと、は、い。……一応……」

さっきのように反射的に出てしまうこともあるから、まだ完璧とは言えないが、恐らくこれは「操れる」の部類に入るだろう。

自信なさげに言ったナルカミではあったが、ナミダにしてみれば肯定の言葉のほう格段にインパクトがあったようだ。

「ほんと!？すごいすごい!!えへへ……じゃあ、さあ?」

ナミダの目が物欲しげな色に染まり、ナルカミは強烈に嫌な予感を掻き立てられた。

この予感が当たらないで欲しいと瞬時に祈ったが、同じく瞬時にその祈りが届かなかつたことも理解した。

ナミダはこともなげに言っただけなのだ。

「みーせてっ!」

楽しそうに楽しそうに彼女は笑う。

エンジも、いや、ゆっくりと近付いてきている、タトウの女と

クラゲまで、期待の顔でこちらを見ている。

ああ、それもそうか。

ナルカミは小さく唇を噛んだ。

彼等はきつと、まだ自分の幼さを知らないのだ。

雷族の長なのだから、その力を宴会芸の如く見せることなど容易なのだと思っっているのだろう。

しかしそれは、強大な力を持つナルカミだからこそ、できない話だった。

人の期待を裏切るといふのはとても怖かったが、仕方がない。

ナルカミは覚悟を決めて口を開いた。

このまま沈黙していればしている程、きつと言い出せなくなるから。

「……………あの、できません」

覚悟を決めたわりには控え目なナルカミの主張に、そこにいた全員が肩を落とした。

そして予想通り、ナミダが真っ先に不満そうな声を上げる。

「えー！？できないなんてことないでしょ！？あたしちゃんと聞いたんだから！君が超特大の電気玉を悪い奴にぶっつけてやったってー！！」

「え、いや、あの、あたしはそんなことは……………」

何だか事実が大きく改変されている。

「じゃあ何！？君が雷族の長って話、嘘だったの！？」

一変してナルカミを責めるような顔つきになったナミダは、ナルカミに詰め寄る。

ここで「嘘だ」と嘘を吐いてしまえば、或いは楽になったかもしれない。

しかしナルカミは、咄嗟にそんな嘘を吐ける程頭の回転が速くなかった。

「ち、違います……!!」

むしろ責められるのが嫌で、必死に否定してしまった。

「じゃあどうして!?!」

他の三人は困った顔をしてはいるが、止めはしない。

ナルカミはワンピースの裾をきゅっと握りしめ、言う。

「あたしはまだ……力をコントロールする自信がないのです」

たったそれだけの言葉を紡ぎ出すだけなのに、こんなに勇気がいるなんて。

恐る恐るナミダの顔を窺った。

案の定彼女はつまらなさそうにナルカミを見ていて、ちくりと心が痛む。自分が悪くはないことなど承知はしていたけれど。

しかしナミダの反応は、「つまらなさそう」だけでは済まなかった。そして彼女は顔を歪めて叫ぶ。

「嘔吐き!ほんととはできないんですよ!?!」

ナルカミは目を剥いた。
そして、その瞬間自分の中に黒く悲しい感情が沸き上がってくるのがわかる。
何だろう。

切なくて、情けなくて、苛立たしい。
そう、これはもしかしたら、「屈辱」？

気が付くと、ナルカミも叫んでいた。

「できません!」

存外に大きな声が出て、急に恥ずかしくなった。
馬鹿だ。

ナミダはナルカミの返答を聞くと、子どものように得意気な顔になった。

「じゃあやってみせてよ!」

どうやら彼女は挑発しているのではなく、本当にナルカミができないと思っっているらしい。だとすれば、ナルカミにとっては余計悔しい。

それでも、要求を受けるわけにはいかなかった。

「……できません」

力無く呟く。
そして付け足す。

「できるけど、できません」

ナミダはより一層疑わしそうな目を向ける。

そしてまた何か言おうとした刹那、

「本日のアイスクリームは残り二十個、残り二十個となりまーす！
まだお買い求めになっていない方はお早めにお越しくださーい！」

拡声器で増量した音声か、辺り一帯に響いた。

即座にナミダの目が変わる。

「今の、もしかして『パウダースノー』の!？」

エンジンも焦った顔をする。

「みただよ！早くしなきゃ売り切れちゃう！めっちゃばい!！」

「急ごう、エンジン！ケムリにお土産約束したんだ!！」

「うん!！」

そして二人揃って、来た道を駆けて行く。

更に、あるうことにナミダは、去り際ナルカミに笑顔でこう残したのだ。

「ばいばい、ナルカミ！また今度ね!！」

エンジンもそれに倣って、手を振る。

ナルカミは啞然としてしまった。
だって、さつきまで、あんなに怒ってたのに。
ぼかんとしているナルカミを見て、タトゥーの女が苦笑した。

「まあ驚くのも無理ないわよね。あの子、目の前にあることにしか気が回らないのよ。だから、すぐ忘れちゃうの。良くも悪くも、ね。許してあげて」

言って女は、色気たつぷりの笑顔をナルカミに見せた。

何故か恥ずかしいような気分になる。

「わたしはパフ。正式名称は……ま、言っても問題ないか。周知の事実なわけだし。パフュームよ」

「ぱ、ぱひゅ……む？」

上手く言えていないナルカミを、パフはけらけらと笑った。

「別にそれが言えなくても問題ないけどね。パフって呼んでね。で、こっちが……」

「パフ。私は地下街復旧作業のために人を集めてくる」

「あつ、ちよつと待ちなさいよ、自己紹介くらい……！……あー、馬鹿ね、あいつ」

さつさと、しかしぎこちなくその場を後にしたクラゲを見て、パフは溜め息を吐いた。

「あの人女の子が苦手なのよ。特にあなたみたい綺麗な子は、ね」
「え、と、とんでもないです」

ぶんぶんと首を横に振るナルカミに、パフは笑みを深くした。

「あら、そういう謙虚なところとか、あいつ好きそうだわあ」

「ほ、ほえ」

体は冷めてるのに、顔は熱い。ナルカミはここを今直ぐに逃げ出したい衝動に駆られた。

耳まで真っ赤になったナルカミを見て、パフは再び声を上げて笑った。

立ち居振る舞いは大人っぽく色っぽいのに、笑い声だけはまるで街娘のような感じだった。

「冗談よ。冗談つてことにしてあげる。じゃないと怒られちゃう」

そうでしょうか？とナルカミ自身に同意を求められたが、ナルカミには意味がわからなかった。

「あの人はね、クラゲっていうの。夜衆の治安改善のために働いてるの。馬鹿でしょう」

しかしそう言ったパフの目には、ちっとも嘲りの色など含まれていなかった。ナルカミははいともいいえとも言わなかった。

パフの話が一段落したところで、ナルカミもようやく口を開く。

「あたしは……ナルカミといいます」

「うん、知ってるけどね。それであなたは何のためにここに来たの？」

一瞬どう言おうか迷ってから、小さな口を動かす。

「……旅行です」

パフの目が大きく見開かれた。信じられない、とでもいうように。そして大仰に首を振ると、片手で頭を押さえた。

「それで、この街に一人で来たっていうの？」

「はい……」

パフの眉間には皺が寄っている。

しかしそんな顔さえ様になっているのだから、美人は得だ、とぼんやり思った。

「あたしはてつきり誰かに拐われでもして、ここまで連れて来られたのかと思っただわ。それが何？旅行ですって？一人で」

これだから貴族は、と口走ってから、直ぐに彼女は訂正を入れる。

「いえ、違うわね。貴族であれば余計用心するはずだもの。つまりあなた、馬鹿よ」

思ってもみなかったことをぐさぐさと言われ、ナルカミの体はどんどん小さくなっていった。

パフはそんなナルカミを見て小さく息を吐くと、真面目な顔に戻って問うた。

「これから、どうするつもり？」

唐突なその言葉に、ナルカミは目をしばたかせた。

正直、驚いた。

自分にそれを選ぶ権利があるなどは、思ってもいなかったのがある。ばれた時点で、もうゲームオーバーだと思っていたのだ。

それを言ったら、パフは誇らしげに胸を張った。

「ここをどこだと思ってるの？夜衆よ。自由の街ミッドナイトストリートよ」

ま、だけど、と彼女は付け足す。

「自由を認められてるのが良い人間とは限らないわけで、むしろこの街にはいわゆるちんぴらも多いのよね」

パフは鼻を鳴らすと、周囲を見やった。

ナルカミもそれに倣う。

いつの間にか、また大勢の野次馬達が、遠巻きにこちらを見ていた。

成る程。

ナルカミはぶるりと身を震わせた。

つまり、ナルカミのことが知れ渡ってしまった以上、一人での行動はとんでもなく危険なのだ。

カザミ様はいるけれど……姿の見える誰かがいてくれないと、やっぱり不安だ。

「当てはあるの？知り合いとか」

視線をナルカミに戻したパフが聞く。
ナルカミは情けなさそうに首を横に振った。

「いえ……ないんです」

ふーん、そつか、と、パフは頷く。

「じゃ、あたしんどこに来る？」

あつさりと言い放たれたその台詞に、ナルカミは目を見張る。

「あどどのくらいここにいるつもり？まさかもう出発するだなんて
言わないでよね」

「あ、いえ、今日ここに来たばかりなのです。どのくらいいるかは、
考えてなかったのですが……一通りめばしいものを見てからにしよう
かな、なんて思っていて……」

パフはそう、と頷く。

「じゃあやっぱりうちに来なさいよ。寝るところと食べるものと、
それと最大の利点として、安全を保障してあげるわ」

「い、いいのですか？」

勿論よ、とパフは答えた。

「そつね、一日10000サムでどうかしら？」

きよとんとするナルカミ。

「さ、さむ？」

「言つとくけどこれ以上は負けられないわよ。あなたみたいな重要人物を預かるんだから、妥当、ううん、全然安い金額だと思うの」

言つてパフは妖艶に微笑んだ。

「金額……お金を、払つのですね」

「ええ。けちなことは言わないでね。朝衆の族長様なら、それくらい簡単に出るでしょ？」

ナルカミは首を傾げた。

「すみません、わからないです……。ちょっと待つてください。持つてるお金を見せますので、いくらあるのか数えていただけますか？」

言つて、ウツにもらったバッグの中から、小さいケースを取り出す。ウイルの車中で色々物色してみたのだが、きつとこの中の紙がお金なのだと思う。

差し出された財布を訝しげな顔で受け取つたパフは、中身を見て眉を潜めた。

「これで有り金全部？」

頷くナルカミ。

「嘘でしょ？30000サムしかないわ」

その言葉に、何故か周囲の野次馬の四分の一が消えていた。

第七章：フレグランス・レイディー

しかしその事実が意味するところをわかっていないナルカミは、
こういうときに限って冷静な顔で言った。

「わかりました。じゃあとりあえず三日間の契約でお願いできますか？その間にあたし、その、お仕事見つけて、もっとここに居られるよう頑張りますから」

パフはナルカミの顔をまじまじと見た。その顔に嘘がないことを見てとると、ふん、と鼻を鳴らす。そしてナルカミのおでこをぴしりと弾いた。

「！」

思わず目を瞑ってしまったナルカミが次に見たパフの顔には、諦めと苦笑が混じっていた。

「馬鹿ね。あたしは持ってない人から金を巻き上げる程鬼じゃないわ。一日で10000サム稼ぐのだって普通無理だろうし、そもそもあなたを雇うところなんて、ちんぴらか頭のおかしい奴よ」

明るく言い放ったパフに、肩を落とすナルカミ。

「じゃあどうしよう。」

一度城に帰ってオト八にお金を……いや、駄目だ。城を出るときあんなに怒っていたではないか。きつとそのまま城から出してもらえない。

それともカザミ様に？それも駄目だ。そんなこと、恐くて頼める

はずもない。

そもそも自分は記憶を無くす前、どうやって生活していたのだろう。親は？

どんどんと逸れていくナルカミの思考を、パフの言葉が遮った。

「それじゃナルカミ、やっぱりあなたうちに来るべきよ」

困った顔をするナルカミ。

「あの、だからあたしにはお金が無くて……」

「そのことはもういいわ。わたし、大きくはないけど、お店をやっているの。丁度バイト募集しようと思ってたところなのよ」

「バイト……とは、何ですか？」

そんなことも知らないの？と、逆にパフは不思議そうな顔をした。

「アルバイトよ。ってああ、そっか。貴族には馴染みのない言葉よね。まあ、要は仕事の手伝いよ。お給料はそんな良くはないかもしれないけど……三食宿付き安全の保障は変わらないわ。どう？」

ナルカミの顔がぱあっと明るくなる。

「いつ、いいのですか!？」

パフはにやりと笑んだ。

「契約成立ね。いいわ、店に案内してあげる。付いて来なさい」

姿勢良く歩き出したパフに、ナルカミも上機嫌で続く。

パフが歩くと、民衆の壁は自然と割れた。ナルカミに手出ししてくる者も一人もいない。

「ね？安全でしょう？」

得意気なパフに何度も頷くナルカミ。

「凄い！どうしてですか！？」

「あれを見なさい」

パフが顎で示した方向を見やると、いつの間にか戻って来ていたクラゲがこちらを見ていた。ナルカミと目が合うと、思い出したように誰かに指示を出す。

「会員番号一番よ」

「え？」

ナルカミの目が点になる。

「ストーカー、元い親衛隊ってやつよ。会員番号は1から759まであるわ。増えてなければね」

「えっと……パフさんの？」

ええ、とパフは事も無げに頷く。
そんな彼女の後姿を、ナルカミは羨望の眼差しで見つめるのだった。

「見えてきたわ。あそこがわたしの店よ」

十分程歩いたとき、パフが前方を指差した。
まだよく見えないが、とりあえず紫のネオンで輝く看板はわかつた。

「ないと……がある？」

アルファベットでそう書いてあった。

「どつという意味ですか？」

聞くと、パフはふふんと笑う。

「『夜の少女』よ」

釈然としない顔で、ナルカミは相槌を打つ。

「何のお店だか、わかる？」

ナルカミは浮かない顔で答えた。

「女の子、売るんですか？」

ぶつ。

唐突に吹き出すパフ。そしてけらけらと笑い出した。

「安直ねー、あなた！」

そしてふいに顔をしかめる。

「てゆうかわたしそんなに悪人顔なわけ？確かに夜衆には奴隷売買とかもあるけどお」

『奴隷』という単語に反応して、ナルカミの肩が震えた。同時に生まれる焦燥。

駄目駄目。折角忘れてたのに。あたしは今を楽しむのよ。必死に言い聞かせたが、結局不安が消えることはなかった。

「あたしがやってるのはあ、ま、いわゆる水商売ってやつかしら？」

言って、ちらりとナルカミの反応を窺ってきた。

「……お水を売るのですか……？」

「あら」

パフは拍子抜けしたような顔でナルカミを見つめる。

ナルカミもきょとんとした顔でパフを見つめ返す。

やがてパフのほづが諦めたように目を逸らした。

そしてぼやく。

「あーあ、つまんないの」

「え、え？」

何かまずいことを言ってしまっただろうか。

パフは不機嫌そうに言った。

「正解よ。あたしが売ってるのは水。ただし、香り付きのね」

「ふああああ……！」

パフが店内の電気をつけるや否や、ナルカミは歓声を上げた。

複雑なモチーフの描かれた薄紫色の壁紙。適度に装飾的な陳列棚やカウンター。

そしてそこかしこに並ぶ、色とりどりの小瓶達。丸かったり四角かったり、ハートの形だったり、小瓶の形も様々だ。ラベルにもそれぞれ違う文字が並んでいる。「WIN HEART」、「LEMON SQUASH」、「POP LADY」などなど。

それらを優しく照らしているのは、吊り下がった二つの小さなシヤンデリア。

そこはかたなく乙女な空間に、ナルカミの心も弾んだ。

パフも、ナルカミの反応に気を良くしたようだ。

「どう？なかなか可愛いでしょ？家具も瓶も、全部わたしがチョイスしたのよ」

「パフさん凄い……！特にこのカウンター、本当に素敵です……！」

笑みを深くするパフ。

「ナルカミ、あなたなかなか見る目があるじゃない。サンライズエリアのアンティークショップで買ったのよ。結構値が張ったんだから。全くあのむつつり店主ったら、全然負けてくれないの」

パフの愚痴は適当に聞き流し、ナルカミはカウンターのつやつや

とした表面をうつとりと撫でた。

「あなたそういう顔できるのねえ」

パフが何故か感心したように呟いた。
そして思い付いたように言う。

「そうだ、ナルカミ、ちょっとその椅子に座ってみなさいよ」
「これ、ですか？」

カウンターの椅子を指差して、首を傾げる。

「ええ」

訳もわからないまま、ナルカミはとりあえず控え目に腰掛けてみた。

そして数秒も経たない内に、「もういいわ」と言われる。

「えと、何でしょうか」

「おずおずと立ち上がるナルカミ。」

「うん。何でもないわ」

にっこりと微笑むパフ。

ナルカミは眉を潜めるしかなかった。

「さてと。まず必要なのは……うん、カラコンね。じゃ、ちょっと買って来るから、留守番よろしくね」

「だ、だいじょぶですか？」

パフがいなくなるのは心配だった。自分に殺到する群衆が、まだ忘れられない。

しかしパフは明るい調子で、「大丈夫よ」と言う。

「鍵をかけたわたしの店に入り込もうだなんて、わたしのストーカー元い親衛隊が許さないはずよ」

それでもまだ不安そうなナルカミに、パフは溜め息を吐いた。

「安心なさい。万が一誰かが押し掛けてきたら、その椅子に座るがいいわ」

「え、ええ？」

椅子とパフを交互に見比べたが、パフはそれについてはもう何も言わなかった。

そして、

「じゃ、行ってくるわ」

と元気に店を出ていく。

後に残されたのは、ナルカミと、アンティークの椅子。

とりあえずナルカミは、また控え目に椅子に腰かけたのだった。

第八章：帝王と侍女

「世話の焼ける奴だ」

いきなりそう呟いて溜め息を吐くものだから、オトハは一瞬、カザミに話しかけるのを躊躇ってしまった。

美しい植物が色とりどりに生え出^{いで}、小川のせせらぎが聞こえる広大な中庭。そこに面した吹き抜けの回廊で、カザミを見つけた。

最近はまだ段々と寒い時期になってきており、深夜のこの時間帯では息も白くなる程だ。

今日のカザミはやけに不機嫌そうな空気を放っている。どうせまた嬢様をストーキングして、一喜一憂しているのだろう。そのまま観察していようかとも考えたが、カザミは既にこちらに気付いていた。

諦めて丁寧にお辞儀する。

「おはようございます、カザミ様。朝食の支度が整いました」

カザミはそうか、と頷いた。しかしそこを動く気配はない。

オトハはもう随分昔から、カザミが時々ここに来て、何をすることもなく立っているのを知っていた。

正確な時期はわからないが、恐らくその慣習が始まったのはナルカミが誘拐されてからだろう。

また、ここがカザミとナルカミにとって意味深い場所であることも、オトハは知っていた。

複雑な心境を胸に抱きつつも、今はただ事務的な会話にとどめておく。

「折角の朝食が冷めてしまえますわ」
「……………そうだな」

力の籠らない声で答えると、カザミはようやく歩き出した。
オトハもその後を追う。
彼の背中からは、それ以上何も告げられない。

沈黙に耐えかねたオトハは、気がつけばカザミに話しかけていた。
「嬢様は、今どこにいらっしやるのですか？」

カザミはこちらを向くことなく答えた。

「ミッドナイトストリートだ」
「なっ……」

それっきり、絶句してしまうオトハ。
しかしオトハが立ち尽くしているのを知ってか知らずか、カザミは気にも止めずに先を行く。
慌てて小走りに追い掛けた。

「あんな無法地帯に嬢様が……………!？」
「俺の風をつけている。案ずるな」

そうは言われても、心配で心配で仕方がない。

「でも、付いているのは昼衆の者なのでしょう!？」

あんな者達と嬢様だけで夜の街を行くなど、心細いにも程がある。

「いや、少なくとも昼衆の者は付いていないな」

オトハは眉を潜める。

「では、朝衆の者が？」

「いや」

では、一体誰が？

「付いている、というか、今は夜衆の人間が集まってきているな。水族と炎族の族長もいる」

「……つまり、事実上嬢様の保護者は誰もいない、と？」

「ああ」

カザミは何とも思っていないように頷く。後から「俺以外はな」と付け足した。

しかしそんな付け足しに安心できるはずもない。

オトハは、怒っていた。

形の良い眉をきりきりと吊り上げる。

「カザミ様、あなた自己中心的過ぎでしょ」

カザミは沈黙を返すのみだ。

「あなたは嬢様のことなど全く考えておりません。ただ嬢様を手に

入れることしか頭に無いのです。嬢様の意思など、考えもせず……！」

少し間を空けてから、カザミは答えた。

「身勝手なのは何も俺だけではあるまい。ナルカミとて俺の気持ちを考えてなどないだろう」

「ですが……！」

拳を握り締めるオト八。

「嬢様は幼いのですよ！？待って差し上げてもよろしいじゃないですか！」

「その待ちの期間が一年だというのだ」

それに、と続けて、カザミはようやくオト八のほうをちらりと見た。

「あれは望んで幼くあるうとしているように見えるな」

ぐ、とオト八は言葉を詰まらせる。

それはオト八も気付いていたことだった。

「きっと、記憶が蘇ったとき生じる責任やら束縛やらが疎ましいのだろう。俺のことも含めてな」

そう言うカザミは、己を含め全てのものを嘲っているかのようだった。

それでもオト八は黙るわけにはいかなかった。

そんなことがナルカミを縛る理由にはならない。

「カザミ様、嬢様のそんなところを許す度量もないのであれば、あなたは嬢様から手を引くべきです」

立ち止まるカザミ。

最後の足音が回廊に反響した。

そしてオト八に向き直る。

「面白いことを言っな、オト八」

そうは言うものの、カザミの声音は全く面白そうではない。

オト八は改めてこの人の威厳を見せ付けられる。

カザミは冷徹非道の王と思われることが多いが、実際はそういうわけでもない。

常識もあるし、心もある。

ただひとつ欠けているもの、それは執着心だ。

何かを好きになることはないし、好かれようとするなんてもつての外だ。

だから、誤解される。目的のためなら手段を選ばない、冷酷な王だと。

そう噂される彼が、今はこんなにも感情的になっている。

たった一人の女を手に入れるために。

恋って人を変えるのね、とオト八は胸中で呟いた。

でも、カザミがどんなに本気になったとしても、それがナルカミを幸せにするとは限らないのだ。

「カザミ様。嬢様はあなた以外の殿方と結ばれたほうが、きっと幸福でしょう」

顔を歪めるカザミ。

そして考えるのも嫌そうに言う。

「黙れ。反吐が出る」

そして踵を返した。

しかしオトハは声を抑えながらも叫ぶ。

「ではカザミ様！あなたは、あなたが、嬢様を世界で一番幸せにできる断言できるのですか!？」

カザミは足を止めない。

「何も知らないお前が口を出すな」

去って行くカザミの後姿を見つめながら、オトハは唇を噛んだ。

「もう、もう怒りました。どうなっても知りませんからね」

オトハがそう言ったことをカザミは知らない。
そして、

「他の誰でもない。彼女が俺を選ぶだろう。これまでも、これから
も」

カザミがそう言ったことを、オト八は知らない。

第九章：自称獣と獣もどき

気が付いたとき、一番勘に触ったのはその匂いだった。獣のよう
でいて、人間のようできて。獣と人間が混在しているのではない。
これは別々の匂いなんかじゃなく、統一されたものな気がする。

次に勘に触ったのは、温度。何だかやけに暑い。今は秋も終わりの
季節だし、この暑さはおかしい。暖房の暑さでもない気がした。
何故なら取り立てて熱い部位と、そうでないところがあったから。
熱い何かを所々に押し当てられているようなかんじだ。

そして最後に、感触。ふさふさとした何かが、自分の頬に当たっ
ている。こちらは特に嫌なかんじはしなかった。それは触り慣れた、
犬達の毛の感触によく似ていたから。

うつすらと目を開けた。

何も見えない。真っ暗だ。

虚空を見つめながら、アイスは考える。えつとあたしは、何がど
うなって今に至るんだ？ 記憶を隅から隅まで引っ掻き回してみた
が、答えは得られない。最後の記憶は、白金髪の少女の手から、金
色の触手が伸びてきたところ。

あれは多分電気か何かで、あの子はやはりナルカミだったんであ
ろう。

ああしくじった。いくらやましいことが何もないとはいえ、もう
少し警戒しておくんだった。相手があまりに儂げな姿をしていたか
ら、油断していたのだ。外見など関係ない、ということを見失って
いた。また彼女に自分を傷付ける手だてがあるなどは、これっぽ
ちも思っていなかったのだ。ああ何て馬鹿なんだ、あたしは。

そうして雷撃にやられて気を失ったのか。

そうなると、ここは夢の中か？まさか失明した、なんてことはな

いだらうな。

不安に思ったアイスは頬をつねろうとしたのだが、できなかった。アイスは呆然としてしまう。

う、嘘だろ！？まさか失明した上に、手の神経がいかれたのか！？このときの彼女に、真つ暗な場所に自分が横たわっている可能性や、何かに動きを封じられている可能性など、頭を霞めもしなかったことは言うまでもない。

慌てて起き上がるうとしたが、それもできなかった。力を入れているはずなのに、体は一向に言うことを聞いてくれないのだ。痛みはない。なのに動かない。

アイスは絶望的になった。

いやだ、そんな、こんなのあたしじゃない。どうやってあたしを確認しろというんだ。これから、このあやふやな状態で生きていけというのか？ふざけるな、ふざけるな。ブチ、ポチ、シルウ、ア、もう一度お前達の凜々しい顔が見たい。いや、ここまで来ると、憎かった人間の顔まで見たくなくなる。ああ、クロ、会長、ココロ……。

いつの間にか、頬を涙が伝っていた。

ここで、こんなところで、終わるのか？いや、人生が終わりじゃないことはわかっていているけれど。でも、だからこそ、辛い。

涙が自分の髪の毛に染み込んでいった途端、何かが吹っ切れた。そしてアイスは、最後の悪あがきと言わんばかりに暴れ出した。

「う、うああああああああああああああああああああああああああああああ……！！！！！！」

動け……！動いてくれ！！

痛切な願いを込めてもがいた。

一瞬、ほんの一瞬だけ動いた気がした。だが、それさえ気のせいだったようで、またすぐ動かなくなってしまう。

駄目、か。

アイスは、観念したように息を吐いた。

唇を噛む。涙は止まらなかった。

「ん……」

突然もぞりと、自分の全身を通して何かが生じろぎする感触が伝わってくる。

あ、？ちよつと待て、何か嫌な予感がするぞ？

耳に規則的な微風が届く。いや、これは……息？

正面から伝わってくるのは、熱い、た、体温？ま、まさかな、はは。

試しにもう一度だけ、運動を試みてみた。一瞬だけ動いて、またすぐ封じ込められる。ぎゅっと。そう、ぎゅっと。

「んー……」

耳元で呻いたのは、子どものような声で、でも間違いなく男で……

「う、うわあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ！……！！……」

今度は別の恐怖で叫んだアイスであった。

「うるっさあああああいい!!」

アイスが何者かと格闘していると（ほぼアイスの一人相撲だったけれども）、ふいにそんな声とともに、ぱちりと灯りがついた。

同時に抵抗するアイスを尚も引き寄せようとする人物の様相も露あらわになる。

それは、狼の耳と尻尾を持った青年だった。背はかなり高いほうで、手足が異様に長い。そして、その長さを際立たせるように、がりがりに痩せている。栗色のくせ毛と虚ろな濃い灰色の目が特徴的だった。

で、もっと特徴的なことに、上半身裸だった。

「うぎゃああああああああああああああああああああああああああああ!!!!!!」

正当な、これは（うら若くはないけれど）乙女の正当な叫びだったと思う。

がしかし、そんなアイスの切実な訴えは、別の声に掻き消されてしまう。

「だからうつさいって言うてんでしょっ!!!!!!!!」

「そーゆーあんたの声がうつさいんじゃぼけ!!!!!!!!」

「ってゆーか誰だよさつきからわーわーわーわーウミか!？」

「ちっ、違うよ!失礼な!!さしずめクジラあたりが怖い夢でも見たんじゃないのお!？」

「ふっ、ふええええ!？あ、あたしじゃないよおおおお!!うああああああん!!!!!!!!」

「あーあ!泣かしてやんの!!いつけねーんだ!!!!!!!!」

「おっ、おにいひゃんおねえひゃんっ、けんかしいへよおおおお

放される。呆気無さすぎて、逆に心配になる程だ。

アイスが青年を警戒しながらも周りを見回す。

「どうやらここはベッドの上のようだ。天井はやけに低くて、夜空の絵が描かれていた。床は見えない。もしかしてここは、二段ベッドの上か何かだろうか。」

「参ったな、とアイスは頭を掻く。高いところは苦手だ。」

「苦虫を噛み潰したような顔で、下を覗くアイス。」

「……見なければ良かった。」

二段ベッドという予想は、近からず遠からず。そこは、五段ベッドの上だったのだ。向かい側のベッドも五段で、それぞれ一人ずつ人間が収まっていた。炎族の獣人も、そうでない者もいる。つまりこの部屋にいるのはアイスも含め十一人で、皆がアイスのほうを注視していた。

その内の、向かい側の一番下の段の少女が口を開く。

「ちよつとあんたなんですよ！？さつきからうるさいの！まだ十七時なのよ！？もうちよつと寝かせてよ！」

「十七時だと！？大寝坊だ！」と言いたくなるのをぐっと堪える。ここは夜衆なのだ。

しかしアイスが大人しくなったのを確認すると、少女はさっさと灯りを消してしまう。

「ち、ちよつと待ってくれ！」

「やあよ！あたしもう寝るんだから！お休み！」

それを機に、他の者達も布団に潜り込む音がする。

「じゃあもう一眠りすつかあ」
「もう起こすなよ、ひひひ」

呆然とするアイスの方が、くいくいと引つ張られた。見えないが、あの変態だろう。暫く無視していたが、しつこいので、冷えた声で答えた。

「何だ変態」
「寝る」

いきなり頭から布団をかけられる。
じ、冗談じゃない！
というか、正面のベッドから視線を感じるのは、多分気のせいではないだろう。

アイスは声を潜めて言った。

「おい、ここはどこだ」

離せと言ったら素直に離れたし、変態とはいえ言葉は伝わるだろう。

「ここは、俺の家」

まだ声変わりの済んでいない子どものような声で答えられた。

「何故あたしがそこにいるんだ」
「犬がいて、倒れてて、帰ろうとしたけど、犬がいたから、連れて帰った」

詳しくはわからないが、恐らく助けしてくれたということなのだろう。

しかし、よもや炎族の獣人なんぞに助けられてしまうとは。屈辱だ。

「で、お前は、何で、その、だ、抱きついてきたんだ」

顔を赤くして目を逸らす。暗いから見えてないだろ、どうせ。

「抱き枕」

顔の見えない青年は短く言い放った。

は？

「丁度いい、抱き枕」

ふ、ふざけるなああああああああ……！！！！
心の中だけで叫んでおく。

というか、獣人というのはこんなにもデリカシーのない人種だったのか！？

しかし、助けてもらったことは事実だ。

くっ、こんな奴に頭を下げるのは割に合わない気がするが……まあそれも見えていないだろう。

アイスは頭こぶを垂れた。

「助けてくれたことには礼を言おう。だが、それだけだ。本来ならば礼金などやってもいいところだと思うが、お前はその、まあ、つ

「まりあれだ。猥褻罪わいせつで五分五分だということだ。そういうわけで、じゃ」

「言っ
てアイス
は背を
向けベ
ッドを
降り、
よう
として、
頭を
抱えた。
そう
だ、そ
うだ
った、
ここ
は五
段ベ
ッド
の最
上階
だ
った。
しか
も真
つ暗
闇。
どう
しよ
う、
どう
す
れば
いい
んだ。」

「おい、ここを降りる方法ってあれか？梯子か？」
「ん」

残念ながら、肯定の意。

「他にないのか？」
「梯子？」
「違う、ここを降りる方法だ」

「んー、と唸る獣人。」

「飛ぶ」
「他ほか」
「落ちる」
「他！」
「んー、ない」
「……そうか……」

まあ、あまり期待はしていなかったが。どうしたものだろうか。

「ん？そういえばあんた、どうやってあたしをここへ運んだんだ？」
「俺が運んだ」
「なっ！？」

「こんながりがりなこいつが!？」

「ほ、本当か？本当にそんな力があんだにあるのか？」

「ん」

「そうか……」

「まだ信じられなかったが、自分がここにいるということが真実を物語っている。」

「重かった」

「ぶっ飛ばしてやりてえ。」

「こんな変態にまたも力を借りるのは不服だが……まあ背に腹は変えられない。」

「おい変態、頼みがある」

「んー？」

「あたしをここから運んで降ろしてほしい」

「少し間があってから返事があった。」

「い、褒美は？」

「舌打ちするアイス。」

「仕方ないな。いくら欲しい？それなりにわきまえた上で言うてみる」

変態はぼつりと呟いた。

「名前」

「あ？」

「名前で、呼んで。へんたい、違う」

呆気に取られた。そして溜め息を吐く。

ある種それは金を払うことより嫌だったが、まあベッドを降りたらこんなところは即刻おさらばだ。ならば安い要求と思うことにして、アイスは首を縦に振った。

「よかるう。あなたの名は何と言う？」

「……ケムリ……」

「よし、ケムリだな」

「ん。お前、は？」

う。そういえば、偽名を考えてなかった。

「あ、あー、アイビーだ」

少し返答に詰まってしまったが、ケムリは特に気にした様子もなく、

「アイビー……」

と呟いただけだった。

ひとまず胸を撫で下ろす。

「じゃあ、早速あたしをここから降ろしてくれ」

「ん。後で」

第十章：音無しの世界の住人

イエリースの館^{やかた}。

ウインドネル城には、そう呼ばれる洋館がある。

そこは、ウインドネル城で働く侍女達の寝泊まりする建物である。一階には応接室がある。侍女の館に応接室なんぞ必要ないのでないかと思いかもしれないが、ウインドネル城で働く侍女は貴族も多い。まあ、そうは言っても、大抵の場合は使うのはオト八だが。そして、今日もそこにいたのは彼女だった。

今はいつものエプロンドレスではなく、紺色のシックなドレスを纏っている。髪も普段は後ろでお団子にしてまとめているのだが、今は下ろしていた。オト八のファンが見たら泣いて喜ぶであろうこと間違いなしだ。しかし残念ながら、今そこにいるのはオト八一人である。

頭上では、城内では比較的地味めなシャンデリアが白く光っている。

オト八は椅子に腰かけて、何らかの書類の束を捲っていた。時折紅茶を口にしては、息を吐いて窓の外を見やる。

外は暗闇だ。陽は完全に落ちたようである。月明かりに照らされて木々の影が浮き上がっていた。

壁にかけられた時計に目を移すと、短い針が六の文字に近付いている。

廊下のほうはまだばたばたしているが、遅番でなければ、皆もそろそろ眠りに就く頃であろう。

再び書類に目を落としたとき、気付いた。
いつの間にか、辺りが静寂に包まれている。

唾を飲み込んだ。自分で呼んだとはいえ、オトハはこの空間があまり好きではないのだ。

顔を上げて扉のほうを見ると、いつの間にかそこには一人の男がいた。シルクハットに黒のチョッキ、ズボン、白のシャツ、そして黒いマントを着ている。赤い髪と白い肌が際立っていた。
背後には背の高い男が控えている。

赤髪の男は口角を上げると、シルクハットを取り、恭しく礼をした。
オトハも優雅に立ち上がり、腰を落として挨拶した。

先に口を開いたのは男のほうだった。

「ご機嫌麗しゅう、族長殿。お呼びいただき光栄に思います」

その低く朗々とした声は、耳から入るのではなく、直接頭の中で響いた。あまりの大音量の反響に、頭がくらくらする。

オトハは額に手をやり、呻いた。

「ムオン卿、もう少し、静かに話していただけますか？」

しかしその声は静寂を破るものとはならず、全く音にはならない。それがこの男の能力、「無音」である。

ムオンはちつとも悪びれた様子もなく、「これは失礼」と、少し音量を下げて言った。

とはいえ、ムオンの声も実際に音となって発されているわけではない。先程も言ったが、彼の声は聴力を介してでなく、直接脳に入り込んでくるのだ。何故かはわからないが、そもそも名の力に原理など求めても仕方がない。彼がそう信じたからそうだったのである。

しかしこっちの声が彼の脳内に響いているかというところ、そういうわけでもないらしい。ムオンはいつも読唇術で言葉を読み取っているのだそうだ。

彼は音族でありながら、音を聞いたことのない特殊な人間だった。

ひとまず、音量に関して配慮を示してくれたことに感謝する。

「ありがとうございます」

「いえいえ。すみませんね、あなた直々にお呼びいただくというのはこれが初めてのものです、気持ちが高ぶっていたようです」

オトハは微笑む。

「こちらこそ、突然お呼び出ししてしまい、申し訳ありませんでした」

「気にしないでください。むしろ仕事が終わってからで良いと言っただけだったことに感謝いたします。スケジュール調整が難しい日でしたので、助かりました」

そう言われて、少し罪悪感を感じた。

「やっぱりお忙しいですわよね。申し訳ありませんわ」

ムオンは気さくに笑った。

「あなた程ではありませんよ」

オトハはムオンの親切に感謝しながら、椅子のほうを手で示した。

「どうぞお座りになってください。そちらの方は……」

ムオンは首を横に振った。

「彼はお構いなく。部屋に居させてもよろしいでしょうか？」

きつと用心棒か何かなのだろう。

オトハは頷いた。

「それで、今日は何の御用でしょうか。まさか暗殺ではないでしょうね？」

席についてから一言目がそれだったので、オトハはやや厳しい視線をムオンに送った。

苦笑するムオン。

「その反応を見て安心しました」

そして自嘲気味に笑んだ。

「昔はよく頼まれて困ったものでした。雷族の要人を殺せ、とね。私に言ってくる程ですから、よっぽど人手が足りなかったんでしょ

うねえ」

オトハはそれについては何も言わなかった。そしてさもそれが自然であるかのように、話を変える。

「ナルカミ嬢を、ご存知ですね？」

ムオンはおや、というふうには眉を上げた。

「まさか本当にあんさ……」

「違います」

皆まで言わず言い切った。

「確かに嬢様関係ですが……彼女に察知されずに事を成し遂げたいのではありません。察知されたくないのは……カザミ様です」

するとムオンは、興味深そうに目を細めた。

「ほう……。いや、しかしすみませんな。そんなことは知らなかったものですから、堂々とここに来てしまいました」

「それはいいんです。例えこのやりとりを見ていたとしても、私の声が聞こえることはありませんから」

ムオンは「それもそうだな」と頷いた。

「ナルカミ嬢は今ミッドナイトストリートにいます。彼女にはカザミ様の風がついている。そのためあなたをお呼びしました」

「どづいことですか？」

首を捻るムオン。

「……くれぐれもこのことは内密にお願いしたいのですが……」

聞こえていないとはわかってはいても、気持ち小声を意識してしまおう。

「カザミ様の風が感知できるのは、音だけです」

「ほう……それは、初耳です」

「ええ。知っている者は少数だと思います。と、いうか、さもなくば私しか感知していないということも有り得ます。くれぐれもこのことは……」

「内密に、ですね。了解しました」

オトハは硬い面持ちで頷いた。

「そしてあなたにはこれを……渡してほしいのです」

先程眺めていた書類の束を、テーブルの上に置いた。

それを見たムオンの顔が、驚き一色に染まる。そして楽しそうな声言で言った。

「いいのですかな？」

「と、いうことは、あなたはこれがかわかっていきますのね？」

頷くムオン。

「実家から同じようなものが大量に送られてくるのですよ。いやはや、親というものは心配性でなりません。そしてあなたも、相当

の心配性にしてお節介です」

言っつてにやりと笑う。

「何と言われても結構です。私は嬢様の幸福を真に願っているのです」

一貫した態度を取るオト八に、ムオンはふうむ、と唸り、「まあいいでしょう」と言った。

「何にせよあなたは族長殿です。命じられるがままに私は行います。むしろ暗殺じゃなかったことに感謝します」

そう言っつて笑うムオンに、オト八は頭を下げた。

「ん……」

ケムリは目を開けようとしなない。

「約束だろ？早くあたしを降ろしてくれ」

そこでようやく、うつすらと灰色の瞳が覗く。

アイスと目が合うと、ゆっくりと身を起こした。

「おはよう、アイビー」

眠そうな声でそう告げられて、一瞬何のことかわからなかった。そしてワンテンポ遅れて気付く。

そうだ、アイビーというのは自分の名前だった。

「あ、ああ、おはよう。で、あたしを降ろしてくれ」

「んー、わかった」

ケムリの顔は未だ寝惚けているようで、大丈夫かな、と思う。しかしそういえば元々こんな虚ろな顔だったかもしれない。

ケムリは一度立ち上がってしゃがむと、振り返ってアイスを見た。

「おんぶ」

「ほ、本当に大丈夫だな？お前の骨が折れたりしないな？」

「ん。だいじよぶ」

恐る恐る両手をケムリの肩に載せると、いきなり両足をすくわれ、驚く程安々と持ち上げられた。

一体どこからこんな力が湧いてくるのだろう。

ひとまず大丈夫だとわかったアイスは、体重を完全にケムリに預

ける。

ケムリはしゃがみ込んだままの体勢でベッドの端まで進んだ。天井が低いので、立ち上がってしまうと完全に頭を打ち付けてしまうのだ。ケムリの背中に乗っているアイスも、頭をあと少しでも上に動かすとぶつかってしまう。

ケムリがベッドの木枠に手をかけた。そして次の瞬間……

がすっ。

アイスは天井に頭を見事にぶつけた。

「いって、何すっ……って、ぎゃあああああああああああ！
！……！！」

いつの間にか、二人の体は空中に放り出されていた。

「ふふふふざけんなあっ！！跳ぶんならそう言えっ！死ぬかと思っ
たぞ！？」

あの後ケムリは見事な着地を決め、少し得意気な顔をしていたが、
アイスにとってはたまったものではなかった。

「ん。じゃあ次からはひとこと言ってから跳ぶ」

尚も飄々としているケムリがアイスはむかっついて仕方がなかった。

「ていうかそもそも跳ぶな！梯子を使え！」

「アイビー、急いでるみたいだったから」

何だか子どもを相手にしているみたいに、猛烈に疲れてきたと、思っていたら、

「そこまでにしといてやりなよ。五歳児相手に怒鳴っちゃって。カッコ悪い」

は？

後ろからかかってきた声に、硬直するアイス。ぎぎぎと振り返って、話しかけてきた獣人に問い返す。

「五歳だった？」

胡散臭そうな目を向けるが、獣人は真面目くさった顔で頷いた。

「そつだよ。俺もこう見えて十三歳だし」

なっ！？

目の前の男も、顔にあどけなさは残っているものの、どう見ても体つきは大人だ。

信じられないアイスに、自称十三歳は説明した。

「僕達炎族の民は基本的に身体的な成長が速いんだ。反対に精神的な成長は遅いけどね。特に、僕ら狼の一族はその傾向が激しい」

確かに獣人の成長は速いという話は聞いたことがあったが……。

思い、アイスはもう一度視線を元に戻して、ケムリに目をやった。ケムリの身長は、アイスより頭ひとつと半分程高い。

これは、ありなのか？このでかさで五歳児は。じっと見つめると、ケムリは小首を傾げた。

「このいでたちでそういう素振りを見せられると、そこはかたなくうざい。」

まあ、よく考えれば、どうでもいいか、そんなこと。何にせよこいつらと関わることももうないだろう。

「そういうことにしといてやるよ」

言い置き、アイスは踵を返した。

どちらかというところ、ケムリよりもこの自称十三歳のほうが話が通じそうだ。

「迷惑かけたな。厄介者は早々に去ることにするよ」

「あれ。もう帰っちゃうの？ケムリが寂しがるよ」

「すまないがあたしは用事があるんだ。出口はどこだ？」

そう聞いたとき、片方の手首が掴まれた。

またか。

アイスは軽く舌打ちする。

「何だ？」

横目で睨むが、ケムリの表情は変わらない。

「……腹、減った」

溜め息を吐くアイス。

だからどうしろというんだ。

後ろでは何故か、自称十三歳が「へえ」と興味深そうに呟いていた。

「じゃあ勝手に何か食べればいいだろ。まさか食いモンが何も無いなんてことないだろ」

できるだけ落ち着いて諭すように言った。五歳と聞いてから、少しくらい容赦する気持ちが生まれたのかもしれない。

ケムリは何も答えず、手は握ったままで、じっとアイスを見つめている。

アイスは顔を赤らめて目を逸らした。

例えこの男が本当に五歳だとしても、この近さで異性に見つめられるのには参る。その表情に何の感情も浮かんでいないのがまた、アイスを焦らせた。こういうタイプの人間には、今まで接したことがなかった。何を考えているのかわからなくて、正直、恐い。

「何だよ、言いたいことあるなら言えよ」

うつ向いて喋った。

手をほどこうと上下に振ってみたが、ケムリのそれは未だがつちりと離れない。

結局ケムリは何も発さず、数秒、沈黙が舞い降りた。

苛立ちを募らせたアイスが上を向くと、ケムリはついと顔をいすこかへと向ける。まるで、拗ねた子どもがそっぽを向くように。

二人のやりとりに見かねたのか、自称十三歳が声をかけてきた。

「ケムリ。姉ちゃんは帰るってさ」

しかしケムリはただっ子のように激しく首を横に振った。

「帰ってほしくないのか？」

こくりと頷く。

成る程。まあ、確かに五歳児だな。

しかしそうわかってはいても、大の男が素直に自分に帰ってほしくないと言っているのだ。アイスとて何とも思わないわけがない。

「あんだ、名前は？」

「アイ……ビー」

「よし。じゃあちょっと付いて来て」

言って扉のほうに向かって歩き出す。

「帰らせてくれるのか？」

そう聞いて歩き出そうとしたところ、ケムリが掴んだ手に力を込めて、アイスは先に進めなくなってしまう。

苦々しげに振り返ると、ケムリは唇を尖らせている。

「駄目」

助けを求めるように自称十三歳に視線を移すと、彼はケムリに向かって微笑んだ。

「ケムリ。じゃあ今朝はアイビー姉ちゃんに飯作ってもらおうか」

「はっ!？」

ケムリは僅かに頷いた。心なしか嬉しそうに見える。

「よし、来い、アイビー」

まるでそれが当たり前のようないいぐさだ。

「いや『来い』じゃないし！何であたしが他人んちの朝飯作んなきゃいけないんだよ!？」

「ケムリがお腹空いてるって言ってるじゃないか」

「理由になつてない!」

「まあ一宿一飯の恩義つてやつだよ」

一瞬納得しかけたが、一宿はともかくとして一飯厄介になった記憶はない。

それに……

「だってあたしは夜ケムリに抱きまく……」

らにされたんだぞ！と言いかけたところで口をつぐんだ。

言えない。そんなこと言えるわけがない。

しかし変なところまで言いかけたので、更に大きな誤解をされた。

「は？何？抱きまくられた？」

ぶっ。

「ちっがあああああああう!!!!!!!!!!」

必死に否定しているというのに、自称十三歳は何故か得心したように、頷いている。

「そっか。ケムリ発情期か」

「違っつっつてんじゃねえかあああああ!」

そして遙か上方から注がれるこの視線は……、

いと思う。

「あのなあ、お前ら、あたしは作ってやったんだぞ？本当はあたしだって暇じゃないってのにこうやって時間を割いて……」

その言葉を自称十三歳が遮った。

「そうそう。アイビーはケムリに抱かれまく……」

「まあケムリには世話になったからこうやって作ってやったんだがな。やっぱり恩はあるし」

慌てて付け加えるアイス。全く最近の十三歳は何て恐ろしいんだ。そのやりとりを見ていた獣人の娘が呆れたように言う。

「アカネまた何か弱み握ってんの？」

「別に？そんな覚えはないけど」

飄々と言い切る自称十三歳。

あああほんとはやましいところなんて何ひとつないのに、何であたしがこんな目に遭わなければいけないんだ。本当は本当にここでこんなことをしている場合ではないのだ。ナルカミのことが心配で心配でならない。

途端いてもたってもいられなくなり、アイスは自分の分の食事を食べ終わる前に立ち上がった。

「じゃっ、そういうことで！あたしはもう行くからっ」

ケムリの顔色が変わるが気にしている暇などない。もたもたしていると、また理由をつけられて出られなくなってしまう。

アカネというらしい自称十三歳に目を向け、聞いた。

「出口はどこだ？」

アカネは観念したような顔で答える。

「真つ直ぐ出て廊下を右に行つた突き当たり」

アカネがそう言った途端ケムリが席を立った。こうしてはいられないと思ひ、簡単に礼を述べると、直ぐ様部屋を出る。右のほうにドアを認めると、足早にそちらに向かった。が、そんな自分の横を、滑るように何かがすり抜けた。そして一瞬にしてケムリが道を塞ぐ。

「駄目」

大の男が両手両足を広げて通せんぼしているわけだから、気持ち悪いことこの上ない。

アイスは溜め息を吐いた。

「あのおな、この際はつきり言うが、迷惑だ」

ケムリが無表情なりに表情を見せた。罪悪感に心が痛むが、今は本気でそんなことを気にしている場合ではない。いっそのこと自分のことなど嫌いになつてしまえばいいと、アイスは思う。

「お前なんて嫌いだ。あたしに構うな」

ケムリの顔が見る見る悲しみの色に染まっていき（といつても微かな違いだが、表情の少ない彼にしたら大きな変化だ）、瞳には涙すら浮かんでいる。

そのとき、奥の扉が勢いよく開け放たれた。同時にけたたましい

男女の音が、廊下に響き渡る。

『たっただいまあああああ！！』

突如現れた騒々しい二人組と目が合って、アイスは自分の不幸体質を呪いたくなった。

第十二話：カツコウの嘆願

一人は黒いハンチングを被った、うねるような水色の髪を持つ女。
もう一人は、茶色いコートを羽織った獣人だった。

四人はそれぞれを見つめ合い、

「あれ！？何で君がここにいの！？超家宅侵入！？」

「うをー！ー！！アイスじゃん！めっちゃ久しぶり！！」

「もう嫌だああああ！！！！！！」

その内の三人がそれぞれ叫んだ。

そして、

「アイス？」

ケムリだけはアイスを見下ろして目を煌めかせた。

「もう嫌だ！何でお前達がここにいるんだ！！」

ていうかわたしは何でこんなに不幸なんだ！

さも無くばどうにかなってしまえばいい怒りと嘆きを何とか胸の奥にしまって、それでもアイスは叫ぶだけ叫んだ。この不条理さはいくら押し込めても溢れるくらいだ。

いつになく泣きそうなアイスの様子に目の前の二人はしばしばかんとしていたが、やがて先に我に返ったナミダが唇を尖らせた。

「何その超不愉快な発言！超こっちの台詞なんだけど！！つかここ

あたし達んちだから、あたし達がいるのは超当たり前だし！超むかつく！！」

「何だと？」

確かにアイスにも引つかかる点があった。

アイスは後ろにいるその引つかかる点に目を移す。

栗色の髪と完全に開けば大きくて真ん丸になるであろう瞳は、どこかで見たことがあったような気がしたのだ。それから、他の九人の住人達の顔も、それぞれどこかの誰かに似ているような気がしたのだ。

アイスは今度はそのどこかの誰か候補達に再び目を向ける。

「もしかしてここにいる奴ら全部、お前らの身内か？」

恐る恐る聞くと、ナミダは胸を張って答えた。

「あたし達の愛の結晶ですが何か」

アイスは愕然とする。

言ってやりたい言葉は本当に沢山あったが、とりあえず一言。

「おっ、親ならちゃんとしつけるこの野郎！！」

「は！？」

ナミダとエンジは二人して、腑抜けた面をした。

「何だよそれ！何で君にそんなこと言われなきゃいけないんだよ！」

「うっ、うるさい！この状況を見てわかんないのか！馬鹿野郎！」

腹が立つのと暑苦しいのと恥ずかしいので、頭に血が上って仕

方がない。

すなわち、ケムリがさつきからずーっと、空気を読まずしてアイスの体にへばりついているのだ。

ナミダとエンジは、そんな二人を注意深く凝視し、やがてやっと腑に落ちた顔をした。

「超仲良いね！」

「人見知りで兄弟ともあんまり話さないあのケムリなのに！」

「そういうことじゃない！会って間もないか弱き乙女に抱きついてるんだぞ！変態の極みだ！」

「アイスが弱くないじゃん。それにしてもめっちゃ懐いてんなあ、ケムリ」

「アイスが好きなの？」

ナミダがど直球に尋ねると、ケムリはこっくりと頷いた。

「きゃあ」と嬉しそうに手を合わせるナミダを冷ややかに眺めつつ、アイスは頭の中で狂ったように繰り返す。

子どもの戯言子どもの戯言子どもの戯言。
すると唐突に、ナミダが「あ」と何かを思いついた顔をした。

「エンジ！ベビーカー頼もうよ、アイスに！」

その追い討ちをかけるような言葉に、兎に角ここを立ち去ろうと思ったのだが、はりついた狼男はそれを許さない。

よって口で必死に異論を唱える。

「ふざけんなふざけんなふざけんな」

「ん？何で？」

「ほら、エアルトの打ち合わせ！」

「あ、あー。でもいくらアイスがいてもそれは……」

しかしこちらの意向など全く気にせず会話は進むので、腹立たしいことこの上ない。二人は全部は理解できないが、自分に不利益をもたらすに違いない事柄をあれこれと話し合う。そろそろいい加減強攻突破に移ろうかと考え出したところで、漸くナミダがこちらを向いた。

「あーいす！お願いがあるの！」
「断る」

「あのねー、あたし達これからエアルートに行かなきゃなんないんだ！だから大体10日間くらいこの家を空けることになるの！」

不愉快な発言に、しかし体を震わせたのはアイスではなかった。

斜め上を見上げる。ケムリの表情に変化はない。だが、先程反応を見せたのは確かだ。

成る程彼は五才児である。

しかしそんな息子の変化にも気付かないナミダは、続けた。

「そ・こ・で！アイスにケムリの面倒を頼みたいの！」
「嫌だっつってんだろ」

にべもなくアイスは即答する。

「えー！？何で何でー！？見るのはケムリだけでいいんだよ！？」
「そういう問題じゃない！わたしは忙しいんだ！10日間も、ってゆーか今この瞬間も、ここでこうしてる暇はない！」
「そっぴゃアイス何でこんなとこにいいんの？」

今更ながらまっとうな質問をするエンジ。

「ぐ。き、気を失ってたらここにいたんだよ」
「ほんと？ケムリ」

ケムリは小さく頷いた後、独り言のように言う。

「人助け」

「えっらああああい！超偉いよケムリ！さっすがあたしの子ども
！！」

ナミダが狂ったように手を叩くと、ケムリも少しだけ鼻を高くしたようだ。

「でも、何で気を失ってたんだ？」

ナミダより若干常識のあるエンジは、普通に疑問を指摘する。これにはケムリも首を傾げた。ケムリはナルカミとの事故現場までは見ていないらしい。それならそれで好都合だ。雷族の長がミッドナイトストリートに来ていることを知ったら、二人がどんな行動に及ぶか定かでない。

そこでアイスは、はたと気付いた。そうだ、ナルカミは既に、街の真ん中で堂々と力を解放している。騒ぎになってないほうがおかしいし、話がこの二人に行っていないほうがおかしい。

アイスは、なるべく当たり障りがないよう尋ねた。

「昨夜、騒ぎとか起きてなかったか？」

「めっちゃ騒がしかったよ！昨夜も一昨日の夜も、その前の夜も！」

「いや、そうじゃなくて……。変わったこととか起こらなかったか？」

ナミダとエンジは顔を見合わせる。

「あつ、あれのことだな！？シグレの念願初個展！」

「いやそーゆーんじゃないか……」

「違うよ、きつとあれだよ！地族の誰かが地下街の天井を押し上げるくらいに、桜の木を成長させちやったっていうあれ！」

「いやそこまでダイナミックなことでもなくて……」

「あ、あれじゃん？トルマリンの物価が急激に上昇して細工師が困ってるっていう」

「かといってそこまで日常的に流れてそうなニュースでもなく……」

「あ！わかった！ドペスター・クイツクの社長が事故ったってやつ！」

「え。あいつ事故ったの？ってだから違う！」

ここまでわからないとなると、本当に彼らは知らないのだろうか。少なくとも、わかっていてわからないふりをしているというのは、この二人に限ってないように思えるのだが。それともナルカミ事件など、「変わったこと」には入らないのだろうか。

「うーん、謎かけは苦手だよ。あとは精々ナルカミがこの街に来てたってことくらいかなあ」

正解は後者だったようである。

アイスは脱力した。彼女を守りに来た己が、彼女を危険に晒すことになるとは。

「ナルカミは、今、どこでどうしてる？」

まさか珍品としてオークションに出されてはいないだろうか。

しかしはらはらと落ち着かない心をさらにはらはらさせることに、二人は揃って首を傾げた。

「んー、どうなったんだろな？あのあとケムリのお土産を買いに行
って……」

ケムリの体がぴくりとうごめく。

「あ、ごめんケムリ。でも買った後にまだ色々行きたいところがあ
ってさあ、アイス溶けちゃうから二人で食べちゃった」

心なしが自分にのしかかる圧力が増えた気がする。

「アイス……溶けちゃう……」

そして心なしがケムリが自分を睨んでいる気がする。

「わたしを挟んでややこしい話はしてくるな」

「そっか！『アイス』も『アイス』だもんね！ケムリ、これがお土
産代わりってことで！」

「ん」

「領くな！わたしの名前は生命の『生』に『守』るで『アイス』だ
！アイスクリームとは違う！……それで、ナルカミがどうなったの
か、お前ら本当に知らないんだろっな？」

沸き返る苛立ちを押し込めつつ、アイスはとぼけた二人を睨め付
けた。

ナミダは口を尖らせる。

「知らないよお。だって興味ないもん」

アイスは今回の件を通して、改めて夜衆の人間に常識を求める阿

呆らしさを知った。

「なになにアイス。ナルカミ追っかけてんの？」

「そうだよ。クロから命じられてんだ」

『クロ』の名を出すと、ナミダの顔はぱつと明るくなった。クロとナミダは波長が合うのか、昔から仲が良い。

「クロがつ？何でっ？」

「ボディーガードだよ」

「何でえ？何でナルカミ守る必要があんの？」

一から説明すると非常に面倒だし、昼衆の沽券にも関わりそうだし、アイスは適当に、しかしさしさわりなく答えた。

「仲良しなんだよ、クロとナルカミ」

「ふうん？そんな話は超初めて聞いたなあ」

首を傾げるナミダだったが、しかし別段疑う様子もない。

そこでアイスは、これぞ好機と思いつく。

「ナミダとクロも友達だろ？わたしはお前の友達の命令で行動してるんだ。わたしを邪魔することはクロを邪魔することだぞ」

我ながらなかなか巧みだと思ったのだが、夜衆の変人はそれを一笑に付した。

「あはは、それが何？」

黙するアイス。

駄目だ。常識獣のわたしには、常識のない人間との会話が不可能なようだ。こいつらとまともなコミュニケーションを試みるのは、アメーバに話しかけるようなものだ。

そろそろアイスの瞳に不気味な光が灯ってきたところで、エンジが前に出た。

「じゃあさじゃあさっ、お前らのめっちゃ好きな『コーカンジョーケン』って奴でいこうぜっ」

「………………。別にわたしは好きでも何でもないが、言うだけ言ってみる」

氷点下の眼差しをもともせず、エンジは嬉しそうに答えた。

「オレ、情報屋に頼んで、ナルカミの情報を逐一報告してくれるよう手配するよ！ミッドナイトストリートにもクイックの支店はあるからさっ。アイスもそこなら信頼できるだろうし、サンライズエリアの人間だから、携帯電話くらい持つてるだろ!？」

「…………持つてる」

アイスはぶすつと応じる。

「じゃあそれで連絡取ればいい！情報料は全部オレが出すっ」

「それで？」

「そのかわりアイスは10日間ケムリの面倒を見るっ！その報酬も出す!」

はああと溜め息を吐く。断るのにも疲れてきて、それなりに誠実に対応していた自分が馬鹿らしくなってきた。もういっそのこと、請け合った責任を放棄することにしよう、そうしよう。しかしそういう心中を悟られてもまずい。アイスは慎重に言葉を選んだ。

「大体ベビーシッターくらいわたしじゃなくてもできるだろ。そもそもこんな年上の兄弟がいっぱいいるんだ。必要ないに決まっている」

「それが駄目なんだよ！ケムリは筋金入りの人見知りにして好き嫌いが激しくてさ！上のにーちゃんねーちゃんにも懐かないし、どこかの馬の骨とも知れないベビーシッターなんて尚更だ」

「わたしだってどこの馬の骨とも知れない獣なんだが」

エンジは無邪気に微笑んだ。

「ところがどっこい懐いてる！獣だからかもな！」

「ふむ、成る程」

なかなか筋の通ったことを言うじゃないか。

「なあ、頼むよ！10日間も家を空けるのは初めてなんだ！流石にケムリも寂しいだろうしさ！！」

「……そんなに大事な用なのか？」

ここでナミダが口を挟む。

「大事！超大事な打ち合わせ！！今回の企画は、あたしたちの芸術を貴族に売り込むチャンスなんだよ！」

「ふうん」

アイスは少し思案するふりをして、それから渋々といった様子で口を開いた。

「わかった。ほんつとーに10日間だな？」

エンジンとナミダは手を合わせて喜ぶ。

「うん！うん！ほんとに10日間だから！ありがとうアイス！そして超流石あたしの旦那様！大好き！」

ぎゅゅつと抱き締め合う二人から目を逸らすと、今度はケムリと目が合った。

アイスは眉ひとつ動かさない顔立ちをしげしげと見つめる。

「あの親でよくこんな子どもに育ったな」

「……………」

ケムリは何事かを発することなく、前方のいちゃつく夫婦に目を向けた。アイスもそれに倣う。

ああ、寂しいのか。

視線に気付いた親達ははしゃぐのを中断した。ナミダがそつとこちらに歩み寄ると、ケムリもアイスを離れる。暫くぶりの解放に息吐く暇なく、今度は目の前でナミダとケムリが抱き合った。

「なっ……っ……！」

戦慄したアイスが恐々とエンジンを見やると、心配虚しく彼は感動した面持ちで二人の抱擁を見守っている。ケムリがこんななりだから、つい罪深き行為と勘違いしてしまうが、実際は母と幼き息子の別れのシーンである。しかし目を逸らしたくなるこの衝動は何である。

「……………ママ……………」

「ケムリいいいっ！恋と仕事に超勤むママを許してねっ！辛いだろ

うけどいい子にしてるんだよっ!!」

折角自由が得られた今、この隙に逃げ出してやろうかという願望が頭を霞める。しかしがむしゃらに逃亡を謀るよりも、後で安全に逃げ出すほうがより確実である。

やがて母子は体を離し、見つめ合った。

「それじゃ、行ってくるよっ、ケムリ！」

「え、もう行くのか？」

いくら何でも急過ぎやしないだろうか。

「善はめっちゃ急げっていうしな!のんびりしてらんないよ!」

「ホテルの予約もせず!?急な宿泊だけならず、お前らみたいなじやじゃ馬受け入れてくれるところ少ないぞ?」

「大丈夫だよ!いいとこ知ってるし!」

「ふうん」

まあこいつらの心配など自分がすることはないし、早くいなくなつてくれるのであれば、こちらとしては万々歳だ。

「じゃあねえ!ケムリのことよろしくねえ!」

手をひらひらさせて、ナミダは家を出て行った。

「何だ?お前は未練があるのか?」

はやる気持ちを抑えつつ、アイスはのんびりと立ち尽くすエンジを見る。できるだけ不満げな顔で。

彼は嬉しそうに笑いながら口を開いた。

「ありがとうなっ、アイス！」

「礼を言うくらいなら解放してほしいんだが」

「うん、あのなっ。ケムリは泣かせてもいいけど、ナミダを泣かせたら、オレめっちゃ怒るからなっ」

笑うエンジの口が牙を剥いたのは、きっと気のせいだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1993e/>

飛べぬ燕、鳴けぬ金糸雀

2010年10月8日12時31分発行